みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

一括ダウンロード

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009844

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電話 06-6876-2151（代）
http://www.minpaku.ac.jp/

研究年報——2020 国立民族学博物館

研究年報

National Museum of Ethnology
2020

国立民族学博物館

国立民族学博物館

研究年報

National Museum of Ethnology

2020

目次

あいさつ …… 3

1 組織

組織構成図 …… 4
運営組織 …… 5
館内運営組織 …… 5
現員 …… 6
歴代館長・名誉教授 …… 6
研究部教員の紹介 …… 7
・館長 …… 8
・副館長 …… 10
・人類基礎理論研究部 …… 14
・超域フィールド科学研究部 …… 38
・人類文明誌研究部 …… 57
・グローバル現象研究部 …… 81
・学術資源研究開発センター …… 102
・国際研究統括室 …… 151
・IR 室 …… 151
・梅棹資料室 …… 152
・機関研究員 …… 152
・プロジェクト研究員 …… 154
・拠点研究員(人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点) …… 160
・拠点研究員(人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点) …… 161
・拠点研究員(人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点) …… 163
・拠点研究員(人間文化研究機構総合情報発信センター・「人文知コミュニケーター」) …… 165
・客員教員(人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門(附置)) … 168
・客員教員 (人類文明誌研究部) …… 170
・特別客員教員 (人類基礎理論研究部) …… 172
・特別客員教員(人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門(附置)) … 173
・特別客員教員 (人類基礎理論研究部) …… 174
・特別客員教員 (学術資源研究開発センター) …… 176
・外国人研究員 …… 177

2 研究および共同利用

概観 …… 181
[2-1 みんぱくの研究] …… 182
特別研究 …… 182
人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築 …… 189
共同研究 …… 200
研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣 …… 225
館長リーダーシップ経費による事業・調査 …… 227
民博研究懇談会 …… 228
[2-2 外部資金による研究] …… 229
科学研究費補助金による研究プロジェクト …… 229
受託事業 …… 233
民間などの研究助成金などによる研究活動 …… 235
[2-3 文化資源関連事業・情報関連事業] …… 235
文化資源関連事業 …… 235
情報関連事業 …… 240
[2-4 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト] …… 241
人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト …… 241
[2-5 研究成果の公開] …… 248
刊行物 …… 248
国立民族学博物館学術情報リポジトリ …… 250
学術講演会 …… 251
[2-6 学会開催] …… 252
学会開催 …… 252
[2-7 若手研究者奨励セミナー開催] …… 252
若手研究者奨励セミナー開催 …… 252
[2-8 研究員制度] …… 252
外来研究員 …… 252
特別共同利用研究員 …… 258
[2-9 データの利用] …… 259
標本資料および映像音響資料に関するデータ …… 259
文献図書資料の収集・整理・利用状況 …… 260
民族学資料共同利用窓口 …… 261
民族学研究アーカイブズの構築事業 …… 262
データベースの作成・利用状況 …… 262
[2-10 みんぱく施設の利用] …… 269
博物館施設の利用状況 …… 269
施設の整備状況 …… 269
[2-11 受賞・特許] …… 270
受賞 …… 270
知的財産形成・特許出願など …… 270

3 展示

入館者数 …… 271
本館展示 …… 271
特別展示・企画展示など …… 275
展示関連出版物およびプログラム …… 276

4 国際連携と研究協力

海外研究機関との研究協力協定 …… 279
MINPAKU Anthropology Newsletter …… 284
みんぱくフェローズ …… 285
「博物館とコミュニティ開発」コース …… 286
国内研究機関等との研究連携、協力の推進 …… 286

5 広報・社会連携

概観 …… 289
国立民族学博物館要覧2020 …… 290
ホームページ …… 291
報道 …… 291
月刊みんぱく …… 292
みんぱくゼミナール …… 292
みんぱくウィークエンド・サロン …… 293
研究公演 …… 297
みんぱく映画会 …… 297
博物館社会連携 …… 298
その他の事業 …… 300
ボランティア活動 …… 300

6 学術資源研究開発センター

センターの設置目的 …… 301
センターの研究事業 …… 301

7 国際研究統括室

設置目的 …… 302
2020年度活動報告 …… 302

8 総合研究大学院大学 …… 303

索 引 …… 306

あいさつ

国立民族学博物館（みんぱく）は文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として1974年に創立され、1977年に開館しました。みんぱくには現在専任教員が52名在籍し、それぞれが世界各地をフィールドに調査・研究活動に従事しています。人類学関係の単体の教育研究機関として、世界全域をカヴァーする研究者の陣容と研究組織をもつという点で、みんぱくは世界で唯一の存在といえます。

一方で、みんぱくがこれまでに収集してきた標本資料は、現在、34万５千点を超えます。これは、20世紀後半以降に築かれた民族誌資料のコレクションとしては世界最大のものです。また、博物館施設の規模の上で、みんぱくは、世界最大の民族学博物館となっています。

文化人類学分野の国際的中核研究拠点として、みんぱくはこれまでに海外25大学・博物館、国内16大学・研究機関等と学術協定を締結し、機関間の共同研究、研究集会や連携展示等の活動を展開してきています。本年度は、新型コロナウイルス感染症の地球規模での拡大により、海外での調査研究は事実上全面的に断念せざるをえなくなり、対面での研究会・シンポジウム活動も大きな制約を受けましたが、オンライン環境の整備により、新領域研究の開拓をめざす国際共同研究プロジェクト「特別研究」を４件、公募制・異分野融合に基づく共同研究を27件実施しました。また、国際シンポジウム・ワークショップを15回開催しています。これらの研究集会への参加者、及び外国人教員や客員教員、外来研究員など本館を活用する国内外の研究者はオンラインでの参加者も含めて1,206人にのぼります。

これら共同研究やシンポジウムの成果は、日本語・外国語の刊行物によって国内外に発信しています。さらに、昨年度に続き、世界の文化や芸術に関する映像番組や音声資料をそのまま論文と同様に掲載できる国際マルチメディア・オンラインジャーナル『TRAJECTORIA』Vol. 2 を刊行しました。

研究資料の国際的集積・発信拠点として、みんぱくでは、現在、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」というプロジェクトを推進しています。このプロジェクトは、国内外の大学・博物館のみならず、研究対象となる社会（ソースコミュニティ）との協働の作業に基づいて、本館所蔵の標本資料・映像音響資料を中心とした人類の文化資源に関する情報を蓄積し、その国際的な発信、交換、生成、共有化と世代を超えた継承を目指すものです。コロナ禍のもとでも、プロジェクトは順調に進展しています。

博物館機能を活かした大学や社会への貢献に関しては、展示をはじめとする多様なメディアを用いて最新の研究成果を発信しています。2020年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大にともなう緊急事態宣言の発出を受け、博物館は、2020年２月28日から６月16日まで臨時休館を余儀なくされましたが、年度を通じて、特別展、企画展、巡回展等は、計６回開催しました。また、新型コロナウイルス感染予防対策をとったうえで、館内外でのゼミナール、研究公演、映画会等の事業を、オンラインも併用しつつ積極的に実施しました。2019年度に更新した次世代型電子ガイドについては、操作性や位置情報精度の向上を図っています。さらに、講堂のみんぱくインテリジェントホールとしての整備が完了しました。

新型コロナウイルス感染症の収束は、まだ見通せません。感染症の蔓延が地球規模で、しかもほぼ同時に生起するという事態に及んで、社会の成り立ちそのものが問い直されるとともに、社会に潜在していた差別意識の浮上による世界の分断も生じています。異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の別を超えて共に生きる世界を築きあげる上で、本館の果たすべき役割は今後ますます重要になると認識しております。

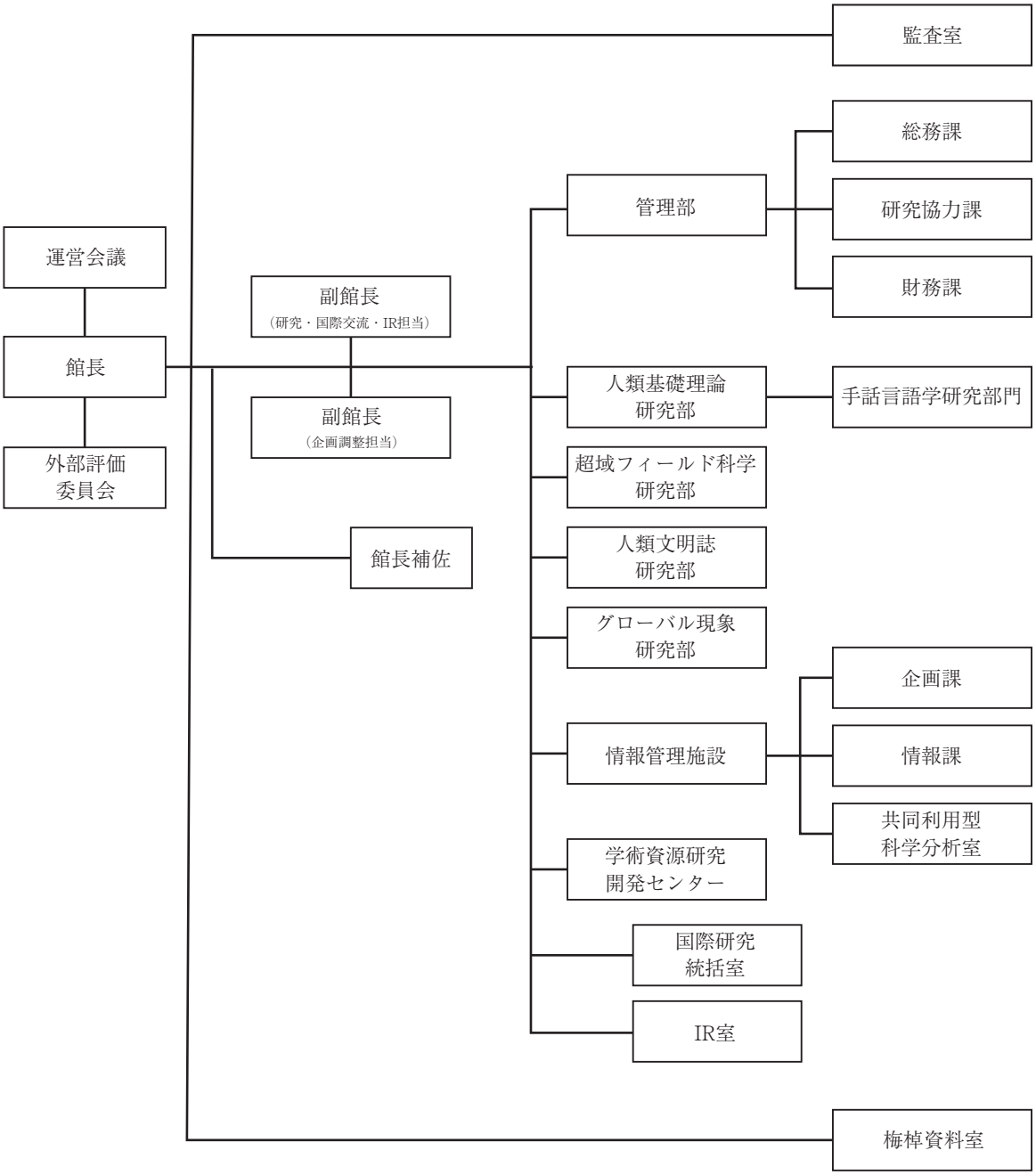
『研究年報』は、以上のような、みんぱくの教員の研究調査をはじめとする多方面の活動とその成果について、みなさまに知っていただくために毎年刊行してまいりました。大学共同利用機関としてのみんぱくの一年間の活動を集約してお伝えするものです。

本誌を通じ、みんぱくの活動をご理解いただき、今後とも、本館に対して、みなさまからのご指導とご支援をいただけますことを念願しております。

2021年３月
国立民族学博物館長
吉　田　憲　司

1 組織

組織構成図（2021年 3 月31日現在）



運営組織 (2021年 3 月31日現在)

●運営会議

窪田幸子　神戸大学大学院国際文化学研究科教授 *2
栗本英世　大阪大学副学長*1
後藤　明　南山大学人文学部教授*2*3
佐野千絵　東京文化財研究所名誉研究員*3
出口　顕　島根大学副学長*2
富沢壽勇　静岡県立大学国際関係学部特任教授*1
豊田由貴夫　立教大学名誉教授*1
松田素二　京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨俊夫　国立国際美術館長
飯田　卓　人類文明誌研究部長*1*2*3
樫永真佐夫　総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長／超域フィールド科学研究部教授*1
關　雄二　副館長（企画調整担当）*1
園田直子　人類基礎理論研究部長*1*3
野林厚志　学術資源研究開発センター長*1*2*3
林　勲男　超域フィールド科学研究部長*1*3
平井京之介　副館長（研究・国際交流・IR 担当）*1*2
三尾　稔　グローバル現象研究部長*1*2*3

注）*1　人事委員会委員
　　*2　共同利用委員会委員
　　*3　研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達　淳　国立情報学研究所副所長
池田博之　東洋テック株式会社代表取締役社長
田中雅一　国際ファッション専門職大学副学長
堀井良殷　公益財団法人関西・大阪21世紀協会顧問
水沢　勉　神奈川県立近代美術館長
武藤めぐみ　独立行政法人国際協力機構 JICA 緒方研究所前副所長
山極壽一　京都大学前総長
山本真鳥　法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2021年 3 月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会
創設五十周年記念事業推進委員会
福利厚生委員会
安全衛生委員会
ハラスメント防止委員会
広報企画会議
特別研究運営会議
刊行物審査委員会
研究出版委員会
知的財産委員会
地域研究拠点運営委員会
大学院委員会
情報運営会議
文化資源運営会議
国際研修博物館学コース運営委員会
施設マネジメント委員会
危機管理委員会
大規模災害復興支援委員会
国際研究統括室会議
フォーラム型情報ミュージアム委員会
研究資料共同利用委員会

現員 (2021年３月31日現在)

区　　分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					30	30
情報管理施設					19	19
監査室					1	1
研究部		20(1)	21	1(1)		42(2)
学術資源研究開発センター		3	4	2		9
客員（国内）		12	7			19
客員（国外）*		2	1			3
計	1	37(1)	33	3(1)	50	124(2)

注）（　）は特任研究員の人数を外数で示す
注）客員（国外）*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2021年３月31日現在)

●歴代館長

初　代／梅棹忠夫（故人）　1974年６月～1993年３月
第２代／佐々木高明（故人）1993年４月～1997年３月
第３代／石毛直道　1997年４月～2003年３月
第４代／松園萬亀雄　2003年４月～2009年３月
第５代／須藤健一　2009年４月～2017年３月
第６代／吉田憲司　2017年４月～

●名誉教授

祖父江孝男(故人)1984年４月１日
岩田慶治(故人)　1985年４月１日
加藤九祚(故人)　1986年４月１日
伊藤幹治(故人)　1988年４月１日
中村俊亀智(故人)1988年４月１日
君島久子　1989年４月１日
和田祐一(故人)　1990年４月１日
垂水　稔(故人)　1991年４月１日
杉本尚次　1992年４月１日
梅棹忠夫(故人)　1993年４月１日
大給近達(故人)　1993年４月１日
片倉素子(故人)　1993年４月１日
竹村卓二(故人)　1994年４月１日
周　達生(故人)　1995年４月１日
松澤員子　1995年４月１日
大丸　弘(故人)　1996年４月１日
友枝啓泰(故人)　1996年４月１日
藤井知昭　1996年４月１日
佐々木高明(故人)1997年４月１日
杉村　棟　1997年４月１日
和田正平　1998年４月１日
清水昭俊　2000年４月１日
黒田悦子　2001年４月１日
崎山　理　2001年４月１日
端　信行　2001年４月１日
小山修三　2002年４月１日
森田恒之　2002年４月１日
石毛直道　2003年４月１日
栗田靖之　2003年４月１日
杉田繁治　2003年４月１日
熊倉功夫　2004年４月１日
立川武藏　2004年４月１日
田邉繁治　2004年４月１日
藤井龍彦　2004年４月１日
山田睦男(故人)　2004年４月１日
江口一久(故人)　2005年４月１日
大塚和義　2005年４月１日
松原正毅　2005年４月１日
石森秀三　2006年４月１日
野村雅一(故人)　2006年４月１日
大森康宏　2007年４月１日
山本紀夫　2007年４月１日
松園萬亀雄　2009年４月１日
松山利夫　2010年４月１日
長野泰彦　2011年４月１日
秋道智彌　2012年４月１日
中牧弘允　2012年４月１日
小林繁樹　2014年４月１日
田村克己　2014年４月１日
吉本　忍　2014年４月１日
久保正敏　2015年４月１日
庄司博史　2015年４月１日
八杉佳穂　2015年４月１日
朝倉敏夫　2016年４月１日
佐々木史郎　2016年４月１日
杉本良男　2016年４月１日
須藤健一　2017年４月１日
竹沢尚一郎　2017年４月１日
塚田誠之　2017年４月１日
印東道子　2018年４月１日
横山廣子　2018年４月１日
寺田吉孝　2020年４月１日

研究部教員の紹介（2021年３月31日現在）

組織図に基づく現員一覧

館　長		吉田憲司		
副館長（企画調整担当）		關　雄二		
副館長（研究・国際交流・IR担当）		平井京之介		
研究部	職名・研究部門	教　授	准教授	助　教
人類基礎理論研究部	研究部長	園田直子		
	第一超域	日高真吾 福岡正太		末森　薫
	第二超域		岡田恵美 川瀬　慈 吉岡　乾	
	第三超域	出口正之	菊澤律子 丸川雄三	
附置	日本財団助成手話言語学	※飯泉菜穂子	菊澤律子（併）	※相良啓子
超域フィールド科学研究部	研究部長	林　勲男		
	第一超域	樫永真佐夫 韓　　敏	太田心平 島村一平 奈良雅史	
	第二超域		菅瀬晶子 松尾瑞穂	
	第三超域	宇田川妙子 ピーター・J・マシウス	新免光比呂	
人類文明誌研究部	研究部長	飯田　卓		
	第一超域		卯田宗平 小野林太郎 寺村裕史 藤本透子	
	第二超域	池谷和信	上羽陽子	
	第三超域	齋藤　晃 鈴木　紀 關　雄二（副館長）		
グローバル現象研究部	研究部長	三尾　稔		
	第一超域	信田敏宏 平井京之介（副館長）	河合洋尚 廣瀬浩二郎	
	第二超域	西尾哲夫	相島葉月 鈴木英明 三島禎子	
	第三超域	鈴木七美 森　明子		
学術資源研究開発センター	センター長	野林厚志		
	第一超域	笹原亮二	齋藤玲子	諸　昭喜
	第二超域	山中由里子	南　真木人	
	第三超域	岸上伸啓（併）	伊藤敦規 丹羽典生	八木百合子
	人文知コミュニケーター			※神野知恵（併）
国際研究統括室		平井京之介（室長）（併） 齋藤　晃（兼務） 韓　　敏（兼務） 福岡正太（兼務）	卯田宗平（兼務） 鈴木英明（兼務） 丹羽典生（兼務）	

※は特任研究員を示す。

吉田憲司［よしだ　けんじ］——館長

1955年生。**【学歴】**京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）**【職歴】**大阪大学文学部美学科研究生（1980）、ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2000）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センターセンター長（2006）、放送大学客員教授（2010）、国立民族学博物館副館長（2015）、国立民族学博物館館長（2017）**【学位】**学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**博物館人類学、文化人類学**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

［単著］

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて――南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999 『文化の「発見」――驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森――アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

2004　第１回木村重信民族藝術学会賞

2000　第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993　日本アフリカ学会研究奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

さらに、本格実施の２年目に当たる、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）研究基盤リソース支援プログラム「地域研究画像デジタルライブラリ」の構築を通じて、国内に所蔵される世界各地の自然と文化の記録画像の集積と共有化の作業を積極的に支援する。

・成果

本年度は新型コロナウイルス感染症の拡大のため、海外での現地調査はまったく実施できず、これまでに蓄積した南部アフリカ、ザンビアのチェワ社会およびンゴニ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態についての現地調査の成果の取りまとめに注力し、とくに博物館建設を介した伝統的首長制度の再構築のプロセスを検証した。

2000年以降の世界の博物館の動向に関する研究成果を踏まえて、広範囲な読者を対象とした博物館学の啓発書の刊行の準備をする一方、民博の所蔵する世界の仮面をもとに、世界の無形文化遺産の創造的継承のありかたを総覧する刊行物の編集を進めた。

「地域研究画像デジタルライブラリ」については、年度内に2次にわたる募集を実施し、応募30件中、計19件のプロジェクトを対象にデータの集積・共有化・公開の支援をおこなった。

◎出版物による業績

［論文］

吉田憲司

2020 「ICOM 京都大会を振り返る――成果と課題」『別冊博物館研究「ICOM 京都大会2019特集」』55：46-50。

2020 「チェワ　マラヴィと呼ばれた王国の末裔たち」島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』pp.112-116，東京：明石書店。

2020 「コラム 9　チェワ社会の仮面結社ニャウ」島田周平・大山修一編『ザンビアを知るための55章』pp.117-119，東京：明石書店。

［分担執筆］

吉田憲司

2021 「世界の仮面と出会う」酒井忠康・他31名編『美術 1 』pp.56-57，東京：光村図書出版株式会社。

2021 「世界の仮面と出会う」酒井忠康・他31名編『美術 1 中学校美術学習指導書 1 朱書編』pp.60-63，東京：光村図書出版株式会社。

［その他］

吉田憲司

2020 「新しいトーテムポールの制作」『美術の窓』39(459)：118。

2020 「生誕100年　没後10年　現代を射る　梅棹忠夫の目」『産経新聞』 5 月15日。

2020 「とらのもん往来」『文部科学情報 週刊文教ニュース』 6 月15日。

2020 「人類学と博物館　これまでとこれから」『じんるいけん Booklet 南山大学人類学研究所設立70周年記念シンポジウム講演録　人類学と博物館　民族誌資料をどう研究するのか？』6：11-26。

2020 「関西のミカタ　大阪は歴史ある文化都市」『日本経済新聞』 9 月30日夕刊。

2020 「交遊抄　アフリカの学友」『日本経済新聞』10月 7 日。

2020 「生きる力を育む造形・美術教育」『教育美術』81(11)：23。

2021 「なぜ日本人は『仮面のヒーロー』が好き？」『朝日新聞　GLOBE+』 2 月 7 日。

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, K. Yoshida, I. Hayashi, and T. Iida

2020 International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 115-176.

Yoshida, K.

2020 Globalization and Migration-Introduction-. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 50: 1-2.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 9 月13日 「’70大阪万博から ’25大阪・関西万博へ」2020年度北大阪ミュージアム・ネットワークシンポジウム　北大阪のミュージアムで万博を考える『大阪でEXPOを考えるⅢ――大阪万博50年』国立民族学博物館

2021年 1 月27日 「まなざしの交錯――『Self and Other アジアとヨーロッパの肖像』展・再訪」東アジア「間文化」第 5 回研究会、オンライン開催

・広報・社会連携活動

2020年 9 月 5 日 「対談　知的生産のフロンティアの原点――探検家　梅棹忠夫を語る」第500回記念国立民族学博物館友の会講演会・梅棹忠夫生誕100年記念対談、国立民族学博物館

2020年12月14日 「ポストコロナの社会――文明の転換点における未来への視座」『第16回選択する未来2.0』内閣府、オンライン開催

2021年 1 月 1 日 「感染症と文明――現下のコロナ禍に思う」オンラインレクチャー、国立民族学博物館友の会

2021年 1 月23日 「文明の転換点とポストコロナの社会」梅棹忠夫生誕100年記念連続講座『梅棹忠夫の「人類の未来」からの対話――ニューノーマル時代の羅針盤』梅棹忠夫生誕100年記念連続講座実行委員会主催、京都人類学研究会（近衛ロンド）・ロンドクレアント共催、オンライン開催

2021年 1 月31日 「ちょっといい話」ABC ラジオ

2021年 2 月28日 スピーカー、小原真史トークプログラムシリーズ③　トークイベント『博覧会・博物館と人間の展示』（KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭　2021　SPRING）、京都国際舞台芸術祭実行委員会、オンライン開催

2021年３月７日 「ちょっといい話」ABC ラジオ

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人類学における芸術研究の刷新――イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

独立行政法人　国立文化財機構施設長選考委員会委員、公益財団法人2025年日本国際博覧会協会シニアアドバイザー、ICOM 日本委員会副委員長、独立行政法人日本学術振興会大学の世界展開力強化事業プログラム委員会専門委員、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター理事、公益財団法人教育美術振興会第55回教育美術・佐武賞 ゲスト選考委員、公益財団法人京都服飾文化研究財団評議員、日本民族藝術学会会長、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、African Arts（UCLA）Consulting Editor、Museum International（ICOM）Editorial Board Member、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、公益財団法人日本博物館協会参与、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、日本展示学会評議員、関西サイエンス・フォーラム理事

・他大学の客員、非常勤講師

浙江大学客員教授、放送大学客員教授

關　雄二［せき　ゆうじ］―――― 副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

1956年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程退学（1983）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2016）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館副館長（2017）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院 1982）**【専攻・専門】**アンデス考古学、文化人類学　古代アンデス文明の形成過程、現代ペルーの文化行政、考古学と国民国家形成、世界遺産と国別の文化遺産との相互関係 **【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology、Institute of Andean Studies

【主要業績】

［単著］

関　雄二

2010 『アンデスの考古学　改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス――権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

［編著］

関　雄二編

2017 『アンデス文明　神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2020　文化庁長官表彰（文化庁）

2019　カハマルカ州名誉勲章（ペルー・カハマルカ州）

2019　アントニオ・ギジェルモ・ウレロ大学名誉博士号（アントニオ・ギジェルモ・ウレロ大学）

2016　外務大臣表彰

2015　ペルー文化功労者表彰

2008　濱田青陵賞

2008　科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008　クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンパ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C.2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。

なお上記の調査部分は、科学研究費（基盤研究（A））および平和中島財団国際学術研究助成をあてる予定である。

・成果

予定していたペルーにおける発掘調査は新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止を余儀なくされたが、これまでの研究のまとめを行い、それらの成果を以下に示すような形で公開した。

『ラテンアメリカ文化事典』に加えて論文３本を出版。

研究発表としては、10月にCONADEA（Coordinadora Nacional de Estudiantes de Arqueología）主催のシンポジウム Ciclo de conferencias magistrales（Tema: Arquitectura Monumental Prehispánica）で 'Pacopampa: 14años de investigación y conservación del centro ceremonial formativo'（オンライン開催）、およびシンポジウム「社会進化の比較考古学」実行委員会主催のシンポジウムで「権力分析の異なる位相――アンデス文明初期における威信財と社会的記憶」（オンライン開催）を、12月にシンポジウム Arqueología del valle de Lambayeque で 'Repensando el impacto cultural de la sierra norte en la costa norte peruana durante la época prehispánica'（オンライン開催）を、２月に金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」主催のオンライン・シンポジウム「世界の古代文明をめぐる最新調査研究」で「科学分析から見たアンデス文明初期の神殿の変貌」（オンライン開催）を発表した。

また、11月には文化庁主催の2020年度文化財行政講座で「社会的記憶と無形遺産の導入――南米ペルー高地での有形遺産保護の試み」の講演を行ったほか、３月には民博の連続ウェブ研究会「文化遺産実践における身体とモノ――集合的健忘に抗するための文化伝達 第４回 学術活動をとおした継承」でDaniel D. Saucedo Segamiと共同で 'A Bridge between the Past and the Present: Cultural Heritage as a Mean to Build Social Memory in Peru（過去と現在の架け橋――ペルーにおける社会的記憶構築の手段としての文化遺産）'（オンライン）を、３月には徳島県・一般財団法人自治総合センター主催の鳥居龍蔵生誕150周年記念 国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会――その学問と資料の意義を問う」で「アンデス考古学の視点から」を発表した。

◎出版物による業績

［共編］

ラテンアメリカ文化事典編集委員会編（［編集委員長］関　雄二［編集幹事］齋藤　晃、鈴木　紀、村上勇介、八木百合子［編集委員］井口欣也、岡田裕成、窪田　暁、佐々木直美、渋下　賢、清水達也、杓谷茂樹、田島久歳、ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ、鼓　宗、細谷広美、山脇千賀子、若林大我）

2021 『ラテンアメリカ文化事典』東京：丸善出版。

［分担執筆］

関　雄二

2020 「鳥居龍蔵とアンデス文明との出会い」徳島県立鳥居龍蔵記念館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』pp.203-226，京都：思文閣出版。

［論文］

関　雄二

2021 「南米ペルー考古学との出会い――ナショナリズムを超えた文明史観」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館編『鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会」講演要旨集』pp.42-47，徳島：徳島県立鳥居龍蔵記念博物館。

Seki, Y. and D. S. Segami

2020 Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial para su uso y protección en la sierra norte del Perú. *Acta Hispanica* 2020（Supplementum II）: 737-746.［査読有］

Nagaoka, T., Y. Seki, M. O. Livia, and D. M. Chocano

2020 Depressed Skull Fracture at Pacopampa in the Peru's Northern Highlands in the Late Caja-

marca Period. *Anthropological Science* 128(2): 83–87.［査読有］

［その他］

関　雄二

2021「古代文明研究と現代社会――人間とモノの関係を巡る思索」『ラテンアメリカ時報』1433：65–67。

2021「ラテンアメリカの文化領域と古代文化」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.6–7，東京：丸善出版。

2021「文化遺産への国際協力」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.626–627，東京：丸善出版。

2021「コロナ禍にある村からの便り」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』61–62：3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2021年３月７日　'A Bridge between the Past and the Present: Cultural Heritage as a Mean to Build Social Memory in Peru(過去と現在の架け橋――ペルーにおける社会的記憶構築の手段としての文化遺産).' 連続ウェブ研究会『文化遺産実践における身体とモノ――集合的健忘に抗するための文化伝達　第4回　学術活動をとおした継承』オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年10月10日　'Pacopampa: 14años de investigación y conservación del centro ceremonial formativo.' Ciclo de conferencias magistrales（Tema: Arquitectura Monumental Prehispánica），オンライン開催

2020年10月11日　「権力分析の異なる位相――アンデス文明初期における威信財と社会的記憶」シンポジウム『社会進化の比較考古学』オンライン開催

2020年11月20日　「社会的記憶と無形遺産の導入――南米ペルー高地での有形遺産保護の試み」2020年度文化財行政講座、文化庁

2020年12月２日　'Repensando el impacto cultural de la sierra norte en la costa norte peruana durante la época prehispánica, Arqueología del valle de Lambayeque.' オンライン開催

2021年２月28日　「科学分析から見たアンデス文明初期の神殿の変貌」金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」オンライン・シンポジウム『世界の古代文明をめぐる最新調査研究』オンライン開催

2021年３月21日　「アンデス考古学の視点から」鳥居龍藏生誕150周年記念 国際シンポジウム『鳥居龍藏と現代社会――その学問と資料の意義を問う』徳島県立21世紀館イベントホール

・広報・社会連携活動

2020年８月28日　「アンデス文明におけるミイラ――古代での意味、現代社会での意味」池田市教育委員会、池田市中央公民館

2020年９月29日　「アンデスの文化遺産をめぐる問題――盗掘の実態」阪神シニアカレッジ

2020年９月29日　「マチュ・ピチュの発見と出土品の行方」阪神シニアカレッジ

2020年10月16日　「アンデス先住民と文化遺産――インカをめぐる葛藤」阪神シニアカレッジ

2020年10月16日　「アンデス文明の神殿を掘る」阪神シニアカレッジ

2020年12月19日　「ペルー北部地域の形成期の全体像」アンデス文明研究会、オンライン開催

2021年１月23日　「アンデスの世界・神殿のひみつオンライン（南米のペルー）」ワークショップ『2020世界旅オンライン たんけんたい⑨』マナラボ環境と平和の学びデザイン（京都府受託事業）、オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「先住民の視点からグローバル・スタディーズを再構築する領域横断研究」（研究代表者：池田光穂（大阪大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「総合資料学にもとづく古代アンデス文明の社会統合の解明」（研究代表者：鵜澤和宏）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「社会的記憶の

観点からみたアンデス文明史の再構築」研究代表者、金沢大学戦略的研究推進プログラム超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」（研究代表者：河合　望）プロジェクト担当者

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

公益財団法人平和中島財団　2020（令和２）年度国際学術研究助成「アンデス文明における饗宴と複合社会の成立に関する基礎研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本学術会議連携会員、日本ユネスコ国内委員会文化・コミュニケーション小委員会調査委員、ペルーカトリカ大学 PUCP 編集委員、公益財団法人高梨学術奨励基金選考委員、金沢大学国際文化資源学研究センターアドバイザー、文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会長、アンデス文明研究会顧問

平井京之介［ひらい　きょうのすけ］――― 副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

【学歴】東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）**【職歴】**国立民族学博物館第一研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部部長（2018）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2019）、国立民族学博物館副館長（2019）**【学位】**Ph.D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M.Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）**【専攻・専門】**社会人類学　水俣病被害者支援運動の人類学的研究、タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute

【主要業績】

［単著］

平井京之介

2011 『村から工場へ――東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT 出版。

［編著］

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ――移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

Hirai, K.（ed.）

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice and Society in East Asia*（Senri Ethnological Studies 91）. Osaka: National Museum of Ethnology.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、熊本県水俣市において、水俣病という悲惨な出来事を伝える場所やモノがいかにして「負の遺産」として保存されるようになったか、水俣病紛争が沈静化した現在の水俣社会においてそれらはどのような役割を果たしているかを明らかにすることである。本研究では、①水俣病被害者が運動のなかで収集してきたモノや記録が1990年代以降になって、いかにして「遺産」と認識されるようになったか、②行政がどのような経緯でそれらを「負の遺産」として保存・活用するようになったか、③「負の遺産」は社会においてどのような役割をもつか、を解明することを具体的な研究目的とする。なお、当研究に関わる現地調査においては、自身が代表を務める科学研究費（基盤研究（C））を利用する。

・成果

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、予定していた、水俣病に関わる「負の遺産」の保存・活用の

実態とその歴史的経緯を把握する現地調査を実施することができなかった。そのため、執行予定だった科学研究費（基盤研究（C））を来年度に繰り越すとともに、これまでに収集した水俣病センター相思社についての聞き取りデータおよび文献資料を分析し、水俣病センター相思社が1980年代後半にいかにして水俣病歴史考証館という展示施設を設立することになったのかについての経緯をまとめ、「考証館運動の生成――水俣病運動界の変容と相思社」として『国立民族学博物館研究報告』45巻4号に発表した。また、国立民族学博物館共同研究会「博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から」において、「手作り資料館の持続不可能な資料管理――水俣病歴史考証館の事例から」というタイトルで、水俣病歴史考証館の資料管理の現状について報告した（3月12日）。

◎出版物による業績

［論文］

平井京之介

2021 「考証館運動の生成――水俣病運動界の変容と相思社」『国立民族学博物館研究報告』45(4)：575-654。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2021年3月12日 「手作り資料館の持続不可能な資料管理――水俣病歴史考証館の事例から」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から』国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2020年11月21日 「ミュージアムが社会を変える――水俣の遺産」第504回みんぱくゼミナール

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（4人）、副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「ポスト紛争期の水俣における『負の遺産』の生成過程に関する博物館人類学的研究」研究代表者

人類基礎理論研究部

園田直子［そのだ　なおこ］――部長（併）教授

【学歴】Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学文学部美術史と考古学・美術史卒（1980）、Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学/U. E. R Art et Archéologie/ Maîtrise des Sciences et Techniques: Conservation et restauration des oeuvres d' art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques 修士課程修了（1982）、Ecole du Louvre エコール・ド・ルーブル卒（1983）、Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学/Histoire de l'art 美術史博士課程修了（1987）**【職歴】**Direction des Musées de France/Laboratoire de recherche des musées de France/アメリカ・ゲッティー財団との共同プロジェクト研究員（1987）、Direction des Musées de France/Service de restauration des peintures des musées nationaux/assistante scientifique（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2016）、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部研究部長（2017）**【学位】**博士（美術史）Doctorat de 3ème cycle en Histoire de l'art（Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学 1987）、科学技術修士 Maîtrise des Sciences et Techniques - Specialité: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques（Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学 1982）、文学士 Licence es Lettres（Université de Paris I（Panthéon-Sorbonne）パリ第1大学1980）**【専攻・専門】**保存科学**【所属学会】**ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、IIC–Japan（国際文化財

保存学会日本支部)、文化財保存修復学会

【主要業績】

［編著］

Sonoda, N.（ed.）

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer.

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第２版)』東京：岩田書院。

［学位論文］

園田直子

1987 *Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l' étude de quelques tableaux d'art contemporain,* Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2019 文化財保存修復学会第13回学会賞

2010 文化財保存修復学会第４回業績賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族資料の総合的資料管理

・研究の目的、内容

本館では、民族資料を対象に、総合的見地から資料管理を実践している。収蔵庫再編成は、単なる狭隘化対策ではなく、保存科学研究と連動した持続的な資料管理活動の一環と位置づけ、小型・中型の資料に関しては特別収蔵庫〈毛皮〉〈絨毯〉〈漆器〉および第３収蔵庫、大型の資料に関しては第１収蔵庫、船に関しては多機能資料保管庫、それぞれの収蔵庫再編成で収納・保管方法のプロトタイプを確立してきた。本年度は、収納・保管方法のプロトタイプが完成していない衣類収蔵庫での調査を継続し、対応策を検討する。平行して、IPM（総合的有害生物管理）の考えかたのもと、博物館環境調査をはじめとする予防保存活動、防虫・殺虫処理の検証と条件改良をおこなう。

・成果

本館では2004年度より、研究者の安全や調査・閲覧しやすさに留意しつつ、資料にとって安全な配架・収納を目的に、収蔵庫再編成を計画的に進めている。2018年の大阪府北部を震源とした地震は、本館が15年以上継続実施している収蔵庫再編成の方法論を検証し、再考する機会となった。2020年の文化財保存修復学会では、収蔵什器の安全性と、資料の収納・保管方法の改善に関する発表をおこなった。収蔵什器の安全対策強化として実施したのは、二段重ねの収蔵棚の連結作業と、マップケースの引き出し飛び出し防止のための安全バンド装着である。また、転倒の被害が集中した、土人形類とカチナ人形に関しては、それぞれの大きさ、重量、形態をもとに収納・保管方法を改善した。いくつかのカチナ人形に関しては、アメリカ先住民の研究者の助言を受け、カルチャル・センシティビティへの配慮から、個別に保存箱を製作するとともに、収蔵庫内でも人の目にふれにくい場所に別置する措置をとった。本館の経験を関連の研究機関、研究者と共有することで、博物館等にとって防災・減災だけでなく、喫緊の課題である収蔵スペース不足に対しても有用な具体的事例を提供することができた。なお、同学会は、新型コロナウィルス感染症の影響により、現地開催は中止となり、電子媒体による発表となった。

博物館環境調査をはじめとする予防保存活動としては、年４回実施している生物生息調査の結果をもとに、展示場および収蔵庫での防虫・殺虫処理の計画をたてた。また、新型コロナウィルス感染症の拡大防止対策として、展示場での外気の取り入れを最大限にしているところから、毎日、展示場・収蔵庫等の温湿度データを確認する体制をとり、博物館環境の適切な維持につとめた。同時に、実測データをもとに、換気量の増加が室内環境に与える影響の検証、分析を進めた。

◎出版物による業績

［その他］

河村友佳子・日髙真吾・園田直子・末森　薫・橋本沙知・和髙智美・桂田峰男

2020「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集（PDF データ）』pp.446-449。［査読有］

橋本沙知・園田直子・日髙真吾・末森　薫・河村友佳子・柴切弥生・西澤昌樹・和髙智美

2020「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境――国立民族学博物館の事例より」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集（PDF データ）』pp.256-259。［査読有］

末森　薫・正垣雅子・高林弘実・張　梁・園田直子・日髙真吾

2020「敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏図の再現」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集（PDF データ）』pp.214-217。［査読有］

日髙真吾・園田直子・末森　薫・河村友佳子・橋本沙知・和髙智美

2020「３Ｄスキャナーで製作した複製品の活用事例――ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集（PDF データ）』pp.266-269。［査読有］

岡山隆之・田中祐輝・小瀬亮太・金　海蘭・園田直子

2020「微細セルロースファイバー小型塗工機の試作と劣化した酸性紙への適用効果」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集（PDF データ）』pp.86-89。［査読有］

園田直子・日髙真吾・末森　薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・和髙智美

2020「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策――2018年の大阪府北部地震を受けて」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集（PDF データ）』pp.298-301。［査読有］

和髙智美・日髙真吾・園田直子・河村友佳子・橋本沙知・中村晋也・早川晃示・石樽康彦・和田光生・柿本雅美

2020「大津祭曳山『郭巨山』の妻人形、童子人形の修理事例」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集（PDF データ）』pp.182-185。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2021年３月12日「AD-Strips を用いたフィルム調査――国立民族学博物館の事例からの考察」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から』国立民族学博物館

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「民族資料の収蔵庫再編成」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日髙真吾）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価」（研究代表者：末森　薫）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

読売新聞大阪本社読売あをによし賞選考委員、愛知芸術文化センター愛知県美術館美術館専門委員会委員、公益財団法人文化財虫菌害研究所文化財 IPM コーディネータ委員会委員、国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員

出口正之［でぐち　まさゆき］――教授

1955年生。**【学歴】**大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）**【職歴】**ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教

授（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）**【専攻・専門】**NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学 **【所属学会】**国際NPO・NGO学会（ISTR＝International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA＝The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［著書］

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版。

［共編］

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi（eds.）

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York, Dordrecht, Heidelberg and London: Springer.

本間正明・出口正之編

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

【受賞歴】

1995 ESP大来佐武郎賞

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

トランスフォーマティブな非営利研究／新型コロナウイルス災厄時代におけるサイバー空間のフィールドワーク

・研究の目的、内容

トランスフォーマティブな非営利研究は、科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」を中心にした研究である。新しい分野の研究に積極的に挑戦して行く。あわせて、「民都・大阪」フィランソロピー会議議長として、「ビジネスセントリズム」に基づかない文化人類学的な視点により、本研究の成果として、地域社会貢献の実績を積んでいく。研究は、Shore & Wright（1999）が主張する「地理的フィールド」ではない「社会的かつ政治的空間としてのフィールド」を研究対象としたものであり、実際の政策に適用していくことによって一層の研究を深めていった。

昨年度からは、21世紀社会の新現象である「サイバー空間」もShore & Wrightのいう「フィールド」として捉えることで、萌芽的に「サイバー空間」のフィールドワークにも挑戦し、ネット上の収集を行う。特に、新型コロナウイルスの影響で、人と人とが接することができなくなっていることから、どのような文化の変化（例えば、儀礼や文化・芸術）が起こりうるのかを考察した。また、研究会なども積極的にネットを活用したものに挑戦した。

・成果

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」及び共同研究「人類学と会計学の融合」の成果として以下を出版。

［書籍］

出口正之・藤井秀樹編『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』清水弘文堂書房

日本フィランソロピー協会編『共感革命　フィランソロピーは進化する』中央公論事業出版

［雑誌論文］

出口正之

2020/12/15 「フランスの『公益の増進の徹底した改革』と日本の『失われた10年』」『公益・一般法人』（1020）：32. 全国公益法人協会。

出口正之

2020/09/10 「公益法人税制優遇のルビンの壷現象――価値的多様性と手段的多様性への干渉」『非営利法人研究学会誌』22：1-14. 東京：公益社団法人非営利法人研究学会。

出口正之

2020/04/15 「地方・国・海外から見た公益認定制度」『公益・一般法人』（1006）：39-45. 全国公益法人協会。

出口正之

2020/04/01 「公益法人制度に対する世間の誤解」『公益・一般法人』（1005）：18-28. 全国公益法人協会。

［口頭発表］

出口正之

2020/08/28 「【ガイダンス】言政学とは何か。COVID-19の中でのオンライン国際シンポジウム開催にあたって」東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化――普遍性と個別性、オンライン

出口正之

2020/08/28 「中国・台湾・日本の公益法人をめぐる制度改革」東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化――普遍性と個別性、オンライン

久保秀雄・出口正之

2020/09/26 「公益法人の財務三基準のシステム論的理解」公益社団法人非営利法人研究学会第24回全国大会、オンライン

出口正之

2020/09/26 「相違説に基づく非営利会計の本質と国際標準化」公益社団法人非営利法人研究学会第24回全国大会、オンライン

［報告書］

「民都・大阪」フィランソロピー会議報告書

［動画］

YouTube

トランスフォーマティブ研究とは何か　2021年２月10日

https://youtu.be/iWbT9j3K7Ck

『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』のブック・ローンチ・ビデオ第二弾大阪バージョン

2021年３月２日

https://youtu.be/SAFBoVUYOyw

◎出版物による業績

［編著］

出口正之・藤井秀樹編

2021 『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』東京：清水弘文堂書房。［査読有］

［分担執筆］

出口正之

2021 「フィランソロピーの過去・現在・未来」日本フィランソロピー協会編『共感革命――フィランソロピーは進化する』pp.132-161，東京：中央公論事業出版。

［論文］

出口正之

2020 「公益法人制度に対する世間の誤解」『公益・一般法人』1005：18-28。

2020 「地方・国・海外から見た公益認定制度」『公益・一般法人』1006：39-45。

2020 「公益法人税制優遇のルビンの壷現象――価値的多様性と手段的多様性への干渉」『非営利法人研究学会誌』22：1-14。

2020 「フランスの『公益の増進の徹底した改革』と日本の『失われた10年』」『公益・一般法人』1020：32。

［その他］

出口正之

2020 「寄付探訪⑨　感染症とフィランソロピー」『フィランソロピー』397：24。

2020 「より冷静で確実な情報の提供を」『公益・一般法人』1006：4-８。

2020 「寄付探訪⑩　フィランソロピー元年」『フィランソロピー』398：21。
2020 「寄付探訪⑪　ベルリンの壁の崩壊と世界的広がり」『フィランソロピー』400：21。
2020 「非営利会計の国際的な標準化の議論に幅広い参加を」『公益・一般法人』1018：1。
2020 「それぞれの法人でぜひ理事会等の機関の役割について議論を」『公益・一般法人』1006：7-11。
2020 「寄付探訪⑫　阪神淡路大震災の影響」『フィランソロピー』401：25。
2021 「寄付探訪⑬　NPO 法の成立と用語の混乱」『フィランソロピー』402：20。
2021 「実効性を持たせるために理事会でしっかりと議論を」『公益・一般法人』1022：8-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年 8 月28日 「【ガイダンス】言政学とは何か。COVID-19の中でのオンライン国際シンポジウム開催にあたって」館長リーダーシップ国際シンポジウム『東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化――普遍性と個別性』オンライン開催
2020年 8 月28日 「中国・台湾・日本の公益法人をめぐる制度改革」館長リーダーシップ国際シンポジウム『東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化――普遍性と個別性』オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 9 月26日 「公益法人の財務三基準のシステム論的理解」公益社団法人非営利法人研究学会第24回全国大会、オンライン開催
2020年 9 月26日 「相違説に基づく非営利会計の本質と国際標準化」公益社団法人非営利法人研究学会第24回全国大会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」研究代表者

日髙真吾［ひだか　しんご］―――― 教授

1971年生。**【学歴】**東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）**【職歴】**（財）元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**文学博士（東海大学 2005）**【専攻・専門】**保存科学、保存修復 **【所属学会】**文化財保存修復学会、日本文化財科学会、日本民具学会

【主要業績】

［単著］

日髙真吾
2015 『災害と文化財――ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。
2008 『女乗物――その発生経緯と装飾性』平塚：東海大学出版会。

［編著］

日髙真吾編
2012 『記憶をつなぐ――津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

【受賞歴】

2016　文化財保存修復学会　業績賞
2009　日本文化財科学会第 4 回ポスター賞
2008　文化財保存修復学会第 2 回奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのように文化が継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに貢献しうるかを考察することを研究の主眼とする。

この研究からは、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを住民自身が感じることができるプログラムの策定、③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す。

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日髙真吾）および、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日髙真吾）の研究プロジェクトと関連づけながら実施する。

・成果

2020年度は、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示について、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」を2021年３月４日から５月18にかけて開催した。②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを住民自身が感じることができるプログラムの策定では、枚方市旧田中家鋳物民俗資料館と共同して、教育パック「地域文化の宝箱」シリーズの「枚方の鋳物づくりと昔のくらし」を製作し、来年度から本格運用をおこなう準備を整えた。③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築では、2021年度に公開シンポジウム「多角的な視点からとらえる地域の文化――博物館における研究の可視化・高度化」を開催する準備を進めた。また、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す点では、昨年度におこなった京都造形芸術大学での連続講座「民俗文化財の保存・活用入門」の成果をもとに、日髙真吾編『継承される地域文化――災害復興から社会創発へ』を刊行した。また、昨年度開催した国際フォーラム「地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす地域文化の役割」のブックレットを刊行した。

以上の研究は、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日髙真吾）および、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日髙真吾）の研究プロジェクトと関連づけながら実施した。

ただし、当初研究計画であった、教育キット「地域文化の宝箱」の村上市の学校での本格運用や台北芸術大学との協定のもと、災害復興における博物館の役割をテーマとした国際フォーラムの開催は、新型コロナウイルス感染症拡大により、実施が実現できなかった。

◎出版物による業績

［編著］

日髙真吾・黄　貞燕編

2021　『地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割』大阪：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日髙真吾研究室。

日髙真吾編

2021　『復興を支える地域の文化――3.11から10年』大阪：国立民族学博物館。

2021　『継承される地域文化――災害復興から社会創発へ』京都：臨川書店。［査読有］

［論文］

日髙真吾

2020　「フォーラム型ミュージアム『時代玩具コレクションデータベース』について」近畿民具学会編『近畿民具』42：33-43。

2020　Museum Management Thinking from an Environmental Perspective: Examples of Undertakings at the National Museum of Ethnology. In A. Nobayashi and S. Simon (eds.) *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific* (Senri Ethnological Studies 103), pp.137-164. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

2020 「地域文化の活用を目指して」『民具研究』161：43-54。

［その他］

日髙真吾

2020 「スマートフォンで展示場を歩く」『月刊みんぱく』44(9)：16-17。

2021 「特別展『復興を支える地域の文化――3.11から10年』」『美術の窓』450：177。

2021 「東日本大震災から10年――地域文化の継承を目指して」特集「地域の記憶と向き合う」『月刊みんぱく』45(3)：2-3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

2021年3月4日～5月18日 「復興を支える地域の文化――3.11から10年」国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「時代玩具コレクションの公開プロジェクト」研究代表者、人間文化研究機構広域連携型「地域における歴史文化研究拠点の構築」（研究代表者：小池淳一）メンバー、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」研究代表者

福岡正太［ふくおか　しょうた］――教授

1962年生。**【学歴】**東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）**【職歴】**国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2020）**【学位】**芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）**【専攻・専門】**民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスンダ伝統音楽についての研究**【所属学会】**東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会、国際伝統音楽学会（International Council for Traditional Music）、民族芸術学会、日本民俗音楽学会

【主要業績】

［論文］

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160，東京：ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究――民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2)：257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp. 95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、音楽芸能の学術的な記録および分析の手段として、重要な役割を果たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの存在を抜きにして論じることはできない。一方、20世紀を通

じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化発展が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、近年、手軽なビデオ撮影機器の普及とネット技術の発展により、音楽芸能にかかわる関係者が自ら映像を作成して公開することが普通になり、映像は音楽芸能の上演や伝承そして創造に不可欠なものとして組み込まれつつある。こうした状況の中、研究機関等にとって、音楽芸能の関連資料を伝承や創造にも活用可能な形でアーカイブ化することが課題となっている。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響および情報メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀のアジアにおいて、レコードやラジオなどのメディアおよび博物館や学校などの近代的制度が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。民博が所蔵する日本コロムビアレーベルの外地録音金属原盤資料等に基づき、1930年代前後の東アジアの音楽交流のあり方について検討する。また、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多元的意味に関する研究」（研究代表者：福岡まどか）により、インドネシア芸能の発展とメディアや近代的制度とのかかわりについて研究を進める。②国立民族学博物館が所蔵する音楽関連資料を例に、音楽芸能の伝承や創造への活用を前提とした関連資料のアーカイブ化の諸問題について明らかにする。楽器資料に関するフォーラム型情報ミュージアム「世界の音楽と楽器」を活用し、通文化的な広がりをもつ双方向的データベースにより、楽器に関する学術的な知識の蓄積と活用の可能性を探る。また、「東洋音楽学会調査記録」資料を精査し、1950年代から80年代ころにおこなわれた日本の民俗音楽調査のあり方と意義を明らかにするとともに、調査資料を現在の音楽芸能の伝承や創造に生かすための諸条件を探る。③科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）により鹿児島県徳之島および三島村の芸能を例として、芸能の映像記録を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像記録が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。

・成果

①20世紀前半のインドネシアのラジオ放送により伝統的な音楽にどのような変化がもたらされたのかについて12月にマレーシアのサンウェイ大学がオンラインで開催したInter-Asia Popular Music Studies Conferenceにおいて、“The ‘modern’ in Sundanese music broadcast over the radio in the 1930s and 1940s”と題した研究発表をおこない、近日出版予定の同会議の報告書に論文を寄稿した。また、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多元的意味に関する研究」（研究代表者：福岡まどか）の成果として、民博の東南アジア展示におけるラーマーヤナ表象の変化について、編集中の英文論文集に論文を寄稿した。②民博の研究アーカイブズ資料・映像音響資料精査プロジェクトにて、民博が所蔵する東洋音楽学会調査記録資料の一部をなすべき五島列島民俗音楽調査資料（山口修大阪大学名誉教授所蔵）について、本館と東洋音楽学会のあいだの研究協定に基づき、寄贈受入を前提として精査をおこなった。近日中に同資料の寄贈受入申請をおこなう予定である。③科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）の成果に基づき、共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究」（研究代表者：野澤豊一）の成果論文集に、「行為としての民俗芸能の映像記録とその活用」を寄稿した（出版準備中）。

◎出版物による業績

［その他］

福岡正太

2020 「異文化の音楽をまなぶ」『月刊みんぱく』44(7)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月4日 ‘The “Modern” in Sundanese Music Broadcast over the Radio in the 1930s and 1940s.’ 7th Inter-Asia Popular Music Studies Conference (IAPMS), Department of Film & Performing Arts, Sunway University, Selangor, Malaysia, オンライン開催

・広報・社会連携活動

2020年8月8日 「国立民族学博物館における芸能の映像記録作成と活用」『日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成――「伝統×伝統」、「伝統×現代」、「伝統×地域」のクロスオーバーによる新たな価値の創出を目指して』東京音楽大学付属民族音楽研究所、オンライン開催

◎大学院教育

・**指導教員**

主任指導教員（４人）、副指導教員（１人）

・**大学院ゼミでの活動**

テーマシリーズ講義「レコードに聴く東アジアの音楽交流」

・**博士論文審査委員（総研大に限る）**

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多元的意味に関する研究」（研究代表者：福岡まどか）研究分担者、国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・**他大学の客員、非常勤講師**

広島市立大学「音楽人類学Ⅱ」（集中講義）、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」（集中講義）

・**その他の社会活動・館外活動**

東洋音楽学会会長理事、日本民俗音楽学会理事

岡田恵美［おかだ　えみ］―― 准教授

【学歴】東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学専攻博士課程修了（2010）**【職歴】**東京藝術大学音楽学部楽理科教育研究助手（2010-2011）、琉球大学教育学部専任講師（2012-2016）、琉球大学教育学部准教授（2017-2019）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2020）**【学位】**博士（文学）（東京藝術大学大学院 2010）**【専攻・専門】**音楽民族学、南アジア研究

【主要業績】

［単著］

岡田恵美

2016 『インド鍵盤楽器考――ハルモニウムと電子キーボードの普及にみる楽器のグローカル化とローカル文化の再編』広島：渓水社

［分担執筆］

岡田恵美

2021 「第５章　インド北東部ナガランド州にみるローカリティの再創造――ポピュラー音楽振興政策とフェスを通して『つながる』ナガの若者たち」 松川恭子・寺田吉孝編『世界を環流する〈インド〉――グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』pp.160-185，東京：青弓社。［査読有］

［論文］

岡田恵美

2020 「八重山諸島・黒島の正月綱引き『世引き（ユーピキ）』――ローカリティの再生と歌の伝承問題を考える」『民族藝術学会誌　arts/』36：186-195。

【受賞歴】

2017　第６回日本南アジア学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

インド北東部におけるポリフォニーと歌唱文化に関する音楽民族学研究

・研究の目的、内容

ミャンマーと国境を接するインド北東部ナガランド州とマニプル州には、モンゴロイド系の山岳民族「ナガ」が暮らす。ナガの居住区は、第二次世界大戦中にはインパール作戦の戦地となり、戦後は独立闘争が激化し、インド軍による軍事弾圧はナガ社会を半世紀以上苦しめた。2011年に両州への外国人の入域規制が緩和されたことを契機に、ナガランド州で調査を実施したところ、南アジアにおいて極めて稀少な合唱様式の民謡や労働歌が伝承されていることが明らかとなった。

本研究の第一の目的は、マニプル州に暮らすナガの民謡の音楽的構造や社会文化的脈絡を調査・分析し、ナガ社会における歌の機能と協働性について解明することである。今年度は、マニプル州の中でもナガの人口の多いマオ、マラム集落を対象とした現地調査を実施する。情報提供者の許諾を得た上で、民謡の実践や教習・伝承の場を録音・撮影し、民謡やその伝承に対する世代間の意識を考察するため、幅広い年齢層にインタビューも行う。（科学研究費（基盤研究（C））「南アジアのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究――インド・マニプル州ナガを中心に」）

また第二の研究目的は、ナガランド州南部に伝承される「リ」と呼ばれるポリフォニーの民謡を対象として、その記録保存と教育資源化を現地研究者と共同で推進することである。具体的には、3集落で現地調査を実施し、調査で得た音源・映像から民謡のレパートリーを緻密に採譜した上で、詩型・歌詞の現代語訳や隠喩法に関する分析、またポリフォニックな構造や協和音を生むメカニズムについて解明する。（平和中島財団・アジア地域重点学術研究助成「インド北東部・山岳民族チャケサン・ナガの伝統歌唱文化『リ（Li）』の記録保存と教育資源化」）

・成果

今年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって、当初予定していたマニプル州に居住するナガの民謡の実践や教習・伝承の場の録音・撮影といった現地調査が不可能であった。またナガランド州南部に伝承されるポリフォニーの民謡の記録保存と教育資源化をめぐる、現地研究者との共同調査・研究に関しても、現地調査ができない状態の中で、十分に推進することが困難であった。

上記のような状況に伴い、今年度はこれまでの調査で得た録音資料の分析を中心に進めた。その結果、研究成果に関しては、10月にオンラインで開催された国際学会「第10回伝統ポリフォニー国際シンポジウム」で口頭発表を行ったほか、国内の学会・研究会等でも本研究に関連する3件の発表・報告を行った。また、1月には分担執筆した『世界を環流する〈インド〉――グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』（松川恭子・寺田吉孝編，青弓社，2021年，第5章担当）（科学研究費での研究と関連）が出版された。その他にも、国際学会から依頼された会報記事や、月刊みんぱく等の国内の雑誌記事においても、本研究に関連する報告を行っている。

◎出版物による業績

［分担執筆］

岡田恵美

2021 「第5章　インド北東部ナガランド州にみるローカリティの再創造――ポピュラー音楽振興政策とフェスを通して『つながる』ナガの若者たち」松川恭子・寺田吉孝編『世界を環流する〈インド〉――グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』pp.160–185，東京：青弓社。［査読有］

［論文］

Okada, E.

2021 Polyphonic Singing of Chakhesang Naga tribe in India. *The IRCTP Bulletin* 29: 19–20.

［その他］

岡田恵美

2020 「世界の島嶼をつなぎ共振する音楽」『みんぱく e-news』230：巻頭コラム。

2020 「多言語の国――インドの教室にて」『月刊みんぱく』44(10)：20。

2021 「編んで着飾る男たち」『月刊みんぱく』45(1)：14–15。

2021 「旅・いろいろ地球人 沖縄の年中行事と歌① 旧正月の綱引き」『毎日新聞』2月6日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 沖縄の年中行事と歌② 消えゆく伝統歌唱」『毎日新聞』2月13日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 沖縄の年中行事と歌③ 海人と糸満ハーレー」『毎日新聞』2月20日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 沖縄の年中行事と歌④ ハーレー歌再び」『毎日新聞』2月27日夕刊。

2021 「名門校か、公立校か？ 教育の権利法が生んだ歪み」『月刊みんぱく』45(3)：18–19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2020年７月11日　「無形文化の観光資源化と復興のプロセス――インド北東部ナガランド州の芸能祭に着目して」2020年度 MINDAS「音楽・芸能」班第１回研究会、オンライン開催

・民博研究懇談会

2020年12月９日　「共に歌う山の民ナガ――インド北東部ナガランド州の音楽文化にみる特殊性」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年10月20日　'Traditional Polyphonic Singing Culture and Interpersonal Cooperativeness of Chakhesang Naga, an Ethnic Minority in Northeast India.' 10th Anniversary International Symposium on Traditional Polyphony, オンライン開催

2021年３月６日　「インド北東部ナガランド州の歌唱文化にみる特殊性――なぜポリフォニーなのか？」第288回東洋音楽学会西日本支部例会、オンライン開催

・展示

2021年３月25日　「音楽展示チャルメラ」改修

・広報・社会連携活動

2021年２月８日　「Music or Musicking?（大学共同利用：大阪産業大学学生に向けた民博での講義）」国立民族学博物館

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2020年10月　「みんぱっく（インドのサリーとクルター）への追加資料２点および教材資料の作成」

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（２人）

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「『音楽民族学』分類・属性・グローカリゼーションを考える――インドの鍵盤楽器を事例に」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「独立後のインド音楽世界を文化資源化する知の統合研究」（研究代表者：田中多佳子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「南アジアのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究――インド・マニプル州ナガを中心に」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

平和中島財団・アジア地域重点学術研究助成「インド北東部・山岳民族チャケサン・ナガの伝統歌唱文化『リ（Li）』の記録保存と教育資源化」研究代表者

川瀬　慈［かわせ　いつし］――准教授

1977年生。**【学歴】**立命館大学文学部卒（2001）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員 PD/ 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（2007）、日本学術振興会海外特別研究員 / マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター（2010）、メケレ大学 Abba Gorgoryos Guest Professor（2011）、SIC-Sound Image Culture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所 Hiob Ludolf Guest Professor（2013）、ブレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）、山東大学人類学科客員教授（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）**【専攻・専門】**アフリカ地域研究、映像人類学、民族誌映画制作**【所属学会】**日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会、英国王立人類学協会

【主要業績】

［単著］

川瀬　慈

2018 『ストリートの精霊たち』京都：世界思想社。

［編著］

川瀬　慈編

2019 『あふりこ――フィクションの重奏 / 遍在するアフリカ』東京：新曜社。

［論文］

Kawase, I.

2017 ETHNOGRAPHIC FILMMAKING IN ETHIOPIA, the Approach and the Film Reception. In S. Dinslage and S. Thubauville（eds.）*Seeking out wise old men: Six decades of Ethiopian Studies at the Frobenius Institute revisited*（Studien zur Kulturkunde 131）, pp.75–86. Berlin: Reimer-Verlag.

【受賞歴】

2019　第 6 回鉄犬ヘテロトピア文学賞、受賞対象作：川瀬慈著『ストリートの精霊たち』（世界思想社、2018））

2013　第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008　最も革新的な映画賞、サルデーニャ国際民族誌映画祭、受賞対象作：Room 11, Ethiopia Hotel

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づけ、その相互作用が、研究の新たな展開を生成させうる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や上映を基軸に提示し、論文としても発表する。

・成果

2020年度は研究課題に関する複数の著作を執筆し、発表することができた。代表的な刊行物としては、科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」に関連する成果である単著『エチオピア高原の吟遊詩人　うたに生きる者たち』（音楽之友社）が挙げられる。本書では、エチオピア北部の地域社会において音楽・芸能を生業とする職能集団の活動の歴史的変遷から、当集団を対象にした映像記録の方法論をめぐる報告者による創意工夫、さらに完成した記録作品が各国で巻き起こした議論について報告した。本書にはQRコードを付し、報告者が制作した 4 本の民族誌映画作品と書籍を連動させる試みを行った。大阪の映画館シネヌーボーにおいて 9 月に開催された東京ドキュメンタリー映画祭 in 大阪においては、アフリカ無形文化をテーマに報告者が制作した 3 本の民族誌映画を発表した。さらに研究集会 The Image Making from Africa―Perspectives from Visual Anthropology―を主宰者として企画し、東京外国語大学や日本アフリカ学会の協力のもと、2020年 6 月と2021年 3 月にオンラインで開催した。本会では、マリ、カメルーン、エチオピアの映像人類学者、映像作家とともに彼ら / 彼女たちが制作した研究映像を視聴し「人類学的な映像記録とは何か？」について議論を行った。アフリカと日本の映像人類学者の建設的な研究交流を今後も継続し深めていく予定である。

◎出版物による業績

［単著］

川瀬　慈

2020 『エチオピア高原の吟遊詩人――うたに生きるものたち』東京：音楽之友社。

2021 『叡智の鳥』東京：tobmac / インスクリプト。

［分担執筆］

川瀬　慈

2020「民族誌映画」artscape 編集部編『artscape　アートスケープ』現代美術用語辞典 ver.2.0，東京：DNP Art Communications。

2021「エチオピアの酸味」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.546–547，東京：丸善出版。

ウスビ・サコ，和崎春日，鈴木裕之，川瀬　慈

2020「現代アフリカ・カルチャーの現在地」ウスビ・サコ，清水貴夫編『現代アフリカ文化の今――15の視点から、その現在地を探る』pp.12–40，京都：青幻舎。

［その他］

川瀬　慈

2020「バー・マレブ」『Subsequence』3：19。

2020「コロナ時代の民族誌映画祭」『月刊みんぱく』44(12)：18–19。

2021「このごろ通信　先客の歩行」『毎日新聞』1月4日夕刊。

2021「このごろ通信　曽祖父とヒル」『毎日新聞』1月18日夕刊。

2021「このごろ通信　ぬめり」『毎日新聞』1月25日夕刊。

2021「このごろ通信　鳥の歌声の旅」『毎日新聞』2月1日夕刊。

2021「このごろ通信　標」『毎日新聞』2月8日夕刊。

2021「このごろ通信　伝承」『毎日新聞』2月15日夕刊。

2021「このごろ通信　さずかる」『毎日新聞』2月22日夕刊。

2021「このごろ通信　写す」『毎日新聞』3月1日夕刊。

2021「このごろ通信　私の中の野生」『毎日新聞』3月8日夕刊。

2021「このごろ通信　牛の聴力」『毎日新聞』3月15日夕刊。

2021「このごろ通信　海と浜のあわい」『毎日新聞』3月22日夕刊。

2021「このごろ通信　土に還る」『毎日新聞』3月29日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CD などの制作・監修

川瀬　慈　監修

2021『みんぱく映像民族誌　第38集　アシェンダ！――エチオピア北部地域社会の女性のお祭り』（日本語、アムハラ語、ティグライ語・38分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2021年3月10日　「映像話法の方法論」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月21日　「アフリカ無形文化の記録をめぐる課題――エチオピア音楽・芸能の映像人類学研究の事例より」文化遺産国際協力コンソーシアム第15回アフリカ分科会、オンライン開催

・研究講演

2020年7月12日　「蝕のイメージ、創発のコロナ、グルーヴのアフリカ」本屋ルヌガンガ

2020年11月11日　「歌を通して世界を多層的に読み替える」一般社団法人エチオピア・アートクラブ、オンラインとのハイブリッド開催

2020年11月21日　「映像話法の理論と実践」（Tokyo Art Research Lab 東京プロジェクトスタディ）アーツカウンシル東京、アーツ千代田 3331

2020年12月16日　「芸能から世界を多層的に見つめる――映像人類学からの考察1」NHK 文化センター京都、オンライン開催

2021年1月11日　「芸能から世界を多層的に見つめる――映像人類学からの考察2」NHK 文化センター京都、オンライン開催

2021年2月14日　「マタギと人類学者――自然と社会の〈距離〉を考える」第51回マルチスピーシーズ人類学研究会、マルチスピーシーズ人類学研究会、オンラインとのハイブリッド開催

2021年2月15日　「言葉の鳥はどこまで飛べるか」明治大学理工学部批評理論研究室、オンライン開催

2021年２月17日　「芸能から世界を多層的に見つめる――映像人類学からの考察３」NHK 文化センター京都、オンライン開催

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2020年９月１日　「東京ドキュメンタリー映画祭 in 大阪　民族誌映画・川瀬　慈作品特集」neoneo 編集室、シアターセブン

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」研究代表者、文化庁2020年度大学における文化芸術推進事業「今を生きる人々と育む地域芸能の未来――『保存』から『持続可能性』への転換を志向する場の形成と人材育成」（研究代表者：向井大策（沖縄県立芸術大学））メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

International Society for Ethnology and Folklore（SIEF）Selection Committee, Film Program, the 15th Congress of the SIEF 2021, Helsinki、International Union of Anthropological and Ethnological Sciences（IUAES）Scientific Committee, IUAES 2021 Congress in Yucatán（México）、The 15th German International Ethnographic Film Festival, Jury、The Intercultural Institute of Comparative Music Studies（IISMC), Giorgio Cini Foundation, Jury, Carpitella Fellowship 2020、公益社団法人全日本郷土芸能協会世界無形文化遺産フェスティバル2020招聘団体選考委員、日本文化人類学会第28・29期日本文化人類学会学会誌編集委員

◎学会の開催

2020年６月26日　“The Image-making from Africa, Part 1-Perspectives from Visual Anthropology-”, Anthrofilm Laboratory, オンライン開催

2021年３月16日　“The Image-making from Africa, Part 2-Perspectives from Visual Anthropology-”, Anthrofilm Laboratory, オンライン開催

菊澤律子［きくさわ　りつこ］――准教授

1967年生。**【学歴】**東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程退学（1995）、ハワイ大学大学院言語学部言語学専攻博士課程修了（2000）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2005）、総合研究大学院大学人文科学研究科准教授（2006）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**Ph. D.（Linguistics）（ハワイ大学2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）**【専攻・専門】**言語学、音声言語と手話言語の対照言語学、記述言語学、歴史（比較）言語学、言語類型論、オーストロネシア語族、歴史（比較）統語論、フィジー語諸方言、マラガシ語諸方言、オセアニアの先史研究、ヒトの移動誌、動植物のドメスティケーション、文化接触・文化交流、言語情報と地理情報システム（GIS）**【所属学会】**日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society（UK）、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics、日本手話学会、Sign Language Linguistics Society、関西言語学会

【主要業績】

［単著］

Kikusawa, R.

2003　*Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and*

Polynesian Languages. Canberra: Pacific Linguistics.

［編著］

Kikusawa, R. and L. A. Reid（eds.）

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011*（Current Issues in Linguistic Theory 326）. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

［論文］

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀研究者賞

2008 第４回日本学術振興会賞

2005 第４回日本オセアニア学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フィジー諸言語の発達史研究における地理情報システム（GIS）の応用

・研究の目的、内容

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））の三年度目として、フィジー語諸方言データの地理情報システム（GIS）化の成果を活用し、言語情報とその地理情報を組み合わせることで、引き続き、当該言語の史的変遷についてどのような研究ができるのか、その手法の研究を行う。

GISは近年、考古学や歴史学等の人文科学系分野にも応用されるようになり、成果をあげているが、言語データへの適用は限られている。その理由のひとつに、言語データはその分布域の特定が難しく、そもそも地図上にデータを落とすことが困難であることに加え、その手続きを踏むことの利点が見えにくいことがあげられる。特に、言語データの比較がマクロレベルで行われる場合には、地理情報・地形情報と言語との結びつきはゆるやかであり、人間の目でみて分析することができた。ところが、近年、現地調査による詳細なデータが報告されるに従い、ミクロレベルでの比較再建が必要となってきた。言語は、垂直伝播と水平伝播が入り組んで発達するが、今のところ、これらを組み合わせて動的な史的変遷の模様を解明するツールはない。これを、地面情報を媒介とし、音対応、語彙や文法現象の共有・非共有といった言語情報と、地形や行政や文化にかかわる区域を組み合わせた分析を可能にすることで、新しい研究手法に結び付けられる可能性があると考えている。昨年度ウェブ上で稼働するベータ版を完成したことから、データのギャップが明らかになった。今年度はそれらのさらなる整備を最優先に進めつつ、ウェブ版をも利用しながら研究手法に関するさらなる検討を進め、合わせて理論的な裏付けについても取り組む。また、国際共同研究、学際共同研究の一例として、課題や解決法について発生の都度、報告をまとめること、また、地図として成果物の博物館展示への応用や社会還元の方法などについても検討することで、学界および社会貢献にも結び付ける。

・成果

今年度はコロナ禍の影響で個人レベルでもチームレベルでも、予定を立てるのが難しかったため、基礎データの整備を進めた。フィジー諸方言GISデータとして完成公開したβ版（https://arcg.is/1my5L5）を見直し、抜けや不統一な部分の整備を行った。また、構築段階で得られなかったデータの追加を行った。さらに、このシステムに手書きの地図を取り込む手法を検討し、2021年度にスタートできるよう準備を進めた。

◎出版物による業績

［論文］

Kikusawa, R.

2020 Conducting Syntactic Reconstruction of Languages with No Written Records. In E. Luján, J. Barðdal and S. Guildea（eds.）*Reconstruction Syntactic*（Brill's Studies in Historical Linguistics 11）, pp.108-161. Leiden: Brill.［査読有］

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「手話翻訳システム構築を目指した手話対話における文単位の認定」（研究代表者：坊農真弓（国立情報学研究所））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「時空間を融合する―― GIS と数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（研究代表者：相良啓子）研究分担者

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

日本財団助成金「手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Virtual Conference: Language, Communication and Education学術評価委員、Scientific Committee member、日本言語学会常任委員、大阪大学2017-2019年度全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、Brill's Studies in Historical Linguistics編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics編集顧問委員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、International Society for Historical Linguistics（ISHL）国際歴史言語学会理事

丸川雄三［まるかわ　ゆうぞう］―――― 准教授

【学歴】東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】**東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構 CREST 研究員（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）**【学位】**博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）**【専攻・専門】**文化財情報発信、連想情報学 **【所属学会】**アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

［論文］

丸川雄三

2018 「美術関係資料アーカイブズにおける情報管理発信システムの研究」『アート・ドキュメンテーション研究』25：3-17。［査読有］

2017 「ミュージアムの情報発信力を高める文化遺産オンラインの活用法」『情報の科学と技術』67(12)：628-632。［査読有］

丸川雄三・阿辺川武

2010 「横断的連想検索サービス『想―― IMAGINE』――データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204。

【受賞歴】

2011　文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

2020年度は、文化庁の「文化遺産オンライン」、国立映画アーカイブの「日本アニメーション映画クラシックス」、奈良国立博物館の「法隆寺金堂壁画写真ガラス原板」デジタルビューアなど、これまで国立情報学研究所高野明彦研究室と共同で進めてきた文化財情報の活用と発信に関する研究を継続して進める。あわせて美術情報分野を中心とする制作者データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は科学研究費（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（研究代表者：丸川雄三）の助成を受け実施してきたものであるが、研究成果をふまえ今年度も継続して研究を進める。

・成果

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究として、国立情報学研究所と文化庁が共同で運営する文化財ポータルサイト「文化遺産オンライン」の開発に参画し、サイトリニューアルのための企画と構成を進めた。この研究に関連して、2020年11月に刊行された書籍『アートシーンを支える』（デジタルアーカイブ・ベーシック4：勉誠出版）に「文化遺産オンライン試験公開版の構築」が掲載された。またデジタル技術を活用した展示場情報発信の研究として、国立情報学研究所と奈良国立博物館の共同研究に参画し、2020年７月22日に一般公開されたウェブサイト「法隆寺金堂壁画写真ガラス原板デジタルビューア」の制作取りまとめをおこなった。美術情報分野の情報統合手法の研究については、ウェブサイト「『みづゑ』の世界」の公開に向けた準備を進め、成果の一部を2020年10月に東京文化財研究所で開催された研究会で発表した。その他に研究資料の情報を公開するための研究に取り組み、成果の一部を2020年５月に刊行された学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』で公表した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

丸川雄三

2020 「文化遺産オンライン試験公開版の構築」高野明彦監修・嘉村哲郎責任編集『アートシーンを支える』（デジタルアーカイブ・ベーシックス4）pp.233–248，東京：勉誠出版。［査読有］

［論文］

丸川雄三

2020 「研究資料デジタルアーカイブズの活用におけるウェブシステムの研究――身装画像データベース公開用ウェブ API の設計と詳細」『アート・ドキュメンテーション研究』27・28：62–74。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年５月17日 「データベースと編集機能を用いた写真整理の支援」DiPLAS 公開セミナー『埋もれた写真を掘り起こす――データベースを用いた整理術の開発と応用』オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年６月27日 「デジタルアーカイブズの活用研究――テーマ型情報展示で広がる学びの可能性」アート・ドキュメンテーション学会シンポジウム『芸術文化資源デジタル・アーカイブの国際的共同利用――オンライン環境での知的生産システムとそのツール』オンライン開催

2020年６月28日 「文化財デジタルアーカイブズの持続可能な発信環境の研究――文化遺産オンライン試験公開版の負荷分散システムを例に」第31回アート・ドキュメンテーション学会年次大会、オンライン開催

2020年10月８日 「近代美術研究における関係資料の発信と活用」東京文化財研究所文化財情報資料部2020年度第４回研究会、東京文化財研究所

・展示

2020年９月３日～12月１日 「梅棹忠夫生誕100年記念企画展『知的生産のフロンティア』」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年９月27日 「デジタル技術でみる『梅棹忠夫アーカイブズ』」第571回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

吉岡　乾［よしおか　のぼる］——准教授

1979年生。**【学歴】**東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2012）**【職歴】**国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員 PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教（2017）、神戸大学国際教養教育院非常勤講師（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2019）**【学位】**博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）**【専攻・専門】**言語学　記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、南アジア（パキスタン）研究 **【所属学会】**日本言語学会、日本南アジア学会、Societas Linguistica Europaea

【主要業績】

［論文］

吉岡　乾

2020 「ブルシャスキー語の名詞修飾表現」プラシャント・パルデシ，堀江薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』pp.515–534，東京：ひつじ書房。［査読有］

Yoshioka, N.

2019 The Decay and Reconstruction of Nominal Classes in Srinagar Burushaski. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 44(2): 239–254.［査読有］

2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2): 109–125.［査読有］

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、系統的孤立語であるブルシャスキー語、北パキスタンの消滅の危機に瀕した言語であるドマーキ語を中心にしつつ、カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、パシトー語、カシミーリー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。

・成果

世界的な COVID-19の流行に伴い、2020年度は現地調査に赴くことが適わなかった。

研究の成果として、１月にカティ語に関連したジャーナル論文（英語）を発表した。ブルシャスキー語に関しての論文（日本語）を寄稿した名詞修飾表現に関する論文集が５月に刊行された。フィールド言語学と多様性に関するシンポジウムでの基調講演を１本、その他、様々な研究会での発表を行った。

◎出版物による業績

［分担執筆］

吉岡　乾

2021 「味の表現」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.522–523，東京：丸善出版。

2021 「南アジア地域の食文化――パキスタン」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.586–588，東京：丸善出版。

［論文］

吉岡　乾

2020 「ブルシャスキー語の名詞修飾表現」プラシャント・パルデシ，堀江　薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』pp.515–534，東京：ひつじ書房。［査読有］

Yoshioka, N.

2021 Nominal Echo Formations in Kati: In the Context of Languages of Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(3): 429–440.［査読有］

［その他］

吉岡　乾

2020 「熱帯雨林での死――辛抱強く、迷い多く、しかし一種の愛情を込めて、綴る」『週刊読書人』 4 月10日。

2020 「どうしてなお、現地へ調査に行き続けるのか」『じんぶん堂』（https://book.asahi.com/jinbun/article/13488640）。

2020 「時代を読む、ラベルも読む」『LOCKET』4：30–31。

2020 「口ずさみたい世界の幸せな言葉」『PHP スペシャル』265：50–55。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2020年11月23日 「パキスタン北部における味覚認識の言語人類学的論攷」アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 9 月22日 「多様さとフィールド言語学」『フィールド言語学とフィールド言語学者のダイバーシティ』北海道大学

2020年10月10日 'Stop Series in South Asia.' アジア・アフリカ地理言語学研究2020年度第 1 回研究会、オンライン開催

・みんぱくウィークエンド・サロン

2021年 3 月14日 「今日からは話せない！　ブルシャスキー語門前講座」第589回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（ 1 人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（ 1 人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」、テーマシリーズ講義「言語をフィールドワークする」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「時空間を融合する――GIS と数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」（研究代表者：菊澤律子）研究分担者、人間文化研究機構広域連携型「文明社会における食の布置」（研究代表者：野林厚志）メンバー、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（研究代表者：窪薗晴夫）メンバー、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究（ 2 ）」（研究代表者：児倉徳和）メンバー、「アジア・アフリカ地理言語学研究」（研究代表者：遠藤光暁）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

National University of Modern Languages, Islamabad（Pakistan）博士論文外国人審査委員（foreign evaluator／thesis examiner）

末森　薫［すえもり　かおる］――助教

1980年生。**【学歴】**国際基督教大学教養学部人文科学科卒（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修士課程修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻博士課程単位取得退学（2009）**【職歴】**国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター客員研究員（2009）、国際協力機構大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家（保存修復研修計画）（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2014）、日本学術振興会特別研究員 DC（2015）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部外来研究員（2017）、関西大学国際文化財・文化研究センターポスト・ドクトラル・フェロー（2017）、日本学術振興会特別研究員 PD（2017）、

国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教（2020）国立民族学博物館グローバル現象研究部機関研究員（2020）**【学位】**博士（学術）（筑波大学大学院人間総合科学研究科 2018）、修士（学術）（筑波大学大学院 2006）**【専攻・専門】**文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学 **【所属学会】**文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【主要業績】

［著書］

末森　薫

2020 『敦煌莫高窟と千仏図――規則性がつくる宗教空間』京都：法藏館。

［共編］

吹田　浩・末森　薫・肥後時尚・東濱直希・尼崎弥生・太田壱成・川崎智也編

2018 『国際的な文化遺産の保存・活用に関する総合的研究』大阪：関西大学国際文化財・文化研究センター。

［論文］

Sonoda, N., S. Hidaka, and K. Suemori

2018 Continuous Efforts over 10 Years for Storage Re-organization at the National Museum of Ethnology, Japan. *Preventive Conservation: The State of the Art, The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works*（*IIC*）*2018 Turin Congress Preprints*（Studies in Conservation）63(1): 234–241.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

光学的手法を用いた博物館資料の調査方法の開発

・研究の目的、内容

近年、LED の開発が進み、さまざまな波長特性を持つ光源が入手できるようになってきた。また、画像化する機器も日々進化している。光源および画像化機器などを用いた光学調査法は、目では捉えられてない情報を可視化するなど、博物館の資料を調査する上で有効である。本研究では、博物館の現場において簡易に使用することのできる光学調査法の開発を進める。

本年度は、資料保存の観点から、カビ発生の早期発見に資する光学調査法の開発を進めた。具体的には、カビの発生が見られる資料を対象に、さまざまな光源を用いた光学撮影、デジタルカメラ・デジタル顕微鏡を用いた高倍率画像撮影、資料から採取したカビのプレパラートの作成・透過画像撮影をおこなった。また、絵画資料などが有する彩色情報の可視化を目的として、さまざまな波長特性を有する光源を用いた光学撮影、ハイパースペクトル画像撮影を実施した。

・成果

カビが付着した資料を対象として、さまざまな光源を用いた光学撮影をおこなった結果、近紫外光や青色 LED を用いた撮影画像がカビの発生分布の可視化に有効であることを確認した。また、カビかどうか疑わしい物質を確認する場合、デジタルカメラのマクロモードで撮影した画像によりある程度の判別が行えることが確認された。また、高倍率画像はクリーニング後におけるカビの付着状況の確認をおこなうのに有用であった。本成果の一部について、民博共同研究「博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から」（研究代表者：園田直子）の成果物に掲載予定である。

本館の共同利用型科学分析室において実施した、滋賀県有形文化財「馬見岡綿向神社祭礼渡御図絵馬」を対象とする調査では、撮影と画像処理の方法を工夫することにより、修復前後における画面状態の差異などを可視化した。本成果については、文化財保存修復学会第43回大会（2021年度、紙上開催）で発表をおこなう。また、科学研究費（基盤研究（B））「再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価」の助成を受けた研究では、彩色を再現した敦煌莫高窟の千仏壁画のハイパースペクトル画像を取得するとともに、光源を選択できる輝度変化プログラムを作成し、特性の異なる光源で照射したときの見え方の差異を擬似的に可視化した。本成果については、日本文化財科学会第38回大会（2021年 9 月、オンライン開催）で発表をおこなう。

その他、これまでにおこなってきた光学撮影調査に関する成果について、特別展「復興を支える地域の文化

――3.11から10年」（2021年３月４日～５月18日）のパネルおよび図録、分担執筆した書籍『継承される地域文化　災害復興から社会創発へ』（日高真吾編、臨川書店、2021年３月）にまとめた。

◎出版物による業績

［分担執筆］

末森　薫

2021「光学撮影が明らかにした地域文化」国立民族学博物館編『復興を支える地域文化――3.11から10年』pp.77-81，大阪：国立民族学博物館。

2021「新潟県十日町市で発見された越後縮『御召縮』関連資料の解読支援」日高真吾・黄　貞燕編『地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割』pp.143-158，大阪：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日高真吾研究室。

2021「民俗文化財の光学撮影調査」日高真吾編『継承される地域文化――災害復興から社会創発へ』pp.210-223，京都：臨川書店。［査読有］

［論文］

末森　薫

2020「敦煌莫高窟初唐窟に描かれた千仏図の研究」『鹿島美術研究年報別冊』37：427-437。

2020「敦煌莫高窟北周時代的石窟空空間构成――解析図案展示的方向性」『芸術学界』24：103-153。［査読有］

Liu, C., K. Suemori, Q. Li, Y. He, F. Wang, H. Kang

2020　Deterioration Caused by A New Support Layer Bonded with Epoxy Adhesive to the Mural Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, China. *Studies in Conservation* 65(P1): 187-191.［査読有］

［その他］

末森　薫

2021「シルクロードに生きた人びとの歴史ものがたり」『月刊みんぱく』45(1)：18-19。

2021「特別展『復興を支える地域の文化――3.11から10年』――十日町で発見された包紙文書」『みんぱく e-news』237：巻頭コラム。

2021「天水麦積山石窟東崖面の造営年代の再考――建築遺構を手掛かりとして」『日本中国考古学会2020年度大会　予稿集』pp.111-120。

末森　薫・正垣雅子・高林弘実・張　梁・園田直子・日高真吾

2020「敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏図の再現」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.214-217。

末森　薫・劉　成・王　珺・劉　逸堃・安室喜弘

2020「中国義県・奉国寺大雄殿に描かれた壁画のハイパースペクトル画像解析」『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集』pp.310-311。

園田直子・日高真吾・末森　薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・和高智美

2020「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策――2018年の大阪府北部地震を受けて」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.298-301。

日高真吾・園田直子・末森　薫・河村友佳子・橋本沙知・和高智美

2020「３Ｄスキャナーで製作した複製品の活用事例――ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.266-269。

河村友佳子・日高真吾・園田直子・末森　薫・橋本沙知・和高智美・桂田峰男

2020「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.446-449。

橋本沙知・園田直子・日高真吾・末森　薫・河村友佳子・柴切弥生・西澤昌樹・和高智美

2020「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境――国立民族学博物館の事例より」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.256-259。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年７月10日　「３Ｄスキャナーで制作した複製品の活用事例――ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」文化財保存修復学会第42回大会

2020年７月10日　「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策――2018年の大阪北部地震を受けて」文化財保存修復学会第42回大会
2020年７月10日　「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境――国立民族学博物館の事例より」文化財保存修復学会第42回大会
2020年７月10日　「敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏画の再現」文化財保存修復学会第42回大会
2020年７月10日　「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」文化財保存修復学会第42回大会
2020年９月５日　「中国義県・奉国寺大雄殿に描かれた壁画のハイパースペクトル画像解析」日本文化財科学会第37回大会、オンライン開催
2020年11月２日　'Deterioration Caused by a New Support Layer Bonded with Epoxy Adhesive to the Mural Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, China.' The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC）2020 Edinburgh Congress, Edinburgh, Scotland
2021年１月９日　「天水麦積山石窟東崖面の造営年代の再考――建築遺構を手掛かりとして」日本中国考古学会2020年度大会、オンライン発表
2021年１月28日　「博物館における文化遺産活用のためのICT」第25回関西大学先端科学技術シンポジウム、オンライン開催

・展示

2021年３月４日～５月18日　「復興を支える地域の文化――3.11から10年」国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日髙真吾）研究分担者、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」メンバー、関西大学先端科学技術推進機構「文化遺産の修復、維持管理のためのICT技術研究グループ」メンバー

飯泉菜穂子［いいずみ　なおこ］――特任教授

【学歴】早稲田大学法学部卒（1985）、お茶の水女子大学家政学研究科修士課程修了（1989）**【職歴】**日本アイビーエム株式会社入社（本社人事部）（1989）、NHK手話ニュースキャスター（1990）、フリーランス手話通訳、手話講師（1993）、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任准教授（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任教授（2017）**【学位】**家政学修士（お茶の水女子大学、1989）**【専攻・専門】**手話通訳論、手話通訳養成**【所属学会】**日本通訳翻訳学会、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会

【主要業績】

［著書］

飯泉菜穂子

2013　「手話通訳士専門養成機関（世田谷福祉専門学校）における養成について」『手話通訳士試験の在り方等に関する検討会』pp.64-72。

［共著］

小谷眞男・下城史江・飯泉菜穂子

2011　「新しいリベラルアーツとしての日本手話 お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」『手話学研究』20：19-38。

［映像教材］

飯泉菜穂子

1995　『DVDで学ぶ手話入門講座』http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092（構成、テキスト・スクリプト執筆、演出、ナビゲーターとしての出演）産業能率大学通信教育講座。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

相良啓子［さがら　けいこ］ 特任助教

【学歴】筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻修士課程修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 修士課程修了（2014）【職歴】株式会社 JTB 首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）、国立民族学博物館特任助教（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任助教（2017）【学位】手話言語学修士（M. Phil.）（セントラル・ランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）、修士（筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻 1999）【専攻・専門】手話言語学類型論・聴覚障害児教育【所属学会】日本手話学会、日本言語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

［編著］

Zeshan, U. and K. Sagara（eds.）

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

［論文］

Sagara, K. and U. Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara（eds.）*Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification,* pp.3–37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, A., K. Mesh, and K. Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57–85.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明

・研究の目的、内容

本研究の目的は、歴史的に関連がある日本手話、台湾手話、韓国手話（日本手話ファミリー）の語や表現における意味および用法の変化を明らかにし、これら３つの手話言語における史的変遷を体系的に示すことである。本研究は、４年度計画の３年目に入る。まず、１年目に作成したデータを、Global Signbank に登録して基盤データを作成する。次に、対象となる語の音韻および形態の情報を記述し検索することを可能とする。これによって、同じ形の語がもつ言語的特徴を横断的に抽出できるようにする。同時に、意味・概念の変化についてのデータ収集の準備に取りかかる。データ収集の構想が整った後、３手話それぞれについて、80才以上と30代から40代の話者、それぞれ２組ずつの会話を通して、文脈による語彙の使い方や意味の違いに焦点をあてたデータの収集を行う。言語変化を知る手がかりとして、言語のバリエーションを分析する重要性が知られており、歴史的に関連があるといわれている地域および日本統治時代を生きた話者に協力を得られる地域を対象として調査を行う。本年は、東京と大阪の他、熊本など、語の意味の変化についての記録がある変種も含めて収集する。

・成果

本年度は、Global Signbank への登録作業を進め、日本手話203語、台湾手話180語、韓国手話119語、計502語を登録した。登録した語彙は、親族表現、数詞表現、地域による表現の違いがある語彙、表現は同じだが各言語によって意味に違いがあると思われる語彙とした。コロナ禍において、本年度はフィールド調査を行うことができなかったが、これまでに収集した語彙の整理を行い、一部論文にまとめた。

2020年７月に発刊された *Macro and micro-social variation in Asia-Pacific sign languages* 第６巻第１号に、

“Variation in the numeral system of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A comparative sociolinguistics study” が掲載された。9月には、イギリスのセントラルランカシャー大学で行われた第28回日本語/韓国語言語学会（JK28）にて、“Sign Language in Japan, South Korea and Taiwan” について、オンラインによる招待講演を行った。次年度は、文脈による語彙の使い方や意味の違いに焦点をあてたデータの収集を行い、更なる分析を深めていきたい。

◎出版物による業績

［論文］

Sagara, K. and N. Palfreyman

2020 Variation in the Numeral System of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A Comparative Sociolinguistics Study. In N. Palfreyman(ed.) *Macro and micro-social variation in Asia-Pacific sign languages*, pp.119–150. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Nonaka, A., J. Ann, and K. Sagara

2020 Linguistic and cultural design features of sign language in Japan. *Visible Language* 54(1–2): 30–65.［査読有］

超域フィールド科学研究部

林　勲男［はやし　いさお］——部長（併）教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）**【職歴】**シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2012）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2018）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2019）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長（2019）**【学位】**文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**社会人類学　パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、オセアニア近代史の人類学的研究、自然災害への対応に関する人類学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences（IUAES）、Japan Anthropology Workshop（JAWS）

【主要業績】

［編著］

林　勲男編

2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害の想起における媒体の役割——遺構・モニュメント・語り継ぎ

・研究の目的、内容

大規模災害の被災地では、遺構や遺物の保存・公開、モニュメントの建立、被災体験の語り継ぎなどによって、被災経験を後世に継承していこうとの活動が生まれる。その一方で、こうした活動は、被災の苦悩や悲痛さを喚起するものとして、反対もしくは距離を置く人びとも存在する。本研究は、大規模災害の集合的記憶を、物を介して保存・伝承（物象化）したり、言葉により語り継いだりしていく（物語化）活動をプロセスとして、それぞれの地域社会の動態の中で捉える。今年度は、記憶と物質性と語りの関係について先行研究を整理するとともに、東日本大震災の被災地と元禄地震津波の被災地で現地調査を予定している。調査には、科学研究費（基

盤研究（A））「災害の想起における媒体の役割――遺構・モニュメント・語り継ぎ」（研究代表者：林　勲男）を当てる。

・成果

千葉県房総半島太平洋岸での元禄地震津波に関わる石碑等の調査に基づき、民博の「寺社・石碑データベース」に新たなデータを記載するとともに、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」の図録に「和歌山における津波の記憶」を、調査データの一部を利用して寄稿した。2021年２月刊行の *Journal of Disaster Research*（*JDR*）Vol.16に、石原凌河との共著論文 'The Role of the "Mediator" in Sustainable Preservation and Utilization of Disaster Remains'（査読付き）が掲載された。また、2021年２月23日に開催された災害語り継ぎ研究会にて、2020年１月開催の世界災害語り継ぎフォーラムの成果であるDRI調査研究レポート2020-01『2020世界災害語り継ぎフォーラム――災害の記憶をつなぐ』と上記の *Journal of Disaster Research* の特集号に関するレビューを発表した。

◎出版物による業績

［論文］

林　勲男

2021　「和歌山における津波の記憶――和歌山県日神社『津波警告板』と濱口梧陵の功績」日髙真吾編『復興を支える地域の文化――3.11から10年』pp.102-108，大阪：国立民族学博物館。

Hayashi, I.

2020　Introduction. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 115-118.［査読有］

2021　The Role of the "Mediator" in Sustainable Preservation and Utilization of Disaster Remains —Report from the 2020International Forum on Telling Live Lessons from Disasters. *Journal of Disaster Research* 16(2): 176-181.［査読有］

［その他］

林　勲男

2021　「民博による郷土芸能の支援――仰山流笹崎鹿踊りの支援を中心に」『復興を支える地域の文化』pp.26-28，大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月６日　「被災地における民俗芸能の役割とそれへの支援――脆弱性とレジリエンスから考える」総研大文化フォーラム2020、シンポジウムテーマ『災いから考える文化のレジリエンス』オンラインとのハイブリッド開催

2021年２月23日　「2020世界災害語り継ぎフォーラムを振り返って」災害語り継ぎ研究会、オンラインとのハイブリッド開催

・展示

2021年３月４日～５月18日　「復興を支える地域の文化」国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2021年３月６日　「災害を後世に伝える――記録・供養・教訓」第510回国立民族学博物館友の会講演会、千里文化財団、オンライン開催

◎調査活動

・国内調査

2020年７月17日～７月20日―千葉県房総半島東海岸（2011年東日本大震災及び過去の災害における津波被害と記録化に関する調査）

2020年10月22日～10月26日―千葉県房総半島太平洋沿岸（元禄地震津波災害の石碑に関する調査）

2020年10月29日～11月２日―福島県浜通り（2011年東日本大震災に関する展示施設の視察）

2021年３月11日～３月14日―福島県会津若松市（福島県立博物館にて開催中の企画展「震災遺産を考える――次の10年へつなぐために」視察と意見交換）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム「ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築――

20世紀前半収集資料を中心として」（研究代表者：林　勲男）研究代表者

宇田川妙子［うだがわ　たえこ］——教授

1960年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科第一卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1990）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1990）、中部大学国際関係学部講師（1992）、中部大学国際関係学部助教授（1995）、金沢大学文学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2002）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2018）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1984）**【専攻・専門】**文化人類学　イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究、ジェンダーとセクシャリティ研究、ヨーロッパ近代をめぐる問題群 **【所属学会】**日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

［単著］

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

［共編］

宇田川妙子・中谷文美編

2016 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レヴュー』京都：世界思想社。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。今年度は、近年研究を重ねている食という観点からの調査研究をさらに進展させ、イタリアの事例を中心としながらも他との比較にもとづく考察へと発展させていく。

・成果

本年度は、昨年度同様、食の場面に着目して、イタリア以外の事例との比較を念頭に置きながら、グローバル化における公私の関係の再編に関する研究を行った。なお、その関心をさらに広げ、共同研究「戦争・帝国主義と食の変容——食と国家の関係を再考する」を代表者として組織し、研究会を開始した。

刊行物による主な成果は以下の通りである。

［刊行物］

＊編著

2021　野林厚志、宇田川妙子、河合洋尚、濱田信吾　他編　『世界の食文化百科事典』，丸善出版。

＊分担執筆

2021 「缶詰」、「消費と生産の提携」、「インターネットと食」、「イタリア料理」 野林、宇田川、河合、濱田他編『世界の食文化百科事典』、丸善出版（それぞれ、190–191頁、502–503頁、508–509頁、564–565頁）。

＊その他

2020 「イタリアの若者たちはなぜ日本食が好きなのか」『vesta』（119）：16–17，味の素食の文化センター。「変化するイタリアの食（1）——グローバル化の波（旅・いろいろ地球人）」、「変化するイタリアの食（2）——コロナ禍の共食（旅・いろいろ地球人）」、「変化するイタリアの食（3）——日本食と若者たち（旅・いろいろ地球人）」『毎日新聞（夕刊）』、「変化するイタリアの食（4）——＃家で調理する（旅・いろいろ地球人）」、いずれも『毎日新聞（夕刊）』12月５日、12日、19日、26日。

2021 「イタリアの日本食ブームの背後にあるもの」『月刊みんぱく』(2021.03)：10-11。

◎出版物による業績

［編著］

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

［分担執筆］

宇田川妙子

2021 「缶詰」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.190-191，東京：丸善出版。

2021 「消費と生産の提携」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.502-503，東京：丸善出版。

2021 「インターネットと食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.508-509，東京：丸善出版。

2021 「イタリア料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.564-565，東京：丸善出版。

［その他］

宇田川妙子

2020 「イタリアの若者たちはなぜ日本食が好きなのか」『vesta』119：16-17。

2020 「旅・いろいろ地球人 変化するイタリアの食① グローバル化の波」『毎日新聞』12月５日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 変化するイタリアの食② コロナ禍の共食」『毎日新聞』12月12日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 変化するイタリアの食③ 日本食と若者たち」『毎日新聞』12月19日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 変化するイタリアの食④ ＃家で調理する」『毎日新聞』12月26日夕刊。

2021 「イタリアの日本食ブームの背後にあるもの」『月刊みんぱく』45(3)：10-11。

2021 「戦争と食の多様な関係」『民博通信 Online』3：12-13。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年11月５日 「イタリアのパン・小麦から考える『主食』」『食生活から考える持続可能な社会――「主食」の形成と展開』オンラインとのハイブリッド開催

・広報・社会連携活動

2021年１月31日 「食とは何か――イタリアの日常生活から考える」吹田歴史文化まちづくり協会主催オンライン事業民博夜話イタリア編、吹田歴史文化まちづくりセンター浜屋敷

2021年２月１日 「世界のカーニバル　夢幻の街に仮面は輝き――イタリア・ベネチア　スタジオゲスト」NHKBS プレミアムカフェ

2021年２月８日 「世界のカーニバル　地中海に春が来た！――フランス・ニース　スタジオゲスト」NHKBS プレミアムカフェ

2021年２月15日 「世界の祭　炎のプリマベーラ――スペイン　バレンシアの火祭り　スタジオゲスト」NHKBS プレミアムカフェ

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」（研究代表者：出口正之）研究分担者

樫永真佐夫［かしなが　まさお］―― 教授

1971年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（1997）、ベトナム民族学博物館客員研究員（1997）、放送大学学園非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）、総合研究大学院大学教授併任（2016）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）**【学位】**学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）**【専攻・専門】**文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）**【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」――村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記――「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀――家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010　第６回日本学術振興会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイ（ベトナムではターイの地方集団として分類）の伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。

とくに黒タイ文化の独自性が近代以降にどのように構築され、現在に至るまでどのように継承されてきたのかを視野に入れつつ、黒タイの「伝統」を考察する。

・成果

・『世界の食文化百科事典』（丸善出版）の「調理場」の項目その他を執筆し、編集委員として作業にも携わり刊行した。

・19世紀後半にインドシナを探検したパヴィ使節団による収集資料の文献調査で得た、白タイ文字と黒タイ文字の文字資料に関する歴史民族学的な研究成果を『国立民族学博物館研究報告』45巻２号に論文「ベトナムにおける黒タイ文字の創成について」として発表した。

・そのほかの業績として、ベトナムでの現地調査のことを綴ったエッセイを４回連載（『毎日新聞』の「旅・いろいろ地球人」コーナー）したほか、ベトナムの慣用句に関するエッセイ（『あすなろ』所収）、渓流釣りに関するエッセイ（『月刊みんぱく』５月号）、緊急事態宣言下における生活を綴った日記（左右社編集部編『仕事本　わたしたちの緊急事態日記』所収）を発表した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

樫永真佐夫

2020 「文化人類学」左右社編集部編『仕事本　わたしたちの緊急事態日記』pp.286-291，東京：左右社。

2021 「調理場」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.196-197，東京：丸善出版。［査読有］

2021 「東南アジア地域の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』p.591，東京：丸

善出版。

［論文］

樫永真佐夫

2020 「ベトナムにおける黒タイ文字の創成について」『国立民族学博物館研究報告』45(2)：183-235。［査読有］

［その他］

樫永真佐夫

2020 「渓流の魚と人」特集「釣り」『月刊みんぱく』44(5)：7-８。

2020 「旅・いろいろ地球人 調査は想定外だらけ① 血まみれの調査者」『毎日新聞』６月６日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 調査は想定外だらけ② 公安との友情の行方」『毎日新聞』６月13日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 調査は想定外だらけ③ ばい菌ヤローめ！」『毎日新聞』６月20日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 調査は想定外だらけ④ 仕上げは道路工事」『毎日新聞』６月27日夕刊。

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に」（研究代表者：小野林太郎）メンバー

韓　敏［ハン　ミン］――教授

1960年生。**【学歴】**中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）**【職歴】**武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、Harvard UniversityFairbank Center for East Asian ResearchVisiting Scholar（2002）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長（2012）、人間文化研究機構国立民族学博物館運営会議委員（2012）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長（2017）、人間文化機構国立民族学博物館運営会議委員（2017）**【学位】**学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）**【専攻・専門】**社会、歴史と象徴に関する人類学的研究 **【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

韓　敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』（フィールドワーク選書18）京都：臨川書店。

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology.

［編著］

韓　敏編

2009 『革命の実践と表象――現代中国への人類学的アプローチ』東京：風響社。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会、歴史と象徴に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、近代社会における社会記憶と歴史の資源化に焦点を当て、人類学の視点から国家と社会の多様な関係性を考察する。

具体的に昨年度に引き続き、人間文化研究機構北東アジア地域研究（代表者：池谷和信）の分担者として、中国北部のシボ族における歴史と文化の資源化の動態について論文執筆を行う。

また、本館の共同研究「グローバル時代における寛容性／非寛容性をめぐるナラティヴ・ポリティクス」（研究代表者：山　泰幸）の分担者として、中国社会における寛容性／非寛容性をめぐるナラティヴ・ポリティクスについて考察する。本館の共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価」（研究代表者：河合洋尚）の分担者として、中国の人類学会史について考える。

最後に、2019年３月１日に本館において開催された学術潮流フォーラムⅡ　超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力――世界のフィールドから」の成果をまとめる。

・成果

具体的な成果物として以下のものがある。

・人間文化研究機構北東アジア地域研究（代表者：池谷和信）の分担者として、中国社会における毛沢東をめぐる社会記憶に関する論文執筆をした。

・「疫病に立ち向かう精神力、地域の絆という文化による免疫力」というエッセイを執筆し、『京都新聞』2021年元旦特集に掲載された。

・「婚姻と食」が『世界の食文化百科事典』（丸善出版）に掲載された。

・2018年度に超域フィールド科学研究部が主催した国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力――世界のフィールドから」の成果を英語論文集にまとめ、出版委員会に提出した。現在、査読者からのコメントに基づいて、修正しているところである。

◎出版物による業績

［分担執筆］

韓　敏

2021 「婚姻と食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.326-327，東京：丸善出版。

［その他］

韓　敏

2021 「疫病に立ち向かう精神力、地域の絆という文化による免疫力」（2021元日 文化人メッセージ――次世代へ、美しい日本を）『京都新聞』１日１日。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（３人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「グローバル時代における『寛容性／非寛容性』をめぐるナラティヴ・ポリティクス」（研究代表者：山　泰幸）メンバー、国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価」（研究代表者：河合洋尚）メンバー、国立民族学博物館特別研究「コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に」（研究代表者：島村一平）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

立命館大学食総合研究センター研究メンバー、International Journal of Tourism Anthropology（IJTA）編集委員会委員

MATTHEWS, Peter Joseph［マシウス、ピーター・ジョゼフ］——教授

1959年生。**【学歴】**オークランド大学生物科学部人類科学部植物学卒（1981）、オークランド大学大学院生物科学植物学修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院先史考古学遺伝学博士課程修了（1990）**【職歴】**科学技術庁（STA）、農林水産省野菜・観賞用植物・茶業試験場（NIVOT）客員研究員（1990）、オーストラリア国立大学客員研究員、国立民族学博物館 客員研究員を経て、大阪へ（1991–1992）、日本学術振興会客員研究員（京都大学理学部植物分類学研究室）（1993）、フリーランス・エディター、京都（1994）、国立民族学博物館助手（1995）、国立民族学博物館助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）**【学位】**先史学・遺伝学博士（オーストラリア国立大学大学院 1990）、理学修士（オークランド大学大学院 1984）**【専攻・専門】**民族植物学、先史学 **【所属学会】**Society for Economic Botany、Indo–Pacific Prehistory Association、International Aroid Society、European Association of Science Editors、World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

【主要業績】

［単著］

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History*（Senri Ethnological Studies 88）. Osaka: National Museum of Ethnology.

［編著］

Spriggs, M., D. Addison, and P. J. Matthews（eds.）

2012 *Irrigated Taro*（*Colocasia esculenta*）*in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historica Perspectives*（Senri Ethnological Studies 78）. Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Ahmed, I., P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart

2013 Identification of Chloroplast Genome Loci Suitable for High-Resolution Phylogeographic Studies of Colocasia esculenta（L.）Schott（Araceae）and Closely Related Taxa. *Molecular Ecology Resources* 13(5): 929–937.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

（i） *Mapping Genetic Diversity in Taro to Test Domestication Theories*. This project is financially supported by the *Japan Society for the Promotion of Science*（JSPS Kakenhi No. 17H04614）. Project period: 1st April 2017 - 31st March 2021.（as Principle Investigator）

（ii） *Plant genetic resources and related traditional knowledge in semi-autonomous ethnic minority areas with political and geographic isolation*. JSPS Kakenhi No. 17H01682. Project leader: Dr K. Watanabe, Tsukuba University.（to FY 2020）

（iii） *The Archaeology of Boundaries* supported by Toshiba International Foundation（TIFO）. Project leader: S. Aki, Cooperative Research Fellow, Univ. Tokyo. Project period 2020-2021.

・研究の目的、内容

The main focus for 2020 was analysis and reporting of previous field observations and DNA sequences obtained from populations of wild taro species（*Colocasia* spp）. Related publications are noted below. Due to the ongoing pandemic, my participation in the project *The Archaeology of Boundaries* was limited to providing advice for continued work by the project leader.

・成果

See publications.

◎出版物による業績

［分担執筆］

マシウス、ピーター・ジョゼフ

2021 「オセアニア地域の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.550–551，東京：丸善出版。

［論文］

Ahmed, I., P. J. Lockhart, E. M. G. Agoo, K.W. Naing, D. V. Nguyen, D. K. Medhi, and P. J. Matthews

2020 Evolutionary Origins of Taro（Colocasia Esculenta）in Southeast Asia. *Ecology and Evolution* 10（23）: 13530–13543. DOI: 10.1002/ece3.6958［査読有］

Abdullah., C. L. Henriquez, F. Mehmood, A. Hayat, A. Sammad, S. Waseem, M. T. Waheed, P. J. Matthews, T. B. Croat, P. Poczai, and I. Ahmed

2021 Chloroplast Genome Evolution in the Dracunculus Clade（Aroideae, Araceae）. *Genomics* 113（1）: 183–192. DOI: 10.1016/j.ygeno.2020.12.06［査読有］

Matthews, P. J. and M.E. Ghanem

2021 Perception gaps that may explain the status of taro（*Colocasia esculenta*）as an “orphan crop”. *Plants People Planet* 3: 99–112. DOI: 10.1002/ppp3.10155［査読有］

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統知の賦存」（研究代表者：渡邉和男（筑波大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」研究代表者

太田心平［おおた　しんぺい］——准教授

1975年生。**【学歴】**大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得退学（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2007）**【職歴】**文部科学省アジア諸国等派遣留学生（2000）、（韓国）ソウル大学社会文化研究院比較文化研究所研究員（2003）、（韓国）暻園大学歴史・哲学部非常勤講師（2003）、（韓国）ソウル女子大学教養教育部非常勤講師（2003）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、京都産業大学文化学部非常勤講師（2004）、天理大学国際文化学部非常勤講師（2005）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、同志社大学社会学部嘱託講師（2007）、大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員（2007）、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、宮崎公立大学人文学部非常勤講師（2010）、（米国）アメリカ自然史博物館人類学部門上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2014）、大阪大学大学院人間科学研究科非常勤講師（2014）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学 2000）**【専攻・専門】**北東アジア研究、博物館学、社会文化人類学 **【所属学会】**日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、Association for Asian Studies（米国）、韓国・朝鮮文化研究会、American Anthropological Association（米国）

【主要業績】

［分担執筆］

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304–336，京都：昭和堂。

［論文］

오타 심페이

2006 「료한：일본에서의 한국문화 표상양식에 관한 지식인류학적 연구,」『한국문화인류학』39(2): 85-128. ［査読有］

Ota, S. C.

2015 Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. In K. Hirai (ed.) *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.79-193. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に２つの柱を立て、両側面から研究を推進した。

第１の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ――ミクロ双対性をもっていたのか、その一貫性と非連続性を明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとしてきた。この期間には、これまでに公刊した研究成果を整理しなおしつつ、新しい関連研究とつきあわせて再検討し、総括する作業を進めた。この推進のため、人間文化研究機構の地域研究推進事業である北東アジア地域研究プロジェクトの資金を使用することを予定していたが、新型インフルエンザの蔓延にともない外国旅行がかなわなかったため、資金を使用する活動はおこなわなかった。

第２の柱は、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費（基盤研究（C））「民俗誌と統計解析の手法による博物館員の働きがいと職業意欲の解明」を受託し、米国のアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業した。ただこれについても、外国旅行の規制と、世界の博物館の活動の一時的な急変（展示場の閉鎖や在宅勤務）により、現地調査や調査紙調査がかなわず、文献調査やチーム内での調査計画策定と理論的準備に時間を使うこととなった。

・成果

新型コロナウイルスの蔓延が年度始めの想定以上に深刻なものとなったため、この期間の研究内容は計画時点から大きく変わらざるをえなかった。その結果、研究成果の公刊も最小限の分量となった。

研究成果の公刊の核となったのは、これまで日本語か韓国語で公刊してきた論文や分担執筆物を、それぞれ出版した後に出た学界の研究動向、および出版後にえられたデータや知見も含めたうえで、３本の英語論文としたことである。これらは、すべて特集としてそれぞれの編者に受理され、年度終わりの時点では編者による確認作業、ないし査読者のコメントをへた後の修正をおこなっている段階にある。

他方、計画の時点で想定していなかった活動として、新型コロナウイルスの蔓延に関する研究活動もおこなった。この成果の一部は、韓国文化人類学会が主催したウェブセミナーにて、ラウンドテーブル「コロナ時代の人類学」に参加することで発表した。発表は韓国語でおこない、題目は日本語に訳すと「コロナ時代に人類学の市場価値を再考する」だった。

◎出版物による業績

［分担執筆］

太田心平

2021 「ジャンクフード」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.100-101，東京：丸善出版。

2021 「朝鮮半島の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.598-603，東京：丸善出版。

［その他］

太田心平

2020 「特集『多文化』化する日本の外食」『vesta』118：2-49。

2020 「『パラサイト』の成功を呼んだ難解な作品――『グエムル――漢江の怪物』」『月刊みんぱく』44(6)：18-19。

2020 「食文化の真正さ――比較対象としての日本の韓国料理」『vesta』119：30-34。

アレックス・デ＝ヴート著，太田心平訳

2020 「食の都の小さな秘宝」『vesta』117：26-27。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月４日 「코로나 시대에 인류학의 시장가치를 다시 생각해보다」코로나 19 시대의 인류학：온라인 라운드테이블、オンライン開催

・研究講演

2020年８月18日 「嗜好品の歴史」日本タバコ産業株式会社・株式会社リバネス開催 JT オンラインセミナー『嗜好品5.0　その定義から未来へ』

2020年９月20日 「人は嗜好品を介して何を交換するか」嗜好品文化研究会主催『第18回嗜好品文化フォーラム』都ホテル京都八条

2020年９月20日 「総合討論『嗜好品のビジネス』」嗜好品文化研究会主催『第18回嗜好品文化フォーラム』都ホテル京都八条

・広報・社会連携活動

2021年２月３日 「世界の中の東アジア（１/２）――移民の生活から考える」大阪府高齢者大学校「現代社会を考える科」

2021年２月10日 「世界の中の東アジア（２/２）――韓国の多文化社会化」大阪府高齢者大学校「現代社会を考える科」

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「民族誌と統計解析の手法による博物館職員の働きがいと職業意欲の解明」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

株式会社 CDI 嗜好品文化研究会メンバー、韓國文化人類學會海外理事、味の素食の文化研究所責任編集委員

島村一平［しまむら　いっぺい］―― 准教授

【学歴】早稲田大学法学部卒（1993）、モンゴル国立大学大学院社会学研究科民族学専攻修士課程修了（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2004）**【職歴】**株式会社クリエイティブネクサステレビ番組制作部アシスタント・ディレクター、ディレクター（1993）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2004）、滋賀県立大学人間文化学部専任講師（2005）、滋賀県立大学人間文化学部准教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2020）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2020）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2010）、民族学修士（モンゴル国立大学大学院 1998）**【専攻・専門】**文化人類学・モンゴル研究 **【所属学会】**日本文化人類学会、日本モンゴル学会、International Association for Mongol Studies、International Society for Academic Research on Shamanism、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

［単著］

島村一平

2021 『ヒップホップ・モンゴリア――韻がつむぐ人類学』東京：青土社。

2011 『増殖するシャーマン――モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』横浜：春風社。［査読有］

Shimamura, I.

2014 *The Roots Seekers: Shamanism and Ethnicity among the Mongol-Buryats.* Yokohama: Shumpusha. ［査読有］

【受賞歴】

2016 総研大科学者賞（総合研究大学院大学）

2014 滋賀県立大学優秀職員賞（滋賀県立大学）

2014 大同生命地域研究奨励賞（大同生命国際文化基金）

2013 地域研究コンソーシアム賞（地域研究コンソーシアム）

2013 日本学術振興会賞（日本学術振興会）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究

・研究の目的、内容

本研究は、同名の科学研究費（基盤研究（A））「モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究」（研究代表者：島村一平）の研究の一環として推進していくものである。

モンゴル仏教は、現在モンゴルのみならずインド、中国、アメリカなどを舞台にグローカルに展開されている。こうしたモンゴル仏教の実践を、特に「転生活仏」誕生のポリティクスに焦点を当ててその実践の実態明らかにすることを目的とする。モンゴル仏教はチベット仏教に属しながらも独自の経典や呪術的な宗教実践を生み出してきた。かつて清朝時代モンゴル高原には清朝公認・非公認の転生活仏が数十人いたが、こうした転生活仏が現在、次々と誕生している。そもそも活仏はインドのダライラマ法王の認定を必要とするが、モンゴルのローカルなポリティクスが深く関わっている。そこで従来の神秘主義的な説明とは異なる活仏誕生の現実を学際的（現在・歴史・他宗教との関わり）国際的（多拠点調査）に明らかにしていく。

・成果

本年度は、科学研究費（基盤研究（A））の最終年であったが、コロナ禍により研究の大幅な変更を迫られた。調査や国際会議ができなくなったが、その代わりに執筆活動に勤しんだ。

例えば、研究分担者として参加してきた科学研究費（基盤研究（B））「モンゴルをとりまくエスノスケープとアイデンティティの重層的動態に関する実証的研究」（研究代表者：滝澤克彦）において研究をすすめてきたヒップホップに関する研究が、単著『ヒップホップ・モンゴリア――韻が紡ぐ人類学』として結実した。このヒップホップはシャーマニズムや仏教とも関わっており、自身の科学研究費（基盤研究（A））の成果でもある。またスイス・アジア学会の紀要に社会主義時代のモンゴルにおける仏教実践にかかる論文が掲載された。筑摩書房の『世界哲学史』シリーズに原稿を依頼され、モンゴルの仏教とシャーマニズムについて書いたのも重要な成果だ。それから北海道立北方民族学博物館の図録に「文化の免疫系」に焦点を当てたシャーマニズム論を執筆した。そのほか、エッセイをいくつか執筆した。

◎出版物による業績

［単著］

島村一平

2021 『ヒップホップ・モンゴリア――韻がつむぐ人類学』東京：青土社。

［分担執筆］

島村一平

2020 「モンゴル仏教とシャーマニズム」伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史 別巻――未来を開く』pp.355-365，東京：筑摩書房。

［論文］

島村一平

2020 「学びなおしの５冊・モンゴル、あるいはコロナ渦の中でモンゴルを考える」芹沢一也編『αシノドス』（275） ５月15日。

2020 「『文化の免疫システム』としてのシャーマニズム――シベリア・モンゴルにおける狩猟・牧畜世界と現代をつなぐ」『北で生きるよすが――北方民族の世界観』（北海道立北方民族博物館第35回特別展図録）pp.51-62, 網走：北海道立北方民族博物館。

Shimamura, I.

2020 Magicalized Socialism: An Anthropological Study on the Magical Practices of a Secularized Reincarnated Lama in Socialist Mongolia. *Asiatische Studien - Études Asiatiques* 73(4): 799-829.［査読有］

［その他］

島村一平

2020 「先生、僕にはアブガイが３人いるんだよ」『月刊みんぱく』44(11)：20。

2021 「旅・いろいろ地球人 モンゴル草原奇譚① 呪術師に弟子入り上」『毎日新聞』 1月９日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 モンゴル草原奇譚② 呪術師に弟子入り下」『毎日新聞』 1月16日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 モンゴル草原奇譚③ わらう月夜の狼」『毎日新聞』 1月23日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 モンゴル草原奇譚④ 大シャーマンの最期」『毎日新聞』 1月30日夕刊。

2021 「モンゴルがヒップホップ大国だという件」『みんぱく e-news』236：巻頭コラム。

2021 「木を編まぬモンゴル――草原のバスケタリー文化のありか」『月刊みんぱく』45(3)：14-15。

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

島村一平　監修・出演

2021年３月９日 「〈アジアン・ミュージック・ジャンクション〉モンゴルヒップホップ特集 by 島村一平さん」『アフター６ジャンクション』TBS ラジオ

・広報・社会連携活動

2020年11月14日 「呪術として生き残った仏教――社会主義期における世俗化・仏教実践・還俗ラマ」第506回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

◎大学院教育

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（２件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「モンゴルをとりまくエスノスケープとアイデンティティの重層的動態に関する実証的研究」（研究代表者：滝澤克彦）研究分担者、国立民族学博物館特別研究「コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

滋賀県立大学大学院　人間文化学研究科修士論文の審査委員　（２件）

・他大学の客員、非常勤講師

滋賀県立大学「比較宗教論」、滋賀県立大学「アジア文化論Ｃ『モンゴル』」、滋賀県立大学「文化人類学概論Ａ」、滋賀県立大学「研究演習」、滋賀県立大学大学院「国際文化論特別演習」

新免光比呂［しんめん　みつひろ］―― **准教授**

1959年生。**【学歴】**早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学（1992）**【職歴】**帝京大学非常勤講師（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、東方研究会専任研究員（1992）、国立民族学博物館第三研究部助手（1993）、国立民族学博

物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2004）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**博士（文学）（筑波大学大学院 2019）、文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）**【専攻・専門】**宗教学・東欧研究**【所属学会】**東方研究会

【主要業績】

［単著］

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国――ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

［共著］

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途３　人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

［論文］

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教――民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コンスタンティン・ノイカの思想とその影響

・研究の目的、内容

コンスタンティン・ノイカは、大戦間期にルーマニアのファシズム運動に関与したことで戦後の社会主義体制下では排除の対象となった思想家である。しかし、その独創的な思想によって、弾圧下での苦しい体験を経てリチェアヌたち後継者たちを育てた。ルーマニア知識人の戦略、教育思想、権力との関わり方などについてノイカを通して考察した。

・成果

研究の成果の一部は「戦間期ルーマニアの知識人と歴史表象」（平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』所収、2020年４月24日発行）として発表された。

◎出版物による業績

［分担執筆］

新免光比呂

2020 「戦間期ルーマニアの知識人と歴史表象」平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』pp.170-196, 札幌：北海道大学出版会。

菅瀬晶子［すがせ　あきこ］――准教授

【学歴】東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2006）**【職歴】**総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）、滋賀県立大学非常勤講師（2012）、神戸女子大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）**【専攻・専門】**文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）**【所属学会】**日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

［単著］

菅瀬晶子

2012 『豊穣と共生への祈り――パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。

2010 『イスラームを知る 6　新月の夜も十字架は輝く――中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。

2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒――その社会とアイデンティティ』広島：渓水社。

【受賞歴】

2006　長倉研究奨励賞

2006　総研大研究賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

20世紀前半、歴史的パレスチナで活躍したナジーブ・ナッサールらアラブ・ナショナリストの活動について調査する。宗教をこえたナショナル・アイデンティティの創出の過程をあきらかにするとともに、キリスト教徒としての宗教的アイデンティティが、彼らの執筆活動に与えた影響をさぐる。また、平行して彼らがおもな活動の場としていたアラビア語紙に寄稿していた中東系ユダヤ教徒に注目し、アラビア語によるアラブ・ナショナリズムとシオニズムの議論とその影響を調査する。

・成果

20世紀前半の歴史的パレスチナにおける、キリスト教徒が主導するアラブ・ナショナリズムについては、英語論文（In the Midst of the Chaos: Christian Arab Nationalists of Historical Palestine in early 20th Century）を執筆した。本論文は現在編纂中のSES “*The Logic and Conception of History: Cross-Field Approaches from around the World*” の一部として発表される予定である。

ほかに、編集委員として関わった『世界の食文化百科事典』、執筆者として参加した『沙漠学事典』、『中東・オリエント文化事典』が、いずれも丸善出版より刊行された。

◎出版物による業績

［編著］

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

［分担執筆］

菅瀬晶子

2020 「キリスト教」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.184–185，東京：丸善出版。

2020 「ギリシャ語とギリシア系の人々」鈴木　薫・近藤二郎・赤堀雅幸編『中東・オリエント文化事典』pp.128–129，東京：丸善出版。

2021 「収穫祭」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.318–319，東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年 8 月30日 「コーヒーと西アジア、そして日本」第585回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

奈良雅史［なら　まさし］——准教授

【学歴】筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻博士課程修了（2014）**【職歴】**北海道大学メディア・コミュニケーション研究院助教（2015）、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院准教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2019）**【学位】**博士（文学）（筑波大学大学院人文社会科学研究科2014）**【専攻・専門】**文化人類学 **【所属学会】**日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences（IUAES）、 The East Asian Society for the Scientific Study of Religion（EASSSR）

【主要業績】

［単著］

奈良雅史

2016 『現代中国の〈イスラーム運動〉——生きにくさを生きる回族の民族誌』東京：風響社。

［共編］

西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編

2019 『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』京都：ミネルヴァ書房。

澤井充生・奈良雅史編

2015 『「周縁」を生きる少数民族——現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』東京：勉誠出版。

【受賞歴】

2020　2020年度教育啓蒙著作賞（観光学術学会）

2018　平成29年度教育研究総長表彰（研究部門）（北海道大学）

2017　第12回国際宗教研究所賞（国際宗教研究所）

2017　第12回日本文化人類学会奨励賞（日本文化人類学会）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

宗教と移動に関する人類学的研究：現代中国における回族の事例から

・研究の目的、内容

本研究は、中国内陸部から中国沿岸部にアラビア語通訳として出稼ぎに行く、回族と呼ばれるムスリム・マイノリティの動きに焦点を当て、中国政府による「一帯一路」構想の推進に伴う中国とイスラーム諸国との間での経済交流の促進が人々の移動の活発化をもたらし、イスラーム復興を促進してきたプロセスを明らかにすることを目的とする。本研究は、研究代表者を務める科学研究費（若手研究）「宗教と移動をめぐる人類学的研究——現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」を中心として実施する。

本研究では以上の目的を達成するため、回族と呼ばれるムスリム・マイノリティの出身地におけるイスラーム復興の状況と沿岸部への出稼ぎの実態を明らかにする。本年度はこれらの地域における現地調査を通じて、宗教活動に大きく影響する中国共産党の宗教政策、および出稼ぎに影響する中国共産党の経済政策の実施状況についても明らかにするとともに、出稼ぎ先でのトランスナショナルなムスリム・コミュニティの実態とそこでの宗教実践のあり方を明らかにする。

・成果

研究代表者を務める科学研究費（若手研究）「宗教と移動をめぐる人類学的研究——現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」の成果の一部として、流動性が高まる現代社会におけるモノとメディアの働きに焦点を当てた共編著『モノとメディアの人類学』（ナカニシヤ出版）を刊行した。加えて、同じく科学研究費（若手研究）の成果の一部として、中国におけるトランスナショナルなムスリム・コミュニティに焦点を当てた論文を『中国の国内移動——内なる他者との邂逅』（川口幸大・堀江未央編、京都大学学術出版会）に寄稿した。加えて、研究分担者として加わっていた、昨年度に終了した科学研究費（基盤研究（B））「東アジアにおける拡張現実時代の観光に関する研究」の成果論集『いま私たちをつなぐもの——拡張現実時代の観光とメディア』（山田義裕・岡本亮輔編、弘文堂）にメディア状況の変化と移動の活発化との関係について論じた論文を寄稿した。これらを含む当該研究による成果は以下になる。

◎出版物による業績

［編著］

藤野陽平・奈良雅史・近藤祉秋編

2021 『モノとメディアの人類学』京都：ナカニシヤ出版。

［分担執筆］

奈良雅史

2020 「国家をかわす――現代中国における回族のインフォーマルな宗教活動」櫻井義秀編『中国・台湾・香港の現代宗教――政教関係と宗教政策』pp.113-142，東京：明石書店。

2020 「出稼ぎ先は『小さな国連』――浙江省義烏市に暮らすムスリムたち」川口幸大・堀江未央編『中国の国内移動――内なる他者との邂逅』pp.91-123，京都：京都大学学術出版会。

2021 「アルコール排斥の多義性と風紀の形成――現代中国における回族の実践と国家による宗教管理」高尾賢一郎・後藤絵美・小柳敦史編『宗教と風紀――「聖なる規範」から読み解く現代』pp.64-83，東京：岩波書店。

2021 「分裂とつながり――現代中国におけるムスリム・コミュニティの変容と生誕祭の活発化」山田義裕・岡本亮輔編『いま私たちをつなぐもの――拡張現実時代の観光とメディア』pp.216-235，東京：弘文堂。

2021 「ヴァーチャルとリアルのもつれ合い――中国雲南省昆明市におけるムスリム・コミュニティの変容」藤野陽平・奈良雅史・近藤祉秋編『モノとメディアの人類学』pp.141-155，京都：ナカニシヤ出版。

［その他］

奈良雅史

2020 「油の香り――中国」『みんぱく e-news』226：巻頭コラム。

2020 「現代中国におけるイスラーム復興と他者の包摂」（論）『中外日報』７月20日。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食① 通り抜け禁止」『毎日新聞』８月１日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食② 庶民の味」『毎日新聞』８月８日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食③ 板ばさみ」『毎日新聞』８月15日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食④ 断食の快味」『毎日新聞』８月22日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 中国ムスリムと食⑤ 共食の現在」『毎日新聞』８月29日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年11月１日 「中国における宗教の人類学――成立宗教を中心とした研究動向」『社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価』オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年９月19日 「非イスラーム世界のイスラーム――中国におけるムスリムの宗教性と民族性をめぐって」『2020年度中東☆イスラーム教育セミナー』オンライン開催

・みんぱくゼミナール

2020年８月15日 「出稼ぎ先は『小さな国連』――国際貿易都市・浙江省義烏市に暮らすムスリムたち」第501回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年８月９日 「中国におけるハラールフード」第568回ウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学特論Ⅰ」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中国ムスリムの超国家・超民族的ネットワークの構築と多文化共生圏の創出に関する研究」（研究代表者：木村　自（立教大学））研究分担者、科学研究費（若手研究）「宗教と移動をめぐる人類学的研究：現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「グローバル化時代における『観光化／脱――観光化』のダイナミズムに関する研究」（研究代表者：東　賢太朗（名古屋大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価」（研究代表者：河合洋尚）メンバー、国立民族学博物館特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？」（研究代表者：西尾哲夫）メンバー、国立民族学博物館共同研究「不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う――モノ、制度、身体のからみあい」（研究代表者：森　明子）メンバー

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

植松東アジア研究基金「エスニシティと多文化共生をめぐる人類学的研究――台湾ムスリム・コミュニティの事例から」研究代表者、The Chiang Ching-kuo Foundation for International Scholarly Exchange Conference and Seminar Grants「Beyond Piety and Impiety: Ambiguous Practices of Sino-Muslims in Historical and Contemporary Asia」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士論文審査委員、日本文化人類学会 Japanese Review of Cultural Anthropology 編集委員、日本文化人類学会代議員、日本文化人類学会『文化人類学』編集委員

・他大学の客員、非常勤講師

筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群「宗教の人類学」（集中講義）、三重大学人文学部「中国地域の民族と宗教」（集中講義）

松尾瑞穂［まつお　みずほ］――准教授

【学歴】南山大学文学部人類学科卒（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）、学術修士（名古屋大学大学院国際開発研究科 2002）**【専攻・専門】**文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会、宗教と社会学会

【主要業績】

［単著］

松尾瑞穂

2013 『インドにおける代理出産の文化論――出産の商品化のゆくえ』京都：風響社。

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学――インド農村社会の不妊を生きる女性たち』東京：昭和堂。

［論文］

Matsuo, M.

2021 Imagined and Unimagined Relatedness: A Child of 'One's Own' in Third Party Reproduction in India. *Contemporary South Asia* 29(1): 10-23.［査読有］

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南アジアにおける混血の歴史的展開に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、南アジアにおける「混血」（mixed race）をめぐる歴史的な言説や諸実践を検討することを通して、集団の差異と同定のメカニズムを明らかにすることを目的とする。その際に注目するのは、広い意味でのサブスタンス（身体構成物）である。このサブスタンスの共有がいかに個と集団のカテゴリーの同定や差異を形成するのかについて、血液、母乳、精液といった、南アジア社会における伝統的なサブスタンス概念と、卵子、精子のような配偶子や遺伝子といった新しいサブスタンス概念との比較に注目する。そして、それが人種のような集団の差異の「自然化」や「実体化」に作用するメカニズムを考察することも目的である。

本研究が具体的に対象とするのは、インドにおいて「アングロ・インディアン」、スリランカで「バーガー」と呼ばれる、植民地期に西洋人男性と現地人女性の間に生まれた「混血」集団である。彼ら／彼女らの定義や法的ステータスは歴史的に変遷してきたが、白人／非白人、植民者／被植民者の境界を不安定化させる存在として、植民地政府によって問題視されてきた。アングロ・インディアンとバーガーは多くの類似性を持つが、しかし、同じ英連邦植民地でも、インドとセイロン（スリランカ）の白人と非白人の間の混血集団のたどった道には差異がみられる。今年度は予備的段階として両集団の歴史的形成過程を検討するとともに、現代の動向について概要をつかみ、今後の分析に向けて全体像を把握することを目指す。

・成果

本研究は主に科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A））「遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化――インドにおける血と遺伝子を中心に」の資金を活用し、インド、スリランカでの調査と資料収集、エジンバラ大学での在外研究を行うことを予定していたが、コロナ禍で海外渡航・出張がすべてキャンセルまたは延期となり、計画に大幅な変更が生じた。その一方で、南アジアにおける白人と現地人の混血や、人種概念に関する先行研究の動向をまとめるなど、学説的な検討を行った。また、人類学におけるサブスタンスの概念と研究史をまとめ、編集予定の『サブスタンスの人類学の展望』（仮）の序論を執筆するとともに、インドにおける第三者が関与する生殖医療、とくに代理出産と提供胚の利用を、南アジアのサブスタンスーコード論と接合させて考察を行った英語論文を執筆した。2020年度に開催した現代南アジア地域研究事業の国際シンポジウムの成果論集を編纂中であり、その序論と分担章を執筆したほか、刊行に向けて準備を進めた。これらの編集論集や論文は、来年度以降に刊行される予定である。

海外調査は実行できなかったが、オンラインで開催された国際学会（Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science EASST／4S）、シンポジウム、研究会等に参加して研究発表を実施した。

共同研究に関しては、民博共同研究「人類学を自然化する」（研究代表者：中川　敏）や「月経をめぐる国際開発の影響の比較研究――ジェンダーおよび医療化の視点から」（研究代表者：新本万理子）のメンバーとして、研究会やシンポジウム、JICAとの共同研究会等において研究発表を行った。また、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」（MINDAS）において、松尾がリーダーを務める「社会変動と親密圏」班の運営を行った。あわせて、現代南アジア地域研究事業の成果論集として編集中の『南アジアの新しい風』（三尾　稔編）に論文を寄稿した。さらに、科学研究費（基盤研究（B））「アジアにおける出生前検査と障害をめぐる実証的研究」（研究代表者：白井千晶）の分担者として、インターネットを用いた日本、インド、シンガポール、フィリピン、タイ、ミャンマー、台湾の7か国比較調査に参加した。

また、研究成果としては、インドにおける第三者が関与する生殖医療における親子関係の構築について論じた研究論文 “Imagined and Unimagined Relatedness: A Child of ‘One’s Own’ in Third Party Reproduction in India” がContemporary South Asia誌に掲載された。さらに、学術論集に2本、教科書に2本の分担執筆を行ったほか、『月刊みんぱく』などの一般誌に寄稿した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

松尾瑞穂

2020 「ジェンダー――政治化される身体」石坂晋哉・宇根義巳・舟橋健太編『ようこそ南アジア世界へ――地域研究のすすめ』pp.179–197，京都：昭和堂。

2020 「呪術が禁止されるとき――インドにおける合理主義運動がもたらす迷信としての呪術」川田牧人・白川千尋・飯田　卓編『現代世界の呪術――文化人類学的探究』pp.109–135，横浜：春風社。［査読有］

2021 「生殖医療をめぐる治療の線引きとジェンダー」飯田淳子・錦織　宏編『医師・医学生のための人類学・社会学――臨床症例／事例で学ぶ』pp.114–121，京都：ナカニシヤ出版。

2021 「日常世界における被傷性――リプロダクションの管理としての人工妊娠中絶」田中雅一・石井美

保・山本達也編『インド・剥き出しの世界』pp.32–58, 横浜：春風社。

［論文］

Matsuo, M.

2021 Imagined and Unimagined Relatedness: A Child of 'One's Own' in Third Party Reproduction in India. *Contemporary South Asia* 29(1): 10–23.［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年10月18日 「信仰と迷信の差異化」『文化人類学を自然化する』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年８月19日 'Making and Unmaking of Relations through Third Party ARTs in India.' "Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science EASST/4S 2020", オンラインとのハイブリッド開催

2020年９月19日 「インド農村社会における不妊とその苦悩への対処法――信念／効果に注目して」第８回多文化医療研究会、オンライン開催

2021年３月21日 「脱魔術化の見果てぬ夢――インドの合理主義運動と信念の腑分け」第119回現代人類学研究会、オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））「インドにおける集団範疇の差異化と同定――血と遺伝子を中心に」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本南アジア学会常務理事、日本文化人類学会『文化人類学』編集委員

人類文明誌研究部

飯田　卓［いいだ　たく］――部長（併）教授

1969年生。**【学歴】**北海道大学理III系（生物学系）文学部へ移行（1990）、北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（DC１）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、総合研究大学院大学文化科学研究科 比較文化学専攻准教授（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）、総合研究大学院大学文化科学研究科 比較文化学専攻教授（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2019）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2020）**【学位】**博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）**【専攻・専門】**生態人類学、漁撈社会、技術と知識、物質文化、視覚メディア、文化遺産、日本人類学史**【所属学会】**生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会、地域漁業学会、日本島嶼学会、環境社会学会、Association of Critical Heritage Studies

【主要業績】

［単著］

飯田　卓

2014 『身をもって知る技法――マダガスカルの漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌――マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

［編著］

飯田　卓編

2019 『財団法人日本民族学協会附属民俗学博物館（保谷民博）関係人名の研究』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集 1）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2010　第22回 日本アフリカ学会学術研究奨励賞（日本アフリカ学会）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

両大戦期間における日本とフランスの学術交流――とくに人類学と民族学、民俗学に着目して

・研究の目的、内容

1920年代から1930年代にかけて日本からフランスに留学した松本信廣および岡本太郎、山田吉彦（きだみのる）、同じ時期にフランスから日本に来て研究をおこなったエミール・ガスパルドヌおよびアンドレ・ルロワ＝グーランに着目し、ドイツやイギリスとの関係を過度に重視して記述されてきた日本民族学史をあらたな観点から描きなおすことを目的とする。

なお、この研究は、中生勝美を研究代表とする科学研究費（基盤研究（B））「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスの人類学史」の分担金を用いて遂行する。

・成果

フランスの複数の文書館と日本に所在するフランス極東学院でアーカイブズ調査やインタビュー調査をおこなう予定だったが、新型コロナウィルス感染症の流行が収まらず、これらの調査を限定的にしか実施しえていない。また、このテーマに関わって始まるはずだった論文集編纂も、他の執筆者の調査の遅れに配慮して滞っている。

しかし、実施期間中に文献調査を進めることができ、1920年代から1930年代にかけての日本の大学を中心とする知的活動の状況をかなり把握することができた。この当時、ヨーロッパでは植民地経営の安定化により考古学的な発掘調査が盛んになっており、日本の研究者たちはその動きに同調あるいは対抗しようと一方では発掘調査やフィールドワークを盛んにおこない、他方ではヨーロッパの研究成果を日本に輸入するよう努めていた。人類学や民俗学の動向も、こうした動きとの関わりで考察する必要がある。

今年度は、予定していた成果論文の執筆に着手できなかったが、論文集刊行のスケジュールに合わせて補足調査と論文執筆をおこない、場合によっては民博研究報告などの媒体を通して、しかるべきタイミングで研究成果を発表する。

◎出版物による業績

［編著］

野林厚志（編集委員長）・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

川田牧人・白川千尋・飯田　卓編

2020 『現代世界の呪術――文化人類学的探究』横浜：春風社。

［論文］

飯田　卓

2020 「財団法人日本民族学協会（1942年～1964年）と附属民族学博物館（1937年～1962年）――アーカイブズ資料をとおしてその性格をふり返る」『文化人類学』85(2)：336-345。［査読有］

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, K. Yoshida, I. Hayashi, and T. Iida

2020 International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”. *Bulletin of*

National Museum of Ethnology 45(1): 115–176.[査読有]

［分担執筆］

飯田　卓

2020「経験されざるものを知る――マダガスカル漁撈民ヴェズにおける霊と呪術のリアリティ」川田牧人・白川千尋・飯田卓編『現代世界の呪術――文化人類学的探究』pp.437–465，東京：春風社。

2021「遺産化する地域料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.636–641，東京：丸善出版。

2021「メディアの物質的基盤――とりわけ映像メディアに着目して」藤野陽平・奈良雅史・近藤祉秋編『モノとメディアの人類学』pp.219–231，京都：ナカニシヤ出版。

［その他］

飯田　卓

2020「未来に開かれた記憶装置――梅棹アーカイブズと梅棹資料室」『季刊民族学』172：40–47。

2020「書評：坂野　徹著『〈島〉の科学者――パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』勁草書房、2019」『島嶼研究』21(2)：179–180。

2020「編集後記」『文化人類学』85(3)：576–577。

Iida, T.

2020 UMESAO Tadao's 100th Anniversary: The Front-runner of Intellectual Production. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 12.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

飯田　卓・端　信行監修

2021『王の祭り――仮面の王国マンコン、カメルーン高地』（日本語・61分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年８月26日　'Local Values of Heritage in Africa: Swinging between the Universal and Local, as Well as the Tangible and Intangible.' "ACHS Fifth Biennial Conference 2020", University of London College, London, United Kingdom. オンライン開催

2020年８月26日　'Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks.' "ACHS Fifth Biennial Conference 2020", University College London, London, United Kingdom. オンライン開催

2021年３月21日　「探索と推論の限界心理学――アフォーダンス理論と関連性理論の架橋」第119回現代人類学研究会「文化人類学を自然化する」東京大学、オンライン開催

・展示

2020年４月23日～６月23日　「知的生産のフロンティア」国立民族学博物館

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究――イワシをめぐる韓国の民俗変化」（研究代表者：松田睦彦（国立歴史民俗博物館））連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：Peter Matthews）連携研究者、科学研究費（基盤研究（S））「『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服――人類の未来を展望する総合的地域研究」（研究代表者：松田素二（京都大学））連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「文化遺産の『社会的ふるまい』に関する応用人類学的研究――東部アフリカを事例に」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」（研究代表者：上羽陽子）研究分

担者、科学研究費（基盤研究（B））「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスに関する人類学史」（研究代表者：中生勝美（桜美林大学））研究分担者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」（研究代表者：中生勝美（桜美林大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「文化人類学を自然化する」（研究代表者：中川　敏（大学大学））メンバー、人間文化研究機構広域連携型「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日髙真吾）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本アフリカ学会理事、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会「民間ユネスコ活動助成のための補助事業」審査委員、日本文化人類学会理事、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、京都大学東南アジア研究所CIRASセンター（京都大学地域研究情報統合センター）共同研究課題選考委員、文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、マダガスカル研究懇談会世話役

・他大学の客員、非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）

池谷和信［いけや　かずのぶ］――教授

1958年生。**【学歴】**東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）**【職歴】**北海道大学文学部附属北方文化研究施設文化人類学部門助手（1990）、国立民族学博物館第一研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部人類環境部門助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科生命体科学専攻助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2015）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）**【学位】**理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）**【専攻・専門】**環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学、世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、植民地時代における民族社会の変容に関する研究、地球環境問題および地球環境史に関する研究 **【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会

【主要業績】

［単著］

池谷和信

2014　『人間にとってスイカとは何か――カラハリ狩猟民と考える』（フィールドワーク選書５）京都：臨川書店。

2003　『山菜採りの社会誌――資源利用とテリトリー』仙台：東北大学出版会。

2002　『国家のなかでの狩猟採集民――カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2007　日本地理学会優秀賞

1998　日本アフリカ学会研究奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

狩猟採集民と隣人との関係に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人類文明誌研究の一環として、「狩猟採集民と隣人との関係に関する歴史的変容を把握すること」が目的である。これまでの狩猟採集民の歴史研究においては、植民地以前や先史時代の狩猟採集民と隣人とのか

かわり方が不明瞭であった。本研究では、狩猟採集民と隣人とのかかわりに注目して過去100年を超える時間のなかでの変容と持続を把握することが目的である。このため、アフリカ南部のカラハリ砂漠での地域研究を軸にして、西アジアのヨルダン地域、東南アジアの大陸部、シベリア北東部、南米・アマゾンにおける先史から現在までの狩猟採集民の歴史を復元することを計画している。

・成果

上記の研究テーマに関して以下のような成果を提示することができた。

1）研究会報告：

① 2020年５月16日、パレオアジアの新学術領域の研究会において研究報告をした。また、演題は、「狩猟採集民と隣接集団との関係――共生、融合、同化」である。

② 2020年12月20日、パレオアジアの新学術領域の研究会において研究報告をした。また、演題は、「シベリアにおける狩猟採集民の環境適応について――『ヤナ狩猟民』の実像を探る」である。

2）1）の成果をもとに、第12回の国際狩猟採集民会議の研究成果としてSESに論文集として刊行した。*Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present.*（Senri Ethnological Studies No.106）（with Y. Nishiaki（eds.), Osaka: National Museum of Ethnology, 2021年３月）

◎出版物による業績

［編著］

池谷和信編

2021 『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）東京：農山漁村文化協会。

Ikeya, K. and Y. Nishiaki（eds.）

2021 *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present*（Senri Ethnological Studies 106). Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［論文］

池谷和信・高木　仁

2020 「ウミガメの文化誌――日本から世界へ」『BIOSTORY』33：8-13。

2020 「ウミガメと人の共存にむけて」『BIOSTORY』33：58-59。

池谷和信

2020 「世界のハンターと動物」『ヒトと動物の関係学会』56：11-16。

2021 「狩猟採集民の食――先史から現在まで」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）pp.43-69, 東京：農山漁村文化協会。

2021 「地球・食・文明」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）pp.9-31, 東京：農山漁村文化協会。

2021 「現代文明と食」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）pp.413-422, 東京：農山漁村文化協会。

佐藤靖明・池谷和信

2020 「人類とバナナ」『BIOSTORY』34：6-11。

2020 「総括　バナナからみた地球――『３つの波』の人類誌」『BIOSTORY』34：32-33。

Yatsuka, H. and K. Ikeya

2020 Farming practices among African Hunter-Gatherers: Diversifying without Loss of the Past. In G. Hyden, K. Sugimura and T. Tsuruta（eds.）*Rethinking African Agriculture: How Non-Agrarian Factors Shape Peasant Livelihoods,* pp.49-63. London and New York: Routledge.［査読有］

Ihara, Y., K. Ikeya, A. Nobayashi, and Y. Kaifu

2020 A Demographic Test of Accidental Versus Intentional Island Colonization by Pleistocene Humans. *Journal of Human Evolution* 145: 102839.［査読有］

Ikeya, K.

2020 History of Human Culture Reflected in Beads: the Bead Research Framework. *Archivio per l' Antropologia e la Etnologia* CL: 171-183.［査読有］

Nakai, S. and K. Ikeya

2021 Sedentarism and the Continuity of the Relationship between Hunter-gatherers and Farmers in Thailand. In K. Ikeya and Y. Nishiaki（eds.）*Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present*（Senri Ethnological Studies 106), pp.181 － 194, Osaka: National Museum of Ethnology.

［査読有］

Ikeya, K. and P. Chumpol

2021 The Dispersal of Prehistoric Hunter-gatherers and the Roles/Materials of Beads: An Ethno-archaeological Approach. *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp.93–107, Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

Ikeya, K. and Y. Nishiaki

2021 Introduction: Cultural Diversity among Asian Hunter-gatherers. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp.1–25. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［その他］

池谷和信

2020 「ビーズに秘められた可能性⑨　石」『Bead Art』33：64–67。

2020 「食と農の未来――佐々木高明の見た最後の焼畑」特集「拡がる写真データベース」『月刊みんぱく』44(7)：6–7。

2020 「ビーズに秘められた可能性⑩　植物」『Bead Art』34：70–73。

2020 「狩猟採集と現代」総合討論」『ヒトと動物の関係学会誌』56：42–59。

2020 「岩絵　アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.246–247，東京：丸善出版。

2020 「食　狩猟採集民――アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.228–229，東京：丸善出版。

2020 「アマゾンにおけるペッカリーと人とのかかわり方――生態人類学の視点」『出ユーラシア・プロジェクト第2集2019年研究活動報告「出ユーラシアの統合的人類史学――文明創出メカニズムの解明」』pp.66–67。

2020 「営みにさぐる『ヒトらしさ』」『季刊民族学』44(4)：95–98。

2020 「森の民の知恵――バスケタリーの起源をさぐる」『月刊みんぱく』44(11)：14–15。

2020 「ヒトと動物の関係学の新たな地平――学会のあり方から考える」『ヒトと動物の関係学の新たな地平――学会のあり方から考える　12月号』57：6–7。

2021 「コメント」『羊飼いと風船（映画プログラム）』p.24，東京：ビターズエンド。

2021 「特集　生き物と現代文明」『季刊民族学』175：3。

2021 「人類と生き物からみた現代文明」『季刊民族学』175：4–13。

2021 「狩猟採集民とは何か？――人類史からのまなざし」『時空旅人』61：22–27。

2021 「あとがき」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）pp.433–435，東京：農山漁村文化協会。

2021 「時空をまたぐ食の世界――まえがきに代えて」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）pp.1–2，東京：農山漁村文化協会。

2021 「地図で見る『地球の食』」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム人間の食）pp.425–432，東京：農山漁村文化協会。

2021 「五木村での『佐々木高明の見た焼畑』展」『民博通信 Online』3：4–5。

篠田謙一・池谷和信

2020 「ヒトってなんだ？？――ホモ・サピエンスの誕生から文化の獲得まで」『季刊民族学』174：99–103。

森枝卓士・池谷和信

2021 「写真で見る『地球の食』」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム人間の食）pp.32–40，東京：農山漁村文化協会。

Ikeya, K.

2021 Slash-and-Burn Cultivation Viewed by SASAKI Komei: From Itsuki Mura to the World. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年11月28日　「コメント」2020年度みんぱく若手研究者奨励セミナー『危機対応をめぐる文化のデザイン――人類の知と技を問いなおす』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2020年9月11日　「フロンティア空間の発見と消失――乾燥帯アフリカの事例」『統治のフロンティア空間をめ

ぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する』オンライン開催

2020年11月28日　「ソマリランドにおける人の移動、ものの移動」『人類史における移動概念の再構築――「自由」と「不自由」の相克に注目して』国立民族学博物館

2021年３月６日　「狩猟採集民の葬送とは――人類史的アプローチ」『島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年５月16日　「狩猟採集民と隣接集団との関係――共生、融合、同化」パレオアジア文化史学第９回研究大会『新人と新人的文化の拡散ルート――遺伝学からの示唆と考古学からの示唆』オンライン開催

2020年８月22日　「コメント」『出ユーラシアの統合的人類史学――文明創出メカニズムの解明』第３回全体会議『人類史構築のための比較研究』オンライン開催

2020年10月17日　「趣旨説明――佐々木高明氏の写真の意味すること」「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」関連企画第１回公開セミナー『人びとのくらしと焼き畑――日本文化の多様性を探る』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷

2020年10月25日　「趣旨説明――村の『歴史』を再考する」「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」関連企画第２回公開セミナー『焼畑は、いつ、どのように始まったのか？――稲作以前の農民像を探る』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷

2020年10月31日　「キリンとラクダ――アフリカの先住民の世界」第79回例会『先住民例会』国立民族学博物館

2020年10月31日　「趣旨説明」生き物文化誌学会第79回例会『先住民例会』国立民族学博物館

2020年11月１日　「趣旨説明――焼畑、ミュージアム、地域振興」「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」関連企画第３回公開セミナー『佐々木高明の焼畑写真から見た五木村――博物館の新たな役割を探る』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷

2020年11月３日　「コメント」日本地理学会2020年秋季学術大会シンポジウムＳ２『総合的学問領域としての地理学の成果と展望』オンライン開催

2020年11月15日　「趣旨説明――五木村の焼畑からみた食と農」「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」関連企画第４回公開セミナー『焼畑、在来作物、地域社会――現代社会における食と農のあり方を考える――』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷

2020年11月21日　「趣旨説明」第38回比較文明学会大会『「いのち」をめぐる文明的課題の解決に向けて』、シンポジウムⅠ『生き物をめぐって現代文明を考える』国立民族学博物館

2020年12月12日　「趣旨説明――焼き畑からみた地球の未来」「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」関連企画公開セミナー・特別編『焼き畑からみた地球の未来』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷

2020年12月12日　増野高司・池谷和信「地球環境問題とアマゾンの焼畑」「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」関連企画公開セミナー・特別編『焼き畑からみた地球の未来』国立民族学博物館、ヒストリアテラス五木谷

2020年12月20日　「シベリアにおける狩猟採集民の環境適応について――『ヤナ狩猟民』の実像を探る」パレオアジア文化史学第10回研究大会、オンライン開催

2021年２月20日　「人為的な植生改変と狩猟・採集との関わりについて――狩猟採集民の民族誌の事例から」第35回考古学研究会東海例会『愛鷹山麓の後期旧石器時代前半期における狩猟活動と植生改変』オンライン開催

2021年３月19日　'Slash-and-burn Agriculture and Millet Cultivation in Postwar Japan.' CJS-JSPS Symposium-Agroecology, Sustainable Food Production and Satoyama: Contributions of Japanese Case Studies to the Discussion of Traditional Ecological Knowledge and Environmental Conservation, Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley, オンライン開催

・展示

2020年10月３日～12月13日　熊本県五木村ヒストリアテラス五木谷・国立民族学博物館・五木村共催展「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」実行委員

◎調査活動

・国内調査

2020年９月26日～27日――熊本県五木村（焼畑に関する調査）
2020年10月２日～４日――熊本県五木村（焼畑に関する調査）
2020年10月16日～18日――熊本県五木村（焼畑に関する調査）
2020年10月24日～26日――熊本県五木村（焼畑に関する調査）
2020年10月31日～11月２日――熊本県五木村（焼畑に関する調査）
2020年11月13日～16日――熊本県五木村（焼畑に関する調査）
2020年12月11日～13日――熊本県五木村（焼畑に関する調査）
2020年11月７日～８日――福井県福井市（焼畑に関する資料収集）
2021年３月７日～８日――北海道白老町（先史時代のビーズに関する資料収集）
2021年３月26日～28日――北海道函館市苫小牧（先史時代のビーズに関する資料収集）
2021年３月21日～24日――沖縄県石垣島・西表島（狩猟採集に関する研究資料収集）
2021年３月30日～31日――東京大学（狩猟採集に関する研究資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（３人）、副指導教員（１人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（２件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「装飾文化からみたアフリカ史の再構築に関する研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「ポスト古代ゲノム解読期における家畜化概念のヒューマンアニマルボンド的学融合刷新」（研究代表者：遠藤秀紀（東京大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「資源利用行動から探る新人社会の基盤形成史――レヴァント地方乾燥域の考古科学研究」（研究代表者：門脇誠二（名古屋大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「20世紀中期以降における焼畑と熱帯林の変容メカニズムの地域間比較研究」（研究代表者：佐藤廉也（大阪大学））、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおける里芋の遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：Peter Matthews）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明」（研究代表者：大西秀之（同志社女子大学））連携研究者、民博共同研究会「食生活から考える持続可能な社会――『主食』形成と展開」共同研究員（研究代表者：野林厚志）、民博共同研究会「島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」共同研究員（研究代表者：小野林太郎）民博共同研究会「人類史における移動概念の再構築――『自由』と『不自由』の相克に注目して」共同研究員（研究代表者：鈴木英明）民博共同研究会「統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する」共同研究員（研究代表者：佐川　徹）、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「データベース『焼畑の世界――佐々木高明のまなざし』の国際化と学際研究の展開」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型北東アジア地域研究「自然環境と文化・文明の構造」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples 編集委員、*Tribes and Tribals*（*India*）編集委員、生き物文化誌学会会長、ヒトと動物の関係学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営会議員、コスモス国際賞選考専門委員会委員、味の素食の文化フォーラム会員、味の素食の文化センター研究助成選考委員、九州国立博物館買取評価委員

◎学会の開催

2020年10月31日　生き物文化誌学会「第79回例会『先住民例会』」国立民族学博物館
2020年11月21日～23日　比較文明学会大会「『いのち』をめぐる文明的課題の解決に向けて」国立民族学博物館

齋藤　晃［さいとう　あきら］——教授

【学歴】京都大学文学部フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）**【職歴】**国立民族学博物館第四研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）**【学位】**学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）**【専攻・専門】**文化人類学、ラテンアメリカ研究 **【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

［単著］

齋藤　晃

1993 『魂の征服――アンデスにおける改宗の政治学』東京：平凡社。

［共著］

岡田裕成・齋藤　晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

［編著］

齋藤　晃編

2020 『宣教と適応――グローバル・ミッションの近世』名古屋：名古屋大学出版会。

【受賞歴】

2018　大同生命地域研究奨励賞（公益財団法人大同生命国際文化基金）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第５代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が碁盤目状に整然と区画された１千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、人文情報学のツールを活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。なお、本研究は、科学研究費（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代――副王トレドの総集住化の総合的研究」（研究代表者：齋藤　晃）の一環として実施される。

・成果

科学研究費による国際共同研究のメンバーと共著で、人文情報学の道具と方法を歴史学研究へ応用することの有効性と問題点を論じた日本語論文を執筆し、『歴史学研究』に掲載された。また、同共同研究の主要な成果として刊行を予定している英語論集の執筆・編集作業を進めた。

◎出版物による業績

［編著］

ラテンアメリカ文化事典編集委員会編（［編集委員長］関　雄二［編集幹事］齋藤　晃、鈴木　紀、村上勇介、八木百合子［編集委員］井口欣也、岡田裕成、窪田　暁、佐々木直美、渋下　賢、清水達也、杓谷茂樹、田島久歳、ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ、鼓　宗、細谷広美、山脇千賀子、若林大我）

2021 『ラテンアメリカ文化事典』東京：丸善出版。

［論文］

齋藤　晃・近藤康久・溝田のぞみ・小山朋子

2020 「アンデス植民地史への人文情報学的アプローチ――先住民の総集住化の事例」『歴史学研究』1000：

32–38。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2020年８月１日　「福音以前の祖先の救済――キリシタン時代の日本」第503回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年７月12日　「アマゾンのゴムブーム」第567回ウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「近代ヒスパニック世界における文書ネットワークの成立・展開・変容（衰退）過程の究明」（研究代表者：吉江貴文（広島市立大学））研究分担者

鈴木　紀［すずき　もとい］――教授

1959年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）**【職歴】**国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2019）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院 1985）**【専攻・専門】**開発人類学・ラテンアメリカ文化論　開発援助プロジェクト評価、フェアトレード、マヤ・ユカテコ民族の社会変化、先住民族文化の比較展示学 **【所属学会】**日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会

【主要業績】

［編著］

鈴木　紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働――NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ８）東京：明石書店。

［論文］

鈴木　紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69–84，東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤　寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学――冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45–66，東京：明石書店。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館におけるラテンアメリカの先住民文化展示の比較研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、ラテンアメリカの先住民文化に関する博物館展示の特徴を解明することである。ラテンアメリカを中心とする博物館は先住民文化をさまざまな形で展示しているが、それらの間にはどのような差異と共通性があるのだろうか、そしてその理由はなんだろうか。本研究では、①先スペイン期起源の文化伝統、②植民地時代以降の外来文化の影響、③各博物館の政治、経済的関心３要素に着目して、博物館展示を比較する。この研究のために、2020年度は、2014年度から2018年度にかけて実施した科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」（研究代表者：鈴木　紀）で収集した100余りの博物館の展示資料を活用する。また本研究を次年度以降も発展させるために、2020年度後半には科学研究費、民間の研究助成金などに応募する。

・成果

研究成果は、以下の出版物の形で発表した。

1）鈴木　紀　2021「博物館でラテンアメリカの先住民文化の意味を考える」『月刊みんぱく』45(1)：10–11. 吹田：国立民族学博物館。

2）鈴木　紀　2021「古代文明と国家形成」『ラテンアメリカ文化事典』pp.18–19. 東京：丸善出版。

3）鈴木　紀　2021「博物館における文化の見せ方」『ラテンアメリカ文化事典』pp.290–291. 東京：丸善出版。

1）では欧米およびラテンアメリカの博物館展示場における先住民文化の意味として、古代文明の遺産、近代国家の文化的基層、古代から連続する先住民の文化伝統、現代の文化的多様性の一要素という4つの傾向を指摘した。2）ではラテンアメリカの博物館を地域別に比較した。ラテンアメリカを、メソアメリカとアンデスからなる核アメリカ地域、中間地域、南米南部、カリブ海地域の4地域に分類し、各地域における国立博物館の展示の特色を考察した。3）ではラテンアメリカの博物館を、その運営形態に応じて国立博物館、私立博物館、遺跡に併設された博物館、テーマパークの4つに分類し、各形態に応じた先住民文化の表象の特徴を考察した。

また、2019年に国立民族学博物館で開催した世界博物館学ワークショップ「刷新――展示における挑戦とイノベーション」で発表したメキシコの先住民文化展示に関する試論を以下の出版物に掲載した。

4）Laura Osorio Sunnucks, Nicola Levell, Anthony Shelton, Motoi Suzuki, Gwyneira Isaac and Diana E. Marsh　2020　“Interruptions: Challenges and Innovations in Exhibition-Making The Second World Museologies Workshop, National Museum of Ethnology（MINPAKU), Osaka, December 2019”. *Museum Worlds: Advances in Research* 8(1): 168-187.

5）Suzuki, Motoi　2020　“Interruptions: Challenges and Innovations in Exhibition Making”, *MINPAKU Anthropology Newsletter*（50): 12-12.

◎出版物による業績

［編著］

ラテンアメリカ文化事典編集委員会編（［編集委員長］関　雄二［編集幹事］齋藤　晃、鈴木　紀、村上勇介、八木百合子［編集委員］井口欣也、岡田裕成、窪田　暁、佐々木直美、渋下　賢、清水達也、杓谷茂樹、田島久歳、ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ、鼓　宗、細谷広美、山脇千賀子、若林大我）

2021『ラテンアメリカ文化事典』東京：丸善出版。

［論文］

Sunnucks, L. O., N. Levell, A. Shelton, M. Suzuki, G. Isaac, and D. E. Marsh

2020　Interruptions: Challenges and Innovations in Exhibition-Making The Second World Museologies Workshop, National Museum of Ethnology（MINPAKU), Osaka, December 2019. *Museum Worlds: Advances in Research* 8(1): 168–187.[査読有]

［その他］

鈴木　紀

2020「臨時休館中の展示場で――メキシコの『アレブリヘ』の新着資料」『みんぱく e-news』228：巻頭コラム。

2021「博物館でラテンアメリカの先住民文化の意味を考える」『月刊みんぱく』45(1)：10–11。

2021「古代文明と国家形成」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.18–19，東京：丸善出版。

2021「民族」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』p.113，東京：丸善出版。

2021「ネオ・インディオ」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.136–137，東京：丸善出版。

2021「博物館における文化の見せ方」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.290–291，東京：丸善出版。

2021「マヤの生業と農耕儀礼」ラテンアメリカ文化事典編集委員会編『ラテンアメリカ文化事典』pp.314–315，東京：丸善出版。

2021「メキシコおよび中米の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.622–623，東京：丸善出版。

Suzuki, M.
2020 Interruptions: Challenges and Innovations in Exhibition Making. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 50: 12.

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（３人）

◎社会活動・館外活動

・その他の社会活動・館外活動

日本ラテンアメリカ学会理事

關　雄二［せき　ゆうじ］―― 副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

上羽陽子［うえば　ようこ］―― 准教授

1974年生。**【学歴】**大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士前期課程修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士後期課程修了（2002）**【職歴】**大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学准教授（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）**【学位】**博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）**【専攻・専門】**民族芸術学、染織研究、手工芸研究**【所属学会】**民族藝術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

［単著］

上羽陽子
2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼――ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

［分担執筆］

Ueba, Y.
2020 Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India. In A. Nakatani (ed.) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, pp.235–251. Lanham: Lexington Books.

［論文］

上羽陽子
2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)：1–51。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞
2007 第４回木村重信民族藝術学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手工芸文化の比較研究

・研究の目的、内容

本研究は手工芸品に焦点をあて、つくり手たちが急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることが目的である。本年度は、とくに現在の日本および世界における余暇的・趣味的仕事とその造形物に焦点をあて、通文化的な視点でそれらの特徴を比較・検

討する。

本研究は、科学研究費（基盤研究（B））「バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」および、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）による。

・成果

本年度は、日本および世界における余暇的・趣味的仕事とその造形物に焦点をあてた『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』（上羽陽子・山崎明子編、フィルムアート社、2020年）を刊行した。論文は、「『手芸的なるもの』を探る」（上羽陽子、山崎明子編『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』、pp.9–27、フィルムアート社）を公表した。研究発表は、上記、科研新学術領域主催の研究大会等でおこなった。

◎出版物による業績

［単著］

上羽陽子・山崎明子

2020 『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』東京：フィルムアート社。

［分担執筆］

金谷美和・上羽陽子・中谷文美

2021 「道具としての植物利用（3）――インドネシア北東部アッサム地域を中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究　計画研究B01班2020年度 研究報告』pp.5–10，東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016–2020年度計画研究B01班（研究課題番号16H06411）。

上羽陽子

2020 「『手芸的なるもの』を探る」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』pp.9–27，東京：フィルムアート社。

2020 「つくりたくないものは、つくりたくない」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』pp.53–56，東京：フィルムアート社。

2020 「隙間を埋める刺繍作業」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』pp.223–226，東京：フィルムアート社。

2020 「あとがきにかえて」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』pp.287–295，東京：フィルムアート社。

［その他］

小野林太郎・Riczar Fuentes・中谷文美・金谷美和・上羽陽子

2020 「タケ仮説再考――ウォーレシアにおける植物利用からみた石器の機能論」『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第10回研究大会』p.10，名古屋：名古屋大学。

中谷文美・上羽陽子・山岡拓也・金谷美和・Riczar Fuentes・小野林太郎

2020 「植物資源の多面的利用――用途に適した素材特性の理解と文化的選好をめぐって」『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第10回研究大会』p.12，名古屋：名古屋大学。

上羽陽子

2020 「籠だけじゃない」『月刊みんぱく』44(4)：14–15。

2020 「豊穣たるテキスタイルの国」『中央公論』134(8)：12–14。

2020 「世界を魅了するインドのテキスタイル」『中央公論』134(8)：170–177。

2021 「調理時の衣服」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濵田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.204–205，東京：丸善出版。

2021 「植物素材のつばなし帽子」『月刊みんぱく』45(2)：14–15。

Ono, R., R. Fuentes, A. Nakatani, M. Kanetani, and Y. Ueba

2020 Bamboo Hypothesis Revisited: Lithic Technology and Use from the View if Plant Processing Practice in Wallacea. *The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.11. Nagoya: Nagoya University.

Nakatani, A., Y. Ueba, T. Yamaoka, M. Kanetani, R. Fuentes, and R. Ono

2020 The Multifaceted Utilization of Plant Resources: Understanding the Fit of Plant Properties to

Particular Purposes, and the Possibility of Cultural Preferences. *The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia,* p.13. Nagoya: Nagoya University.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

三尾　稔・金谷美和・上羽陽子監修

2021 『みんぱく映像民族誌 第41集　インドの染色職人カトリー――カッチ地方の絞り染めと更紗』（日本語・53分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年６月８日 「バスケタリー研究の可能性について」科学研究費（基盤研究（B））「バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」2020年度第１回研究会、国立民族学博物館第２演習室、オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月18日 「タケ仮説再考――ウォーレシアにおける植物利用からみた石器の機能論」パレオアジア文化史学第10回研究大会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催、小野林太郎・Riczar Fuentes・中谷文美・金谷美和との共同発表

2020年12月18日 「植物資源の多面的利用――用途に適した素材特性の理解と文化的選好をめぐって」パレオアジア文化史学第10回研究大会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催、中谷文美・山岡拓也・金谷美和・Riczar Fuentes・小野林太郎との共同発表

2021年３月23日 「伝統として残す素材・技術・道具――女神儀礼用染色布をめぐる伝統イメージ」国立民族学博物館共同研究会『伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって』、国立民族学博物館第６セミナー室、オンラインとのハイブリッド開催

2021年３月30日 「道具としての植物利用（３）――インド北東部アッサム地域を中心に」パレオアジア文化史学第10回研究大会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催、中谷文美・山岡拓也・金谷美和・Riczar Fuentes・小野林太郎との共同発表

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2020年９月24日 「模写実践と異文化理解――インド西部の刺繍布を読みとる①」川島テキスタイルスクール

2020年10月８日 「模写実践と異文化理解――インド西部の刺繍布を読みとる②」川島テキスタイルスクール

2020年10月22日 「模写実践と異文化理解――インド西部の刺繍布を読みとる③」川島テキスタイルスクール

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都精華大学「制作演習７・クラフト１」、京都精華大学「美術工芸史１・文様史１・版画論」

卯田宗平［うだ　しゅうへい］――准教授

1975年生。**【学歴】**立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（2003）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員 DC１（総研大、2000-2003）、日本学術振興会海外特別研究員海外 PD（中央民族大学、2005-2007）、中央民族大学民族学社会学学院外籍講師（2005-2010）、日本学術振興会特別研究員 PD（東京大学、2008-2010）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構特任講師（2011-2015）、東京大学東洋文化研究所汎アジア研究部門講師（兼任）（2011-2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017-）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2003）**【専攻・専門】**環境民俗学・東アジア地域研究**【所属学会】**日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human

Ecology（SHE）、生き物文化誌学会、日本現代中国学会

【主要業績】

［単著］

卯田宗平

2014 『鵜飼いと現代中国――人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

［編著］

卯田宗平編

2014 『アジアの環境研究入門――東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

［論文］

卯田宗平

2015 「ポスト『北方の三位一体』時代の中国エヴェンキ族の生業適応――大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性――フィールドからのサスティナビリティ論』（研究双書 No.616）pp.73-108，千葉：アジア経済研究所。

【受賞歴】

2010 第５回日本文化人類学会奨励賞

1998 学部長コース賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

鵜飼文化の比較研究

・研究の目的、内容

本年度の研究では、(1)日本各地でおこなわれている鵜飼を対象に、その歴史や技術、現状に関わる広域調査を進めるとともに、(2)地域間比較の視点から各地の鵜飼の地域固有性と共通性を導きだす。そのうえで、(3)中国の鵜飼との比較から、日本の鵜飼文化の特徴を相対的に導きだす。なお、本研究は科学研究費（基盤研究（B））「動物保護時代における文化システムとしての鵜飼の全面解明と『最適継承ルート』の共創」（研究代表者：卯田宗平）にもとづいておこなう。

・成果

本年度は、おもに広島県三次市の三次鵜飼を対象とし、三次の鵜匠や広島県立歴史民俗資料館の学芸員らの協力のもと、鵜飼で使用されている鵜舟や鵜籠、竹竿、魚籠、手縄といった物質文化の測量、鵜小屋でのウミウの飼育方法の観察、江の川で生業としておこなわれていた時代の資料収集、漁日誌などの記録の整理をおこなった。そして、収集した記録を整理し、次年度以降に実施する日本列島の鵜飼に関わる地域間比較研究のための基礎資料とすることができた。

このほか、今年度はこれまで日本や中国、北マケドニア共和国で実施してきた一連の鵜飼研究の成果をまとめ、鵜飼が成りたつ原理や動物利用の論理を明らかにした単著を準備した。そのうえで、国立民族学博物館出版助成の審査を経て、2021年度出版の見通しを立てた。さらに、2020年度は鵜飼に関わる各個研究から展開した民博の共同研究「もうひとつのドメスティケーション」の成果も論集としてまとめ、『野生性と人類の論理』（東京大学出版会）として2021年５月に刊行予定である。なお、本研究は科学研究費（基盤研究（B））「動物保護時代における文化システムとしての鵜飼の全面解明と『最適継承ルート』の共創」（研究代表者：卯田宗平）にもとづいておこなった。

◎出版物による業績

［編著］

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田省吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

［論文］

卯田宗平

2020 「旧ユーゴスラヴィア時代における鵜飼い漁の技術とその存立条件――北マケドニア共和国ドイラン

湖におけるマンドゥラ（Mandra）漁の事例から」『国立民族学博物館研究報告』45(1)：1-80。［査読有］

2020「魚類のドメスティケーションをアクター間の力学から読み解く――福永真弓著『サケをつくる人びと国立民族学博物館研究報告』水産増殖と資源再生』（東京大学出版会、2019年）を読む」『環境社会学研究』26：180-184。［査読有］

［その他］

卯田宗平

2020「鵜の運搬籠」『月刊みんぱく』44(5)：14-15。

2020「なぜ植物利用は多様なのか」『BIOSTORY』33：110。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年11月28日「いま、危機対応を問うことの意義」2020年度みんぱく若手研究者奨励セミナー『危機対応をめぐる文化のデザイン――人類の知と技を問いなおす』国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2020年11月28日「共同研究会『日本列島の鵜飼文化』で目指すもの」『日本列島の鵜飼文化に関するＴ字型学際共同アプローチ――野生性と権力をめぐって』国立民族学博物館

2020年11月28日「比較対象としての中国の鵜飼の紹介」『日本列島の鵜飼文化に関するＴ字型学際共同アプローチ――野生性と権力をめぐって』国立民族学博物館

2021年２月27日「ウミウの繁殖生態と鵜匠たちによる繁殖技術の収斂化――計５回の繁殖記録から考える」『日本列島の鵜飼文化に関するＴ字型学際共同アプローチ――野生性と権力をめぐって』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2021年２月11日「異文化を鏡にした自文化理解――日本・アジア学という視座」『日本・アジア学の歩みと展望――過去・現在・未来』オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（１人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「ポスト専業化時代における経験知のマネジメントとその限界性――農山漁業の事例から」（研究代表者：石本敏也（聖徳大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「動物保護時代における文化システムとしての鵜飼の全面解明と『最適継承ルート』の共創」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都府宇治市宇治川の鵜飼・放ち鵜飼あり方検討委員会委員、生き物文化誌学会生き物文化誌学会学会誌『BIOSTORY』編集委員、生き物文化誌学会生き物文化誌学会評議委員、岐阜県岐阜市長良川鵜飼習俗総合調査専門委員会・委員、岐阜県関市小瀬鵜飼習俗総合調査委員会・委員、生態人類学会理事

・他大学の客員、非常勤講師

京都市立芸術大学「日本文化史」（集中講義）

小野林太郎［おの　りんたろう］――准教授

【学歴】上智大学文学部史学科卒業（1998）、上智大学外国語学研究科地域研究専攻前期博士課程修了（2000）、上智大学外国語学研究科地域研究専攻後期博士課程単位取得退学（2003）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員 DC 1（2000-2003）、日本学術振興会特別研究員 PD（国立民族学博物館）（2003-2006）、総合地球環境学研究所研究プロジェクト推進支援員（2007-2008）、日本学術振興会海外特別研究員 PD（オーストラリア国立大学）（2008-2010）、

東海大学海洋学部海洋文明学科専任講師（2010-2014）、東海大学海洋学部海洋文明学科准教授（2014-2019）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2019）**【学位】**博士（地域研究）（上智大学 2006）**【専攻・専門】**海洋考古学、東南アジア・オセアニア研究**【所属学会】**東南アジア考古学会、インド太平洋先史学会、世界動物考古学会、日本オセアニア学会、日本人類学会、日本文化人類学会、日本生態人類学会、日本考古学研究会、東南アジア学会、日本動物考古学会、日本考古学協会、日本イコモス国内委員会、日本海洋政策学会

【主要業績】

［単著］

小野林太郎

2018 『海の人類史：東南アジア・オセアニア海域の考古学――増補改訂版』東京：雄山閣。

［編著］

小野林太郎・長津一史・印東道子編

2018 『海民の移動誌――西太平洋のネットワーク社会』京都：昭和堂。

［論文］

Ono, R., A. Oktaviana, M. Ririmasse, M. Takenaka, C. Katagiri, and M. Yoneda

2018 Early Metal Age interactions in Island Southeast Asia and Oceania-jar burials from Aru Manara, northern Moluccas. *Antiquity* 92(364): 1023-1039. https://doi.org/10.15184/aqy.2018.113

【受賞歴】

2013 第4回東南アジア考古学会奨励賞

2006 第5回井植アジア太平洋研究賞（佳作）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

海域アジア・オセアニアにおける人類の島嶼移住・島嶼適応・海洋文化の解明

・研究の目的、内容

本研究の目的の一つは、東南アジア島嶼部や琉球列島を軸とする海域アジアからオセアニアにかけての海域世界へと移住・拡散した人類（主にホモ・サピエンス）が、いつ頃、どのように島嶼環境への移住に成功したのかを考古・人類学的手法により追究するところにある。また移住後の人類による島嶼・海洋適応のプロセスにかかわる人類学的データを、新たな発掘調査や民族考古学的な手法により発見・収集していくのが二つ目の目的となる。さらに3つ目の目的として、各島嶼域で発展してきた漁撈や造船、航海術といった海洋文化を通文化史的視点から再検討する計画である。これらの目的遂行のため、科学研究費（新学術領域研究・国際共同研究強化B）を主に用いたインドネシア、およびミクロネシアでの発掘調査と出土遺物の分析調査を進めるほか、代表を務めているフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトでの海洋文化に関する研究も進める計画である。またその過程で新たに得られた成果については逐次、国内外の学術誌や学会等にて論文発表するほか、一般書としても公表し、成果の社会還元も目指す。

・成果

テーマにかかわる英語論文を国際的な学術誌や学術本に6本、和文論文を国内で刊行された学術本に2本公表できたほか、英語で編集した共編著本を1本、監修本1冊を刊行した。いずれも研究課題と直接・間接的関わる内容である。このほか、国内の学会や研究集会での発表や講演として、本研究の成果を積極的に公表した。外部資金との関わりにおいては、コロナ禍で海外調査が全く実施できなかったが、これまでに出土した考古資料の分析や公表を進めることができた【科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））（研究代表者：門脇誠二）・科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））（研究代表者：小野林太郎）】。また新たに国内調査として琉球列島をフィールドとした人類・考古学的調査を実施することができた【科学研究費（挑戦的研究（開拓・萌芽））（研究代表者：小野林太郎）・科学研究費（基盤研究（S））（研究代表者：菅　浩伸）、科学研究費（基盤研究（B））（研究代表者：長津一史）、科学研究費（基盤研究（C））（研究代表者：石原与四郎、片桐千亜紀）】。

◎出版物による業績

［編著］

Ono, R. and A. Pawlik（eds.）

2020 *Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation*. London: IntechOpen Publisher.［査読有］

［分担執筆］

小野林太郎

2020「人類史１――発掘からよみとくオセアニア移住史と海洋適応」風間計博・梅崎昌裕編『オセアニアで学ぶ人類学』pp.2–20，京都：昭和堂。

2020「『動く』戦略からみたオセアニアにおけるヒトの人類史」大塚柳太郎編『動く・集まる』（生態人類学は挑む）pp.95–121，京都：京都大学学術出版会。

［論文］

Ono, R., R. Fuentes, A. Pawlik, H. O. Sofian, Sriwigati, N. Aziz, N. Alamsyah, and M. Yoneda,

2020 Island Migration and Foraging Behaviour by Anatomically Modern Humans during the Late Pleistocene to Holocene in Wallacea: New Evidence from Central Sulawesi. *Quaternary International* 554：90–106.［査読有］

Ono, R., A. Pawlik, and R. Fuentes

2020 Island Migration, Resource Use, and Lithic Technology by Anatomically Modern Humans in Wallacea. In Ono, R. and A. Pawlik（eds.）*Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation*（Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation), pp.85–111. London: IntechOpen Publisher.［査読有］

Nakanishi, Y., R. Ono, C. Katagiri, N. Sakagami, and T. Tetsu

2020 Pursuing Sustainable Preservation and Valorisation of Underwater Cultural Heritage: Okinawa's Pilot Project for an Underwater Site Museum. In J.A. Rodrigues and A. Traviglia（eds.）*IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November–2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle, Western Australia*（IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November–2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle, Western Australia), pp.292–300. Oxford: Oxbow Books.［査読有］

Katagiri, C., R. Ono, Y. Nakanishi, and H. Miyagi

2020 Research on the Wreck Sites, Sea Routes and the Ships in the Ryukyu Archipelago. In J.A. Rodrigues and A. Traviglia（eds.）*IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November–2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle*（IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November–2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle), pp.19–29. Oxford: Oxbow Books.［査読有］

Ono, R., R. Fuentes, A. Noel, O. Sofian, Sriwigati, N. Aziz, and A. Pawlik

2021 Development of Bone and Lithic Technologies by Anatomically Modern Humans during the Late Pleistocene to Holocene in Sulawesi and Wallacea. *Quaternary International*.［査読有］

Ono, R.

2021 Technological and Social Interactions between Hunter-gatherers and New Migrants in the Prehistoric（Neolithic）Islands of Southeast Asia and Oceania. In K. Ikeya and Y. Nishiaki（eds.）*Hunter-gatherers in Asia: From Prehistory to the Present*（Senri Ethnological Studies 106), pp.127–148. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［監修］

小野林太郎

2021 テルモ・ピエバニ、バレリー・ゼトゥン著、エラリー・ジャンクリストフ、篠原範子、竹花秀春訳『人類史マップ――サピエンス誕生・危機・拡散の全記録』東京：日経ナショナルジオグラフィック社。

［その他］

小野林太郎

2020「海の民とバスケタリー」『月刊みんぱく』44(10)：14–15。

2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界① 石垣の海底遺跡」『毎日新聞』10月３日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界② 四爪錨の謎と魅力」『毎日新聞』10月10日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界③ トケラウ――環礁での発掘」『毎日新聞』10月17日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界④ ポンペイ島の謎を追う」『毎日新聞』10月24日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 海洋考古学の世界⑤ 海を越えたサピエンス」『毎日新聞』10月31日夕刊。
2021 「渡海による移住に成功したウォーレシアの旧石器人」『ミルシル』14(2)：12-14。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2021年２月27日 'Report of Project Update and Plan 2020-2021.' "Fishing and Material Culture in Maritime Asia", National Museum of Ethnology, オンライン開催

・共同研究会での報告

2020年８月１日 「ウォーレシアにおける初期金属器時代の再葬――比較の視点から」『島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較』国立民族学博物館
2021年３月６日 「東インドネシアの複葬に関する考察――民族考古学的視点から」『島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年５月16日 「サピエンスによるウォーレシアへの初期移住年代と動物・石器利用」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第９回研究大会、オンライン開催
2020年12月18日 「タケ仮説再考――ウォーレシアにおける植物利用からみた石器の機能論」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第10回研究大会、オンライン開催
2020年12月18日 「植物資源の多面的利用――用途に適した素材特性の理解と文化的選好をめぐって」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第10回研究大会、オンライン開催

・研究講演

2021年２月12日 「海域アジアへ移住したサピエンスの海洋・島嶼適応――日本・東南アジア・オセアニアの事例から」文化庁支援事業「ヤマト・天理の歴史文化をめぐる」プロジェクト連続講座「発見！世界の考古学」天理参考館

・広報・社会連携活動

2020年12月５日 「海洋考古学の世界――沖縄の水中文化遺産とその魅力」第507回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2021年３月11日～３月30日―沖縄県石垣島・沖縄島（石垣島における洞窟遺跡の発掘調査・沖縄島での遺跡踏査・資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（S））「浅海底地形学を基にした沿岸域の先進的学際研究――三次元海底地形で開くパラダイム」（研究代表者：菅　浩伸（九州大学））研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「ホモ・サピエンスのアジア定着期における行動様式の解明」（研究代表者：門脇誠二（名古屋大学））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「琉球列島における西欧沈没船遺跡

の実態把握と水中遺跡公園化へ向けた基礎的研究」（研究代表者：片桐千亜紀（九州大学））研究分担者、国立民族学博物館基幹研究プロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」研究代表者、人間文化研究機構機関拠点型「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」研究代表者

寺村裕史［てらむら　ひろふみ］――准教授

1977年生。**【学歴】**岡山大学文学部歴史文化学科（考古学履修コース）卒（2000）、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修士課程修了（2002）、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻博士課程修了（2005）**【職歴】**同志社大学文化情報学部実習助手（2005）、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員（2007）、国際日本文化研究センター研究部機関研究員（2011）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2015）、国立民族学博物館人類文明誌研究部助教（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2018）**【学位】**博士（文学）（岡山大学大学院 2005）、修士（文学）（岡山大学大学院 2002）**【専攻・専門】**情報考古学、文化情報学 **【所属学会】**考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

［単著］

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

［共著］

Maekawa, K., E. Matsushima, H. Teramura, and S. Watanabe

2018 Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: A Catalogue. Kyoto: Kyoto University Press.

［論文］

寺村裕史

2017 「情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用」『国立民族学博物館研究報告』42（1）：1-47。［査読有］

【受賞歴】

2007 日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

◎各個研究

・研究課題

古代シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、ユーラシア大陸における東西交流（東洋と西洋）の結節点としての古代シルクロード都市の果たした役割と、それらの都市を介しておこなわれた人や文化の交流の実態を明らかにすることを目的として実施するもので、ウズベキスタン共和国のサマルカンドに所在するウズベキスタン共和国科学アカデミーヤフヨ・グロモフ考古学研究所（以下、考古学研究所）との国際共同研究のかたちをとる。具体的には、考古学研究所と連携して実施するカフィル・カラ遺跡などの都市遺跡の発掘調査や、ザラフシャン川中流域に点在する都市遺跡の分布踏査などを通じて、古代シルクロード都市の形成・発展過程ならびに、人と文化の東西交流の動態について国際的な議論を深め、成果を共同で発信する。

・成果

2019年に学術協力に関する協定を締結したウズベキスタン共和国科学アカデミーヤフヨ・グロモフ考古学研究所（以下、考古学研究所）と協働で、カフィル・カラ遺跡での発掘調査を実施する予定であったが、新型コロナウィルス感染拡大のため海外渡航が制限され、今年度は調査を実施することができなかった。

その代わり、考古学研究所所属の研究者や海外の研究協力者、ならびに日本国内の科研費の研究分担者とオンラインで連絡を取り合い、これまでの発掘調査成果をまとめるかたちで、共著での論文投稿や口頭発表をおこなった。

具体的には、カフィル・カラ遺跡から発見された遺物を中心に紹介しながら、遺跡の性格や当時の都市遺跡間の文化交流に関して考察した論考が、東方学会のジャーナルに掲載された（下記①）。また、2021年３月に日本西アジア考古学会主催の『第28回西アジア発掘調査報告会』において、「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果――出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」という口頭発表（オンライン開催）を日本隊・ウズベク隊の共同成果として報告し（報告者・村上智見・北海道大学）、会の報告集に論文が掲載された（下記②）。

① Alisher BEGMATOV, Amtriddin BERDIMURODOV, Gennadiy BOGOMOLOV, MURAKAMI Tomomi, TERAMURA Hirofumi, UNO Takao and USAMI Tomoyuki.（2020/08）

New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Cravings. *ACTA ASIATICA*（Bulletin of the Institute of Eastern Culture）（119）: 1–20. 東京：一般財團法人　東方學會.

②ベグマトフ・アリシェル，寺村裕史，村上智見，宇野隆夫，宇佐美智之，ベルディムロドフ・アムリディン，ボゴモロフ・ゲンナディ（2021/03/28）

「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果――出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」『第28回 西アジア発掘調査報告会報告集』（令和２年度 考古学が語る古代オリエント）日本西アジア考古学会。

なお、先述の協定締結並びに発掘調査は、科学研究費（基盤研究（B））「シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究」（研究代表者：寺村裕史）にもとづき実施したものである。

また、考古学の発掘調査の成果とは異なるが、昨年度までに考古学研究所の協力を得て撮影された取材映像を元に、ウズベク人研究者に日本語-ウズベク語の翻訳チェックを依頼し、民博の映像音響資料として『ウズベキスタンの結婚式』、『ウズベキスタンの美味しい羊料理』、『タンディルでパンを焼く』（日本語、英語）という３本のビデオテーク番組の制作・監修をおこなった。一般向けに短くかつ分かりやすく再編集した映像資料をビデオテークブースで公開することにより、展示への理解を助けるとともに、現地（オアシス都市）での人びとの暮らしぶりに関する研究成果を広く一般に知ってもらうことにもつながることが期待される。

［分担執筆］

寺村裕史

2021 「津波の記憶を刻む文化遺産――寺社・石碑データベース」日髙真吾編『特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」』pp.94–101，大阪：国立民族学博物館。

2021 「地域文化の活用を支援する科学調査の可能性」日髙真吾・黄　貞燕編『地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割』pp.116–127，大阪：日髙真吾研究室。

Watanabe, S. and H. Teramura

2021 3D Modelling of the Cuneiform Tablets and Bricks Possessed by the National Museum of Iran. In K. Maekawa（ed.）*Ancient Iran-New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Studies*（Ancient Text Studies in the National Museum of Iran 2）, pp.173–179. Tehran: National Museum of Iran.

［論文］

ベグマトフ・アリシェル，寺村裕史，村上智見，宇野隆夫，宇佐美智之，ベルディムロドフ・アムリディン，ボゴモロフ・ゲンナディ

2021 「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果――出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』（令和２年度考古学が語る古代オリエント），東京：日本西アジア考古学会。

Teramura, H.

2020 Ecological Approach to Cultural Elements Using GIS-based Spatial Analysis. In A. Nobayashi and S. Simon （eds.）*Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific*（Senri Ethnological Studies 103）, pp.207–219. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

Begmatov, A., A. Berdimurodov, G. Bogomolov, T. Murakami, H. Teramura, T. Uno, and T. Usami

2020 New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Cravings. *ACTA ASIATICA*（Bul-

letin of the Institute of Eastern Culture）119: 1-20.

［その他］

寺村裕史

2021 「みんぱく映像制作の裏話」『月刊みんぱく』45(2)：10-11。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

寺村裕史 監修

2021 『ウズベキスタンの結婚式』（英語・日本語・22分）

2021 『ウズベキスタンの美味しい羊料理』（英語・日本語・15分）

2021 『タンディルでパンを焼く』（英語・日本語・14分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年8月2日 「考古学のデータ処理におけるアナログとデジタル――実測図から読み解く制度・身体・感性」『感性と制度のつながり――芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える』オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2021年3月27日 「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果――出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」第28回西アジア発掘調査報告会、オンライン開催

・研究公演

2021年3月6日 「阪神虎舞みんぱく公演」国立民族学博物館

・展示

2021年3月4日～5月18日 「復興を支える地域の文化――3.11から10年」国立民族学博物館

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中央・北アジアの物質文化に関する研究――民博収蔵の標本資料を中心に」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

岡山大学文学部「博物館情報・メディア論a/b」（集中講義）

藤本透子［ふじもと とうこ］―――― **准教授**

1975年生。**【学歴】**京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関研究専攻博士課程指導認定退学（2007）**【職歴】**京都大学総合人間学部リサーチ・アシスタント（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科ティーチング・アシスタント（2005）、日本学術振興会特別研究員（2006）、京都桂看護専門学校非常勤講師（2006）、関西学院大学経済学部非常勤講師（2008）、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員（2008）、神戸松蔭女子学院大学文学部非常勤講師（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2012）、立命館大学国際関係学部非常勤講師（2015）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）**【学位】**博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）、修士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2002）**【専攻・専門】**文化人類学、中央アジア地域研究

【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

［単著］

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼――現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

［編著］

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教――社会主義を経た地域を読む』神奈川：春風社。

Yamada, T. and T. Fujimoto（eds.）

2016 *Migrationa and the Remaking of Ethnic-Micro-Regional Connectedness*（Senri Ethnological Studies 93）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

【受賞歴】

2013 人間文化研究奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カザフスタンにおける社会・宗教・伝統医療の人類学的研究

・研究の目的、内容

中央アジアにおける社会変容をふまえて、宗教実践とその一部としての伝統医療の実態を明らかにし、社会・宗教・身体の関係を考察することが研究の目的である。具体的には、1）人の移動にともなう社会の形成と変容のメカニズム、2）イスラームと伝統医療の展開に関する研究を行った。新型コロナウイルス感染症の拡大によりカザフスタンでの現地調査はできなかったため、論文執筆やオンラインでの国際ワークショップの開催などをとおして、これまでの調査研究の成果をまとめることに注力した。

・成果

1）移動にともなう社会の形成と変容のメカニズム

科研新学術領域「パレオアジア文化史学」B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の分担者として、これまでにカザフスタンで収集したデータの分析を行った。その成果の一部は、書籍収録論文「移動する人々のつながり――カザフ草原に生きる家族の事例から」にまとめた。また、研究報告「中央アジアにおける移動と接触――ものの形態に反映される人の行動パターン」を共同執筆した。この研究報告では、現生人類のユーラシアへの拡散に関する近年の遺伝学の成果をふまえて、中央アジアで歴史的に西ユーラシア集団と東ユーラシア集団の混淆が生じたことが、居住形態や墓制に及ぼしてきた影響について考察した。

2）伝統医療とイスラームの展開

科学研究費（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」に基づき、8月にカザフスタンで開催された国際会議History and Culture of the Great Steppeにオンライン参加し、治療を目的とする聖者廟参詣に関して、The Transformation of Saint Veneration: A Cultural Anthropological Study of Māshhür-Jüsíp Köpeyūlï's Grave in Northeastern Kazakhstanと題して発表した。この発表に関連して、書籍収録論文「聖者になる過程――カザフスタンにおける近代化の経験とイスラーム」が3月末に刊行された。

9月には、科学研究費（基盤研究（C））と北東アジア地域研究の共同成果として、国際ワークショップSocial and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approachesを開催し、The Healing of Children's Illnesses among Kazakh Women in Villages of the Steppe: Religious Practices in Social Reconfigurationというタイトルで口頭発表した。この国際ワークショップには、カザフスタンとベルギーの研究者がオンライン参加し、①中央ユーラシア草原地帯における人の移動と宗教の多元性、②伝統医療の歴史的背景と再活性化メカニズム、③イスラーム、シャマニズム、仏教などの諸宗教と伝統医療の布置などに関して議論を深めた。

◎出版物による業績

［編著］

長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編

2021 『宗教性の人類学――近代の果てに、人はなにを願うのか』京都：法藏館。

［分担執筆］

藤本透子

2020 「移動する人々のつながり――カザフ草原に生きる家族の事例から」山田孝子編『人のつながりと世界の行方――コロナ後の縁を考える』pp.65–80，京都：英明企画編集。

2021 「カザフスタンの儀礼と食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.618–619，東京：丸善出版。

2021 「聖者になる過程――カザフスタンにおける近代化の経験とイスラーム」長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性の人類学――近代の果てに、人はなにを願うのか』pp.174–202，京都：法藏館。［査読有］

川口幸大・別所裕介・藤本透子

2021 「宗教性の領域で考える」長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性の人類学――近代の果てに、人はなにを願うのか』pp.377–389，京都：法藏館。［査読有］

Fujimoto, T.

2020 The Transformation of Saint Veneration: A Cultural Anthropological Study of Mäshhür-Jüsíp Köpeyūlī's Grave in Northeastern Kazakhstan. In M. Kh. Abusseitova (ed.) *Istoriya i kul'tura velikoi stepi* (*Materialy mezhdunarodnoi nauchno-prakticheskoi konferentsii*), pp.456–466. Almaty: Shygys pen Batys.

［その他］

藤本透子・菊田　悠・吉田世津子

2021 「中央アジアにおける移動と接触――ものの形態に反映される人の行動パターン」野林厚志編『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究　計画研究B01班2020年度 研究報告』pp.15–23，東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016–2020年度計画研究B01班（研究課題番号16H06411）。

藤本透子

2020 「父と少年の旅」『月刊みんぱく』44(9)：18–19。

2020 「ムスリム女性の装い」『月刊みんぱく』44(12)：16–17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年 9 月21日　'Introduction.' "Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches", National Museum of Ethnology

2020年 9 月21日　'The Healing of Children's Illnesses among Kazakh Women in Villages of the Steppe: Religious Practices in Social Reconfiguration.' "Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches", National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 8 月26日　'The Transformation of Saint Veneration: A Cultural Anthropological Study of Mäshhür-Jüsíp Köpeyūlī's Grave in Northeastern Kazakhstan.' History and Culture of the Great Steppe, Almaty, Kazakhstan

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」研究代表者、科

学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本中央アジア学会理事、日本中央アジア学会報編集委員

グローバル現象研究部

三尾　稔［みお　みのる］―― 部長（併）教授

1962年生。**【学歴】**東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、東洋英和女学院大学国際社会学部助教授（2001）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2018）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2019）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）**【専攻・専門】**社会人類学・インドの宗教と社会**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

［共編］

Mio, M. and C. Bates（eds.）

2015　Cities in South Asia. London: Routledge.［査読有・書評有・民博共同研究の成果］（http://choiceconnect.org/webclipping/194400/e0bubfitramyrf7jwbc8s12r_hb62uv6swnu3wbhxn7ct2md3o）

三尾　稔・杉本良男編

2015『現代インド6　環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

［論文］

三尾　稔

2017「モノを通じた信仰――インド・メーワール地方の神霊信仰における身体美学的な宗教実践とその変容」『国立民族学博物館研究報告』41(3)：215–281。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が30年にわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践やローカリティのあり方をどのように変容させているかという点に注目し、特に地方都市におけるフィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。この目的のため申請していた日本学術振興会科学研究費補助金が2019年度より獲得できた（科学研究費（基盤研究（C））「インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究」）ので、この経費を活用して研究を進める。

6年計画で進められている人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」は今年度で5年目を迎える。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点

構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの１つの実証的研究として各個研究を遂行する。

・成果

インドの地方都市のサバルタンの宗教実践やローカリティの変容に関する人類学的調査研究のため獲得し、2019年度から行っている科学研究費（基盤研究（C））「インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究」）による研究は、新型コロナウィルス感染症蔓延のため計画していた現地調査が行えなかったが、現地の研究協力者と電話やメールによって連絡を取って現地の状況を把握した。

上記科研費と「南アジア地域研究」経費によって2019年４月および11月に実施した調査の成果については、「南アジア地域研究」プロジェクトの成果として2022年春に刊行を計画している論文集のための論文として執筆し、寄稿した。

「南アジア地域研究」プロジェクトが毎年実施している国際全体集会のうち、2018年１月にネパール・カトマンズで実施した研究集会の成果論文集の編集作業に筆頭編者として関わってきたが、この論文集を2020年12月に英国Routledge社より *The Dynamics of Conflict and Peace in Contemporary South Asia: The State, Democracy and Social Movements* として刊行した。

新型コロナウィルスの流行がインドの社会に及ぼした影響に関して国際ウェビナーを企画・主宰した。ウェビナーにはかつて国立民族学博物館の外国人客員教授として招聘したインドの社会学者であるAbhijit Dasguptaデリー大学教授を講師として迎え、「南アジア地域研究」の国際セミナーの一環として企画した。ウェビナーは2020年６月11日に実施し、“*Spread,Control and Community Response of COVID-19 in India*” と題した講演を行ってもらった。三尾は企画を担当したほか、当日の司会とディスカッサントをつとめた。

また新型コロナウィルスの流行がインドの宗教文化に及ぼした影響について、毎日新聞夕刊の連載企画『旅・いろいろ地球人』に2020年７月の４週間にわたり計４回「コロナ禍とインド」と題したエッセイを寄稿した。

◎出版物による業績

［編著］

Mio, M., K. Nakamizo, and T. Fujikura（eds.）

2020 *The Dynamics of Conflict and Peace in Contemporary South Asia: The State, Democracy and Social Movements*（Routledge New Horizons in South Asian Studies）. London: Routledge.［査読有］

［その他］

三尾　稔

2020 「現代インドの多様な宗教の葛藤と共存――現地調査からの視点」『ユタ日報研究』25：19–44。

2020 「旅・いろいろ地球人 コロナ禍とインド① 外出規制の影響」『毎日新聞』７月４日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 コロナ禍とインド② 伝染病の記憶」『毎日新聞』７月11日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 コロナ禍とインド③ 地方都市の現状」『毎日新聞』７月18日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 コロナ禍とインド④ 岐路に立つ宗教文化」『毎日新聞』７月25日夕刊。

◎大学院教育

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）、博士論文予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」拠点代表者

鈴木七美［すずき　ななみ］―― 教授

【学歴】東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）**【職歴】**財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師（1997）、京都文教大学人間学部文化人類学科助教授（2000）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助

教授（2002）、マギル大学文化人類学部客員助教授（2003）、放送大学分担協力講師（2004）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（文化人類学' 04 主任講師）（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2009）、総合研究大学院大学比較文化学専攻長（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2014）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）**【学位】**博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）学士（薬学）（東北大学 1981）**【専攻・専門】**文化人類学、エイジング研究、医療社会史**【所属学会】**日本文化人類学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会 Association for Anthropology and Gerontology（AAGE）

【主要業績】

［単著］

鈴木七美

2019 『エイジングフレンドリー・コミュニティ――超高齢社会における人生最終章の暮らし方』東京：新曜社。

2002 『癒しの歴史人類学――ハーブと水のシンボリズムへ』京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学――産婆世界の解体から自然出産運動へ』東京：新曜社。

【受賞歴】

1998　第13回女性史青山なを賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ――エイジング・イン・プレイスと交流の重層化

・研究の目的、内容

超高齢社会において、すべての世代がどのように生活の基盤とウェルビーイングを構想できるのかに関心が集まっている。

本研究は、高齢者のニーズを契機として全ての世代の生活環境を再考・開発するエイジング（エイジ）・フレンドリー・コミュニティ（AFC）に関する研究蓄積を生かし、語り合いやモノ作りなど多世代が参加する活動実践について、研究調査・成果公開を実施する（外部資金　科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」（研究代表者：鈴木七美）。

北米の宗教移民再洗礼派アーミッシュのキルトを素材として、アーミッシュのウェルビーイングの考え方とその実践を検討する。さらに、米国のキルトメイキングの歴史のなかでアーミッシュのキルトをめぐる交流の展開について考察を加え、論考をまとめる。

モノと情報を素材として多世代・多文化に開かれた学びと交流機会の開発にかかわり、エイジングフレンドリー・コミュニティの考え方にもとづき博物館などの施設を生かした、米国の包摂的活動について研究調査資料を分析し、口頭発表を行う。

・成果

外部資金　科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」（研究代表者：鈴木七美）に関連し、高齢者をはじめとする多世代多文化の人々のエイジング・イン・プレイス（居場所を得て生活する）に関わる口頭発表を行い、論考を提示した。

米国における多世代が暮らす包摂的・持続的生活空間について、さまざまなバリエーションを提示してきた再洗礼派の人びとの実践にかかわる第一次資料を収集し、論考を執筆した。再洗礼派は、現代米国一般社会との距離の取り方の異なるいくつものグループが存在するが、いずれにおいても共通である、平和主義（非暴力・無抵抗）の歴史に関する第一次資料を収集し分析を進めた。平和主義にもとづく支援活動への参加として精力的に行われているものづくりや、多様なミーティングの機会の創出などについて、論考を提示した。

［論文］

・Suzuki, Nanami. 2020. Weaving Flexible Aging-friendly Communities Across Generations While Living with COVID-19. *Anthropology and Aging*. 41-2: 155-166.（2020.12.16）

［その他］

・鈴木七美 2020「エイジングフレンドリー・コミュニティにおける『いのち』」『第38回比較文明学会大会プログラム・要旨集 いのち」をめぐる文明的課題の解決に向けて』79-80頁（比較文明学会第38回大会実行委員会）（2020.11.21）

・鈴木七美 2021「家族が集う日の食卓――サンクスギビング・ディナー」『月刊みんぱく』（1）：8. 大阪：国立民族学博物館（2021.1.1）

・鈴木七美 2021「ジャム」『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版（2021.1.30）

◎口頭発表

（国際研究集会）

・鈴木七美 2020「エイジングフレンドリー・コミュニティにおける『いのち』」第38回比較文明学会大会 シンポジウムⅢ「社会・文明・思想から『いのち』を考える」大阪：国立民族学博物館・オンライン（2020.11.23）

◎出版物による業績

［論文］

Suzuki, N.

2020 Weaving Flexible Aging-friendly Communities Across Generations While Living with COVID-19. *Anthropology and Aging* 41(2): 155-166.

［その他］

鈴木七美

2020 「エイジングフレンドリー・コミュニティにおける『いのち』」『第38回比較文明学会大会プログラム・要旨集「いのち」をめぐる文明的課題の解決に向けて』pp.79-80。

2021 「家族が集う日の食卓――サンクスギビング・ディナー」特集「めでたい場の食」『月刊みんぱく』45(1)：8。

2021 「ジャム」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濵田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅﨑昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.192-193, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月23日 「エイジングフレンドリー・コミュニティにおける『いのち』」第38回比較文明学会大会シンポジウムⅢ『社会・文明・思想から「いのち」を考える』国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（２人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」「比較宗教研究演習」、「比較文化学特論Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益信託澁澤民族学振興基金2020年度事業第47回澁澤賞選考委員会委員（委員長）、Anthropology & Aging (A&A): The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology（AAGE）Editorial Advisory Board

西尾哲夫［にしお　てつお］―――― 教授

1958年生。**【学歴】**大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（1984）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士後期課程満期退学（1987）**【職歴】**東京外国語大学ア

ジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第二研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部教授・部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館副館長（2012）、国立民族学博物館国際学術交流室室長（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部教授・部長（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館副館長（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）**【学位】**文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）**【専攻・専門】**言語学・アラブ研究　アラブ遊牧民の言語人類学的研究、アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究**【所属学会】**日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

［単著］

西尾哲夫

2013 『ヴェニスの商人の異人論――人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト――文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2011　第28回田邉尚雄賞（東洋音楽学会）

1992　オリエント学会奨励賞

1992　新村出記念財団研究助成賞

1992　流沙海西奨学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化と中東地域の民衆文化

・研究の目的、内容

「アラブの春」を主導した新興の都市部中流層が用いた「中間アラビア語」と呼ばれる新生の共通アラビア語は、新たなコミュニケーション空間を創出した。この空間では差異化された社会的アイデンティティ獲得をめぐり、グローバルな動向に感応する社会運動の場が確立しつつある。本研究では、民衆、大衆、地域住民という概念の再構築を通じて彼らがグローバル化されたコミュニケーション空間に感応している状況を具体的に分析することによって、「中間アラビア語」が創出した公共的コミュニケーション空間において民衆文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、および個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個々の人間の社会的動員作用として働くメカニズムを解明する。また「中間アラビア語」による文学的社会位相の中で成立した、シンドバード航海記に焦点をあてて分析することによって、グローバル化の観点から多元的共創文学の可能性について考察する。

・成果

①研究成果として、『ガラン版千一夜物語』（岩波書店、全六巻）の最終巻を刊行し、本邦における最初の全訳を完了した。多くの新聞や雑誌の文化欄・書評欄で画期的な仕事として高い評価を受けた。本訳業を通して、ガラン訳テキストの底本に係る新発見を含めて形成過程に関する新知見を得ることができた。

またフランスの社会科学高等研究院（EHESS）との共同研究による国際シンポジウムの成果として国際共同編集のかたちで、*Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées.* を刊行した。また中東地域における個人と社会の関係性に関する国際シンポジウムの成果として、*The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions.* を編集し刊行した。

②研究発表として、英国の Royal Anthropological Institute が主催する国際学会『Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future』でパネルを組織し、「Mediating past anthropological research data with contemporary researchers and research societies: A case study of the Info-Forum Museum Project in MINPAKU」の題で発表した。また日本中東学会第36回年次大会特別研究集会で企画セッションを

組織し、「フォーラム型ミュージアムとしての展示の可能性について」の題で発表した。

③現代的課題にかかるテーマ研究である特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？」を代表として組織し、「神と人の言葉をめぐる世界認識の類型化に向けて――Olivier Hanne, L' Alcoran: Comment l' Europe a découvert le Coran.（Paris: Belin, 2019. 696頁）の紹介と井筒俊彦のコーラン（クルアーン）研究の再評価」」の題で基調となる発表をおこなった。

④一般向けの成果発信として、みんぱく公開講演会『ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう』において、基調講演「アラジンはなぜ世界を魅了するのか？――ファンタジーの文明誌」をするとともに、対談「妄想が世界を創る！　森見登美彦（作家）×西尾哲夫」をおこなった。また「『ガラン版 千一夜物語』（岩波書店）全六冊完結記念　西尾哲夫・深緑野分トークイベント　世界はいつもミステリアス！――作家といっしょに読む『ガラン版 千一夜物語』」をおこなった。また朝日カルチャーセンターでも「訳者と読む『ガラン版 千一夜物語』」と題して一般向けの講演をおこなった。

⑤科学研究費（基盤研究（B））（特設分野）「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（研究代表者：西尾哲夫）ならびに科学研究費（基盤研究（B））（一般）「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」（研究代表者：西尾哲夫）による調査・研究をおこなった。

◎出版物による業績

［単著］

西尾哲夫

2020 『ガラン版千一夜物語 6』東京：岩波書店。

［編著］

鈴木　董・近藤二郎・赤堀雅幸・岡田保良・鎌田　繁・長沢英治・永田雄三・西尾哲夫・深見奈緒子・保坂修司・桝屋友子・水野信男・森本一夫編

2020 『中東・オリエント文化事典』東京：丸善出版。

Casajus, D., T. Nishio, F. Pouillon, and T. Saito（eds.）

2021 *Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées*（Senri Ethnological Reports 152）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

Sumi, A. and T. Nishio（eds.）

2021 *The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions*. Osaka: Center for Modern Middle East Studies at Minpaku.

［分担執筆］

西尾哲夫

2020 「アラビアンナイトとコーヒー」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.220–221, 東京：丸善出版。

2020 「アラブの民衆文学」鈴木　董・近藤二郎・赤堀雅幸・岡田保良・鎌田　繁・長沢英治・永田雄三・西尾哲夫・深見奈緒子・保坂修司・桝屋友子・水野信男・森本一夫編『中東・オリエント文化事典』pp.390–391, 東京：丸善出版。

2020 「アラビアン・ナイト」鈴木　董・近藤二郎・赤堀雅幸・岡田保良・鎌田　繁・長沢英治・永田雄三・西尾哲夫・深見奈緒子・保坂修司・桝屋友子・水野信男・森本一夫編『中東・オリエント文化事典』pp.418–419, 東京：丸善出版。

2021 「西アジア地域の食文化（シナイ半島）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.577–579, 東京：丸善出版。

［論文］

Nishio, T., N. Okamoto, and M. Sironval

2021 Joseph-Charles Mardrus and Orientalism: Re-Evaluating His Translation of the Arabian Nights in Light of New Findings from Mardrus' Personal Archives. In A. Sumi and T. Nishio（eds.）*The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions*, pp.109–134. Osaka: Center for Modern Middle East Studies at Minpaku.

Nishio, T. and N. Okamoto

2021 L'Histoire de Sindbad le Marin est-elle de la littérature populaire?: Une approche nouvelle des relations entre tradition littéraire et culture populaire au Moyen-Orient. In D. Casajus, T.

Nishio, F. Pouillon and T. Saito (eds.) *Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées* (Senri Ethnological Reports 152), pp.41–55. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［その他］

西尾哲夫・深緑野分

2020 「西尾哲夫・深緑野分トークイベント 世界はいつもミステリアス！(前編)」『たねをまく（岩波書店のWEBマガジン)』10月23日。

2020 「西尾哲夫・深緑野分トークイベント 世界はいつもミステリアス！(後編)」『たねをまく（岩波書店のWEBマガジン)』10月23日。

西尾哲夫

2021 「『ガラン版 千一夜物語』翻訳裏話」『月刊みんぱく』45(3)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年6月5日 「神と人の言葉をめぐる世界認識の類型化に向けて―― Olivier Hanne, L'Alcoran: Comment l'Europe a découvert le Coran.（Paris: Belin, 2019. 696頁）の紹介と井筒俊彦のコーラン（クルアーン）研究の再評価」第22回現代中東地域研究レクチャー・シリーズ講演会、オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年8月29日 「フォーラム型ミュージアムとしての展示の可能性について」日本中東学会第36回年次大会特別研究集会、オンライン開催

2020年9月18日 'Mediating Past Anthropological Research Data with Contemporary Researchers and Research Societies: A Case Study of the Info-Forum Museum Project in MINPAKU.' "Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future", オンライン開催

・広報・社会連携活動

2020年8月8日 「『ガラン版 千一夜物語』（岩波書店）全六冊完結記念　西尾哲夫・深緑野分トークイベント 世界はいつもミステリアス！――作家といっしょに読む『ガラン版 千一夜物語』」青山ブックセンター、オンライン開催

2020年11月6日 「アラジンはなぜ世界を魅了するのか？――ファンタジーの文明誌」第21回みんぱく公開講演会『ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう』国立民族学博物館/日本経済新聞社、日本経済新聞社大阪本社カンファレンスルーム、オンラインとのハイブリッド開催

2020年11月6日 「妄想が世界を創る！　森見登美彦（作家）×西尾哲夫」第21回みんぱく公開講演会『ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう』国立民族学博物館/日本経済新聞社、日本経済新聞社大阪本社カンファレンスルーム、オンラインとのハイブリッド開催

2020年11月26日 「訳者と読む『ガラン版 千一夜物語』」オンライン講座、朝日カルチャーセンター（中之島教室)、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B))「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B))「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」拠点代表者

信田敏宏［のぶた　としひろ］ 教授

1968年生。**【学歴】**東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）**【職歴】**東京都立大学人文学部社会学科助手（2001)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003)、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004)、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2012)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012)、国立民族学博

物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2017）**【学位】**社会人類学博士（東京都立大学 2002）**【専攻・専門】**社会人類学、東南アジア研究 **【所属学会】**日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

［単著］

信田敏宏

2019 『家族の人類学――マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ』京都：臨川書店。

2013 『ドリアン王国探訪記――マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

Nobuta, T.

2009 Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia. Subang-Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第 4 回東南アジア史学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）マレーシア先住民に関する人類学的研究

2）インクルーシブ社会に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

1）本研究は、主にマレーシアの先住民オラン・アスリに関わる諸現象について、先住民に関するグローバルな状況を視野に入れながら、その最新の動向を探ることを目的とする。具体的には、オラン・アスリおよびマレーシアの先住民の民族状況や親族制度、民族工芸や文化復興などの諸現象について情報の収集を行ない、オラン・アスリおよびマレーシアの先住民が置かれている状況を把握する。

2）本研究は、本館の文化資源プロジェクト「知的障害者の博物館活用に関する実践的研究」を中心として、知的障害者やその保護者や介護者などへのアンケートや聞き取りなどの手法を用いて、知的障害者をめぐる教育環境や社会状況の実態を探ることを目的とする。本研究の目的には、インクルーシブ社会実現に関する具体的な提言も含まれている。

・成果

1）マレーシアの先住民オラン・アスリを含む世界の先住民に関する特別展「先住民の宝」を開催した。また、オラン・アスリの彫像や仮面に関する講演会（ウィークエンドサロン）を実施し、研究成果の一部を発表した。さらに、オラン・アスリが被害を受ける側になっているマレーシアの開発状況を告発する映画「斧は忘れても、木は覚えている」について、映画解説をおこない、これまでの研究成果の一部を発表した。

2）「知的障害者にとっての学び――みんぱく Sama-Sama 塾の試み」と題した論考を『障害者問題研究』にて発表した。

◎出版物による業績

［論文］

信田敏宏

2020 「知的障害者にとっての学び――みんぱく Sama-Sama 塾の試み」『障害者問題研究』48(1)：68-73。

［その他］

信田敏宏

2020 「東南アジア学術調査――梅棹忠夫の『移動研究室』」特集「知的生産のフロンティア」『月刊みんぱく』44(4)：7。

2020 「書評・新刊書紹介：長津一史著『国境を生きる――マレーシア・サバ州、海サマの動態的民族誌』」『東南アジア 歴史と文化』49：239-244。

2020 「マレーシアの光と影――『斧は忘れても、木は覚えている』」『月刊みんぱく』44(8)：18-19。

2020 「暑い地域に生きる人々――マレーシアの生活」『中学社会　地理的分野』pp.28-29, 東京・大阪：

日本文教出版

2021 「東南アジア地域の食文化　島嶼部（森林地域）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.596–597，東京：丸善出版。

Nobuta, T.

2021 Treasures of Indigenous Peoples. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 13–14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月５日 「オラン・アスリから見たWawasan 2020の時代」2020年度日本マレーシア学会研究大会・ラウンドテーブル『Wawasan 2020とマレーシア社会の変化――複眼的視座からの検証』オンライン開催

・展示

2020年10月１日～12月15日 「先住民の宝」

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年10月18日 「オラン・アスリと精霊」第575回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2020年10月10日 「映画解説」みんぱく映画会『斧は忘れても、木は覚えている』国立民族学博物館

2020年11月16日 「特別展『先住民の宝』」国立民族学博物館

2020年12月19日 「オラン・アスリの解説」シネ・ヌーヴォ

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

文化庁2021年度障害者等による文化芸術活動推進事業に係る企画案審査委員

・他大学の客員、非常勤講師

京都女子大学「家族の人類学」

平井京之介［ひらい　きょうのすけ］――― 副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

森　明子［もり　あきこ］――――――――――――――――――――――――――――――― 教授

【学歴】筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程単位取得退学（1989）**【職歴】**筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第３研究部助手（1990）、国立民族学博物館第３研究部助教授（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2009）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）**【学位】**文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）**【専攻・専門】**文化人類学　ヨーロッパ人類学、ドイツ、オーストリアの民族誌研究、民族学・民俗学の歴史的展開**【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

森　明子

1999 『土地を読みかえる家族――オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

［編著］

森　明子編

2019 『ケアが生まれる場　他者とともに生きる社会のために』京都：ナカニシヤ出版。［査読有］

Mori, A.（ed.）

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social*（Senri Ethnological Studies 81）. Osaka: National Museum of Ethnology.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会的なものの意味と通文化的普遍性に関する人類学研究

・研究の目的、内容

人文社会科学の諸分野において進んでいる社会的なものを問い直すいくつもの研究は、グローバル化やネオリベラリズムのなかで社会が再編成されつつあるという認識や、現代世界は不確実性をましつつあるという人々の感覚に応答するものである。この状況下で人類学は、他者をどのようにとらえるのかということがあらためて問われる。本研究は、社会的なものの編成／再編成を、民族誌の個別性を重視する接近法によって明らかにしていくとともに、人類学の比較のパースペクティヴのもとで、人間社会の普遍性について考察する。

研究は、科学研究費（基盤研究（C））「ケアから見たベルリンのネイバーフッドに関する民族誌研究」（研究代表者：森　明子）によるベルリンの調査研究、科学研究費（基盤研究（B））「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘）によるオーストリア国境地域の調査研究、共同研究「カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて」（代表者：内藤直樹）、「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西　真如）、「不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う」（研究代表者：森　明子）のもとで進めた。また博物館展示における社会的なものの扱いとして、ベルリンとオーストリア、スロヴェニアでの収集を計画した。

・成果

新型コロナウィルス拡散防止のため出張をともなう研究活動はいずれも実施することができなかった。そこで、ベルリンおよびオーストリアの科研調査と収集については、現地のカウンターパートとメールの応答によって情報を収集し、もっぱらデータの補充と整理をすすめた。

ベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館による*What's Missing? Collecting and Exhibiting Europe.*がベルリンの出版社から刊行され、そのなかに論文を執筆した。感染症拡散予防対策のために急遽開催中止になった公開講演会の企画を、*MINPAKU Anthropology Newsletter* 50号記念号の特集として掲載した。共同研究「カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて」（研究代表者：内藤直樹）、「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西　真如）のふたつにおいては、成果出版に向けた議論をすすめた。年度後半から開始した共同研究「不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う」（研究代表者：森　明子）では、感染症拡散防止のために研究会はWEB開催とし、機動力を生かしてほぼ月例で研究会を開催した。2021年4月に開始予定の特別研究プロジェクトの企画・設計を進めた。

◎出版物による業績

［分担執筆］

Mori, A.

2021 Exhibiting Europe in an Ethnological Museum in Japan: Redefining the Opposition between Self and Other. In I. Edenheiser, E. Tietmeyer, and S. Boersma（eds.）*What's Missing? Collecting and Exhibiting Europe,* pp.56–63. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.

［その他］

森　明子

2020 「モスト――オーストリア国境の村のリンゴ・ワイン」『TASC MONTHLY』534：3。

2021 「国境について考える――オーストリアの村から」『みんぱく e-news』235：巻頭コラム。

2021 「椅子――チカラの座とカラダの座」『月刊みんぱく』45(1)：16–17。

2021 「ヨーロッパ地域の食文化　食事の中心にある穀類と，味をつくる油脂」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.558–560，東京：丸善出版。

2021 「人とモノを媒介する場所という視座」『民博通信 Online』3：20-21。

Mori, A.

2020 About 'the Transnational Family' and its Sense of Place. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 50: 2-4.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年11月14日 「共同研究の趣旨について」『不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う――モノ、制度、身体のからみあい』国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘（東京学芸大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「ケアから見たベルリンのネイバーフッドに関する民族誌的研究」（研究代表者：森　明子）研究代表者、国立民族学博物館共同研究「カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて」（研究代表者：内藤直樹）メンバー、国立民族学博物館共同研究「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西　真如）メンバー、国立民族学博物館共同研究「不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う――モノ、制度、身体のからみあい」（研究代表者：森　明子）研究代表者、JSPS研究拠点形成事業「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」（研究代表者：坂井一成）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本民俗学会国際交流特別委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag（Köln, Weimar, Wien）研究顧問

相島葉月［あいしま　はつき］――准教授

【学歴】上智大学比較文化学部比較文化学科卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科社会人類学修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科イスラーム世界専攻博士課程修了（2011）**【職歴】**Zentrum Moderner Orient Visiting Research Fellow（2009）、Zentrum Moderner Orient/Graduate School Muslim Culture and Society, Free University Berlin　Research Fellow（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部Lecturer in Modern Islam（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）**【学位】**D.Phil. in Oriental Studies（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、M.Sc. in Social Anthropology（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）**【専攻・専門】**社会人類学、イスラーム学、中東研究**【所属学会】**日本中東学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris.［査読有］

［分担執筆］

Aishima, H.

2021 Chapter 1. Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom. In I. Ahmad（ed.）*Anthropology and Ethnography are not Equivalent: Reorienting Anthropology for the Future*, pp.20-35. Oxford: Berghahn Books.［査読有］

［論文］

Aishima, H.

2017　Consciously Unmodern: Situating Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt. *Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal* (2): 149–164.［査読有］

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトにおける美と身体文化

・研究の目的、内容

本研究の目的は、エジプトの空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、都市中流層的な美的感覚と身体文化の関係性を再考することにある。本研究の出発点は、なぜエジプト中流層の少年・少女にとって、空手道が「ハラール（イスラーム法的に合法、倫理的）」な習い事であるのに対し、同様の身体動作を行うクラシック・バレエが「ハラーム（イスラーム法的に違法、非倫理的）」なのかという問いにある。ハラール／ハラームと言ったイスラーム法的な語彙を援用しているとはいえ、エジプトの空手人気を支える言説を分析するに際し、中流層的な倫理観になぞられた近代主義との関係性において論じる必要がある。空手道に取り組む意義を「目的」と「効果」で説明し、バレエを享楽的な行為と批判する言説は、国際政治経済の周縁に置かれたエジプトの中流層的な倫理観を如実に反映しているからである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考察する。

研究分担者をつとめる「人間文化機構ネットワーク型基幹プロジェクト・現代中東地域研究拠点」および科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化（研究代表者：西尾哲夫）」に加え、研究代表者をつとめる科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」より研究費を捻出して研究課題を遂行した。

・成果

本年度は、新型インフルエンザの感染拡大の収束のめどがたたない上に、科学研究費（若手研究（B））の最終年度であったことから、海外調査は控え、これまで研究発表のために準備した素材を論文としてまとめる作業に重点を置いた。

Hatsuki Aishima（2021）“Locating the Popular: Sports and Social Class Ideals in Egyptian Karate”, Dominique Casajus et al（eds.), *Sur la notion de culture Populaire au Moyen-Orient*: *Approaches franco-japonaises croisées* (Senri Ethnological Reports 152), pp.157–170.［査読有］

相島葉月（近刊、2021年）「第５章グローバルスポーツとしての武道――カラテからエジプト社会を考える」西尾哲夫、東長靖（編）『中東・イスラーム世界への30の扉』ミネルヴァ書房。

相島葉月（入稿済み）「スポーツ・伝統武術（エジプト）」『イスラーム文化事典』丸善出版。

また、みんぱく公開講演会にてエジプトの空手家コミュニティを主題とした講演を行い、他の登壇者とともに空手や剣道のグローバルスポーツとしての展開について話し合った。

相島葉月（2021年３月19日）「カラテから考えるエジプトのスポーツと社会」『グローバル化する武道と中東』オーバルホール及びオンライン。

2017年のNIHUの若手研究者派遣プログラムで滞在したイギリスの成果公開として、イギリスのEU離脱や大学教育についての論文やエッセーを執筆した。

相島葉月（2020）「イギリスの外食シーンにおける『多文化』をめぐるポリティクス」『Vesta』第118号、pp.36–39.

相島葉月（2021）「クリスマス狂騒曲」『月刊みんぱく』第45巻第１号、p.9.

相島葉月（2021）「分断された社会の行方」『月刊みんぱく』第45巻第４号、pp.5–6.

Hatsuki Aishima（2021）“Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom”, Irfan Ahmad（ed.）*Anthropology and Ethnography are Different*. Oxford: Berghahn, pp.20-35.

本論文については、特別研究「グローバル地域研究と世界社会の認知地図」のオンライン研究会で７月３日に発表し、編者のIrfan Ahmadとともに人類学と民族誌の関係性について話し合った。

2019年４月25日に「人間文化機構ネットワーク型基幹プロジェクト・現代中東地域研究拠点」の事業として、*Wiley Blackwell History of Islam*（2018）の出版を記念し、編著者のアルマンド・サルヴァトーレ（マッギル大学）を招聘して、国内外のイスラーム史の専門家とともに合評会を開催し、グローバルヒストリーとしてイスラーム世界に関する歴史を書くための理論的枠組みや方法論について話し合った。その後、参加者の書評を編集し、*American Historical Review* に Review Roundtable として投稿した。査読を終了し、2021年３月号に掲載予定である。同誌は、英語圏の歴史学を代表する学会誌と目されているものの、イスラーム史やイスラーム世界について論じた投稿はなく、イスラーム史の専門家が歴史学に貢献しようとする試みも見受けられなかった。本企画は、グローバルヒストリーの枠組みを用いてイスラーム世界の事象を論じることで、イスラームに対する本質主義的な視座を脱し、グローバルな潮流に位置付けるためのアプローチを探求した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

相島葉月

2021 「コラム４　アズハル」千葉悠志・安田慎編『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク』pp.213–216，横浜：春風社。

2021 「コラム２　ラジオと知識人」千葉悠志・安田慎編『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク――イスラームのゆくえ』pp.123–125，横浜：春風社。

Aishima, H.

2021 Chapter 1. Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom. In I. Ahmad（ed.）*Anthropology and Ethnography are not Equivalent: Reorienting Anthropology for the Future*, pp.20–35. Oxford: Berghahn Books.［査読有］

2021 Locating the Popular: Sports and Social Class Ideals in Egyptian Karate. In Dominique Casajus et al（eds.）*Sur la notion de culture Populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisée*（Senri Ethnological Reports 152), pp.157–170. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［その他］

相島葉月

2020 「イギリスの外食シーンにおける『多文化』をめぐるポリティクス」『Vesta』118：36–39。

2021 「クリスマス狂騒曲」特集「めでたい場の食」『月刊みんぱく』45(1)：9。

2021 「カフェ・コーヒーハウス」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.22–23，東京：丸善出版。

2021 「西アジアの食文化（エジプト）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.28–29，東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年11月６日 「総合司会」国立民族学博物館公開講演会『ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう』日本経済新聞大阪本社カンファレンスルーム、オンラインとのハイブリッド開催

2021年３月19日 「カラテから考えるエジプトのスポーツと社会」国立民族学博物館公開講演会『グローバル化する武道と中東』オーバルホール、オンラインとのハイブリッド開催

・共同研究会での報告

2020年７月３日 'Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom.' 特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか」国立民族学博物館、オンライン開催

2021年１月30日 「現代エジプトにおけるムスリム知識人とメディア化するイスラーム」共同利用・共同研究課題「現代モスリム知識人の変容と交流」2020年度第２回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、オンライン開催

・研究講演

2020年12月４日 「神なき時代にスーフィーになる――ナセル社会主義とアブドゥルハリーム・マフムードのシャイフ探しの軌跡」イスラーム・セミナー、慶応義塾大学言語文化研究所、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（研究代表者：西尾哲夫）研究分担者、科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「ネオリベラリズムのモラリティ」（研究代表者：田沼幸子（東京都立大学））メンバー、国立民族学博物館特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？」（研究代表者：西尾哲夫）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会民博連携委員

河合洋尚［かわい　ひろなお］――准教授

1977年生。**【学歴】**関西学院大学社会学部卒（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程修了（2009）**【職歴】**中国嘉応大学客家研究所ビジティング・スカラー（2007）、中国嘉応大学客家研究院民族学分野専任講師（2008）、広東外語外貿大学継続学院非常勤講師（2009）、中国嘉応大学客家研究院客員准教授（2010）、中国国立中山大学社会学与人類学院助理研究員［講師相当］（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、流通科学大学総合政策学部非常勤講師（2012）、園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）**【専攻・専門】**都市人類学、景観人類学、漢族研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、日本華南学会、中国広東民族学会

【主要業績】

［単著］

河合洋尚

2020 『〈客家空間〉の生産――梅県における「原郷」創出の民族誌』東京：風響社。

2013 『景観人類学の課題――中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

［編著］

河合洋尚編

2013 『日本客家研究的視角与方法――百年的軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001　安田三郎賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）ランドスケープおよびフードスケープの人類学的研究

2）環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌

3）中国人類学のレビューとその再評価

・研究の目的、内容

①景観（ランドスケープ）をめぐる人類学を整理するとともに、次なるステップに進めるため、以下の３つの研究をおこなった。（A）景観と文化遺産制度、バーチャル世界の関係性についての検討、（B）食を対象とする五感と景観のつながりに関する検討（フードスケープ研究）、（C）景観考古学、建築学（景観デザイン論）との対話。

②漢族、特に中国南部から世界各地に移住する客家に焦点を当て、国境を越えた社会文化的ネットワークについて文献研究やウェブ調査を実施した。具体的な研究対象は以下の3点である。(A) 中国南部における客家エスニシティの生成と華僑とのつながり、(B) オセアニア、特にハワイ、タヒチ、ニューカレドニアにおける客家の歴史と現状、(C) ペルーにおける客家の歴史と現状。

③共同研究会「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位」を主催した。さらに、担当である都市人類学の整理の他、客家地域などの事例から中国の親族論・宗族研究を再考した。

・成果

①景観人類学を一般向けに紹介する『景観人類学入門』を刊行した。また、中国の景観関係の権威雑誌である『風景園林』の「景観人類学特集」に参与し、論文を発表した。さらに、食の景観をめぐる研究を進め、レビュー論文「フードスケープ――「食の景観」をめぐる動向研究」を『国立民族学博物館研究報告』で発表するとともに、『世界の食文化百科事典』の刊行に編集幹事として携わり、「フードスケープ」などの項目も執筆した。景観人類学は、文化遺産研究とも密接に関係する分野である。本館特別研究「デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ」(研究代表者：飯田　卓) に参与し、国際ウェブ・セミナーでも、客家建築の景観政策と文化遺産保護にまつわる口頭発表をおこなった。他方で、科研新学術研究領域「出ユーラシアの統合的人類史学」に研究分担者として参与し、景観という切り口から社会文化人類学、考古学、生物人類学の統合をめざすニッチ構築論の諸研究を整理し、その一部を同科研のシンポジウムでポスター発表するとともに、年次報告書において今後の方向性を示した。

②中国南部の客家エスニシティ生成に関する特集を組み、『国立民族学博物館研究報告』に投稿した。また、みんぱくゼミナールおよびウィークエンドサロンで、タヒチ、ニューカレドニア、バヌアツ、ペルー、ハワイの客家に関する研究成果の一部を公表した。さらに、日本の客家研究に関する編著を現在編纂中であり、台湾で出版する予定となっている。

学術雑誌『中国21』54号の特集で、中国宗族論を再考する論文「祭祀する女性、祭祀される女性――「宗族」の範疇と多様性をめぐる一考」を発表したと同時に、同誌で梅県の女性祖先崇拝に関する論文「広東客家地域における女性祖先崇拝と宗族の形成」(夏　遠鳴著) を翻訳した。

◎出版物による業績

［単著］

河合洋尚

2020 『景観人類学入門』東京：風響社

［編著］

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

［論文］

河合洋尚

2020 「フードスケープ――「食の景観」をめぐる動向研究」『国立民族学博物館研究報告』45(1)：82-114。

2021 「祭祀する女性、祭祀される女性――「宗族」の範疇と多様性をめぐる一考察」『中国21』(愛知大学現代中国学会) 54：103-125。

2021 「人類学如何着眼景観？――景観人類学之新課題」(辺　清音訳)『風景園林』28(3)：16-20。

［翻訳］

河合洋尚

2021 「広東省客家地域における女性祖先崇拝と宗族の形成」『中国21』(愛知大学現代中国学会) 54：83-102［中国語→日本語］。

［その他］

河合洋尚

2021 「フードスケープ」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.24-25，東京：丸善出版。

2021 「中国地域の食文化」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.604-609，東京：

丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2021年３月13日　'Landscape Politics and Heritage Practices: Comparison between Fujian Tulow and Hakka Weilongwu（遺産実践としての景観ポリティクス――福建土楼と客家囲龍屋の比較から）.' "Serial Academic Webinars Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices（連続ウェブ研究会 文化遺産実践における身体とモノ――集合的健忘に抗するための文化伝達）" National Museum of Ethnology, Japan

・みんぱくゼミナール

2021年２月20日　「南半球の華僑華人――客家を中心として」第506回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2021年３月28日　「ハワイの華人と客家」第584回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・展示

2020年８月12日～2021年11月14日　台湾客家文化館特別展示「川流不息――台湾客家与日本国際展」への参与

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価」 研究代表者、人間文化研究機構広領域連携型研究プロジェクト「アジアにおける『エコヘルス』研究の新展開」研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「中国――南太平洋島嶼国関係の変化と『オセアニアン・チャイニーズ』像の表出」 研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明」（研究代表者：大西秀之（同志社女子大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

中国嘉応大学客家研究院客員准教授、京都市立芸術大学非常勤講師「アジア文化史Ⅰ」、大阪経済大学非常勤講師「民俗学」、関西学院大学非常勤講師「フィールド文化特論Ａ」「死と病の文化史」

鈴木英明［すずき　ひであき］―――― 准教授

【学歴】学習院大学文学部史学科卒業（2001年）、慶応義塾大学大学院文学研究科修了（2003年）、東京大学人文社会系研究科単位取得退学（2010年）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員、長崎大学多文化社会学部准教授（2014-2018）、国立民族学博物館グローバル現象研究部助教（2019）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2019）**【学位】**博士（文学）（東京大学 2010）**【専攻・専門】**歴史学、インド洋海域史、グローバルヒストリー**【所属学会】**日本アフリカ学会、日本オリエント学会

【主要業績】

［単著］

Suzuki, H.

2017　*Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the 19th Century.* New York: Palgrave.

［編著］

鈴木英明編

2019　『東アジア海域から眺望する世界史――ネットワークと海域』東京：明石書店。

Suzuki, H.（ed.）

2016　*Abolitions as a Global Experience.* Singapore: NUS Press.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド洋を中心とした奴隷廃止のグローバルヒストリー

・研究の目的、内容

本研究では、奴隷制や奴隷交易の廃止を世界的な共通体験として捉え、そのような共通体験がどのようにして発生し、それがどのような影響を後世に残したのかを明らかにする。とりわけ、インド洋を中心にこの問題を考究する。

・成果

本年度は、海外調査ができなかったが、その分を本年度より開始した科学研究費（基盤研究（C））「20世紀前半ペルシア湾奴隷制に関する歴史民族誌的研究」などを用いて、資料の整理と充実にあてた。

10月には『解放しない人びと、解放されない人びと――奴隷廃止の世界史』を東京大学出版会より刊行した。本書は、インド洋を含み、奴隷廃止の世界史的な展開を明らかにしたものである。また、11月には歴史学会第45回大会シンポジウム「人の移動における自由と不自由のあいだ」にコメンテーターとして参加し、本研究課題の成果を盛り込んだコメントを行った。11月には比較文明学会第38回大会シンポジウム「生き物をめぐって現代文明を考える」において、特にペルシア湾の真珠採取業を事例にした「生き物とグローバルヒストリー」と題した報告を行い、その内容は『季刊民族学』175号で「貝殻に雨粒が宿れば。――20世紀前半、世界商品化する真珠とペルシア湾の採集者たち」と題して刊行された。

◎出版物による業績

［単著］

鈴木英明

2020 『解放しない人びと、解放されない人びと――奴隷廃止の世界史』東京：東京大学出版会。［査読有］

［論文］

Suzuki, H.

2020 The Birth of a Node: Nosy Be as a French Protectorate and Trade Networks. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 77: 87–106.［査読有］

［その他］

鈴木英明

2020 「東アフリカの女性が纏う色彩――鮮やかなるカンガ」『中央公論』134(7)：8–10。

2020 「アフリカを彩った日本製カンガの旅――『メイド・イン・ジャパン』から立ち上がるグローバル・ヒストリー」『中央公論』134(7)：172–179。

2021 「貝殻に雨粒が宿れば。――20世紀前半、世界商品化する真珠とペルシア湾の採集者たち」『季刊民族学』175：22–29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2020年７月31日 「19世紀後半から20世紀前半のペルシア湾における真珠採取業と拘束、奴隷制」特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？」第４回研究会／現代中東地域研究レクチャーシリーズ第24回レクチャー、オンライン開催

・共同研究会での報告

2020年11月28日 「アデン湾両岸地域の可能性」『人類史における移動概念の再構築――「自由」と「不自由」の相克に注目して』国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年５月22日 「世界史的共通体験としての奴隷廃止――解放されない人びと」第88回大阪大学グローバルヒストリーセミナー、大阪大学、オンライン開催

2020年５月23日 「曖昧な『ボンベイ・アフリカン』――ジェイコブ・ウエインライトの日記の分析から」日本アフリカ学会第57回学術大会、東京外国語大学、オンライン開催

2020年７月19日 「ボンベイ・アフリカンの『アフリカ』経験――19世紀インド洋西海域における救出後の元奴隷たち」「『奴隷』と隷属の世界史――地中海型奴隷制度論を中心として」研究会、オンライン開催

2020年10月30日 'The Rise of Nosy Be: Conjunction between Indian Ocean Network and Imperial Expan-

sion.' "A Statistical Study of Indian Ocean Trade: Towards a Reappraisal of Regional Trade in Modern World History", オンライン開催

2020年11月21日 「生き物とグローバルヒストリー――世界商品化する真珠とペルシア湾の採取者たち」第38回比較文明学会大会、国立民族学博物館

2020年12月20日 「コメント」歴史学会第45回大会シンポジウム『人の移動における自由と不自由のあいだ』ウェブ会議

2021年１月30日 「ネットワーク論再考――フロー＝ネットワークの観点から」シンポジウム『港市と渡海者――港を結ぶネットワーク』オンライン開催

2021年２月11日 'Development of Kaiiki-shi 海域史 studies in Japan and its Dilemma.' "South East Asia and East Asia in Studies of the Indian Ocean World: Past, Present and Future", オンライン開催

・広報・社会連携活動

2020年８月27日 'Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the 19th Century.'（New Books in the Indian Ocean World）New Books Network、オンライン開催

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2021年１月26日 「アフリカ地域」（2020度国際協力調査「海域交流ネットワークと文化遺産」意見交換会）文化遺産国際協力コンソーシアム、オンライン開催

◎大学院教育

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「渡海者のアイデンティティと領域国家――21世紀海域学の史学的展開」（研究代表者：上田　信（立教大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「インド洋交易圏の統計的研究――近代世界における地域交易像の再構築」（研究代表者：杉原　薫（総合地球環境学研究所）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「文化遺産の『社会的ふるまい』に関する応用人類学的研究：東部アフリカを事例に」（研究代表者：飯田　卓）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「近世海上貿易ネットワークの構造と変容――アジアの季節変動とグローバル・ヒストリー」（研究代表者：島田竜登（東京大学））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「『循環』を問い直す――物質・文化・環境を繋ぐグローバルヒストリー」（研究代表者：杉浦未樹（法政大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「植民地における予防と監視の比較研究――治安秩序維持と公衆衛生に焦点を当てて」（研究代表者：鬼丸武士（九州大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「『奴隷』と隷属の世界史――地中海型奴隷制度論を中心として」（研究代表者：清水和裕（九州大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「装飾文化からみたアフリカ史の再構築に関する研究」（研究代表者：池谷和信）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「20世紀前半ペルシア湾奴隷制に関する歴史民族誌的研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「人類史における移動概念の再構築――『自由』と『不自由』の相克に注目して」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

大同生命国際文化基金大同生命地域研究賞推薦委員、文化遺産国際協力コンソーシアム国際協力調査ワーキンググループ外部専門家

廣瀬浩二郎［ひろせ　こうじろう］―― 准教授

【学歴】京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校人類学部留学（1995）、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程指導認定退学（1997）**【職歴】**京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）、関西学院大学非常勤講師（2010）、東海大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）**【学位】**文学博士（京都大学大学

院文学研究科 2000)、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）**【専攻・専門】**日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）**【所属学会】**日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待――触覚でみる手学問のすすめ』京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論――出口王仁三郎と近代日本』大阪：解放出版社。

［学位論文］

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

今年度は秋の特別展・企画展の実施に向けて準備を進めることになる。二つの展示は私の触文化研究の集大成であるとともに、過去10年余の民博における共同研究、科学研究費プロジェクトの成果を広く一般公開する大事業と位置付けることができる。チラシ等の広報媒体でも“触”の要素を取り入れたユニークな印刷物を提案・実現したいと考えている。また、図録は単なる展覧会のカタログというのみではなく、ユニバーサル・ミュージアムの基本文献として長く読み継がれる書籍になるよう工夫したい。民博は、ユニバーサル・ミュージアム研究の国際的な拠点であるといえる。この事実を館内外に示すことが、特別展・企画展の同時開催の目的である。

今年度は３年計画で取り組んできた科学研究費プロジェクト「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」の最終年度に当たる。特別展・企画展の成果とも連動しつつ、日本のユニバーサル・ミュージアムの現状と課題について、英文論文をまとめたい。その他、ここ数年の懸案であるユニバーサルデザインのさわる絵本『世界の感触』も刊行をめざす。

・成果

2020年度はコロナ禍のため、大幅な研究計画の変更を強いられた。2020年の秋に実施予定だった特別展・企画展は、民博着任後20年となる私の研究の集大成と位置づけ、準備を進めてきたが、１年の延期が決まった。また、企画展は中止、特別展へ一本化されることとなり、展示プランを再検討した。展示の延期は大きな痛手だったが、在宅勤務が続く2020年５月～７月に京都の出版社、小さ子社のサイトでコラム「それでも僕たちは『濃厚接触』を続ける！」（全８回）を連載できたのは、今年度の研究成果として特筆に値する。本連載コラムに民博所蔵資料の写真、解説を加え、10月に単著として刊行することができたのも有意義だった。

上述の連載コラムがきっかけとなり、コロナ関係でいくつかの論文・エッセーの寄稿依頼があった。これらの原稿を書き進める中で、あらためて特別展の趣旨、研究上の位置づけを明確にすることができた。2020年度末で終了予定だった科研費プロジェクト「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」は総括研究会、野外での調査の実施が困難だったため、１年の延長を申請した。2021年度の特別展開催に合わせ、科研費プロジェクトでもワークショップ等を企画したい。

◎出版物による業績

［単著］

廣瀬浩二郎

2020 『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！――世界の感触を取り戻すために』京都：小さ子社。

［分担執筆］

廣瀬浩二郎

2021 「『射真』という新概念」清水展・小國和子編『職場・学校で活かす現場グラフィー――ダイバーシティ時代の可能性をひらくために』pp.225-229，東京都：明石書店。

［論文］

廣瀬浩二郎

2021 「健常者とはだれか――『耳なし芳一』を読み解く」『2020年度差別の歴史を考える連続講座講演録』pp.77–103, 京都：京都部落問題研究資料センター。

［その他］

廣瀬浩二郎

2020 「目 / 耳 / 手 / をつなぐ“触る”アート　21世紀版『耳なし芳一』」『intoxicate』146：8–9。

2020 「コロナ禍の先へ――全盲の僕が発見した『六つの手』」『こころ』55：23–31。

2021 「3密の意義を見つめなおす“触”の大博覧会」『季刊紙子どもは未来　檸檬新報』p.2, 大阪：檸檬新報舎。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年9月16日 「世界をつなぐユニバーサル・ミュージアム――“触”の大博覧会から2025大阪万博へ」第89回言語・音声理解と対話処理研究会、オンライン開催

2020年11月23日 「バリア・フリー社会における『いのち』」第38回比較文明学会大会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

2021年2月23日 「触発の技法と可能性」第78回身心変容技法研究会、オンライン開催

2021年3月30日 「『点字』的私論、『私』的点字論」日本発達心理学会第32回大会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「インクルーシブアート教育論及び視覚障害等のためのメディア教材・カリキュラムの開発」（研究代表者：茂木一司（群馬大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」研究代表者

三島禎子［みしま　ていこ］――准教授

1963年生。**【学歴】**セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第2課程修了（1992）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第3課程修了（1993）**【職歴】**国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2003）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）**【学位】**D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究科1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1992）**【専攻・専門】**文化人類学（西アフリカ研究）**【所属学会】**アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［編著］

Charbit, Y. et T. Mishima（éds.）

2014 *Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

［論文］

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima（éds.）*Questions de migrations et de santé en Afrique subsaharienne*. Paris: L'Harmattan.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族文化の多元的意義に関する理論研究――商業移民の送出社会の変容から

・研究の目的、内容

民族文化は理解する側にとっても多元的であるとともに、その受容者にとっても一元的ではない。その時代や社会環境によってさまざまな意義が与えられ得る民族文化について、その差異を明らかにし、それぞれについて既存の研究から理論的考察をおこなう。研究対象とするのは、商業移民を歴史的に送出してきた西アフリカのソニンケ社会である。10年以上にわたって移民の出身地で開催されている「文化週間」と地域ラジオの関わりを分析し、送り出し社会についての考察を深める。

研究の方法として、みんぱくプロジェクトの一環であるフォーラム型ミュージアムの資金を利用して、2017年に取材をおこなった映像をデータベース化する作業を今後２年間にわたっておこなう。このデータベースは、「文化週間」の映像を現地の人びとに翻訳してもらい、解説をつけるために利用するもので、民族文化に関する多様な解釈を収集する場となり得る。

・成果

フォーラム型ミュージアム（強化型）の１年目として、映像資料の整理とフランス語による情報の追加をおこないデータベースの基盤を作成した。映像資料はセネガルの20ケ村で行われた「文化週間」を記録したもので、ビデオテークや映像民族誌に使用したものを含め項目別におよそ250件に分割され、それぞれについて10項目の情報を付加した。

このプロジェクトの構想については、アフリカ学会で発表したほか、「民博通信」に執筆した。また映像資料をつかった一般向けの映画会や民博の内外における講演会でも紹介した。

送り出し社会についての考察では、共同研究『人類史における移動概念の再構築――「自由」と「不自由」の相克に注目して』（代表：鈴木英明）において発表し、時代や立場によって異なる移動の諸相を描く試みから研究課題に取り組んだ。

◎出版物による業績

［分担執筆］

三島禎子

2021 「ムスリム系アフリカ移民の食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.482–483，東京：丸善出版。

［論文］

三島禎子

2021 「ソニンケによる『文化週間』の映像データベースの構築」『民博通信 Online』3：8–9。

［その他］

三島禎子

2020 「今と昔――セネガルの養鶏ビジネス」『みんぱく e-news』227：巻頭コラム。

2020 「『アフリカンプリント』は世界とつながっている」『アフリカ布見本帖』pp.13–15，東京：玄光社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2021年２月18日　「移動する人の諸相――時間軸と空間軸の接点からみるソニンケ商人」『人類史における移動概念の再構築――「自由」と「不自由」の相克に注目して』オンライン開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年５月23日　「ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局――『文化週間』の映像取材から見えてきたもの」日本アフリカ学会第57回学術大会、オンライン開催

・広報・社会連携活動

2020年11月16日　「地域ラジオ局と文化運動――セネガルの農村から」大阪府高齢者大学校「国際文化交流科」

2021年１月９日　「セネガル河上流域の変容と『文化週間』――故郷に残った人びとの選択」第509回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館、オンライン開催

2021年１月23日　「セネガルを越える人と地域ラジオ」みんぱく映像民族誌シアター、国立民族学博物館、シアターセブン、オンライン開催

◎大学院教育

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」（研究代表者：飯田　卓）メンバー、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Revue Européenne des Migrations Internationales 編集委員（アジア担当）

学術資源研究開発センター

野林厚志［のばやし　あつし］―――― センター長（併）教授

1967年生。**【学歴】**東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程退学（1996）**【職歴】**国立民族学博物館第３研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授・センター長（2014-2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授・センター長（2019-2020）**【学位】**博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）**【専攻・専門】**人類学、フォルモサ研究**【所属学会】**日本台湾学会、日本文化人類学会、The American Anthropological Association、生き物文化誌学会

【主要業績】

［単著］

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学――台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

［編著］

野林厚志編

2018 『肉食行為の研究』東京：平凡社。

順益台湾原住民研究会・野林厚志主編

2014 『台湾原住民研究の射程――接合される過去と現在』台北：順益台湾原住民博物館。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

生態資源獲得の技術の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、人類が生態資源の獲得に使用してきた技術を、(1)物質文化、(2)人間の行動、(3)環境条件、という３つの側面から分析し、人類の適応行動の空間的な変異と時間的な変化を明らかにすることである。このために、(1)台湾、インドネシアで、生業行動、食生活に関する野外調査を、国立民族学博物館をはじめとする内外の博物館で、生業資源の獲得に関連する資料の熟覧調査を行い、生態資源（動物、植物、鉱物、水等）を獲得するための技術インデックスを作成する。同時に民族誌データ（Binford2001等）の定量分析を進め、環境と文化要素との相関に関する考察を行う。本年度は昨年度の調査で得られた、インドネシア・ハルマヘラ島における食事の基礎資料の分析をすすめ、1970年代後半に実施された、国立民族学博物館ハルマヘラ調査隊による現地調査データと比較しながら、文化変容と生態資源利用の変化との関係の考察を進める。民族誌データ（Binford2001等）の定量分析については、昨年度にプラットフォームを完成させたパレオアジア民族誌データベースへのデータ入力を進め、生態資源獲得技術の通文化比較を視覚的に可能にするデータベースを構築する。

以上の成果にもとづき、自然環境への適応、集団接触による文化変容を説明するための生態資源の獲得技術の人類学的モデルを提示する。

なお、本研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施する。

・成果

本年度は当初計画にしたがいながら、前年度までに得られたインドネシア・ハルマヘラ島における食事の基礎資料の分析を進め、漁撈が生業活動において重要な役割を占める島嶼社会の食生活のモデルを提示した。具体的には、通年利用可能な根菜（タロ、サツマイモ、バナナ）の栽培と海産資源との組み合わせが食生活の基本的な形態である一方で、海流による捕獲可能な魚種の季節性が生じる中低緯度島嶼（台湾）と珊瑚礁リーフを利用した通年的に安定した漁獲である低緯度島嶼（ハルマヘラ）では、農耕と漁撈の組み合わせによる生業カレンダーの差異が生じていることを明らかにした。成果は「日本民俗学会」の年次大会、「生き物文化誌学会」例会において報告した。

また、民族誌データ（Binford2001等）の分析も進め、米国トルーマン大学から公開されているオープンライセンスのEnvCalプログラムを用いて、世界の気候、植生条件にしたがった狩猟採集集団の投影（Projection）の分析を行い、ホモ・サピエンスのアジアにおける拡散ルートの検証を行なった。成果は、新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の研究大会で発表した。

これらの研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施した。

◎出版物による業績

［編著］

野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編

2021 『世界の食文化百科事典』東京：丸善出版。

野林厚志編

2021 『パレオアジア文化史学　計画研究B01班2020年度 研究報告――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班（研究課題番号16H06411）。

Nobayashi, A. and S. Simon（eds.）

2020 *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific*（Senri Ethnological Studies 103）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［分担執筆］

野林厚志

2021 「豆類」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.48-49，東京：丸善出版。

2021 「ヤム・タロ」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.56-57，東京：丸善出版。

2021 「生食と非加熱料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.176-177，東京：丸善出版。

2021 「酒と信仰」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.304-305，東京：丸善出版。

2021 「食の意味（比喩）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.396-397，東京：丸善出版。

2021 「日本のパン」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.492-493，東京：丸善出版。

2021 「中国地域の食文化（少数民族とベジタリアン料理）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.610-611，東京：丸善出版。

2021 「拡大する人類集団の肉食――人新世の消費の行方」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス

史から探る』pp.303–327，東京：農山漁村文化協会。

Nobayashi, A. and S. Simon

2020 'Introduction'. In A. Nobayashi and S. Simon (eds.) *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific* (Senri Ethnological Studies 103), pp.1–8. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

Nobayashi, A.

2020 The Diversity of Taiwanese Indigenous Culture Seen in Bead Products. In A. Nobayashi and S. Simon (eds.) *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific* (Senri Ethnological Studies 103), pp.51–63. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

Peng, Y. and A. Nobayashi

2021 Cross-Cultural Research Comparing the Hunting Tools and Techniques of Hunter-Gatherers and Hunter-Gardeners. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp.75–92. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［論文］

野林厚志

2021 「拡大する人類集団の肉食――人新世の消費の行方」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』pp.303–327，東京：農山漁村文化協会。

Ihara, Y., K. Ikeya, A. Nobayashi, and Y. Kaifu

2020 A Demographic Test of Accidental Versus Intentional Island Colonization by Pleistocene Humans. *Journal of Human Evolution* 145: 1–12.［査読有］

Nobayashi, A.

2020 A Milestone in the Construction of the Exhibits in National Museum of Ethnology, Japan: Japan World Exposition «Osaka 70 Expo» and its Ethnographic Collection. *Archivio per l'Antropologia e la Etnologia* (CL): 129–146. Firenze: Societa Italiana di Antropologia e Etnologia.［査読有］

［その他］

野林厚志・中村光宏

2020 「新旧技術が並存するためのニッチ条件の民族学的、数理的解釈」『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第9回研究大会』pp.18–19，東京：東京大学。

野林厚志

2020 「文献紹介：岩間一弘編著『中国料理と近現代日本――食と嗜好の文化交流史』」『vesta』118：64–65。

2020 「魚皮玩具」『BIOSTORY』33：1。

2020 「〈ことばの迷い道〉『嘉玲』が帰ってきたよ」『月刊みんぱく』44(8)：20。

2020 「島嶼社会の魚食と生業複合――台湾蘭嶼とインドネシアハルマヘラの事例から」『日本民俗学会第72回年会』p.6，名古屋：日本民俗学会第72回年会実行委員会。

2020 「食が生まれる瞬間と脈絡を考える」『民博通信 Online』2：12–13。

2020 「生態資源と観光資源のふたつの顔をもつ温泉」『月刊みんぱく』44(11)：4–5。

2020 「生き物とミュージアム――人新世におけるいのちの表現を考える」『第38回比較文明学会大会プログラム・要旨集』pp.16–17，東京：比較文明学会第38回大会実行委員会。

2020 「台湾における人類集団の連続性の生態・民族誌的検証」『パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第10回研究大会』pp.30–31，名古屋：名古屋大学。

2021 「地球主義とミュージアム――人新世における生物多様性の理解に向けて」『季刊民族学』45(1)：60–68。

2021 「台湾社会の甘い飲食文化――砂糖の歴史生態から考える」『砂糖類・でん粉情報』102：69–75。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年9月14日 「エスニシティから見た主食――台湾原住民族の事例」『食生活から考える持続可能な社会――「主食」の形成と展開』国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年10月３日　「島嶼社会の魚食と生業複合――台湾蘭嶼とインドネシアハルマヘラの事例から」日本民俗学会第72回年会、愛知大学

2020年10月24日　「從國立民族學博物館特展『原住民之寶』來思考（国立民族学博物館特別展『先住民の宝』から考える）」第13届台日原住民族研究論壇（オンライン発表）、國立政治大學原住民族研究中心

2020年10月31日　「海の先住民の生業カレンダー――台湾タオ族の魚食とイモの利用」生き物文化誌学会第79回例会（生き物と先住民）、国立民族学博物館

2020年11月21日　「生き物とミュージアム――人新世におけるいのちの表現を考える」第38回比較文明学会大会シンポジウムⅠ『生き物をめぐって現代文明を考える』国立民族学博物館

2020年12月11日　「博物館を通じた台湾原住民族との協働――大学共同利用機関の視点から」地方大学における総合的な地域資料の展示公開モデルの構築研究会（オンライン発表）、東北大学

2020年12月19日　「台湾における人類集団の連続性の生態・民族誌的検証」パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第10回研究大会（オンライン発表）、名古屋大学

・展示

2020年10月１日～12月15日　「先住民の宝」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年12月６日　「台湾原住民運動40年――『高山青』から移行期正義まで」第580回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2020年11月１日　「地域文化の継承と復興に博物館が果たす役割」（「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」関連企画公開セミナー）五木村歴史文化交流館、ヒストリアテラス五木谷、熊本

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（３人）、副指導教員（４人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「台湾『原住民運動』前史の生活世界の変容と実践：写真アーカイブスによる人類学的探究」（研究代表者：宮岡真央子（福岡大学））研究分担者、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「文明社会における食の布置」研究代表者

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

順益台湾原住民博物館研究賛助金「台湾原住民族の文化、社会、歴史に関する総合的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

文部科学省審議会臨時委員、生き物文化誌学会理事、日本学術振興会国際事業委員、日本学術会議連携会員、アジア太平洋フォーラム・淡路会議アジア太平洋研究賞選考委員、味の素食の文化センター食の文化フォーラム会員、奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキアム運営委員、北海道大学アイヌ・先住民研究センター国際編集諮問委員

岸上伸啓［きしがみ　のぶひろ］――教授

1958年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マギル大学人類学部人類学科博士課程退学（1989）**【職歴】**早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学教育学部函館校助教授（1992）、国立民族学博物館第一研究

部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2017）、人間文化研究機構本部理事（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（併任）（2018）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学　カナダ・イヌイットの社会変化、都市在住のイヌイットの民族誌的研究、先住民による海洋資源の利用と管理、アラスカ先住民イヌピアットとカナダ・イヌイットの捕鯨、環北太平洋先住民文化の比較研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会、生き物文化誌学会、函館人文学会

【主要業績】

［単著］

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

［編著］

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle（eds.）

2013 *Anthropological Studies of Whaling*（Senri Ethnological Studies 84）. Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341–358.

【受賞歴】

2007　第18回カナダ首相出版賞

1998　第９回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカ北西海岸先住民文化の変化に関する民族学的研究

・研究の目的、内容

北アメリカ大陸のアラスカ南部からワシントン州にかけての北西海岸地域には狩猟・漁労民でありながら複雑な社会組織や儀礼を保持しつつ定住生活をおくってきた人々が住んでいる。彼らは、ハイダやクワクワカワクゥ、海岸セイリッシュなど13以上の異なる民族集団からなるが、生業や居住形態、ポトラッチ儀礼の実施、トーテムポールや丸木舟等の製作、世界観、人間と動物との関係など多くの点で共通性が認められるために、北西海岸先住民と総称されてきた。

現代の北西海岸先住民文化の祖型は、約2500年前ごろに形成されたと考えられている。同地域の人びとは地元の豊富な海洋資源と森林資源を利用して、独自の文化を生み出してきた。彼らは18世紀末からラッコなどの毛皮交易によって経済的に栄え、その富を利用して伝統文化を活性化させた。しかし19世紀後半から20世紀半ばにかけてカナダ政府による同化政策のために独自の言葉や儀礼、儀礼具の製作技術の多くを失った。1950年代に政府が先住民に信仰の自由を認めると、ポトラッチ儀礼の実施やトーテムポールの製作など彼らの間で伝統文化の復興運動が活発になった。以上が北西海岸先住民の文化と歴史の概略である。

本研究の目的は、北西海岸先住民族のひとつであるハイダ・グワイ（旧称クイーン・シャーロット諸島）に在住するハイダ民族に焦点をあて、彼らの文化の変化と現状について既存の文献に基づく研究と2020年８月に予定している現地調査によってデータを収集し、整理・分析して、文化変化の全体像を描き出すことである。とくに彼らの生業活動、世界観、儀礼、ダンス、社会組織、モノづくりを取り上げて、それらの文化的な側面

の変化と持続、現状について整理・分析する。また、民博収蔵の北西海岸先住民関連資料の情報についてさらなる精査を行い、フォーラム型情報ミュージアムデータベース「北米北方先住民関連文化資源データベース」の内容の高度化を行う。

本研究は2020年度科学研究費（基盤研究（A））「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」（研究代表者：岸上伸啓）の一部として実施予定である。

・成果

(1)新型コロナ感染症の蔓延のために2020年８月に予定していたカナダのハイダ・グワイでの現地調査を実施することができなかった。このため、ハイダ民族の文化変化に関する新たなデータを現地で収集することができなかった。その代わりにハイダ社会の変化を伝染病の流行による影響という点から検討し、北西海岸地域では欧米人が1860年代にもたらした天然痘が、総人口の60％以上（90％という説もある）の命を奪い、カナダ政府の同化政策の推進と相まって、ハイダ民族の社会と文化、経済の崩壊的変化をもたらし、その復興には100年近い時間がかかったことを解明した。その成果を「カナダ先住民の疫病との戦い――北西海岸地域のハイダと極北地域のイヌイット」(2021年、秋道智彌・角南篤編『疫病と海』pp.61-74，吹田：西日本出版社）として刊行した。また、2020年６月に民博の前庭に立てられたトーテムポールの制作過程に関する記録を取りまとめた結果、北西海岸先住民文化を象徴するトーテムポールの制作・建立技法において21世紀に入り新たな手法が用いられていることが判明し、文化伝統が創造的に再生産されている側面が明らかになった。その成果は、「国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて」(2021年、『国立民族学博物館研究報告』45(4)：655-680）において発表した。

(2)フォーラム型情報ミュージアム「北米北方先住民関連文化資源データベース」のハイダ民族とクワクワカワクゥ民族に関する文化資源情報を確認し、修正や付加を行い、内容を更新し、同データベースを2020年12月４日に新プレート版で館外公開した。

◎出版物による業績

［編著］

岸上伸啓編

2020 『捕鯨と反捕鯨のあいだに　世界の現場と政治・倫理的問題』京都：臨川書店。［査読有］

Kishigami, N.（ed.）

2021 *World Whaling: Historical and Contemporary Studies*（Senri Ethnological Studies 104). Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［分担執筆］

岸上伸啓

2020 「世界の捕鯨と捕鯨問題を考える」岸上伸啓編『捕鯨と反捕鯨のあいだに　世界の現場と政治・倫理的問題』pp.11-30，京都：臨川書店。［査読有］

2020 「ホッキョククジラを守りながら食べる――北極海の先住民捕鯨」秋道智彌・岩崎 望編『絶滅危惧種を喰らう』pp.117-127，東京：勉誠社。

2021 「カナダ先住民の疫病との戦い――北西海岸地域のハイダと極北地域のイヌイット」秋道智彌・角南篤編『疫病と海』（海とヒトの関係学）pp.61-74，大阪：西日本出版社。

Kishigami, N.

2021 World Whaling and Recent Whaling Research Trends. In N. Kishigami（ed.）*World Whaling: Historical and Contemporary Studies*（Senri Ethnological Studies 104), pp.1-30. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

2021 Food Security, Food Sovereignty, Bowhead Whale Hunts among the Inupiat in Utqiagvik, Alaska, USA. In K. Nobuhiro（ed.）*World Whaling: Historical and Contemporary Studies*（Senri Ethnological Studies 104), pp.93-112. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［論文］

岸上伸啓

2021 「狩猟採集民社会における食物分配に関する比較――アカ、アチェ、イヌイットの事例を中心に」『人文論究』90：69-88。［査読有］

2021 「国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて」『国立民族学博物館研究報告』45(4)：655-680。［査読有］

［その他］

岸上伸啓

2020 「書評：長谷川瑞穂著『先住・少数民族の言語保持と教育カナダ・イヌイットの現実と未来』」『カナダ研究年報』40：46–50。

2020 「世界の捕鯨を考える（共同研究　捕鯨と環境倫理（2016–2019年度）Final report」『民博通信 Online』2：16–17。［査読有］

2020 「はじめに」『岸上伸啓編『捕鯨と反捕鯨のあいだに　世界の現場と政治・倫理的問題』pp.1–7，京都：臨川書店。［査読有］

2020 「おわりに」『岸上伸啓編『捕鯨と反捕鯨のあいだに　世界の現場と政治・倫理的問題』pp.325–328，京都：臨川書店。［査読有］

2021 「食物の分配・贈与・交換」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.414–417，東京：丸善出版。

2021 「北米先住民の料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.620–621，東京：丸善出版。

2021 「食をめぐる文化衝突」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.390–391，東京：丸善出版。

2021 「友の会講演会実施報告　トーテムポール――カナダ北西海岸先住民の宝」『国立民族学博物館友の会ニュース』263：4。

2021 「カナダ先住民の疫病との闘い――北西海岸地域のハイダと極北地域のイヌイット」『Ocean Newsletter』491：6–7。

2021 「多元・多文化主義と向き合う都市」横浜国立大学都市科学部編『都市科学事典』pp.850–851，横浜：春風社。

2021 「カナダの極北地域――極寒のツンドラ地帯」飯野正子・竹中　豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.36–40，東京：明石書店。

2021 「気候変動とカナダ――地球温暖化の影響」飯野正子・竹中　豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.41–45，東京：明石書店。

2021 「多様なカナダ先住民――新たな先住民社会の生成」飯野正子・竹中　豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.80–84，東京：明石書店。

2021 「カナダ先住民のアート――先住民らしさの表象」飯野正子・竹中　豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.85–89，東京：明石書店。

2021 「カナダの都市先住民――新たな先住民ネットワークと文化の生成」飯野正子・竹中　豊総監修・日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章（第2版）』pp.90–94，東京：明石書店。

2021 「極北の誇り高きハンターたち　最北の捕鯨民　イヌピアットの世界」『時空旅人』61：78–81。

2021 「北太平洋先住民社会に関する比較研究構想」『民博通信 Online』3：16–17。

2021 「北方研究者としての津曲敏郎先生」呉　人惠・笹倉いる美・山田敦士編『津曲敏郎先生古希記念集』pp.4–5，網走：北海道立北方民族博物館内津曲敏郎先生古稀記念集編集委員会。

Kishigami, N.

2021 A Totem Pole of Northwest Coast People in Canada. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 1–3.

2021 Preface. In N. Kishigami (ed.) *World Whaling: Historical and Contemporary Studies* (Senri Ethnological Studies 104), pp.i-iv. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年5月31日 「『食料の主権』からみたアラスカ先住民社会における生業活動の重要性――イヌピアットの捕鯨を事例として」日本文化人類学会第54回研究大会、早稲田大学、オンライン開催

2020年10月31日 「北アメリカ北西海岸先住民と生き物の不思議な関係――ワタリガラスを中心に」生き物文化誌学会第79回例会、国立民族学博物館第5セミナー室

・研究講演

2020年10月３日　「トーテムポール　カナダ北西海岸先住民の宝」第505回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・展示

2020年10月１日～12月15日　「先住民の宝の北西海岸先住民（カナダ）コーナー」国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

International Arctic Science Committee（国際北極科学委員会）Social and Human Working Group member（Japanese representative）社会・人間作業部会・日本代表、総合研究大学院大学博士論文審査委員、北極域研究加速プロジェクト（Arctic Challenge for Sustainability II）ArCSII海外交流研究力強化プログラム審査委員、日本文化人類学会第29期代議員・監事、日本カナダ学会日本カナダ学会副会長、日本文化人類学会日本文化人類学会第28期評議員、Journal of Anthropological Research Editorial Board Associate Editor、北極環境研究コンソーシアム（JCAR）第４期・第５期運営委員、北海道大学北極域研究センター北極域研究共同推進拠点運営委員会委員、日本カナダ学会理事、民族藝術学会理事

笹原亮二［ささはら　りょうじ］——教授

1959年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程退学（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士前期課程修了（1995）**【職歴】**国立民族学博物館第一研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）**【学位】**博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 1995）**【専攻・専門】**民俗学、民俗芸能研究　日本の獅子舞の民俗学的研究、日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、民俗学における資料論 **【所属学会】**日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

［単著］

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

［編著］

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化――文字の民俗学　声の歴史学』京都：思文閣出版。

［論文］

笹原亮二

2005 「用と美――柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294，京都：思文閣出版。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島の祭や芸能の多様性の形成と島の歴史――奄美の島々を中心に

・研究の目的、内容

九州と沖縄のあいだに位置する奄美の島々には、奄美大島の豊年祭や八月踊、喜界島の島遊びや八月踊、徳之島の浜下りや節目踊、沖永良部島のグムチ（貢物）踊や獅子舞、与論島の十五夜踊など、様々な芸能や祭が伝

わり行われてきた。それらの芸能や祭には、豊年祭系統の祭など、奄美の島々全域で見られるもの、奄美大島や徳之島でみられる八月踊系統の踊や奄美大島や沖永良部島や与論島でみられる仮面芸能など、複数の島でみられるもの、徳之島の田植え歌や沖永良部島のグムチ踊など、１つの島のみで見られるものなどがあり、分布の様相は芸能や祭によって様々である。また、同系統の芸能であっても、島によって歌の音階や楽器の演奏法や形式などに違いがみられたりして、その様相は一様ではない。こうした島々の共通性や独自性が交錯し、多様性が認められる芸能や祭の様相は、この地域の島々が、九州と沖縄のあいだにあって、古来双方から様々な影響を受けてきたこととおそらく無関係ではない。更に、奄美大島の八月踊や徳之島の折目の祭の芸能など、１つの島に多数分布する芸能や祭にも集落や地域ごとに様々な違いがみられて、それをあわせて考えると、この地域の島々の芸能や祭は一層多様性に富んだ様相を呈してくる。

本研究では特に、これまで芸能や祭の現地調査や映像取材を行い、映像や文献などの多くの資料を収集し、映像番組やマルチメディア番組を作成してきた徳之島を初め奄美の島々について、島という環境における芸能や祭の多様性に富む実態とともに、そうした多様性の形成と島の歴史の関係を検討する。あわせて、これらの島々で収集した祭と芸能に関する映像などの資料の効果的な活用の可能性を探る。

・成果

本研究では、徳之島を初めとした奄美の島々における芸能や祭の種類や分布や多様性などについて、報告や論文などの文献、写真や映像や現地の人々へのインタビューなど、従来の現地調査や映像取材で収集した各種資料に基づき検討した。

その結果、この地域の島々の民俗文化に関しては、奄美大島とトカラ列島のあいだを境界線として、そこから北が九州以北の日本列島各地に繋がるヤマト文化圏、南が沖縄島以南の旧琉球国域に繋がる琉球文化圏に区分する二元的な構造の存在が従来から指摘されてきたが、各地の島々の芸能や祭の実態をみると、そうした二元的な構造のみでは理解として十分ではないことが明らかになった。

例えば、この地域の島々のシマウタは、蛇皮を張った三味線を伴奏に歌われる点は共通するが、三味線を竹の撥で弾いて律音階で歌う奄美大島・喜界島・徳之島に対し、水牛の角の撥で弾いて琉球音階で歌う沖永良部島・与論島に分かれ、境界線は徳之島と沖永良部島のあいだとなる。季節の折目などに踊手が歌い、太鼓を叩きながら踊る八月踊系統の踊は、奄美大島・喜界島・徳之島が盛んで沖永良部島でもわずかにみられ、境界線はトカラ列島と奄美大島のあいだと沖永良部島と与論島のあいだの２カ所となる。八月踊系統の踊やシマウタなどで用いられる太鼓は、胴に当てた皮に直接紐を通し、胴の周囲に一列に配した楔を叩いて締める奄美独特の楔締めの太鼓が、奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島でみられるが、喜界島では楔締めの太鼓の使用は近年の傾向で、もともとは皮を張った鉄枠に紐を通して締める太鼓が用いられていた。従って、境界線はトカラ列島・喜界島と奄美大島のあいだと与論島と沖縄島のあいだの２カ所となる。獅子舞は、沖永良部島と与論島では植物の繊維で全身が覆われた沖縄島以南と共通する形式のものがみられるが、徳之島以北から九州南部にかけてはみられず、境界線は徳之島と沖永良部島のあいだとなる。また、田植えの際に男女掛け合いで歌われる徳之島の田植え歌、「ヤマト由来」の狂言踊と「琉球由来」の踊が交互に演じられる与論島の十五夜踊など、それぞれの島のみでみられる芸能もあり、その場合の境界線はそれぞれの島のあいだとなる。このように、芸能の実態に基づき設定される境界線は芸能によって様々で、錯綜していることがわかる。更に、綱引きや様々な芸能が行われる豊年祭、餅貰いなどの水田に関わる行事、独特の祝歌や芸能が行われる正月行事など、様々な祭や行事の島々における実態もあわせて考えると、境界線は一層錯綜してくる。

こうした奄美の島々における民俗文化の錯綜した多数の境界線の存在に関しては、いずれか１つを妥当な境界線として選択する、あるいは１つの境界線に理念的にまとめ上げることは妥当性を欠く。それは、その境界線で区切られた２つの領域が、古来不変なままで実際に存在してきた実態として理解されかねないからである。それは、そうした非歴史的な理解ではなくて、多数の境界線が錯綜した状況をそのまま把握し、九州と沖縄のあいだにあって、古来日本と沖縄の政治的権威や権力や経済力などの様々な影響の下、多様な人々や物資や情報が往来する一方で、四囲を海で囲まれたことで孤立や自律性が醸成された中で展開してきた、この地域の島々の歴史と深く関わりつつ形成された歴史的な現象として理解が試みられるべきであろう。それによって、この地域の島々の民俗文化を、不断の変化や新たな形態の生成が常態化した歴史的な過程として、より実態に即した動的なかたちで把握することが可能になると思われる。

本研究の成果を基に、徳之島とほかの奄美の島々の芸能や祭を巡る境界線の錯綜を提示するコンテンツ「徳之島と周辺地域の歌と踊りと祭り」、徳之島の芸能と祭の特徴を提示する映像番組「徳之島の歌と踊りと祭り」、徳之島独特の田植踊について、島内前野集落における復活の経緯や現況を紹介した映像番組「前野と田植え歌」を作成し、島内各地の芸能や祭の映像などを集成したマルチメディア番組「徳之島の歌と踊りと祭り」に組み

込んで、同番組の充実を図った。同番組は2021年度に民博や徳之島において公開を期している。

◎出版物による業績

［論文］

笹原亮二

2020 「演じる見物の諸相――芸能と祭における見物と演者をめぐって」丹羽典生編『応援の人類学』pp.272-296, 東京：青弓社。［査読有］

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

［マルチメディア番組］

笹原亮二・福岡正太　監修

2021 『徳之島の歌と踊りと祭り』（日本語）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）研究分担者

山中由里子［やまなか　ゆりこ］――教授

1966年生。**【学歴】**カラマズー大学フランス語美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学（1993）**【職歴】**東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2019）**【学位】**学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）**【専攻・専門】**比較文学比較文化　西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史**【所属学会】**日本比較文学会、日本中東学会、日本オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

［単著］

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相――古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。［査読有］

［編著］

山中由里子・山田仁史編

2019 『この世のキワ――〈自然〉の内と外』東京：勉誠出版。

山中由里子編

2015 『＜驚異＞の文化史――中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

【受賞歴】

2020　第61回全国カタログ展図録部門金賞（一般社団法人日本印刷産業連合会・フジサンケイビジネスアイ）

2020　第61回全国カタログ展図録部門経済産業省商務情報政策局長賞（一般社団法人日本印刷産業連合会・フジサンケイビジネスアイ）

2011　第７回日本学士院学術奨励賞

2011　第７回日本学術振興会賞

2010　第15回日本比較文学会賞

2010　島田謹二記念学藝賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

驚異と怪異の比較文明論――想像界と自然界の相関

・研究の目的、内容

本研究ではこれまで、常識や慣習から逸脱した「異」なるもの（異境・異界・異人・異類・異音）をめぐる人間の心理と想像力の働きを「驚異」と「怪異」をキーワードに、比較文明論的な視点から考察してきた。自然界のどのような現象が「驚異」や「怪異」として認識され、どのような言説や視覚表象物が現れたのか、その背景にはどのような自然観があるのか、知識体系に接点はあるのかといった点に注目し、ユーラシアにおける人間と自然の相関関係の歴史的変遷を多元的視点から究明するとともに、生態系と人間の想像力と表象物の相関関係を、より広い人類史的な視点からも検証する。

・成果

当初の予定から開幕が延期されたが、2020年６月23日―８月16日に巡回展「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」が兵庫県立歴史博物館にて無事開催され、アマビエ資料の展示などが一般来館者の関心を集め、メディアでも多く取り上げられた。

2020年11月開催予定の国際研究集会「東西中世を解き放つ――『中世における文化交流』から中世学の未来へ」において、中世一神教世界におけるマンドラゴラの視覚的表象についてフランスの研究者と共同発表を行う予定であったが、海外からの研究者の来日がかなわず開催が中止になった。代わりに成果をフランス語の共著として出版する研究打ち合わせをオンラインで行った。日本中世英語英文学会第36回全国大会の枠組みにおいて12月に開かれた企画シンポジウム「ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷」において、「中世イスラーム世界における巨人像――ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民」を発表した（発表者のみ対面で集まり収録した内容を配信）。ドイツ、マールブルク大学宗教学博物館主催のオンラインコロキウム（12月４日）において、“The Museum as a Re-enchanted Forest?: Magical Thinking in Museum Space” を発表した。新学術領域「パレオアジア文化史学」全国大会（12月18日～20日）において、「想像界の生物多様性と境界性」を発表した。第１回人文知応援大会（2021年２月27日オンライン配信）において「自然界と想像界のあわいに漂うもの」を発表した。

そのほか、驚異・怪異研究の国際展開の準備のための英訳作業を進めた。中東の想像界に関する一般向け新書の執筆を進めた。

本研究は、科学研究費（基盤研究（A））「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」（研究代表者：山中由里子）の補助金、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）および科学研究費（基盤研究（C））「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承――中東および古代・近世との関わり」（研究代表者：大沼由布）と関連付けて実施した。

◎出版物による業績

［分担執筆］

山中由里子

2020 「アレクサンドロス３世（大王）」鈴木　薫・近藤二郎・赤堀雅幸編『中東・オリエント文化事典』p.68，東京：丸善出版。

2020 「驚異譚（アジャーイブ）と想像界」鈴木　薫・近藤二郎・赤堀雅幸編『中東・オリエント文化事典』pp.416–417，東京：丸善出版。

2021 「人はなぜモンスターを想像するのか？――疫病と幻獣」野林厚志編『パレオアジア文化史学　計画研究 B01班2020年度 研究報告――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』（PaleoAsiaProject Series 35）pp.25–29，東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016–2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

［論文］

山中由里子

2020 「マンドレイクの採取法――ヨーロッパ・中東・中国における知識の往還」『東西中世のさまざまな地平――フランスと日本の交差するまなざし』pp.157–188，東京：知泉書館。

［その他］

山中由里子

2020 「特別展『驚異と怪異――想像界の生きものたち』関連公開座談会 自然界から想像／創造する」『季刊民族学』172：84-103。

2020 「ドイツの温泉事情――なぜわたしがバーデン・バーデンに行ったことがないか」特集「世界温泉めぐり」『月刊みんぱく』44(11)：8-9。

2020 「特別展『驚異と怪異――想像界の生きものたち』企画奮闘記」『比較文學研究』106：179-183。

2021 「見上げてごらんーみんぱくで星を巡る」『月刊みんぱく』45(2)：16-17。

Yamanaka, Y.

2020 REGNUM IMAGINARIUM: Realm of the Marvelous and Uncanny. *MINPAKU Antropology Newsletter* 50: 11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月23日 「中世イスラーム世界における巨人像――ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民」（日本中世英語英文学会第36回全国大会企画シンポジウム『ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷』同志社大学、オンライン開催

2020年12月４日 The 'Museum as a Re-enchanted Forest?: Magical Thinking in Museum Space.' REDIM（Dynamiken religiöser Dinge im Museum）Online Colloquium, オンライン開催

2020年12月20日 「想像界の生物多様性と境界性」パレオアジア文化史学第10回研究大会、オンライン開催

2021年２月27日 「自然界と想像界のあわいに漂うもの」第１回人文知応援大会、オンライン開催

・展示

2020年６月23日～８月16日 「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」兵庫県立歴史博物館

・広報・社会連携活動

2021年２月13日 「常ならざる音――耳を通して異界とつながる」みんぱく映像民族誌シアター、国立民族学博物館、シアターセブン、オンライン開催

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2020年11月16日 「過去から紡ぎだす未来（ユーディット・シャランスキーによる朗読とトーク）」ゲーテ･インスティトゥート東京、オンライン配信

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承――中東及び古代・近世との関わり」（研究代表者：大沼由布（同志社大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「日本文化の対話的発展の比較文学的研究――世界のポップ・テクストをめぐって」（研究代表者：平石典子（筑波大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「ペルシア語歴史物語の生成、伝播、受容に関する学際的研究」（研究代表者：近藤信彰）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員、REDIM "Dynamiken religiöser Dinge im Museum" Advisory Board、Interlitteraria University of Tartu Press Academic Advisory Board

伊藤敦規［いとう　あつのり］――准教授

1976年生。**【学歴】**東京都立大学人文学部卒（2000）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学修士課程修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2009）**【職歴】**国立民族学博物館特別共同利用研究員（2007）、三重大学人文学部非常勤講師（2008）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員（2008）、

Visiting Researcher of the A:shiwi A:wan Museum and Heritage Center（2009）、立教大学兼任講師（2009）、日本学術振興会特別研究員 PD（2009）、国立民族学博物館外来研究員（2009）、三重大学人文学部非常勤講師（2010）、東北大学東北アジア研究センター共同研究員（2010）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員（2010）、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員（2010）、国立民族学博物館若手共同研究員（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2011）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2012）、Research Associate of the Museum of Northern Arizona Research Associate（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）、東北大学大学院文学研究科非常勤講師（2019）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 2011）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）**【専攻・専門】**社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学 **【所属学会】**日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association、デジタルアーカイブ学会

【主要業績】

［編著］

伊藤敦規、キャシー・ドーハーティ、ケレイ・ハイズ＝ギルピン編

2020 『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧――ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4）大阪：国立民族学博物館。［査読有］

Ito, A., C. Lomahaftewa, and C. Colwell（eds.）

2021 *Collections Review on 38 Silverworks Labeled "Hopi" in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5*（Info-Forum Museum Resources 5）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［論文］

Hays-Gilpin, K., A. Ito, and R. Breunig

2020 Decolonizing Museum Catalogs: Defining and Exploring the Problem（Special Theme: An Approach of the Info-Forum Museum: To Create a Source Community-driven Multivocal Museum Catalog）. *TRAJECTORIA* 1. Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

2020 地域研究コンソーシアム賞（研究企画賞部門）（地域研究コンソーシアム（JCAS））

2019 デジタルアーカイブ学会優秀学会発表賞（デジタルアーカイブ学会）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は五年計画（2016～2020年度）で実施する。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されうる協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、調査対象機関を、松永はきもの資料館（広島）、柏木博物館（長野）、豊島みみずく資料館（東京）、猪熊源一郎現代美術館（香川）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）などとする。また、資料調査対象とする民族集団はホピを中心とする。

五年度となる2020年度の計画の概要は以下である。

引き続き日本国内での博物館調査研究を進める。現在リニューアルオープンに向けて休館中の柏木博物館（長野県）の受入体制が整い次第、収蔵資料の撮影を行う。成果出版に関しては、これまでに実施してきた資料熟覧の記録をまとめ、国立民族学博物館の刊行物としての成果公開を継続して行うとともに、ソースコミュニティ

との共有を図る。

・成果

五年計画で行ってきた本研究は本年度で最終年を迎えた。第一の目的であったアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況は、当初想定していた松永はきもの資料館（広島）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）に加え、米国と英国の複数の機関に関しても、収蔵している「ホピ製」資料の一部についての情報を把握することができた。第二の目的であったソースコミュニティの人々との博物館資料情報の共有は、収蔵機関での触察や、保留地での画像データを用いたデジタル熟覧という形式で行った。また、ソースコミュニティの人々による熟覧の記録を整え、紙媒体およびデジタル映像として共有を図った。第三の目的であったソースコミュニティの人々からの要望を収蔵機関にフィードバックすることに関しては、例えば国立民族学博物館ではカルチュラルセンシティビティに該当すると指摘された資料について収蔵庫で他の資料と別置したり、デジタル映像アーカイブで当該資料の画像や熟覧時の映像や発言の一部を非公開にするなどの措置を講じた。また、著作物とみなされうる資料に関しては、知的財産権問題を専門とする複数の弁護士の見解を反映させながら機関内の関係部署等に適法な扱いをするよう継続的に働きかけることで、従来の資料公開等のやり方に再考をせまり、特に著作物としての民族誌資料を公衆送信する際の民博の新たな制度設計にあたって部分的に貢献した。

共編著（フォーラム型情報ミュージアム資料集５）を刊行した。民博本館展示場（アメリカ展示場「創る」、および、多機能端末室）では昨年度末に成果公開を果たしたものの、新型コロナウイルス感染症対策として休館・入室禁止が継続していたため、入館制限が解除された本年度になって初めてそれらを一般公開した。その結果も含め、2020年度の地域研究コンソーシアム賞（研究企画賞部門）を受賞した。ソースコミュニティの人々との共有に関しては、2020年４月から2021年３月末現在まで、日本郵便は米国本土宛のEMS発送サービスを止めている。今後のサービスの再開の見通しも立たないため、一部は運送期間６ヶ月ほどの船便で発送した。リニューアルオープンに向けて休館中の柏木博物館（長野県）の受入体制は本年度中に整わなかったので、収蔵資料の撮影は行えなかった。野外民族博物館リトルワールド（愛知）での補足調査も新型コロナウイルス感染症対策のため実施せず、次年度に延期することにした。

◎出版物による業績

［編著］

Ito, A., C. Lomahaftewa, and C. Colwell（eds.）

2021 *Collections Review on 38 Silverworks Labeled "Hopi" in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5*（Info-Forum Museum Resources 5）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［論文］

伊藤敦規

2021 本著の概要（ソースコミュニティと博物館資料との「再会」5）. In A. Ito, C. Lomahaftewa, and C. Colwell（eds.）*Collections Review on 38 Silverworks Labeled "Hopi" in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5*（Info-Forum Museum Resources 5）, pp. 9–13. Osaka: National Museum of Ethnology.

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, K. Yoshida, I. Hayashi, and T. Iida

2020 International Symposium 'Future of the Museum: An Anthropological Perspective'. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 115–176.［査読有］

Ito, A.

2021 Brief Overview of this Volume（Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5）. In A. Ito, C. Lomahaftewa, and C. Colwell（eds.）*Collections Review on 38 Silverworks Labeled "Hopi" in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5*（Info-Forum Museum Resources 5）, pp.1–7. Osaka: National Museum of Ethnology.

［その他］

伊藤敦規

2020 「オンライン展示の条件」『月刊みんぱく』44(5)：16–17。

◎映像音響メディアによる業績

・その他、映像メディアによる業績（論文型映像を含む）

Ito, A.（Supervision）

2021 “#001 Museum of Northern Arizona, E11625, 2015/7/21.”（英語・日本語、15:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=601）.

2021 “#002 Museum of Northern Arizona, E11071, 2015/7/21.”（英語・日本語、09:39）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=602）.

2021 “#003 Museum of Northern Arizona, E11294, 2015/7/21.”（英語・日本語、08:59）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=603）.

2021 “#004 Museum of Northern Arizona, E11284, 2015/7/21.”（英語・日本語、14:20）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=604）.

2021 “#005 Museum of Northern Arizona, E11367, 2015/7/21.”（英語・日本語、13:05）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=605）.

2021 “#006 Museum of Northern Arizona, E10385, 2015/7/21.”（英語・日本語、16:06）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=606）.

2021 “#007 Museum of Northern Arizona, E11373, 2015/7/21.”（英語・日本語、11:32）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=607）.

2021 “#008 Museum of Northern Arizona, E5956, 2015/7/21.”（英語・日本語、16:20）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=608）.

2021 “#009 Museum of Northern Arizona, E3348, 2015/7/21.”（英語・日本語、13:21）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=609）.

2021 “#010 Museum of Northern Arizona, E1388, 2015/7/21.”（英語・日本語、17:50）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=610）.

2021 “#011 Museum of Northern Arizona, E1383, 2015/7/21.”（英語・日本語、12:07）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=611）.

2021 “#012 Museum of Northern Arizona, E11301, E11302, E11303, E11304A-B 2015/7/21.”（英語・日本語、17:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=612）.

2021 “#013 Museum of Northern Arizona, E9866 2015/7/21.”（英語・日本語、12:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=616）.

2021 “#014 Museum of Northern Arizona, E10157 2015/7/21.”（英語・日本語、14:27）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=617）.

2021 “#015 Museum of Northern Arizona, E9867 2015/7/22.”（英語・日本語、10:30）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=618）.

2021 “#016 Museum of Northern Arizona, E5111 2015/7/22.”（英語・日本語、12:12）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=619）.

2021 “#017 Museum of Northern Arizona, E11380 2015/7/22.”（英語・日本語、16:15）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=620）.

2021 “#018 Museum of Northern Arizona, Silversmith kit（75 pieces）E5794, E5796, E5797, E5798, E5799, E5800, E5801, E5802, E5803, E5804, E5805, E5806, E5807, E5808, E5809, E5810, E5811, E5812, E5813, E5814, E5815, E5816, E5817, E5818, E5819, E5820, E5821, E5822, E5823, E5824, E5825, E5826, E5827, E5828, E5829, E5830, E5831, E5832, E5833, E5834, E5835a-c, E5836A-C, E5837 A-dd. 2015/7/22.”（英語・日本語、14:54）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=621）.

2021 “#019 Museum of Northern Arizona, E5109 2015/7/22.”（英語・日本語、09:25）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=664）.

2021 “#020 Museum of Northern Arizona, E2959 2015/7/22.”（英語・日本語、14:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=665）.

2021 “#021 Museum of Northern Arizona, E1490 2015/7/22.”（英語・日本語、11:15）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=666）.

2021 “#022 Museum of Northern Arizona, E11366 2015/7/22.”（英語・日本語、15:34）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=667）.

2021 “#023 Museum of Northern Arizona, E3482 2015/7/22.”（英語・日本語、10:54）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=668）.

2021 “#024 Museum of Northern Arizona, E1514 2015/7/22.”（英語・日本語、12:23）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=669）.

2021 “#025 Museum of Northern Arizona, E5101 2015/7/22.”（英語・日本語、10:42）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=670）.

2021 “#026 Museum of Northern Arizona, E5372 2015/7/22.”（英語・日本語、09:43）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=671）.

2021 “#027 Museum of Northern Arizona, E11359 2015/7/22.”（英語・日本語、14:13）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=672）.

2021 “#028 Museum of Northern Arizona, E8041 2015/7/22.”（英語・日本語、14:44）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=673）.

2021 “#029 Museum of Northern Arizona, E6010 2015/7/22.”（英語・日本語、08:08）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=674）.

2021 “#030 Museum of Northern Arizona, E3346 2015/7/22.”（英語・日本語、08:25）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=675）.

2021 “#031 Museum of Northern Arizona, E11277, 2015/7/22.”（英語・日本語、14:47）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=676）.

2021 “#032 Museum of Northern Arizona, E5960, 2015/7/22.”（英語・日本語、09:05）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=677）.

2021 “#033 Museum of Northern Arizona, E11060, 2015/7/22.”（英語・日本語、14:04）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=678）.

2021 “#034 Museum of Northern Arizona, E8999A-B, 2015/7/22.”（英語・日本語、09:26）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=679）.

2021 “#035 Museum of Northern Arizona, E11624, 2015/7/22.”（英語・日本語、10:28）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=680）.

2021 “#036 Museum of Northern Arizona, E3469, 2015/7/22.”（英語・日本語、12:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=681）.

2021 “#037 Museum of Northern Arizona, E11330, 2015/7/22.”（英語・日本語、28:46）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=682）.

2021 “#038 Museum of Northern Arizona, E960, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:05）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=683）.

2021 “#039 Museum of Northern Arizona, E1398, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:47）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=684）.

2021 “#040 Museum of Northern Arizona, E2213, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:30）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=685）.

2021 “#041 Museum of Northern Arizona, E2955, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:06）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=686）.

2021 “#042 Museum of Northern Arizona, E2956, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:09）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=687）.

2021 “#043 Museum of Northern Arizona, E2957, 2015/7/23.”（英語・日本語、06:11）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=688）.

2021 “#044 Museum of Northern Arizona, E3062, 2015/7/23.”（英語・日本語、02:23）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=689）.

2021 “#045 Museum of Northern Arizona, E3063, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:51）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=690）.

2021 “#046 Museum of Northern Arizona, E3064, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:44）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=691）.

2021 “#047 Museum of Northern Arizona, E3553, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:38）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=692）.

2021 “#048 Museum of Northern Arizona, E5441, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:54）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=693）.

2021 “#049 Museum of Northern Arizona, E5766, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:36）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=694）.

2021 “#050 Museum of Northern Arizona, E5771, 2015/7/23.”（英語・日本語、07:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=695）.

2021 “#051 Museum of Northern Arizona, E5958, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:13）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=696）.

2021 “#052 Museum of Northern Arizona, E6122, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:09）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=697）.

2021 “#053 Museum of Northern Arizona, E6403, 2015/7/23.”（英語・日本語、06:09）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=698）.

2021 “#054 Museum of Northern Arizona, E7197, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:05）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=699）.

2021 “#055 Museum of Northern Arizona, E7386, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:35）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=700）.

2021 “#056 Museum of Northern Arizona, E8426, 2015/7/23.”（英語・日本語、02:30）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=701）.

2021 “#057 Museum of Northern Arizona, E9880, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=702）.

2021 “#058 Museum of Northern Arizona, E10250A-C, 2015/7/23.”（英語・日本語、06:51）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=703）.

2021 “#059 Museum of Northern Arizona, E10251, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:28）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=706）.

2021 “#060 Museum of Northern Arizona, E10265, 2015/7/23.”（英語・日本語、07:37）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=707）.

2021 “#061 Museum of Northern Arizona, E10276, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:56）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=708）.

2021 “#062 Museum of Northern Arizona, E10280, 2015/7/23.”（英語・日本語、02:34）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=709）.

2021 “#063 Museum of Northern Arizona, E10393, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:34）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=710）.

2021 “#064 Museum of Northern Arizona, E10433, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:42）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=711）.

2021 “#065 Museum of Northern Arizona, E11058, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:49）RECONNECT-

ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=712）.
2021 “#066 Museum of Northern Arizona, E5770, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:53）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=713）.
2021 “#067 Museum of Northern Arizona, E1513, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:59）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=714）.
2021 “#068 Museum of Northern Arizona, E11059, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:39）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=715）.
2021 “#069 Museum of Northern Arizona, E11326, 2015/7/23.”（英語・日本語、08:12）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=716）.
2021 “#070 Museum of Northern Arizona, E11310, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:39）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=717）.
2021 “#071 Museum of Northern Arizona, E11320A-B, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:33）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=718）.
2021 “#072 Museum of Northern Arizona, E11289, 2015/7/23.”（英語・日本語、07:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=719）.
2021 “#073 Museum of Northern Arizona, E11323A-B, 2015/7/23.”（英語・日本語、07:27）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=720）.
2021 “#074 Museum of Northern Arizona, E11305, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:26）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=721）.
2021 “#075 Museum of Northern Arizona, E11279, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:18）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=722）.
2021 “#076 Museum of Northern Arizona, E8230A-B, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:16）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=723）.
2021 “#077 Museum of Northern Arizona, E11061, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:11）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=724）.
2021 “#078 Museum of Northern Arizona, E6402, 2015/7/23.”（英語・日本語、07:21）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=725）.
2021 “#079 Museum of Northern Arizona, E8620, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:43）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=726）.
2021 “#080 Museum of Northern Arizona, E2961, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=727）.
2021 “#081 Museum of Northern Arizona, E11293, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:55）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=728）.

2021 “#082 Museum of Northern Arizona, E6124, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:59）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=729）.

2021 “#083 Museum of Northern Arizona, E9850, 2015/7/23.”（英語・日本語、05:51）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=730）.

2021 “#084 Museum of Northern Arizona, E11063, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=731）.

2021 “#085 Museum of Northern Arizona, E11057, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:20）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=732）.

2021 “#086 Museum of Northern Arizona, E11319, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=733）.

2021 “#087 Museum of Northern Arizona, E11321A-B, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:20）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=734）.

2021 “#088 Museum of Northern Arizona, E11338, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:23）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料 との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=735）.

2021 “#089 Museum of Northern Arizona, E11379, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:09）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=736）.

2021 “#090 Museum of Northern Arizona, E11053, 2015/7/23.”（英語・日本語、04:59）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=737）.

2021 “#091 Museum of Northern Arizona, E11288, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=738）.

2021 “#092 Museum of Northern Arizona, E6390, 2015/7/23.”（英語・日本語、03:45）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=739）.

2021 “#093 Museum of Northern Arizona, E1186, 2015/7/24.”（英語・日本語、06:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=740）.

2021 “#094 Museum of Northern Arizona, E8801, 2015/7/24.”（英語・日本語、04:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=741）.

2021 “#095 Museum of Northern Arizona, E5439, 2015/7/24.”（英語・日本語、05:34）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=742）.

2021 “#096 Museum of Northern Arizona, E5105, 2015/7/24.”（英語・日本語、03:44）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=743）.

2021 “#097 Museum of Northern Arizona, E11336, 2015/7/24.”（英語・日本語、07:40）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=744）.

2021 “#098 Museum of Northern Arizona, E4174, 2015/7/24.”（英語・日本語、19:57）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=745).
2021 "#099 Museum of Northern Arizona, E3710, 2015/7/24."(英語・日本語、03:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=746).
2021 "#100 Museum of Northern Arizona, E11633A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、04:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=747).
2021 "#101 Museum of Northern Arizona, E5440, 2015/7/24."(英語・日本語、13:21) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=748).
2021 "#102 Museum of Northern Arizona, E11658A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、03:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=749).
2021 "#103 Museum of Northern Arizona, E6127, 2015/7/24."(英語・日本語、06:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=750).
2021 "#104 Museum of Northern Arizona, E2379A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、04:05) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=751).
2021 "#105 Museum of Northern Arizona, E13491, 2015/7/24."(英語・日本語、06:18) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=752).
2021 "#106 Museum of Northern Arizona, E13509, 2015/7/24."(英語・日本語、07:26) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=753).
2021 "#107 Museum of Northern Arizona, E13502, 2015/7/24."(英語・日本語、04:23) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=754).
2021 "#108 Museum of Northern Arizona, E13507, 2015/7/24."(英語・日本語、10:39) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=755).
2021 "#109 Museum of Northern Arizona, E13493, 2015/7/24."(英語・日本語、05:17) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=756).
2021 "#110 Museum of Northern Arizona, E11378, 2015/7/24."(英語・日本語、05:36) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=757).
2021 "#111 Museum of Northern Arizona, E11365, 2015/7/24."(英語・日本語、02:44) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=758).
2021 "#112 Museum of Northern Arizona, E11329, 2015/7/24."(英語・日本語、06:12) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=759).
2021 "#113 Museum of Northern Arizona, E9849, 2015/7/24."(英語・日本語、03:47) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=760).
2021 "#114 Museum of Northern Arizona, E11823, 2015/7/24."(英語・日本語、04:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=761).
2021 "#115 Museum of Northern Arizona, E6126A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、07:23) RECON-

NECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=762).

2021 "#116 Museum of Northern Arizona, E11076A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、04:37) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=763).

2021 "#117 Museum of Northern Arizona, E11295A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、04:39) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=764).

2021 "#118 Museum of Northern Arizona, E11287A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、03:41) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=765).

2021 "#119 Museum of Northern Arizona, E4175, 2015/7/24."(英語・日本語、04:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=766).

2021 "#120 Museum of Northern Arizona, E2616A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、06:45) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=767).

2021 "#121 Museum of Northern Arizona, E11887, 2015/7/24."(英語・日本語、07:14) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=768).

2021 "#122 Museum of Northern Arizona, E11066A-B, 2015/7/24."(英語・日本語、03:51) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=769).

2021 "#123 Museum of Northern Arizona, E1944, 2015/7/24."(英語・日本語、05:57) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=770).

2021 "#124 Museum of Northern Arizona, E6187, 2015/7/24."(英語・日本語、08:49) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=771).

2021 "#125 Museum of Northern Arizona, E11596, 2015/7/24."(英語・日本語、20:06) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=772).

2021 "#126 Museum of Northern Arizona, E3710 Round2, 2015/12/09."(英語・日本語、16:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=773).

2021 "#127 Museum of Northern Arizona, E3711, 2015/12/09."(英語・日本語、12:50) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=774).

2021 "#128 Museum of Northern Arizona, E6007A-B, 2015/12/09."(英語・日本語、12:24) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=775).

2021 "#129 Museum of Northern Arizona, E5949, 2015/12/09."(英語・日本語、14:17) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=776).

2021 "#130 Museum of Northern Arizona, E3712, 2015/12/09."(英語・日本語、16:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=777).

2021 "#131 Museum of Northern Arizona, E11333, 2015/12/09."(英語・日本語、10:05) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=778).

2021 “#132 Museum of Northern Arizona, E11331, 2015/12/09.”（英語・日本語、19:34）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=779）.

2021 “#133 Museum of Northern Arizona, E11332, 2015/12/09.”（英語・日本語、08:22）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=780）.

2021 “#134 Museum of Northern Arizona, E11949A-B, 2015/12/09.”（英語・日本語、08:47）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=781）.

2021 “#135 Museum of Northern Arizona, E10379, 2015/12/09.”（英語・日本語、14:15）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=782）.

2021 “#136 Museum of Northern Arizona, E13489, 2015/12/09.”（英語・日本語、22:14）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=783）.

2021 “#137 Museum of Northern Arizona, E11374A-B, 2015/12/10.”（英語・日本語、17:47）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=784）.

2021 “#138 Museum of Northern Arizona, E11660, 2015/12/10.”（英語・日本語、12:32）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=785）.

2021 “#139 Museum of Northern Arizona, E11286A-B, 2015/12/10.”（英語・日本語、14:27）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=786）.

2021 “#140 Museum of Northern Arizona, E5842, 2015/12/10.”（英語・日本語、11:30）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=787）.

2021 “#141 Museum of Northern Arizona, E8236A, 2015/12/10.”（英語・日本語、08:35）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=788）.

2021 “#142 Museum of Northern Arizona, E5967, 2015/12/10.”（英語・日本語、12:03）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=789）.

2021 “#143 Museum of Northern Arizona, E2380A-B, 2015/12/10.”（英語・日本語、13:59）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=790）.

2021 “#144 Museum of Northern Arizona, E961, 2015/12/11.”（英語・日本語、08:58）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=791）.

2021 “#145 Museum of Northern Arizona, E1389, 2015/12/11.”（英語・日本語、07:49）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=792）.

2021 “#146 Museum of Northern Arizona, E1390, 2015/12/11.”（英語・日本語、08:09）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=793）.

2021 “#147 Museum of Northern Arizona, E5477A-F, 2015/12/11.”（英語・日本語、09:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=794）.

2021 “#148 Museum of Northern Arizona, E3385A-B, 2015/12/11.”（英語・日本語、14:24）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との

「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=795）.

2021 “#149 Museum of Northern Arizona, E6268 and E6269, 2015/12/11.”（英語・日本語、08:46）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=796）.

2021 “#150 Museum of Northern Arizona, E6413, 2015/12/11.”（英語・日本語、07:55）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=798）.

2021 “#151 Museum of Northern Arizona, E7556, 2015/12/11.”（英語・日本語、08:10）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=799）.

2021 “#152 Museum of Northern Arizona, E7557, 2015/12/11.”（英語・日本語、07:10）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=800）.

2021 “#153 Museum of Northern Arizona, E7597, 2015/12/11.”（英語・日本語、10:06）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=801）.

2021 “#154 Museum of Northern Arizona, E7768, 2015/12/11.”（英語・日本語、09:11）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=802）.

2021 “#155 Museum of Northern Arizona, E7766, 2015/12/11.”（英語・日本語、06:57）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=803）.

2021 “#156 Museum of Northern Arizona, E1386, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:51）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=804）.

2021 “#157 Museum of Northern Arizona, E1391, 2015/12/14.”（英語・日本語、03:54）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=805）.

2021 “#158 Museum of Northern Arizona, E1392, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=806）.

2021 “#159 Museum of Northern Arizona, E1397, 2015/12/14.”（英語・日本語、03:34）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=807）.

2021 “#160 Museum of Northern Arizona, E1393, 2015/12/14.”（英語・日本語、03:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=808）.

2021 “#161 Museum of Northern Arizona, E1394, 2015/12/14.”（英語・日本語、01:43）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=809）.

2021 “#162 Museum of Northern Arizona, E1395, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:38）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=810）.

2021 “#163 Museum of Northern Arizona, E1396, 2015/12/14.”（英語・日本語、05:20）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=811）.

2021 “#164 Museum of Northern Arizona, E2351, 2015/12/14.”（英語・日本語、03:08）RECONNECTING Source Communities with Museum Collectionsソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=812）.

2021 “#165 Museum of Northern Arizona, E2211, 2015/12/14.”（英語・日本語、03:50）RECONNECT-

ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=813）.
2021 “#166 Museum of Northern Arizona, E2963, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=814）.
2021 “#167 Museum of Northern Arizona, E2964, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:18）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=815）.
2021 “#168 Museum of Northern Arizona, E5107, 2015/12/14.”（英語・日本語、06:09）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=816）.
2021 “#169 Museum of Northern Arizona, E5954, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:40）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=817）.
2021 “#170 Museum of Northern Arizona, E5955, 2015/12/14.”（英語・日本語、03:49）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=818）.
2021 “#171 Museum of Northern Arizona, E8680, 2015/12/14.”（英語・日本語、05:04）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=819）.
2021 “#172 Museum of Northern Arizona, E9000, 2015/12/14.”（英語・日本語、03:49）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=820）.
2021 “#173 Museum of Northern Arizona, E9001, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:58）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=821）.
2021 “#174 Museum of Northern Arizona, E9002, 2015/12/14.”（英語・日本語、04:14）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=822）.
2021 “#175 Museum of Northern Arizona, E11067, 2015/12/14.”（英語・日本語、04:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=823）.
2021 “#176 Museum of Northern Arizona, E11072, 2015/12/14.”（英語・日本語、04:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=824）.
2021 “#177 Museum of Northern Arizona, E11278, 2015/12/14.”（英語・日本語、04:16）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=825）.
2021 “#178 Museum of Northern Arizona, E11280, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:55）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=826）.
2021 “#179 Museum of Northern Arizona, E11285, 2015/12/14.”（英語・日本語、02:34）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=827）.
2021 “#180 Museum of Northern Arizona, E11311, 2015/12/14.”（英語・日本語、03:16）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=828）.
2021 “#181 Museum of Northern Arizona, E11334, 2015/12/15.”（英語・日本語、05:26）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=829）.

2021 “#182 Museum of Northern Arizona, E11335, 2015/12/15.”（英語・日本語、05:47）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=830）.

2021 “#183 Museum of Northern Arizona, E11337A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、07:00）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=831）.

2021 “#184 Museum of Northern Arizona, E11361, 2015/12/15.”（英語・日本語、07:20）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=832）.

2021 “#185 Museum of Northern Arizona, E11364A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、05:55）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=833）.

2021 “#186 Museum of Northern Arizona, E11368, 2015/12/15.”（英語・日本語、08:06）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=834）.

2021 “#187 Museum of Northern Arizona, E2962A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、06:49）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=835）.

2021 “#188 Museum of Northern Arizona, E3065, 2015/12/15.”（英語・日本語、06:31）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=836）.

2021 “#189 Museum of Northern Arizona, E3066, 2015/12/15.”（英語・日本語、06:33）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=837）.

2021 “#190 Museum of Northern Arizona, E3386A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、07:47）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=838）.

2021 “#191 Museum of Northern Arizona, E5102, 2015/12/15.”（英語・日本語、06:20）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=839）.

2021 “#192 Museum of Northern Arizona, E6392A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、24:37）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=840）.

2021 “#193 Museum of Northern Arizona, E8802A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、10:35）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=841）.

2021 “#194 Museum of Northern Arizona, E8803A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、06:09）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=842）.

2021 “#195 Museum of Northern Arizona, E11054A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、08:17）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=843）.

2021 “#196 Museum of Northern Arizona, E11055A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、07:37）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=844）.

2021 “#197 Museum of Northern Arizona, E11291A-B, 2015/12/15.”（英語・日本語、08:36）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=845）.

2021 “#198 Museum of Northern Arizona, E11369, 2015/12/15.”（英語・日本語、05:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=846).
2021 "#199 Museum of Northern Arizona, E11370, 2015/12/15."(英語・日本語、08:59) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=847).
2021 "#200 Museum of Northern Arizona, E1387, 2015/12/16."(英語・日本語、05:55) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=848).
2021 "#201 Museum of Northern Arizona, E1399, 2015/12/16."(英語・日本語、05:25) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=849).
2021 "#202 Museum of Northern Arizona, E1512, 2015/12/16."(英語・日本語、09:04) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=850).
2021 "#203 Museum of Northern Arizona, E1401, 2015/12/16."(英語・日本語、06:52) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=851).
2021 "#204 Museum of Northern Arizona, E3023, 2015/12/16."(英語・日本語、13:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=852).
2021 "#205 Museum of Northern Arizona, E3024, 2015/12/16."(英語・日本語、12:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=853).
2021 "#206 Museum of Northern Arizona, E3025, 2015/12/16."(英語・日本語、11:29) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=854).
2021 "#207 Museum of Northern Arizona, E3026, 2015/12/16."(英語・日本語、04:36) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=855).
2021 "#208 Museum of Northern Arizona, E3027, 2015/12/16."(英語・日本語、06:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=856).
2021 "#209 Museum of Northern Arizona, E3028, 2015/12/16."(英語・日本語、04:53) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=857).
2021 "#210 Museum of Northern Arizona, E3349, 2015/12/16."(英語・日本語、08:22) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=858).
2021 "#211 Museum of Northern Arizona, E5104, 2015/12/16."(英語・日本語、09:32) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=859).
2021 "#212 Museum of Northern Arizona, E5108, 2015/12/16."(英語・日本語、09:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=860).
2021 "#213 Museum of Northern Arizona, E5434, 2015/12/16."(英語・日本語、10:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=861).
2021 "#214 Museum of Northern Arizona, E5436, 2015/12/16."(英語・日本語、11:34) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=862).
2021 "#215 Museum of Northern Arizona, E5962, 2015/12/16."(英語・日本語、15:23) RECONNECT-

ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=863）.

2021 “#216 Museum of Northern Arizona, E6009, 2015/12/16.”（英語・日本語、13:14）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=864）.

2021 “#217 Museum of Northern Arizona, E6128, 2015/12/16.”（英語・日本語、05:31）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=865）.

2021 “#218 Museum of Northern Arizona, E6151, 2015/12/16.”（英語・日本語、12:08）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=866）.

2021 “#219 Museum of Northern Arizona, E6152, 2015/12/16.”（英語・日本語、04:04）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=867）.

2021 “#220 Museum of Northern Arizona, E6207, 2015/12/16.”（英語・日本語、09:35）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=868）.

2021 “#221 Museum of Northern Arizona, E6391, 2015/12/16.”（英語・日本語、05:07）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=869）.

2021 “#222 Museum of Northern Arizona, E8238, 2015/12/16.”（英語・日本語、06:40）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=870）.

2021 “#223 Museum of Northern Arizona, E8409, 2015/12/16.”（英語・日本語、07:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=871）.

2021 “#224 Museum of Northern Arizona, E8532, 2015/12/16.”（英語・日本語、04:29）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=872）.

2021 “#225 Museum of Northern Arizona, E8800, 2015/12/16.”（英語・日本語、06:32）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=873）.

2021 “#226 Museum of Northern Arizona, E11056, 2015/12/16.”（英語・日本語、04:31）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=874）.

2021 “#227 Museum of Northern Arizona, E5959, 2015/12/16.”（英語・日本語、18:59）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=875）.

2021 “#228 Museum of Northern Arizona, E3045, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=876）.

2021 “#229 Museum of Northern Arizona, E3363, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:31）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=877）.

2021 “#230 Museum of Northern Arizona, E7549, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:35）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=878）.

2021 “#231 Museum of Northern Arizona, E7550, 2015/12/17.”（英語・日本語、03:46）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=879）.

2021 “#232 Museum of Northern Arizona, E7551, 2015/12/17.”（英語・日本語、03:33）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=880）.

2021 “#233 Museum of Northern Arizona, E7552, 2015/12/17.”（英語・日本語、04:36）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=881）.

2021 “#234 Museum of Northern Arizona, E7553, 2015/12/17.”（英語・日本語、03:53）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=882）.

2021 “#235 Museum of Northern Arizona, E7554, 2015/12/17.”（英語・日本語、03:30）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=883）.

2021 “#236 Museum of Northern Arizona, E7555, 2015/12/17.”（英語・日本語、04:28）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=884）.

2021 “#237 Museum of Northern Arizona, E8826, 2015/12/17.”（英語・日本語、17:45）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=885）.

2021 “#238 Museum of Northern Arizona, E10252, 2015/12/17.”（英語・日本語、08:10）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=886）.

2021 “#239 Museum of Northern Arizona, E10648, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=887）.

2021 “#240 Museum of Northern Arizona, E10649, 2015/12/17.”（英語・日本語、07:00）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=888）.

2021 “#241 Museum of Northern Arizona, E11065, 2015/12/17.”（英語・日本語、05:14）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=889）.

2021 “#242 Museum of Northern Arizona, E11068A-B, 2015/12/17.”（英語・日本語、10:45）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=890）.

2021 “#243 Museum of Northern Arizona, E11069, 2015/12/17.”（英語・日本語、04:57）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=891）.

2021 “#244 Museum of Northern Arizona, E11070, 2015/12/17.”（英語・日本語、04:34）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=892）.

2021 “#245 Museum of Northern Arizona, E11073A-B, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:31）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=893）.

2021 “#246 Museum of Northern Arizona, E11074, 2015/12/17.”（英語・日本語、07:13）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=894）.

2021 “#247 Museum of Northern Arizona, E11075, 2015/12/17.”（英語・日本語、03:43）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=895）.

2021 “#248 Museum of Northern Arizona, E11281, 2015/12/17.”（英語・日本語、05:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=896）.

2021 “#249 Museum of Northern Arizona, E11283, 2015/12/17.”（英語・日本語、05:26）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=897）.

2021 “#250 Museum of Northern Arizona, E11282, 2015/12/17.”（英語・日本語、04:01）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=898）.

2021 “#251 Museum of Northern Arizona, E11290, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:24）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=899）.

2021 “#252 Museum of Northern Arizona, E11292A-B, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:04）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=900）.

2021 “#253 Museum of Northern Arizona, E11324A-B, 2015/12/17.”（英語・日本語、08:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=901）.

2021 “#254 Museum of Northern Arizona, E11325A-B, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:49）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=902）.

2021 “#255 Museum of Northern Arizona, E11327, 2015/12/17.”（英語・日本語、05:39）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=903）.

2021 “#256 Museum of Northern Arizona, E11328, 2015/12/17.”（英語・日本語、09:37）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=904）.

2021 “#257 Museum of Northern Arizona, E11360, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:18）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=905）.

2021 “#258 Museum of Northern Arizona, E11362, 2015/12/17.”（英語・日本語、03:49）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=906）.

2021 “#259 Museum of Northern Arizona, E11372, 2015/12/17.”（英語・日本語、03:24）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=907）.

2021 “#260 Museum of Northern Arizona, E11371, 2015/12/17.”（英語・日本語、05:06）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=908）.

2021 “#261 Museum of Northern Arizona, E11377A-B, 2015/12/17.”（英語・日本語、05:07）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=909）.

2021 “#262 Museum of Northern Arizona, E11381, 2015/12/17.”（英語・日本語、08:27）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=910）.

2021 “#263 Museum of Northern Arizona, E11444, 2015/12/17.”（英語・日本語、04:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=911）.

2021 “#264 Museum of Northern Arizona, E11557, 2015/12/17.”（英語・日本語、07:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=912）.

2021 “#265 Museum of Northern Arizona, E11296, 2015/12/17.”（英語・日本語、04:48）RECONNECT-

ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=913）.

2021 “#266 Museum of Northern Arizona, E11560, 2015/12/17.”（英語・日本語、06:48）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=914）.

2021 “#267 Museum of Northern Arizona, E11375A-B, 2015/12/17.”（英語・日本語、04:43）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料 との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=915）.

2021 “#268 Museum of Northern Arizona, E11376A-B, 2015/12/17.”（英語・日本語、03:57）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=916）.

2021 “#269 Museum of Northern Arizona, E13368, 2015/12/18.”（英語・日本語、04:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=917）.

2021 “#270 Museum of Northern Arizona, E13490, 2015/12/18.”（英語・日本語、04:51）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=918）.

2021 “#271 Museum of Northern Arizona, E13492, 2015/12/18.”（英語・日本語、06:30）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=919）.

2021 “#272 Museum of Northern Arizona, E13494, 2015/12/18.”（英語・日本語、02:58）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=920）.

2021 “#273 Museum of Northern Arizona, E13495, 2015/12/18.”（英語・日本語、02:55）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=921）.

2021 “#274 Museum of Northern Arizona, E13496, 2015/12/18.”（英語・日本語、04:30）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=922）.

2021 “#275 Museum of Northern Arizona, E13497, 2015/12/18.”（英語・日本語、04:17）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=923）.

2021 “#276 Museum of Northern Arizona, E13498, 2015/12/18.”（英語・日本語、07:42）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=924）.

2021 “#277 Museum of Northern Arizona, E13501, 2015/12/18.”（英語・日本語、07:07）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=925）.

2021 “#278 Museum of Northern Arizona, E13503, 2015/12/18.”（英語・日本語、06:13）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=926）.

2021 “#279 Museum of Northern Arizona, E13504, 2015/12/18.”（英語・日本語、07:53）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=927）.

2021 “#280 Museum of Northern Arizona, E13505, 2015/12/18.”（英語・日本語、05:07）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=928）.

2021 “#281 Museum of Northern Arizona, E13506, 2015/12/18.”（英語・日本語、06:59）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=929）.

2021 “#282 Museum of Northern Arizona, E13508, 2015/12/18.”（英語・日本語、06:10）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=930）.

2021 “#283 Museum of Northern Arizona, E13675A-J, 2015/12/18.”（英語・日本語、06:51）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=931）.

2021 “#284 Museum of Northern Arizona, E13676A-B, 2015/12/18.”（英語・日本語、07:11）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=932）.

2021 “#285 Museum of Northern Arizona, E11684A-B, 2015/12/18.”（英語・日本語、08:09）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=933）.

2021 “#286 Museum of Northern Arizona, E13678, 2015/12/18.”（英語・日本語、08:49）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=934）.

2021 “#287 Museum of Northern Arizona, E13499, 2015/12/18.”（英語・日本語、02:03）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=935）.

2021 “#288 Museum of Northern Arizona, E13500, 2015/12/18.”（英語・日本語、07:28）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=936）.

2021 “#289 Museum of Northern Arizona, E11719, 2015/12/18.”（英語・日本語、03:57）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=937）.

2021 “#290 Museum of Northern Arizona, E11730, 2015/12/18.”（英語・日本語、03:30）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=938）.

2021 “#291 Museum of Northern Arizona, E11741, 2015/12/18.”（英語・日本語、03:41）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=939）.

2021 “#292 Museum of Northern Arizona, E11749, 2015/12/18.”（英語・日本語、01:50）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=940）.

2021 “#293 Museum of Northern Arizona, E11760A-C, 2015/12/18.”（英語・日本語、07:26）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=941）.

2021 “#294 Museum of Northern Arizona, E11761, 2015/12/18.”（英語・日本語、01:56）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=942）.

2021 “#295 Museum of Northern Arizona, E11770, 2015/12/18.”（英語・日本語、02:54）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=943）.

2021 “#296 Museum of Northern Arizona, E11770B-C, 2015/12/18.”（英語・日本語、05:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=944）.

2021 “#297 Museum of Northern Arizona, E11800, 2015/12/18.”（英語・日本語、05:43）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=945）.

2021 “#298 Museum of Northern Arizona, E11842, 2015/12/18.”（英語・日本語、04:45）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=946).
2021 "#299 Museum of Northern Arizona, E11858, 2015/12/18." (英語・日本語、03:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=947).
2021 "#300 Museum of Northern Arizona, E13679, 2015/12/18." (英語・日本語、06:14) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=948).
2021 "#301 Museum of Northern Arizona, E13511A-B, 2015/12/18." (英語・日本語、04:50) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=949).
2021 "#302 Museum of Northern Arizona, E13680A-B, 2015/12/18." (英語・日本語、09:13) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=950).
2021 "#303 Museum of Northern Arizona, E13510, 2015/12/18." (英語・日本語、09:48) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=951).
2021 "#304 Museum of Northern Arizona, E11950, 2015/12/18." (英語・日本語、04:03) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=952).
2021 "#305 Museum of Northern Arizona, E11953, 2015/12/18." (英語・日本語、07:53) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=953).
2021 "#306 Museum of Northern Arizona, E11972, 2015/12/18." (英語・日本語、03:02) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=954).
2021 "#307 Museum of Northern Arizona, E13677, 2015/12/18." (英語・日本語、05:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=955).
2021 "#308 Museum of Northern Arizona, E1910, 2015/12/18." (英語・日本語、02:19) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=956).
2021 "#309 Museum of Northern Arizona, E1381, 2015/12/21." (英語・日本語、05:08) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=957).
2021 "#310 Museum of Northern Arizona, E1382, 2015/12/21." (英語・日本語、02:56) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=958).
2021 "#311 Museum of Northern Arizona, E1384, 2015/12/21." (英語・日本語、03:09) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=959).
2021 "#312 Museum of Northern Arizona, E1385, 2015/12/21." (英語・日本語、03:38) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=960).
2021 "#313 Museum of Northern Arizona, E1400, 2015/12/21." (英語・日本語、03:29) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=961).
2021 "#314 Museum of Northern Arizona, E2612, 2015/12/21." (英語・日本語、06:00) RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=962).
2021 "#315 Museum of Northern Arizona, E2951, 2015/12/21." (英語・日本語、05:57) RECONNECT-

ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=963）.

2021 “#316 Museum of Northern Arizona, E2958, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:13）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=964）.

2021 “#317 Museum of Northern Arizona, E2960, 2015/12/21.”（英語・日本語、07:01）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=965）.

2021 “#318 Museum of Northern Arizona, E3256A-B, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:14）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=966）.

2021 “#319 Museum of Northern Arizona, E3347, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:38）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=967）.

2021 “#320 Museum of Northern Arizona, E3387, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:44）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=968）.

2021 “#321 Museum of Northern Arizona, E3481, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:42）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=969）.

2021 “#322 Museum of Northern Arizona, E3709, 2015/12/21.”（英語・日本語、04:50）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=970）.

2021 “#323 Museum of Northern Arizona, E4150, 2015/12/21.”（英語・日本語、04:13）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=971）.

2021 “#324 Museum of Northern Arizona, E5103, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:23）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=972）.

2021 “#325 Museum of Northern Arizona, E5106, 2015/12/21.”（英語・日本語、01:43）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=973）.

2021 “#326 Museum of Northern Arizona, E5110, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:59）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=974）.

2021 “#327 Museum of Northern Arizona, E5373A-B, 2015/12/21.”（英語・日本語、05:33）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=975）.

2021 “#328 Museum of Northern Arizona, E5435, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:01）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=976）.

2021 “#329 Museum of Northern Arizona, E5765, 2015/12/21.”（英語・日本語、04:15）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=977）.

2021 “#330 Museum of Northern Arizona, E5767, 2015/12/21.”（英語・日本語、06:26）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=978）.

2021 “#331 Museum of Northern Arizona, E5873, 2015/12/21.”（英語・日本語、05:08）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=979）.

2021 “#332 Museum of Northern Arizona, E5953, 2015/12/21.”（英語・日本語、04:53）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=980）.

2021 “#333 Museum of Northern Arizona, E5957, 2015/12/21.”（英語・日本語、04:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=981）.

2021 “#334 Museum of Northern Arizona, E5961, 2015/12/21.”（英語・日本語、04:57）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=982）.

2021 “#335 Museum of Northern Arizona, E6006, 2015/12/21.”（英語・日本語、04:50）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=983）.

2021 “#336 Museum of Northern Arizona, E6123, 2015/12/21.”（英語・日本語、06:32）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=984）.

2021 “#337 Museum of Northern Arizona, E6125, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:12）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=985）.

2021 “#338 Museum of Northern Arizona, E6188, E6189, E6190A-B, 2015/12/21.”（英語・日本語、07:13）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=986）.

2021 “#339 Museum of Northern Arizona, E6191A-B, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=989）.

2021 “#340 Museum of Northern Arizona, E6198, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=990）.

2021 “#341 Museum of Northern Arizona, E6205, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:35）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=991）.

2021 “#342 Museum of Northern Arizona, E6258, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:07）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=992）.

2021 “#343 Museum of Northern Arizona, E6401, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:03）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=993）.

2021 “#344 Museum of Northern Arizona, E7014A-B, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:06）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=994）.

2021 “#345 Museum of Northern Arizona, E7596, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:15）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=995）.

2021 “#346 Museum of Northern Arizona, E8084, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=996）.

2021 “#347 Museum of Northern Arizona, E8183, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:55）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=997）.

2021 “#348 Museum of Northern Arizona, E8234, 2015/12/21.”（英語・日本語、04:54）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」

（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=998）.

2021 “#349 Museum of Northern Arizona, E8235, 2015/12/21.”（英語・日本語、06:46）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=999）.

2021 “#350 Museum of Northern Arizona, E8371, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:20）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1000）.

2021 “#351 Museum of Northern Arizona, E8425, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:14）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1001）.

2021 “#352 Museum of Northern Arizona, E8427, 2015/12/21.”（英語・日本語、01:04）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1002）.

2021 “#353 Museum of Northern Arizona, E8493, 2015/12/21.”（英語・日本語、06:32）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1003）.

2021 “#354 Museum of Northern Arizona, E8534, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:19）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1004）.

2021 “#355 Museum of Northern Arizona, E8678, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:54）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1005）.

2021 “#356 Museum of Northern Arizona, E8679, 2015/12/21.”（英語・日本語、03:40）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1006）.

2021 “#357 Museum of Northern Arizona, E8754, 2015/12/21.”（英語・日本語、02:45）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1007）.

2021 “#358 Museum of Northern Arizona, E8992, 2015/12/21.”（英語・日本語、01:47）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1008）.

2021 “#359 Museum of Northern Arizona, E11685, 2015/12/21.”（英語・日本語、07:02）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1009）.

2021 “#360 Museum of Northern Arizona, E13782, 2018/11/13.”（英語・日本語、05:58）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1010）.

2021 “#361 Museum of Northern Arizona, E13781, 2018/11/13.”（英語・日本語、02:56）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1011）.

2021 “#362 Museum of Northern Arizona, E13783A-B, 2018/11/13.”（英語・日本語、02:35）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1012）.

2021 “#363 Museum of Northern Arizona, E13778, 2018/11/13.”（英語・日本語、03:52）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1013）.

2021 “#364 Museum of Northern Arizona, E13779, 2018/11/13.”（英語・日本語、02:25）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1014）.

2021 “#365 Museum of Northern Arizona, E13785, 2018/11/13.”（英語・日本語、02:50）RECONNECT-

ING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1015）.

2021 “#366 Museum of Northern Arizona, E13780, 2018/11/13.”（英語・日本語、02:38）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1016）.

2021 “#367 Museum of Northern Arizona, Gerald Lomaventema, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.”（英語・日本語、03:25）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#368 Museum of Northern Arizona, Merle Namoki, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22 and 2015/12/21.”（英語・日本語、06:29）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#369 Museum of Northern Arizona, Yvette Talaswaima, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.”（英語・日本語、01:11）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#370 Museum of Northern Arizona, Clinessia Lucas, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.”（英語・日本語、01:03）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#371 Museum of Northern Arizona, Jerolyn Honwytewa, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.”（英語・日本語、01:01）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#372 Museum of Northern Arizona, Tobias Lomayestewa, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/07/22.”（英語・日本語、01:16）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#373 Museum of Northern Arizona, Verma “Sonwai” Nequatewa, Reviewers’ Self-introduction and Remarks, 2015/12/09.”（英語・日本語、08:24）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#374 Museum of Northern Arizona, Robert Rhodes, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2019/06/23.”（英語・日本語、01:46）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#375 Museum of Northern Arizona, Jerry Honwytewa Whagado, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2015/12/18.”（英語・日本語、10:38）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “#376 Museum of Northern Arizona, Ed Kabotie, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2019/06/29.”（英語・日本語、05:21）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #01, A1351.514, 2017/01/18.”（英語・日本語、12:49）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1101）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #02, A1351.593A, 2017/01/18.”（英語・日本語、17:37）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1102）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #03, A1351.593B, 2017/01/18.”（英語・日本語、13:50）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1103）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #04, A1351.593C, 2017/01/18.”（英語・日本語、15:08）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資

料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1104).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #05, AC.5178, 2017/01/18."(英語・日本語、19:48)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1105).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #06, AC.11194, 2017/01/18."(英語・日本語、13:09)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1106).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #07, AC.11195, 2017/01/18."(英語・日本語、16:16)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1107).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #08, AC.11196, 2017/01/18."(英語・日本語、15:29)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1108).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #09, A1713.26, 2017/01/18."(英語・日本語、17:03)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1109).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #10, A921.1, 2017/01/18."(英語・日本語、15:37)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1110).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #11, AN-2010-186.12, 2017/01/18."(英語・日本語、13:59)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1111).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #12, AN-2010-186.13, 2017/01/18."(英語・日本語、11:11)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1112).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #13, A1351.155A, 2017/01/18."(英語・日本語、13:21)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1113).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #14, AN-2010-186.15, 2017/01/19."(英語・日本語、11:30)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1114).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #15, A1351.155B-J, 2017/01/19."(英語・日本語、14:20)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1115).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #16, AC.6427, 2017/01/19."(英語・日本語、09:24)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1124).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #17, AN-2010-186.14A-B, 2017/01/19."(英語・日本語、08:17)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1125).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #18, AN-2010-186.18A-B, 2017/01/19."(英語・日本語、14:52)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソース コミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1126).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #19, AN-2010-186.19A-B, 2017/01/19."(英語・日本語、11:23)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1127).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #20, AN-2010-186.20A-B, 2017/01/19."(英語・日本語、10:43)RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1128).

2021 "Denver Museum of Nature & Science, #21, AN-2010-186.21A-B, 2017/01/19."(英語・日本語、

12:47）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1129）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #22, AN-2010-186.23A-B, 2017/01/19.”（英語・日本語、11:33）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1130）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #23, A1351.406A-B, 2017/01/19.”（英語・日本語、14:38）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1131）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #24, AC.6492, 2017/01/19.”（英語・日本語、08:37）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1132）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #25, AC.8988, 2017/01/19.”（英語・日本語、11:18）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1133）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #26, AN-2010-186.16, 2017/01/19.”（英語・日本語、12:53）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1134）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #27, AN-2010-186.22, 2017/01/19.”（英語・日本語、11:26）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1135）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #28, A1351.176, 2017/01/19.”（英語・日本語、03:41）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1136）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #29, AN-2003-139.1, 2017/01/19.”（英語・日本語、08:38）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1137）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #30, AN-2010-186-17, 2017/01/19.”（英語・日本語、10:13）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/reviewDetail.html#id=1138）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #31, Gerald Lomaventema, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、03:03）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #32, Merle Namoki, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、00:43）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #33, Candice Lomahaftewa, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、02:31）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #34, Delwyn “Spyder” Tawvaya, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、02:46）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #35, Cordell Sakeva, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、02:29）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」（https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/）.

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #36, Darrin Kuwanhongva, Self-Introduction and Remarks

on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、03:04）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/).

2021 “Denver Museum of Nature & Science, #37, Yvette Talaswaima, Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project” 2017/01/19.”（英語・日本語、01:27）RECONNECTING Source Communities with Museum Collections ソースコミュニティと博物館資料との「再会」(https://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/).

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

2019年３月17日～2020年９月９日 「本館展示場アメリカ展示新構築」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年８月23日 「オンライン展示の条件――民族誌資料、著作権、公開適正化」第570回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2020年11月６日 「仕事について考えよう」茨木市立中津小学校

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

齋藤玲子［さいとう　れいこ］―― 准教授

1966年生。**【学歴】**北海道大学文学部行動科学科卒（1989）**【職歴】**北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）**【専攻・専門】**文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸 **【所属学会】**日本文化人類学会、北海道民族学会

【主要業績】

［編著］

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告131）大阪：国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶――イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

［論文］

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年――その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60, 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌおよび隣接する民族における物と人の移動と交流

・研究の目的、内容

本研究は、アイヌと隣接する地域、とくに東北地方および日本海側の北前船寄港地に残る衣類などの調査を中心に、近世後期から近現代にいたるまでの交易や人の往来の構造と変遷を明らかにすることをめざす。また、民博に所蔵されている資料のなかで、本州で収集された可能性のあるものとの比較研究をおこない、同定に努める。これは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトの国立民族学博物館拠点北東アジア地域研究のテーマに位置づけられる。現地調査が可能になれば、東北や新潟での資料調査をおこなうが、困難な場合は、文献調査と2014～2016年度および2017～2019年度に加わった科研費の調査資料を見直し、研究を進める。

・成果

本州で収集されたアイヌの衣類については、文献の収集と精読を中心に進めた。とくに、当館で所蔵する故・田中忠三郎氏の旧蔵資料のなかにアイヌの衣類・布製品とされたものが約40点含まれていることから、田中氏の著作や関連する展示図録等を集めて精読するとともに、他館が所蔵する田中氏旧蔵資料の所在確認をおこない、研究準備を進めた。津軽・下北では、和人女性がアイヌのアットゥシ（樹皮繊維製衣）に似た衣服を麻で織って製作したことや、木綿衣にもアイヌの文様に似た刺繍をしたことが記録に残されており、田中氏旧蔵資料の中には、同地で和人が製作したものが含まれている可能性が高いことがわかった。

・当館所蔵のアイヌおよび樺太先住民資料の情報の精査をおこない、フォーラム型情報ミュージアム・プロジェクトで館内公開中の「民博所蔵アイヌ民族資料データベース」の修正を進めた。また、その成果の一部を活用して、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』（2020年、思文閣出版）に「千島・樺太調査」を寄稿し、シンポジウムで発表した。

・共同研究「現代「手芸」文化に関する研究」（上羽陽子代表、2014～2017年度）の成果本、上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考　ものづくりの意味を問い直す』（2020年、フィルムアート社）に寄せたコラム「“アイヌ文様刺繍”を教える」および「座談会２　教える×伝承」が刊行された。

◎出版物による業績

［分担執筆］

齋藤玲子

2020 「“アイヌ文様刺繍”を教える」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考　ものづくりの意味を問い直す』pp.92–94，東京：フィルムアート社。

2020 「千島・樺太調査」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』pp.65–86，京都：思文閣出版。

2021 「アイヌの料理」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.632–633，東京：丸善出版。

杉本星子・新本万里子・齋藤玲子・ひろいのぶこ

2020 「座談会２　教える×伝承」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考　ものづくりの意味を問い直す』pp.99–109，東京：フィルムアート社。

［論文］

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, and K. Yoshida

2020 Panel Discussion（Research Resource: International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”）. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 170–176.［査読有］

Saito, R.

2020 Ethnography and Agency: Collaboration with the Ainu People in Museums.（Research Resource: International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”）. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 45(1): 161–169.［査読有］

［その他］

齋藤玲子

2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物① 流行病を追い払う神」『毎日新聞』５月２日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物② 茅葺きの茅とは」『毎日新聞』５月９日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物③ 樹皮から作る布」『毎日新聞』５月16日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物④ ユリ根は食料の要」『毎日新聞』５月23日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 アイヌ文化と植物⑤ 夏の年＝女の年」『毎日新聞』５月30日夕刊。

2020 「毛皮、必需品から見栄え重視？へ」『月刊みんぱく』44(8)：16–17。

2020 「データベース公開がはじまりの一歩」『民博通信 Online』2：4–５。

2020 「首飾り（タマサイ）、魚皮製衣服（カヤ）、木偶（セワ）」『2021年国立民族学博物館オリジナルカレンダー』大阪：国立民族学博物館。

2020 「博物館が伝える先住民文化」（ソフィア　京都新聞文化会議）『京都新聞』10月２日。

2020 「書評『問いかけるアイヌ・アート』」『北海道新聞』11月29日。

2020 「アイヌのテンキとそのひろがり」『月刊みんぱく』44(12)：14–15。

2021 「鳥居龍蔵が残した千島と樺太の先住民関連資料――100年後のいま、できること」『鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会」講演要旨集』pp.14–19, 徳島：徳島県立鳥居龍蔵記念博物館。

Saito, R.

2021 Motifs of Totem Poles. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 5–7.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

［ビデオテーク］

齋藤玲子 監修

2021 『民博でのカムイノミ――2016年度ミンパク オッタ カムイノミの記録』（日本語・20分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年10月31日 「アイヌ民族の植物利用――継承のいまとこれから」生き物文化誌学会例会、国立民族学博物館

2021年３月21日 「鳥居龍蔵が残した千島と樺太の先住民関連資料」鳥居龍蔵生誕150周年記念国際シンポジウム『鳥居龍蔵と現代社会』徳島県立21世紀館文化の森イベントホール

・みんぱくゼミナール

2020年10月17日 「アイヌ文学の世界――韓・日との比較」（北原モコットゥナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）と共に登壇）第503回みんぱくゼミナール

・展示

2020年10月１日～12月15日 「先住民の宝」国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年11月１日 「100年前のアイヌのくらしと現代の文化」第577回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2020年８月12日 「毎日放送（MBS）『ミント』特集『トナカイ』『ラッコ』『ノンノ』は実は『アイヌ語』『日本の民族として伝えたい』“大阪アイヌ”が思うこと』録画取材」

2020年10月27日 「講義『アイヌ民族の歴史と文化』」智辯学園中学校、国立民族学博物館講堂

2020年11月14日 「アイヌ民族とのコラボ――隣の文化を知るために」（千里コラボ大学校）千里文化センター市民実行委員会、豊中市千里文化センター

2020年11月20日 「アイヌの宝とは何か」（民博夜話）特定非営利活動法人吹田歴史文化まちづくり協会、吹田歴史文化まちづくりセンター浜屋敷

◎調査活動

・国内調査

2020年10月９日～10月10日―北海道白老町（アイヌ文化展示、およびアイヌ文化普及啓発事業に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（２人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習Ⅰ」、「地域文化学基礎演習Ⅱ」、「比較文化学基礎演習Ⅰ」、「比較文化学基礎演習Ⅱ」、テーマシリーズ講義「アイヌ民族と博物館」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」（研究代表者：寺田吉孝・福岡正太）メンバー、国立民族学博物館共同研究「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」（研究代表者：大西秀之（同志社女子大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究――人類史的視点から」（研究代表者：岸上伸啓）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用――日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築」（研究代表者：日高 薫（国立歴史民俗博物館））メンバー、人間文化研究機構

ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・その他の社会活動・館外活動

国立アイヌ民族博物館運営会議構成員、吹田市立博物館協議会委員、公益財団法人アイヌ民族文化財団評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員

丹羽典生［にわ　のりお］——准教授

【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2005）**【職歴】**法政大学経済学部教育補助員（2004）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、日本学術振興会特別研究員 PD（2005）、国立東京工業高等専門学校非常勤講師（2006）、首都大学東京非常勤講師（2006）、ハワイ大学マノア校人類学科客員研究員（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、法政大学非常勤講師（2008）、国際基督教大学非常勤講師（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）**【専攻・専門】**社会人類学、オセアニア地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

［単著］

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。［査読有］

［編著］

丹羽典生編

2020 『応援の人類学』東京：青弓社。［査読有］

2016 『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』横浜：春風社。［査読有］

【受賞歴】

2010　第 9 回オセアニア学会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学

・研究の目的、内容

本研究は、応援という視角から人類の諸文化を通文化的に比較しながら、文化人類学的に考察することを目的とする。調査手法としては、関連資料や文献の収集を中心に、適宜聞き取りを行う。応援の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。主たる事例としては、日本の大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。

・成果

編著『応援の人類学』（青弓社、2020年）を刊行した。当該書籍には論考を 2 本掲載している。論集では「応援」を学問的に取り扱うための概念整理を行い、日本文化として済ませられてきた現象を、文化比較の視点から包括的に考察する枠組みを提示した。関連する英語論文を投稿中であり、また新聞記事データベースの資料をもとに、「応援」がどのように扱われてきたのか戦前から現在までの時間軸で言説分析する論文の執筆を進めている。

◎出版物による業績

［編著］

丹羽典生編

2020 『応援の人類学』東京：青弓社。［査読有］

［分担執筆］

丹羽典生

2020 「野次、喝采そして応援――応援の人類学的研究に向けて」丹羽典生編『応援の人類学』pp.13–37, 東京：青弓社。［査読有］

2020 「日本の大学応援団の原型――その変容と組織秩序が示唆する論点を考える」丹羽典生編『応援の人類学』pp.63–83, 東京：青弓社。［査読有］

2020 「あとがき」丹羽典生編『応援の人類学』pp.325–327, 東京：青弓社。［査読有］

2020 「植民地――ヨーロッパ諸社会による支配と先住民フィジー人の自律」梅崎昌裕・風間計博編『オセアニアで学ぶ人類学』pp.213–225, 京都：昭和堂。

［論文］

丹羽典生

2021 「探検家朝枝利男の後半生――アメリカ日系人収容所での生活から博物館での活躍まで」『経済志林』88(3)：21–42。

［その他］

丹羽典生

2020 「海と生きる人びとの生活と独立期のパプアニューギニア――大島襄二写真コレクション」特集「拡がる写真データベース」『月刊みんぱく』44(7)：8–9。

2020 「データベース『朝枝利男コレクション』の特徴と残された課題」『民博通信 Online』2：6–7。

2021 「オセアニアの嗜好品」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.555–556, 東京：丸善出版。

2021 「人生儀礼と食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.322–325, 東京：丸善出版。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CD などの制作・監修

山田　亨・佐久間寛・丹羽典生・吉田ゆか子　監修

2020 『Circle of life = 人生の節目の儀礼』（Rituals = 世界の祭・儀礼 1）（英語・日本語・50分）東京：丸善出版。

2020 『Great gatherings = 大規模な集団で行う儀礼』（Rituals = 世界の祭・儀礼 4）（英語・日本語・50分）東京：丸善出版。

2020 『Initiation = はじまりの儀礼』（Rituals = 世界の祭・儀礼2）（英語・日本語・50分）東京：丸善出版。

2020 『The power of nature = 自然を敬う儀礼』（Rituals = 世界の祭・儀礼 3）（英語・日本語・50分）東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年11月28日　「民族誌的資料からみるフィジーの葬儀の変化」国立民族学博物館共同研究「島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」第7セミナー室、オンラインとのハイブリッド開催

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年12月12日　「〈複数のアイデンティティを潜在的に抱えた集合体〉の民族誌――フィジー・レヴカの少数民族の事例から考える」科学研究費補助金「紛争後社会のレジリエンス――オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」研究会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事

・他大学の客員、非常勤講師

同志社大学「アジア・オセアニア地域の文化16」

南 真木人［みなみ まきと］—— 准教授

1961年生。**【学歴】**弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1989）、筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程退学（1991）**【職歴】**国立民族学博物館第３研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2019）**【学位】**学術修士（筑波大学大学院環境科学研究科 1989）**【専攻・専門】**人類学、南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

［共編］

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines, and J. S. Eades（eds.）

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77). Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner, and K. Nawa（eds.）*Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp. 443-466. New Delhi: Manohar.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ネパールにおける移住労働の常態化と新型コロナウイルス感染拡大後の地域像

・研究の目的、内容

本研究の目的は、ネパールの調査村を事例として、移住労働が常態化していたネパールの村において新型コロナウイルス感染拡大は何をもたらしているのかを明らかにするものである。具体的には、１） 移住労働の常態化を、調査村のある仲介者が海外に送った54人（2003～14年）のその後を更新することで裏づける。その内の数名（帰国者）に対して移住への過程、現地の生活、帰国後の生活や変化について聞き取り調査し、経済的変化（送金、農業の女性化、焼畑の縮小等）、社会的・文化的変化（社会的送付、通過儀礼的なライフイベント化、旧SLC前の学校中退、男女の役割、「伝統」的な価値観の変容［歌垣の衰退など］等）を把握する。さらに、２）新型コロナウイルス感染拡大後の移住労働の現状、帰国できなくなった労働者の状況、渡航できなくなった若者の選択、村の生活の変化等について明らかにする。

・成果

科学研究費（基盤研究（B））「移動・移民による地域像の再構築――ネパールを越えるネパール地域研究の試み」（研究分担者）の一環としてネパールにおいて現地調査を行なう計画だったが、コロナ下で渡航不可能となり、日本におけるネパール人移住労働者の調査に切り替えた。対面の聞き取り調査に際し初対面の人は避け、既知の知人を調査対象とした。具体的には、東関東と石川県のインド・ネパール料理店に２人の知人を訪ね、新型コロナウイルス感染拡大後の営業状況や労働の現状を調べた。立地にもよるが、日本人が経営する店とネパール人が経営する店とでは、前者がコロナ対応や営業の工夫で対処しているのに対し、後者の経営の厳しさが見てとれた。とはいえ後者にしても、各種の公的給付金や協力金を、その存在を伝え申請書作成をビジネスとする日本人行政書士を介して得ており、加えて篤志家的な日本人に支えられ営業を継続していた。成果の一部は、論文としてMINDASの成果論文集に寄稿中である。

◎出版物による業績

［分担執筆］

南 真木人

2020 「モノから探るネパールの『手芸』」上羽陽子・山崎明子編『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』pp.125–128，東京：フィルムアート社。

2020 「ネパールの食事」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.588–589，東京：丸善出版。

2021 「マガールの『歌垣』的歌舞」江口一久編、八木祐子・手塚恵子編集編『儀礼と口頭伝承』pp.321–346，東京：風響社。

［その他］

南 真木人

2020 「1980年代のサーランギ音楽の共有化」『民博通信 Online』2：8–9。

2020 「世界の温泉にわけいる」特集「世界温泉めぐり」『月刊みんぱく』44(11)：2–3。

2021 「鹿野勝彦著『ヒマラヤ縦走――「鉄の時代」のヒマラヤ登山』」『山』908：5–6。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2021年２月13日　‘Collaboration between Museums and the Source Community: Sharing Audio Materials of the Sarangi Music of the ‘80s in Nepal.’ “Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices”, First Session: Transmission of Records and Media, オンライン開催

・共同研究会での報告

2021年３月18日　「民博ネパール関連データベースの来し方行く末」2020年度研究成果公開促進費（データベース）打ち合わせおよび身装文化デジタルアーカイブ研究会、国立民族学博物館、オンラインとのハイブリッド開催

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年10月11日　「ネパールの先住民運動」第574回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2021年１月30日　「ネパールのサーランギ音楽解説」みんぱく映像民族誌シアター、国立民族学博物館、淀川文化創造館シアターセブン、オンライン開催

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究成果公開促進費（データベース））「服装・身装文化デジタルアーカイブ」（研究代表者：高橋晴子（大阪樟蔭女子大学））研究協力者、科学研究費（基盤研究（B））「移動・移民による地域像の再構築――

ネパールを越えるネパール地域研究の試み」（研究代表者：森本　泉（明治学院大学））研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員

諸　昭喜［チェ　ソヒ］ 助教

1979年生。**【学歴】**大韓民国ソウル大学師範学部地理教育学科卒（2005）、大韓民国ソウル大学社会科学大学院人類学科修士課程修了（2011）、奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了（2019）**【職歴】**大韓民国東アジア財団事務局幹事（2005）、大韓民国ソウル大学日本研究所補助研究員（2007）、大韓民国ソウル大学奎章閣韓国学研究院研究補助員（2008）、大韓民国ソウル大学言語教育院外国語教育センター職員（2011）、大韓民国東アジア財団出版プロジェクトプロジェクト研究員（2011）、大韓民国ソウル大学教育研修院英語研修チームチーム長（2012）、大韓民国ソウル大学病院医生命研究院治験コーディネーター（2014）、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター協力研究員（2019）、奈良県韓国教育院会話講座非常勤講師（2019）、奈良市立看護専門学校文化人類学非常勤講師（2019）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター助教（2020）**【学位】**学術博士（奈良女子大学大学院 2019）、修士（人類学）（大韓民国ソウル大学社会科学大学院 2011）**【専攻・専門】**医療人類学　朝鮮半島地域、民俗特有の病い、産後養生と産後儀礼、民間医療とケア **【所属学会】**日本文化人類学会、日本ジェンダー学会

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会の変化と民間にみられる産後病の変容

・研究の目的、内容

本研究は、文化特有の病いと社会・文化との関係を、患者の語りに焦点を当てて分析することを主たる目的としている。

①研究対象は韓国の産後の女性に特有の「産後風」といわれる症状であり、本年度は、韓国の若い世代に対する調査を行い、社会の近代化と病いの変容に焦点を当てた。産後ケアを大事にするようになった現在の韓国でも産後の症状を訴える患者たちは常に存在するが、その語りの内容は世代によって異なる。そこで、伝統医学における病いが時代とともに変容するさまを、患者自身の症状に対する解釈の変化も含めて明らかにする。

②今年度の韓国調査では、新しいコロナ禍に対応するヘルスケア形態の変化がみられ、そのメタファーに注目した。COVID-19に関し韓国と日本は危機状況をどのように直観的認識、いかなるメタファーを使って、類似性を結びつけて認識し、また、行動するかを調べた。

③バングラデシュにも産後の女性と赤ん坊を脆弱な状態と見なし、日常から分離して保護する慣習がありながら、産後の民俗特有の病いが存在することで、2020年３月にバングラデシュでの調査を行った。本年度はその結果を分析し、民俗特有の病い、民間薬草や儀礼より、国の政策的による製薬産業の発達によって、非常に多い医薬品が妊娠中の女性に使われている事へ着目するするに至った。

・成果

①韓国での調査は科学研究費（研究活動スタート支援）「社会変化と民俗特有の病いの変容：韓国と台湾の産後の病いに対する比較研究」による外部資金を用いて実施した。博士論文の内容と今年度の調査結果を発展させ、民俗病の歴史と近代化、病いのイディオムから見る妊娠と産後の体、共有されている病いの語りと時代の反映、漢方の中で構築される民間の病いというそれぞれのテーマで、学術図書の執筆、編集をすすめ、韓国の韓国学中央研究院の2021年度の出版助成により、刊行を予定している。

②韓国文化人類学会、AJJ,そして、比較文明学会で発表では、病のメタファー研究一環として，COVID-19というウイルスとその感染症を巡って韓国と日本で主に使われる「戦争」と「災害」という表現に着目し、状況がどのような記述され、対応を作り出しているかを扱ってみた。ウィルスが外部からの侵入としてイメージ化され「打ち勝つ」対象に、防疫は国家の安全を守護する「戦争」となる韓国の対応と、新しいウイルスは人類歴史上常に存在したものとして認識し、人々が冷静さ、理性を保つために現状を「禍」や自然災害の比喩が使われる日本と比較した。

③に関しては、科学研究費（基盤研究（B））「MDG５（ミレニアム開発目標）達成に向けたアジアのマタニティ政策の検証――脱医療化とポジティブな出産経験」（研究代表者：松岡悦子）の分担研究者として、外部資金を用いて実施した。共同研究会で「バングラデシュ農村部での妊娠中の薬の使用」のタイトルで研究報告を

実施し、母子保健の向上のために、政府機関から国内、海外のNGO団体まで多くの医療従事者が現場で乱立している現状と、母性死亡率を国際保健基準の目標まで達成するため、国際NGO団体からの無償薬品や国内ジェネリック薬が妊婦に過度に提供、または販売されている側面を指摘した。具体的に、産婦によく見られるつわり、めまい、腰痛などの症状に、どんな薬が誰から処方され、どの程度服用されているかについて調査し、妊娠期間中の医療化に関して問題を提起した。報告書は2021年度に出版予定である。

◎出版物による業績

［分担執筆］

제소희

2020 「‘버티기’가 아닌 ‘적소 만들기’」인류학연구소『연어를 따라간 인류학자』pp.179–197, Seoul：Minsokwon。

［その他］

諸　昭喜

2020 「出産を守ってくれるサン神――韓国」『みんぱく e-news』233：巻頭コラム。

2020 「モムサル薬お願いします」『月刊みんぱく』44(12)：20。

2021 「旅・いろいろ地球人 韓国の出産準備物① おくるみと『驚気』」『毎日新聞』 3 月 6 日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 韓国の出産準備物② 産着――ペネッチョゴリ」『毎日新聞』 3 月13日夕刊。

2021 「旅・いろいろ地球人 韓国の出産準備物③ へその緒の保管」『毎日新聞』 3 月27日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年12月15日 「バングラデシュ農村部での妊娠中の薬の使用」『MDG 5 達成に向けたアジアのマタニティ政策の検証』オンライン開催

・民博研究懇談会

2020年10月28日 「産後の民俗病に関する人類学的研究――韓国のサヌプンを中心に」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 9 月27日 ‘Social Change and the Transformation of Folk illness: A Comparative Study of Postpartum illnesses in Korea and Taiwan.’ 臺灣人類學與民族學學會2020年會, National Chi Nan University, Taiwan, オンライン開催

2020年11月 7 日 「의료적 로컬지식의 형성과 건강 관련 행동: 일본（긴키지역）의 Covid-19 상황을 사례로」2020 한국문화인류학회、オンライン開催

2020年12月 5 日 “Disaster’ and ‘Battle’: Two different metaphors of COVID-19 among South Korea and Japan.’ 2020 Annual Meeting of Anthropology of Japan in Japan, オンライン開催

2021年 2 月21日 「Covid-19に対する 2 つのメタファー‘災害’と‘戦争’――日本と韓国の事例を中心に」比較文明学会関西支部第48回例会、国立民族学博物館、オンライン開催

◎調査活動

・海外調査

2020年12月18日～2021年 1 月 8 日―韓国（韓国のCOVID-19状況でも漢方と民間医療変化調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「MDG 5 達成に向けたアジアのマタニティ政策の検証 - 脱医療化とポジティブな出産経験」（研究代表者：松岡悦子（奈良女子大学））研究分担者、科学研究費（研究活動スタート支援）「社会変化と民俗特有の病いの変容――韓国と台湾の産後の病いに対する比較研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「戦争・帝国主義と食の変容――食と国家の関係を再考する」（研究代表者：宇田川妙子）メンバー、国立民族学博物館共同研究「月経をめぐる国際開発の影響の比較研究――ジェンダーおよび医療化の視点から」（研究代表者：新本万里子）メンバー、国立民族学博物館特別研究「コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に」（研究代表者：島村一平）メンバー

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

Korean Studies Grant 2021: Scholarly Book Publication「産後の風、その望み――民俗病の語りからみる韓国女性と出産」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

奈良市立看護専門学校「文化人類学」

八木百合子［やぎ　ゆりこ］——助教

【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒（2001）、三重大学大学院人文社会科学研究科修士課程修了（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程単位取得退学（2011）**【職歴】**在ペルー日本国大使館専門調査員（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2015）、国立民族学博物館助教（2018）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2012）、修士（人文科学）（三重大学 2004）**【専攻・専門】**文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

［単著］

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

［論文］

八木百合子

2012 「聖女に捧げられた大聖堂——近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・關　雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp.243-267，京都：世界思想社。

2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展——20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』5：5-28。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代アンデスにおける寄進と宗教性に関する研究

・研究の目的、内容

本研究はアンデス地域における宗教実践の一つとして、寄進に着目し、聖人信仰をめぐって展開される人びとの宗教性について検討をおこなうものである。これまでアンデスの聖人信仰に関する研究では、聖人祭礼の主催者と役職者との関係や聖人に奉納する民俗舞踊グループの動向をはじめ、聖人をとりまく諸集団に主眼をおいた分析が中心であったが、本研究は寄進をおこなう個々の人びとの様態に着目していく。

具体的には、近年、寄進の増加が著しく観察されるペルー南部クスコ市の教会を対象に、これまでに納められた奉納品についての調査を実施し、どのような人が、いかなる寄進をおこなっているのかを明らかにする。対象となるのは、同じクスコ市の３つの教区教会であるが、それぞれ教区住民の構成や歴史的な背景が異なる地区に位置する。これにより、多様な民族や社会集団から構成されるアンデス地域の人びとの宗教性をさまざまな角度から分析・考察するのがねらいである。

研究の遂行にあたっては、科学研究費（若手研究）「現代アンデス地域における寄進と宗教性に関する研究——奉納品と教会記録の分析を中心に」の計画にしたがい、ペルー南部クスコ市の３つの教会を対象に調査分析をすすめる。

・成果

本年度は調査対象となる３つの教区教会のうち、農村からの移住者の拡大によって地区住民が大きく増加しているＡ教区の主要な奉納品としてケープについて、前年度までの予備調査で収集したデータの検討をおこない、特に1990年代以降、奉納品の数やデザインに大きな変化がみられる点が明らかになった。これらの点を含め、同教区で収集した奉納品に関する情報を整理して、スペイン語の報告書 *Catálogo de las Capas y Vestimentas de la Virgen de Natividad del Templo de Almudena*（全113頁）を作成し、クスコ大司教府文化財管理局に提出した。

また、これまで取り組んできたアンデス地域の宗教の展開におけるモノの役割に関して、「受け継がれるアンデスの聖像」と題する論考を『季刊民族学』に発表したほか、2020年３月に終了した民博（若手）共同研究「モノをとおしてみる宗教的世界の諸相」の成果刊行の一環として、連載企画「モノからみた宗教の世界」を同季

刊誌において7月からスタートさせた。このほか、研究成果の社会還元の一つとして、上記共同研究会で検討したモノや関連する民博の標本資料を身近なツール（カレンダー）をつうじて紹介する企画・編集をフロッグス株式会社と共同でおこない、万年型カレンダー『モノとイトナミ365――世界の暮らしと文化』を作成した（2021年6月発行予定）。

◎出版物による業績

［共編］

ラテンアメリカ文化事典編集委員会編（［編集委員長］関　雄二［編集幹事］齋藤　晃・鈴木　紀・村上勇介・八木百合子［編集委員］井口欣也・岡田裕成・窪田　暁・佐々木直美・渋下　賢・清水達也・杓谷茂樹・田島久歳・ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ・鼓　宗・細谷広美・山脇千賀子・若林大我）

2021 『ラテンアメリカ文化事典』東京：丸善出版。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「現代アンデスにおける寄進と宗教性に関する研究――奉納品と教会記録の分析を中心に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「ネオリベラリズムのモラリティ」（研究代表者：田沼幸子）メンバー、国立民族学博物館共同研究「モビリティと物質性の人類学」（研究代表者：古川不可知）メンバー

国際研究統括室

平井京之介［ひらい　きょうのすけ］―― 室長（併）、副館長（研究・国際交流・IR担当）、グローバル現象研究部教授

齋藤　晃［さいとう　あきら］―― 兼：人類文明誌研究部教授

韓　敏［ハン　ミン］―― 兼：超域フィールド科学研究部教授

福岡正太［ふくおか　しょうた］―― 兼：人類基礎理論研究部教授

卯田宗平［うだ　しゅうへい］―― 兼：人類文明誌研究部准教授

鈴木英明［すずき　ひであき］―― 兼：グローバル現象研究部准教授

丹羽典生［にわ　のりお］―― 兼：学術資源研究開発センター准教授

IR室

平井京之介［ひらい　きょうのすけ］―― 室長（併）、副館長（研究・国際交流・IR担当）、グローバル現象研究部教授

寺村裕史［てらむら　ひろふみ］―― 兼：人類文明誌研究部准教授

吉岡　乾［よしおか　のぼる］―― 兼：人類基礎理論研究部准教授

末森　薫［すえもり　かおる］―― 兼：人類基礎理論研究部助教

上畑　史［うえはた　ふみ］―― 兼：グローバル現象研究部機関研究員

梅棹資料室

飯田　卓［いいだ　たく］―― 併：人類文明誌研究部教授

機関研究員

上畑　史［うえはた　ふみ］―― 機関研究員

【学歴】大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻・音楽学博士後期課程単位取得退学（2017）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員 DC（2015）、日本学術振興会特別研究員 PD（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部機関研究員（2020）**【学位】**博士（文学）（大阪大学 2020）**【専攻・専門】**音楽学、民俗音楽研究、ポピュラー音楽研究、セルビア／旧ユーゴスラヴィア／バルカンの音楽文化研究**【所属学会】**民族藝術学会、東洋音楽学会、待兼山芸術学会

【主要業績】

［分担執筆］

上畑　史

2019「第50章　伝統音楽セヴダリンカ――古（いにしえ）の古都の音風景」柴宜　弘・山崎信一編『ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための60章』pp.302-306，東京：明石書店。

2015「第52章　クラシック音楽と大衆音楽――『オリエント』の受容と拒絶」柴宜　弘・山崎信一編『セルビアを知るための60章』pp.287-291，東京：明石書店。

［論文］

上畑　史

2011「セルビアにおけるロマのブラス――民俗文化からの逸脱」『民族藝術』27：130-139。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［論文］

上畑　史

2021「（令和元年度博士論文（課程）要旨）セルビアのポピュラー音楽『ターボフォーク』における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践」『大阪大学大学院文学研究科紀要』61：191-192。

2021「音楽と民族的アイデンティティ――セルビアの民俗調ポピュラー音楽『ターボフォーク』の言説と実態」『民族藝術学会誌　arts/』37：38-49。

［その他］

上畑　史

2020「歌姫 JK のコンサート――『新しい生活様式』のオンラインライヴ」（関西の音と人）『大阪日日新聞』8 月18日。

2021「愛すべき『のんべえ』」『月刊みんぱく』45(1)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2021年 2 月 4 日「ポピュラー音楽と民族的アイデンティティ――セルビアのターボフォークを例に」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 7 月 6 日「ポピュラー音楽と民族性――セルビアにおけるターボフォークの言説と実態」民族藝術学会大会シンポジウム『2010年代のポップフォーク（東欧演歌）』オンライン開催

2020年10月11日「セルビアのポピュラー音楽『ターボフォーク』における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践」東洋音楽学会西日本支部第287回定例研究会、オンライン開催

・研究講演

2020年５月19日　「セルビアのポピュラー音楽『ターボフォーク』における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践」（大阪大学文学部文学研究科開講科目「音楽学演習」ゲスト講義）大阪大学文学部文学研究科音楽学研究室、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「東欧の音楽文化に関する民俗学的調査と編曲作品研究」（研究代表者：伊東信宏（大阪大学））研究分担者

大澤由実［おおさわ　よしみ］——機関研究員

【学歴】ケント大学大学院人類学部修士課程修了（2005）、ケント大学大学院人類学・保全学研究科博士課程修了（2011）**【職歴】**欧州大学院大学歴史・文明学研究科研究員（2012）、チェンマイ大学社会科学部・社会科学と持続可能な開発のための地域センター特別研究員（2013）、京都大学学術研究支援室URA（2014）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）**【学位】**Ph.D.（民族生物学）（ケント大学 2012）、M. Sc.（民族植物学）（ケント大学 2005）**【専攻・専門】**食の人類学、民族植物学　味の文化的認識と表象、味のグローバル化

【主要業績】

［分担執筆］

Osawa, Y.

2018　“We Can Taste but Others Cannot”: Umami as an Exclusively Japanese Concept. In N. K. Stalker (ed.) *Devouring Japan: Global Perspectives on Japanese Culinary Identity*, pp.118–132. Oxford: Oxford University Press.

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［その他］

大澤由実

2020　「台所」『月刊みんぱく』44(4)：16–17

2020　「タイの日本食文化」『Vesta』119：38–41

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年５月31日　「タイにおけるMSG（グルタミン酸ナトリウム）の受容と拒絶」日本文化人類学会第54回研究大会、早稲田大学、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究活動スタート支援）「食の認識体系とその変容――タイにおけるMSG（グルタミン酸ナトリウム）の消費と拒絶」研究代表者、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」民博ユニット「文明社会における食の布置」（研究代表者：野林厚志）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

龍谷大学農学部非常勤講師「栽培植物と農耕の起源」、立命館大学非常勤講師「世界と日本の食文化」

金　悠進［キム　ユジン］——機関研究員

1990年生。**【学歴】**同志社大学法学部政治学科卒業（2014）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2020）**【職歴】**京都大学東南アジア地域研究研究所連携研究員（2020）、国立民族学博物館機関研究員（2020）**【学位】**博士（地域研究）（京都大学大学院 2020）**【専攻・専門】**インドネシアのポピュラー音楽、若者のイ

ンディペンデントな文化実践や、都市型ポップの歴史的な形成過程、ロック音楽産業と政治権力の相互依存関係などについての研究【所属学会】東南アジア学会、日本ポピュラー音楽学会、カルチュラル・スタディーズ学会、アジア政経学会、関西社会学会、東洋音楽学会

【主要業績】

［単著］

金　悠進

2020 『越境する〈発火点〉――インドネシア・ミュージシャンの表現世界』東京：風響社。

［分担執筆］

金　悠進

2018 「インドネシア・インディーズ音楽の夜明けと成熟」福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー――アイデンティティ・国家・グローバル化』pp.330–355, 東京：スタイルノート。

［論文］

金　悠進

2020 「『シティポップ』なきポップス――ジャカルタ都会派音楽の実像」『ポピュラー音楽研究』24：35–51。［査読有］

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［単著］

金　悠進

2020 『越境する〈発火点〉――インドネシア・ミュージシャンの表現世界』東京：風響社。

［論文］

金　悠進

2020 「『シティポップ』なきポップス――ジャカルタ都会派音楽の実像」『ポピュラー音楽研究』24：35–51。［査読有］

［その他］

金　悠進

2021 「在日は『ひどすぎる』？」『月刊みんぱく』45(2)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2021年１月14日 「異国趣味を超えて――“インドネシア（らしい）音楽”とは何か」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年６月６日 「非民主的法案の創造――インドネシアにおける創造経済と文化実践の相互依存に着目して」2020年度アジア政経学会春季大会、ウェブでの書面開催

2020年９月20日 「〈タバコとロック〉の民主性――インドネシアの音楽産業における華人と軍の役割に着目して」第18回嗜好品文化フォーラム、オンライン開催

2020年10月10日 「すれちがう『表現の自由』――インドネシアの音楽ライブ空間における権力作用」第71回関西社会学会大会、オンライン開催

2021年３月６日 「『ワールド・ミュージック』のなかのインドネシア音楽――日本の音楽評論家たちの言説空間」東洋音楽学会西日本支部第288回定例研究会、オンライン開催

プロジェクト研究員

石原　和［いしはら　やまと］――プロジェクト研究員

【学歴】立命館大学文学部人文学科日本史学専攻卒（2011）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程前期課程修了（2012）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程後期課程修了（2017）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員 DC２（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部プロジェクト研究

員（2017）、立命館大学授業担当講師（2018）**【学位】**博士（文学）（立命館大学大学院 2017）**【専攻・専門】**日本史学 思想史、宗教史、宗教学**【所属学会】**歴史学研究会、日本歴史学会、日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本思想史学会、日本宗教学会、RA 協議会

【主要業績】

［単著］

石原　和

2020 『「ぞめき」の時空間と如来教　近世後期の救済論的転回』京都：法藏館。

［編著］

石原　和・吉永進一・並木英子編

2020 『月見里神社史料・宮城島家史料目録――近代清水の神職たちと鎮魂帰神』（日本新宗教史像の再構築――アーカイブと研究者ネットワーク整備）。

［論文］

石原　和

2018 「民衆宗教」大谷栄一・菊地　暁・永岡　崇編『日本宗教史のキーワード 近代主義を超えて』pp.229–235，東京：慶應義塾大学出版会。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［単著］

石原　和

2020 『「ぞめき」の時空間と如来教　近世後期の救済論的転回』京都：法藏館。

［編著］

石原　和・吉永進一・並木英子編

2020 『月見里神社史料・宮城島家史料目録――近代清水の神職たちと鎮魂帰神』（日本新宗教史像の再構築――アーカイブと研究者ネットワーク整備）。

［論文］

石原　和

2020 「月見里神社・稲荷講社関係史料と明治期の民間宗教者の活動・公認」石原　和・吉永進一・並木英子編『『月見里神社史料・宮城島家史料目録――近代清水の神職たちと鎮魂帰神』（日本新宗教史像の再構築――アーカイブと研究者ネットワーク整備）pp.20–29。

［その他］

石原　和

2020 「如来教の時代の救済論――身体から心へ 上」『中日新聞』11月10日。

2020 「如来教の時代の救済論――身体から心へ 上」『東京新聞』11月16日。

2020 「如来教の時代の救済論――身体から心へ 下」『中日新聞』11月17日。

2020 「如来教の時代の救済論――身体から心へ 下」『東京新聞』11月23日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年７月26日　「月見里神社・稲荷講社史料と大本に関する新発見」『大本七十年史』研究会×新宗教科研研究会『新資料と新たな大本研究』オンライン開催

2021年１月21日　「1800年前後の名古屋城下の宗教と如来教――民衆宗教の境界領域に注目して」奈良歴史研究会、オンライン開催

2021年３月20日　「近世後期名古屋の宗教動向と如来教――宗派越境的研究の試み」歴史学研究会日本近世史部会第１回準備報告会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「近世近代移行期における教団未満の宗教者と新宗教をめぐる史的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学「キャンパスアジア日本研究Ⅱ（LA）」、立命館大学「キャンパスアジア日本研究Ⅱ（LB）」、立命館大学「日本史特殊講義（LD）」、立命館大学「日本史Ⅱ（L）」、大阪大学「手話の世界と世界の手話言語☆入門（リレー講義）」

石山　俊［いしやま　しゅん］―――――――――――― **プロジェクト研究員**

【学歴】名古屋大学大学院文学研究科満期退学（2006）**【職歴】**大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員（2014）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2015）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員（2017）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2017）**【学位】**博士（文学）（名古屋大学大学院 2015）**【専攻・専門】**文化人類学、環境人類学、アフリカ、中東乾燥地文化研究、農耕社会研究**【所属学会】**日本アフリカ学会、日本中東学会、日本文化人類学会、日本沙漠学会

【主要業績】

［編著］

石山　俊編

2017　『サーヘル内陸国チャドの環境人類学――貧困・紛争・「砂漠化」の構造』名古屋：名古屋大学大学院。

［共編］

石山　俊・縄田浩志編

2013　『ポスト石油時代の人づくり・モノづくり――日本と産油国の未来像を求めて地球研叢書16』京都：昭和堂。

2013　『ナツメヤシ アラブなりわい生態系シリーズ２』京都：臨川書店。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［分担執筆］

石山　俊

2020　「サハラ交易」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.190-191, 東京：丸善出版。

2020　「植民地支配と独立」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.192-193, 東京：丸善出版。

2020　「オアシス アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.200-201, 東京：丸善出版。

2020　「食 ナツメヤシ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.216-217, 東京：丸善出版。

2020　「食 オアシス――アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』pp.226-227, 東京：丸善出版。

2021　「西アジアの食生活――マグリブ」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.27-28, 東京：丸善出版。

2021　「オアシスと甘さ」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.34-35, 東京：丸善出版。

［その他］

2020　「何にでも使える砂漠の植物」『BIOSTORY』34：1。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年５月31日　（石山　俊・渡邊三津子・遠藤　仁・縄田浩志と共同発表）「ワーディ・ファーティマオアシスにおける最近50年の生業の変化、サウジアラビア」日本沙漠学会第31回学術大会、岡山大学

2020年９月18日　（Ishiyama, S., H. Nawata, H. Mikuni, Y. Nishiaki）'Using Scientific Results to Benefit Local People by Working Together at In Belbel Oasis, Algeria: In Accordance with the Will of

the Late Professor Iwao Kobori, the Japanese Human Geographer.' RAI2020: Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future (Wec Conference), Royal Anthropological Institute, London, United Kingdom

・研究講演

2020年12月１日　「アフリカ乾燥地の暮らしと文化」一般財団法人社会保険協会生涯学習事業『えびす大学』小山台会館

◎調査活動

・国内調査

2020年10月10日～11日　高知県（山間集落における地域活性化のための調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析――『近代世界システム』との相克」（研究代表者：嶋田義仁（中部大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「アフリカ食文化研究の新展開――食料主権論のために」（研究代表者：藤本　武（富山大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

京都府立大学非常勤講師「現代の食糧問題」（15回中１回分を担当）

・社会活動

日本沙漠学会沙漠誌分科会運営委員、一般財団法人片倉もとこ記念沙漠文化財団理事、特定非営利活動法人緑のサヘル理事、特定非営利活動法人森のエネルギーフォーラム理事

河村友佳子［かわむら　ゆかこ］―― プロジェクト研究員

【学歴】京都造形芸術大学芸術学部卒（2003）**【職歴】**国立民族学博物館情報管理施設情報企画課技術補佐員（2003）、財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設共同利用型科学分析室プロジェクト研究員（2018）**【専攻・専門】**保存科学 **【所属学会】**文化財保存修復学会、日本文化財科学会、日本民具学会

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［分担執筆］

河村友佳子

2021「山内景行家写真資料から読みとく十日町の織物と人びとのかかわり」日髙真吾編『復興を支える地域の文化――3.11から10年』pp.85-90，大阪：国立民族学博物館。

2021「重要文化財『涅槃釈迦像』の３Ｄ複製品の取り組み事例」日髙真吾・黄貞燕編『地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割』pp.128-142，大阪：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日髙真吾研究室。

2021「三次元計測技術を応用した民俗文化財の活用の可能性」日髙真吾編『継承される地域文化――災害復興から地域創発へ』pp.318-333，京都：臨川書店。［査読有］

［その他］

河村友佳子・日髙真吾・園田直子・末森　薫・橋本沙知・和髙智美・桂田峰男

2020「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.446-449。［査読有］

橋本沙知・園田直子・日髙真吾・末森　薫・河村友佳子・柴切弥生・西澤昌樹・和髙智美

2020「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境――国立民族学博物館の事例より」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.256-259。［査読有］

日髙真吾・園田直子・末森　薫・河村友佳子・橋本沙知・和髙智美

2020「３Ｄスキャナーで制作した複製品の活用事例――ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.266-269。［査読有］

園田直子・日髙真吾・末森　薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・和髙智美
2020「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策――2018年の大阪北部地震を受けて」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.298-301。［査読有］
和髙智美・日髙真吾・園田直子・河村友佳子・橋本沙知・中村晋也・早川晃示・石樽康彦・和田光生・柿本博美
2020「大津祭曳山『郭巨山』の妻人形、童子人形の修理事例」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.182-185。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年12月24日「太陽熱を用いた高温処理の条件確立に向けて――アフリカヒラタキクイムシを用いた高温繰り返し実験について」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から』国立民族学博物館

小林直明［こばやし　なおあき］――プロジェクト研究員

1971年生。**【学歴】**大阪外国語大学外国語学部日本語学科卒（1994）、大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻修士課程修了（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科地域文化専攻博士後期課程単位取得退学（2002）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所日本学術振興会特別研究員（PD・文化人類学）（2002）、国立民族学博物館文化資源研究センター外来研究員／日本学術振興会特別研究員（PD・文化人理学）（2003）、大阪大学世界言語研究センター特任研究員（2008）、龍谷大学社会学部実習助手（2011）、国立民族学博物館人類文明誌研究部プロジェクト研究員（2016）**【学位】**修士（大阪外国語大学大学院 1998）**【専攻・専門】**文化人類学・民俗学 民族誌映像、図書館情報学・人文社会情報学 デジタルアーカイブ、地域研究 アフリカ **【所属学会】**日本アフリカ学会、日本映像民俗学の会、デジタルアーカイブ学会

【2020年度の活動報告】

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究支援代表者：吉田憲司）において技術支援員として写真資料のデジタルアーカイブ化（フィルムの整理やデジタル化・データベース化、権利処理などの諸業務）を効果的・効率的にすすめる手法を研究・考案し、実践した。

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

近畿大学非常勤講師「博物館情報・メディア論」、近畿大学非常勤講師「情報処理専門演習Ⅰ・Ⅱ」、龍谷大学非常勤講師「異文化研究Ｂ」、同志社女子大学嘱託講師「デジタルアーカイブス」、同志社女子大学大学院嘱託講師「メディアリテラシー特論」

橋本沙知［はしもと　さち］――プロジェクト研究員

【学歴】同志社大学文学部文化学科・美学及び芸術学専攻卒（2004）**【職歴】**国立民族学博物館情報管理施設情報企画課技術補佐員（2004）、公益財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設共同利用型科学分析室プロジェクト研究員（2018）**【専攻・専門】**保存科学 **【所属学会】**文化財保存修復学会、日本文化財科学会

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［分担執筆］

橋本沙知

2021「柳染色加工所染め見本の保存と技術の記録保存」日髙真吾編『復興を支える地域の文化――3.11か

ら10年』pp.82–83, 大阪：国立民族学博物館。

2021 「保存と活用の両立を目指した博物館資料の収納方法」日髙真吾編『継承される地域文化――災害復興から地域創発へ』pp.224–238, 京都：臨川書店。［査読有］

［その他］

河村友佳子・日髙真吾・園田直子・末森　薫・橋本沙知・和髙智美・桂田峰男

2020 「滋賀県米原市所在の壽山組山倉における温湿度環境の調査」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.446–449。［査読有］

橋本沙知・園田直子・日髙真吾・末森　薫・河村友佳子・柴切弥生・西澤昌樹・和髙智美

2020 「性能や調湿条件の異なる展示ケース内の温湿度環境――国立民族学博物館の事例より」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.256–259。［査読有］

日髙真吾・園田直子・末森　薫・河村友佳子・橋本沙知・和髙智美

2020 「３Ｄスキャナーで制作した複製品の活用事例――ユニヴァーサル・ミュージアムの実現を目指して」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.266–269。［査読有］

園田直子・日髙真吾・末森　薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・和髙智美

2020 「国立民族学博物館における収蔵庫の防災・減災対策――2018年の大阪北部地震を受けて」『文化財保存修復学会第42回大会研究発表集』pp.298–301。［査読有］

和髙智美・日髙真吾・園田直子・河村友佳子・橋本沙知・中村晋也・早川晃示・石樽康彦・和田光生・柿本博美

2020 「大津祭曳山『郭巨山』の妻人形、童子人形の修理事例」『大津祭曳山「郭巨山」の妻人形、童子人形の修理事例』pp.182–185。［査読有］

彭　宇潔［ホウ　ウケツ］――プロジェクト研究員

【学歴】北京外国語大学日本語学部卒（2008）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻５年一貫制博士課程修了（2016）**【職歴】**京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センタープロジェクト研究員（2017）**【学位】**博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2016）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2012）**【専攻・専門】**文化人類学、狩猟採集民研究、アフリカ地域研究**【所属学会】**日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際狩猟採集民学会、米国通文化研究学会、国際民族生物学会

【主要業績】

［単著］

Peng, Y.

2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter Gatherers in Southeastern Cameroon.* Kyoto: Shokado.

［論文］

彭　宇潔

2021 「個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態――カメルーン東南部のバカを事例に」『国立民族学博物館研究報告』45(3)：441–469。［査読有］

Peng, Y.

2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63–95.

【受賞歴】

2017 中国民族生態学会第２回全国大会「優秀論文賞」

2012 英国王立人類学協会主催 Body Canvas Photography Competition「Runner-up 賞」

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［論文］

彭　宇潔

2021 「個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態――カメルーン東南部のバカを事例に」『国立民族学博物館研究報告』45(3)：441-469。［査読有］

Peng, Y. and A. Nobayashi

2021 Cross-Cultural Research of the Hunting Tools and Technique between Hunter-Gatherers and Hunter-Gardeners. *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106), pp. 75-92. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 5 月16日 「小規模居住集団の居住形態――アフリカとアジアの民族事例から」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会、国立民族学博物館、オンライン開催

2020年 5 月23日～ 5 月24日 「カメルーン東南部における地域住民の居住形態――狩猟採集民バカと焼畑農耕民コナンベンベ、農耕民ンジメを事例に」日本アフリカ学会第57回学術大会、東京外国語大学、ウェブ上公開

2020年10月23日 'Rhythmical Life: Cases of Cutting Activity among the Baka.' Techniques & Culture International Meetings "Waza on the Move: Ineffable Arts of Learning", Marseille, Kyoto, オンライン開催

2020年12月18日 「狩猟採集民集団の通文化研究――熱帯湿潤地域を中心に」パレオアジア文化史学第10回研究大会、国立民族学博物館、オンライン開催

2021年 2 月22日 「アフリカ狩猟採集民バカのイレズミと社会関係」タトゥー研究会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「トイレを必要とする条件とは――狩猟採集民、農耕民、都市生活者の排泄と衛生条件の比較」（研究代表者：山内太郎（総合地球環境学研究所））研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）「パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」計画研究B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究協力者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

国際狩猟採集民学会第13回狩猟採集社会国際会議（CHaGS13）Scientific Committee

・他大学の客員、非常勤講師

京都外国語大学非常勤講師、龍谷大学非常勤講師、京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員

拠点研究員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

辛嶋博善［からしま　ひろよし］――特任助教

1974年生。**【学歴】**慶應義塾大学文学部史学科民族学考古学専攻卒業（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻地域研究コース修了（2001）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2008）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー（2008-2013）、北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員（2013-2014）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究

員（2014-2015）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター地域比較共同研究員（2015-）**【学位】**博士（学術）（東京外国語大学 2011）**【専攻・専門】**日本文化人類学会、日本モンゴル学会、生き物文化誌学会、IUAES（International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）

【主要業績】

［論文］

辛嶋博善

2017 「家業を起業する――モンゴル牧畜社会における牧夫の自立」（特集：市場化・脱生業化時代の生業論――牧畜戦略の多様化を例に）『文化人類学』82(1)：35-49。

2016 「拡張する柔軟性――モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』81(1)：44-61。

［学位論文］

辛嶋博善

2010 「衝突する未来――ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティー県ムルン郡の牧畜社会を事例として」東京外国語大学。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［その他］

辛嶋博善

2020 「モンゴル国の牧畜における小さな変化と大きな変化」『BIOSTORY』33：64-65。

2020 「牧畜民のテントをめぐる」『月刊みんぱく』44(11)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2021年２月25日 「北東アジアの『一昔前』を考える」第36回北東アジア地域研究会@民博拠点（月例会）、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点

黒田賢治［くろだ　けんじ］―― 特任助教

1982年生。**【学歴】**北海道大学文学部人文科学科卒（2005）、北海道大学文学研究科修士課程退学（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程（五年一貫制）修了（2011）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（DC）（2008-2011）、京都大学科学研究員（2011-2012）、京都大学東南アジア研究所特別研究員（2011-2012）、カリフォルニア大学中近東研究所客員研究員（2011-2012）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2012-2015）、広島大学総合科学研究科研究員（2015-2016）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員（2016）**【学位】**博士（地域研究）（京都大学大学院 2011）**【専攻・専門】**中東地域研究、イスラーム研究**【所属学会】**宗教と社会学会、日本文化人類学会、日本中東学会、IUAES

【主要業績】

［単著］

黒田賢治

2015 『イランにおける宗教と国家――現代シーア派の実相』京都：ナカニシヤ出版。

［論文］

Kuroda, K.

2017　Pioneering Iranian Studies in Meiji Japan: Between Modern Academia and International Strategy. *Iranian Studies* 50(5): 651–670.

［学位論文］

黒田賢治

2011　『現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究――イスラーム指導体制下の宗教と政治をめぐって』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［論文］

Kuroda, K.

2020　Finding ‘Ali as a Heroic Figure From Import of Knowledge on Islam to Customization in Modern Japan. *Historical studies bayt AL hikma* 50: 1–9.

2021　Embodying Islamic Thought through Karate: A Reconsideration of Modern Sports and Indigenization in Iran. *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 14: 73–86.

［その他］

黒田賢治

2020　「悩ましい夜」『月刊みんぱく』44(6)：20。

2020　「第６回　イラン流ジハードの流儀――コロナウイルスとの格闘」『アジアと日本は、今』。(http://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/publication/essay/number06/)

2021　「西アジア地域の食文化（イラン）」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化事典』pp.580–581, 東京：丸善出版。

Kuroda, K.

2020　A New Mode of Jihad and Martyrdom in Iran: The Battle against Covid-19. *Asia-Japan Today: Researchers’ Essays*.（http://en.ritsumei.ac.jp/research/aji/publication/essay/ number06/）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年５月４日　「近代日本と中東関係をめぐる試論――大正３年巡礼船事業をめぐる海洋覇権と植民地運営を中心に」現代中東地域研究レクチャー・シリーズ第21回レクチャー／特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？」第１回研究会、国立民族学博物館、オンライン開催

2020年８月29日　（西尾哲夫・黒田賢治と共同発表）「フォーラム型情報ミュージアムとしての展示の可能性について」第36回日本中東学会年次大会、日本中東学会、オンライン開催

2020年８月30日　「現代イランにおける記憶の歴史化と忘却の政治――ある帰還志願兵を中心に」第36回日本中東学会年次大会、日本中東学会、オンライン開催

2020年９月18日　「コメント③『イラン政治の観点から』」イラン・イラク戦争から40年・湾岸危機／湾岸戦争から30年・公開シンポジウム『変動する湾岸情勢と日本――危機の時代を前望する』日本エネルギー経済研究所中東研究センター、立命館大学アジア・日本研究所、立命館大学中東・イスラーム研究センター、オンライン開催

2020年９月18日　（Kuroda, K. and T. Nishio）‘Mediating Past Anthropological Research Data with Contemporary Researchers and Research Societies: A Case Study of the Info-Forum Museum Project in MINPAKU.’ “The Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future”, The Royal Anthropological Institute, オンライン開催

2021年３月28日　「明治期日本におけるアリー表象の変遷」第39回イラン研究会、イラン研究会、オンラインとのハイブリッド開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講師「イスラム社会を考える」

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

田中鉄也［たなか　てつや］——特任助教

1979年生。**【学歴】**関西大学文学部哲学科卒業（2004）、関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（2006）、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了（2014）**【職歴】**関西大学マイノリティ研究センターリサーチアシスタント（2009-2010, 2012-2013）、日本学術振興会特別研究員（DC）（2013-2014）、日本学術振興会（PD）（2014-2016）、アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー（2016-2017）、日本学術振興会海外特別研究員（2017-2018）、デリー大学社会学科臨時研究員（2017-2018）、ロンドン大学東洋アフリカ研究所客員研究員（2018）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／国立民族学博物館南アジア研究拠点特任助教（2018-）**【学位】**博士（文学）（関西大学大学院 2014）

【主要業績】

［単著］

田中鉄也

2014 『インド人ビジネスマンとヒンドゥー寺院運営――マールワーリーにとっての慈善・喜捨・実利』東京：風響社。

［論文］

田中鉄也

2018 「コミュニティの実体化と女神巡行――インド・カルカッタのカースト団体を事例に」『宗教と社会』24：33-47。

Tanaka, T.

2020 Trustee, State and Stakeholder: Hindu Temple Management in Contemporary India, 1957-2012. *Journal of Interdisciplinary Economics* 32(1): 75-94.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月26日 「現代インドのカーストの諸相――カースト的帰属と社会関係資本」アジア太平洋研究所「インド／アジアの人材活用」第4回研究会、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

関西大学研究拠点形成支援費「法の支配と法多元主義」（研究代表者：西澤希久男（関西大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B）「宗教組織の経営プロセスについての文化人類学的研究」（研究代表者：藏本龍介（東京大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「人類史における移動概念の再構築――『自由』と『不自由』の相克に注目して」（研究代表者：鈴木英明）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学国際部非常勤講師「Area Studies（India）」（2020年度春学期）、関西大学文学部非常勤講師「南アジア・内陸アジア論1」（2020年度春学期）、関西大学文学部非常勤講師「南アジア・内陸アジア論2」（2020年度

秋学期）、関西大学大学院文学研究科非常勤講師「M 宗教人類学研究 A 講義」（2020年度春学期）、関西大学大学院文学研究科非常勤講師「M 宗教学研究 B 講義」（2020年度秋学期）、関西大学政策創造学部非常勤講師「専門導入ゼミ 2 」（2020年度秋学期）

茶谷智之［ちゃや　ともゆき］——特任助教

【学歴】北海道大学法学部卒業（2010）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程（5 年一貫制）修了（2017）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（DC）（2016-2017）、びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部非常勤講師（2017）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2017-2018）、帯広大谷短期大学社会福祉科助教（2018-2019）、松本短期大学幼児保育学科助教（2019-2020）、名古屋商科大学国際学部非常勤講師（2019-）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／国立民族学博物館南アジア研究拠点特任助教（2020-）**【学位】**修士（地域研究）（京都大学大学院 2014）、博士（地域研究）（京都大学大学院 2017）**【専攻・専門】**文化人類学・南アジア地域研究

【主要業績】

［単著］

茶谷智之

2020 『依存からひろがる人生機会――インド・スラム地域の人間開発と「子育ての民主化」』横浜：春風社。

［論文］

茶谷智之

2020 「教育――高まる教育熱の行方」石坂晋哉・宇根義己・舟橋健太編『ようこそ南アジア世界へ』pp.201-216，京都：昭和堂。

2018 「貧困児童の教育機会をめぐる排除と包摂――デリー・スラム地域における希望と学校をつなぐ「協同」に着目して」『社会福祉学』59(2)：79-91。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［論文］

茶谷智之

2020 「教育――高まる教育熱の行方」石坂晋哉・宇根義己・舟橋健太編『ようこそ南アジア世界へ』pp.201-216，京都：昭和堂。

［その他］

茶谷智之

2020 「インドのホーリー祭を彩る」特集「めでたい場の食」『月刊みんぱく』45(1)：7。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 6 月16日 「デリーにおける都市の「市民性」――スラムの若年女性と外出」2020年度 MINDAS「社会変動と親密圏」班第 1 回研究会、オンライン開催

・研究講演（授業内講演）

2020年 5 月18日 「スラムと人間開発――貧困層にひらかれた都市とは」東京大学大学院総合文化研究科、南アジア地域文化研究／専門英語、オンライン開催

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾　稔）拠点構成員、科学研究費（若手研究）「中等教育脱落者の少年少女と社会参加――インド・スラムにおける仲介者の働きに着目して」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

名古屋商科大学非常勤講師「国際ボランティア論」、名古屋商科大学非常勤講師「南アジア社会論」（集中講義）

■人間文化研究機構総合情報発信センター・「人文知コミュニケーター」

大石侑香［おおいし　ゆか］ 特任助教

【学歴】首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻社会人類学教室博士前期課程修了（2009）、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻社会人類学教室博士後期課程単位取得退学（2016）**【職歴】**日本学術振興会――特別研究員 DC 1（2009）、日本学術振興会――特別研究員 PD（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター特任助教（2018）、人間文化研究機構総合情報発信センター特任研究員（2018）、神戸大学大学院国際文化学研究科講師（2020）**【学位】**博士（社会人類学）（首都大学東京大学院 2018）**【専攻・専門】**社会人類学、文化人類学、シベリア北方少数民族の生業、北極域研究、毛皮のグローバルヒストリー **【所属学会】**日本文化人類学会、日本シベリア学会、東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、生態人類学会、北極環境研究コンソーシアム

【主要業績】

［分担執筆］

Юка Оиси

2019　Глава3 История человека в Арктике. In Хироки Такакура, Ёсихиро Иидзима, Ванда Игнатьева, Александр Фёдоров, Масанори Гото and Тосикадзу Танака（eds.）*Вечная мерзлота и культура: Глобальное потепление и Республика Саха (Якутия), Российская Федерация*（Center for Northeast Asian Studies report 24）, pp.18–19. Sendai: Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University.

［論文］

藤岡悠一郎・大石侑香・田中利和・ヴィノクロヴァ・N

2020　「サハ共和国・ゴルヌィ郡におけるサハの野生ベリー類採集」『北海道立北方民族博物館研究紀要』29：31–51。［査読有］

Д. Бйамбаджав, Т. В.Литвиненко, Ю. Ойши, М. Сиотани and Х. Такакура

2019　Трансформация горнодобывающего предприятия и ее влияние на окружающую территорию: опыт Японии и уроки для России. *Староосвоенные районы: генезис, исторические судьбы, современные тренды развития. Отв. редактор В.Н. Стрелецкий. Материалы сессий экономико-географической секции* 35: 280–290.［査読有］

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［論文］

大石侑香

2021　「トナカイがはぐれたらどうする？――自立と互助」シンジルト・地田徹朗編『牧畜を人文学する』pp.168–184，名古屋：名古屋大学出版会。

2021　「シベリア内陸森林地帯：ハンティの生業複合と食」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.612–614，東京：丸善出版。

［その他］

大石侑香

2020　「森で焼くパン――シベリア」『みんぱく e-news』232：巻頭コラム。

2021　「雪で凍傷を予防する」特集「逆転の雪」『月刊みんぱく』45(2)：8–9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年 7 月 2 日　「ボードゲーム『The Arctic』で学ぶ・考える北極環境変化と社会」東北大学 COI 拠点主催『第 3 回 COI 学術交流会』ポスター発表、オンライン開催

2020年 9 月20日　「人文知コミュニケーターによる北極環境学習ツール『The Arctic』の活用実践と評価」『第 2 回 若手研究シンポジウム 場ら化らのフィールド』2020度一般財団法人永井エヌ・エス知覚科学振興財開発究助成（研究代表者：板垣順平）「オンラインミーティングアプリを用いた

『臨場感』の再現による議論の活性化を試みる検証研究」主催、オンライン開催

2020年10月21日 'Beringia – The Future of the Bering Strait Region.' "2020 North Pacific Arctic Conference", East-West Center, Hawaii, United States, オンライン開催［招待有］

2021年３月４日 「キツネの飼い方、増やし方」『アカデミックトーク』東北大学、オンライン開催

2021年３月24日 'Domestication of Mink in the Arctic: Hunting to Fur Farming.' "Arctic Science Summit Week 2021", IASC, Portugal, オンライン開催［査読有］

・研究講演

2021年２月10日 「好きな毛皮は何ですか？――西シベリア・ハンティの毛皮利用の変容と現在」ArCSII 沿岸環境課題主催『北方先住民族の狩猟と毛皮』オンライン配信

2021年３月30日 「北極域の人々のくらしと環境変化」京都・まちじゅうアートフェスティバル実行委員会（構成：京都市等）主催『光冠茶会――国際人類観測年』オンライン配信

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「肉食性動物のドメスティケーション――毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト北東アジア地域研究推進事業東北大学東北アジア研究センター拠点「東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット」（研究代表者：高倉浩（東北大学））メンバー、北極域研究推進プロジェクト「ArCSII: Arctic Challenge for Sustainability II」（研究代表者：榎本浩之（国立極地研究所））メンバー

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学「社会システムデザイン実習」、筑波大学「人文知コミュニケーション」

神野知恵［かみの　ちえ］――特任助教

【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒（2008）、東京藝術大学大学院音楽文化研究科音楽学専攻修士課程修了（2011）、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学専攻博士課程修了（2016）**【職歴】**東京藝術大学音楽学部楽理科教育研究助手（2016）、東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター特任助教（2020）、人間文化研究機構総合情報発信センター特任研究員（2020）**【学位】**博士（音楽学）（東京藝術大学大学院音楽研究科 2016）、修士（音楽学）（東京藝術大学大学院音楽文化研究科 2011）**【専攻・専門】**音楽学（民族音楽学）、民俗学　近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷――伊勢大神楽と韓国農楽を中心に **【所属学会】**東洋音楽学会、民俗芸能学会、韓国朝鮮文化研究会、映像民俗学の会、南道民俗研究会（韓国）

【主要業績】

［単著］

神野知恵

2016 『韓国農楽と羅錦秋――女流名人の人生と近現代農楽史』（アジアを学ぼうブックレットシリーズ）東京：風響社。

［論文］

神野知恵

2018 「韓国音楽学者李輔亨による湖南右道農楽録音資料の比較考察」『国立民族学博物館研究報告』43(3)：443-483。［査読有］

［学位論文］

神野知恵

2016 「韓国農楽における個人演奏者論――羅錦秋名人の芸術世界とその継承」東京：東京藝術大学大学院音楽研究科。

【2020年度の活動報告】

◎出版物による業績

［分担執筆］

神野知恵

2021 「音と味」野林厚志・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp.532-533, 東京：丸善出版。

［論文］

神野知恵

2020 「農楽と能楽――国立能楽堂における2020年交流公演の記録」韓国・朝鮮文化研究会編『韓国朝鮮の文化と社会』19：192-198。

2021「それでも、獅子は旅を続ける――伊勢大神楽の回檀の記録」『季刊民族学』45(1)：83-93。

［翻訳］

神野知恵

2020　金　善子著「中国少数民族の女神神話と図像叙事」『歴史と民俗』36：95-120。

2021　全　京秀著「渋沢敬三の「全体」と「自民族誌」――アチック学派の提言」『歴史と民俗』37：95-120。

［その他］

神野知恵

2020 「『みんぱく村に神楽がやって来る！』ワークショップの軌跡」『月刊みんぱく』44(6)：10-11。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国農楽の追憶① 夏休みの後遺症」『毎日新聞』 9 月 5 日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国農楽の追憶② 全羅道の食と芸能」『毎日新聞』 9 月12日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国農楽の追憶③ 羅先生の家」『毎日新聞』 9 月19日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国農楽の追憶④ 秋夕の墓参り」『毎日新聞』 9 月26日夕刊。

2020 「郷土芸能探訪㊼伊勢大神楽――「人付き合い」の仕事を続ける旅の芸能者たち」『文部科学 教育通信』498：22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月 8 日 「大正・昭和の旅する神楽師たちの暮らし――伊勢大神楽講社森本忠太夫社中の出納帳の分析研究」東洋音楽学会第71回大会、オンライン参加

2020年12月12日 「民俗芸能をつなぐ／民俗芸能研究をつなぐ」2020年度民俗芸能学会大会、グループセッション、オンラインとのハイブリッド開催

2020年12月14日～２月１日 「くらしと祈りと芸能――家を廻る民俗芸能から学んだこと」音楽鑑賞振興財団講演会、招聘講演（動画配信）

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2020年10月 3 日 東京音楽大学主催『オンライン芸能村――青ヶ島・韓国とつなぐリモート村祭りワークショップ』（日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成 実践セミナー実施行事）、企画・演奏、オンラインとのハイブリッド開催

2020年10月11日 『旅する異人たちの秋の大芸能祭――おわりを越えてめぐる命のはじまりのうた』映像作品上映・演奏、カフェ周

2020年11月10日 「사람을 만나기 위한 음악학（人に出会うための音楽学）」韓国総合芸術大学校、特別講義、オンラインとのハイブリッド開催

2020年11月14日 「躍動する韓国仮面芸能の世界」堺市博物館無形文化遺産シリーズ展関連イベント『アジアの伝統演劇』展示協力（国立民族学博物館所蔵資料演示）・講演・演奏、堺市博物館

2020年11月18日 「사람을 만나기 위한 음악학（人に出会うための音楽学）」ソウル大学校芸術大学国楽科、特別講義、オンラインとのハイブリッド開催

2020年11月29日 大阪府主催『ビッグ・アイ アーツセミナー オンライン展覧会 about me 4 ～ “わたし” を知って――言語化できないコトバ』障害のある作家による美術作品の選出、考察、トークセッション登壇、国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）

2020年12月 1 日 「韓国農楽実技」宮城教育大学、特別講義、オンラインとのハイブリッド開催

2020年12月 9 日 「伊勢大神楽の映像収録」科学研究費助成事業、コーディネート・企画、国立民族学博物館

［映像番組上映］
2020年10月11日　『悪魔を払う伊勢大神楽』（2017年制作）カフェ周

◎調査活動

・国内調査

2020年７月24日～28日　岡山県（瀬戸内市、倉敷市・伊勢大神楽森本忠太夫社中回檀）
2020年８月25日～26日　兵庫県（兵庫県立図書館資料調査）
2020年９月１日～７日　香川県（丸亀市、坂出市・伊勢大神楽森本忠太夫社中回檀）
2020年９月27日～28日　大阪府（羽曳野市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀）
2020年９月30日～10月１日　大阪府（松原市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀）
2020年10月９日～10日　大阪府（羽曳野市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀）
2020年10月16日～17日　大阪府（羽曳野市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀）
2020年11月３日　大阪府（藤井寺市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀）
2020年12月22日～23日　三重県（桑名市・伊勢大神楽講社神講および神楽師インタビュー）
2020年12月31日～2021年１月３日　滋賀県（愛知郡・東近江市・伊勢大神楽山本源太夫社中回檀）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷――伊勢大神楽と韓国農楽を中心に」研究代表者、科学研究費（学術変革領域（A））「生涯学の創出――超高齢社会における発達・加齢観の刷新」（研究代表者：月浦　崇）研究協力者、科学研究費（学術変革領域（A））「技能・熟練・暗黙知の習得・発達過程に関する人類学的研究」（研究代表者：金子守恵）研究協力者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

2020年５月14日～８月13日　神戸学院大学文学部非常勤講師（一般教養「日本と世界の民族音楽」担当）
2020年７月１日～2021年３月31日　東京音楽大学非常勤講師（一般人向けオンライン講座「日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成」担当）

客員教員

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

原　大介［はら　だいすけ］―――― 教授

1965年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部卒業（1989）、国際基督教大学大学院教育学研究科修了（1991）、シカゴ大学大学院言語学科修了（2003）**【職歴】**愛知医科大学看護学部専任講師（2000）、愛知医科大学看護学部助教授（2004）、愛知医科大学看護学部教授（2007）、豊田工業大学工学部教授（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員教員（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部客員教員（2017-2020）**【学位】**博士（言語学）（シカゴ大学大学院、2003）**【専攻・専門】**音韻論、形態論、手話言語学**【所属学会】**日本言語学会、日本手話学会、日本特殊教育学会、日本英語学会

【主要業績】

［論文］

Hara, D. and M. Miwa
2020　The well-formedness and the ill-formedness of the JSL type-III syllable. In Ö. Eren, et al.（eds.）*Proceedings of the Fifty-fifth Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp.205–220. Chicago, IL: Chicago Linguistic Society.

Hara, D.
2016　An Information-based Approach to the Syllable Formation of Japanese Sign Language. In M. Minami（ed.）*Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.457–482. Boston, MA: GRUYTER MOUTON.

原　大介
2009 「手話」中島平三監修・今井邦彦編『言語学の領域II』（シリーズ朝倉「言語の可能性」2）pp.72–98，東京：朝倉書店。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

・研究の目的、内容

日本手話では、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の３つのカテゴリに属する要素と「掌の向き」、「指先の方向」、「利き手の接触」等のいくつかのマイナーな要素が音節構成素として関与している。各カテゴリにはそれぞれ有限個の要素が存在するが、カテゴリ間の要素結合は自由ではなく数学的に可能な組み合わせの多くが不適格な音節と判定される。本研究では、どのような要素結合が適格な日本手話音節形成を可能にし、どのような要素結合が日本手話音節の不適格性の原因となるのかを明らかにすることを目的とする。目的達成のため、適格音節・不適格音節のそれぞれを収録したデータベース（以下 DB）を作成している。2020年度は、(1)タイプ３と呼ばれる音節にみられる韻律外性（extrametricality）の検討、(2)適格音節 DB の精緻化・拡充化作業、(3)日本手話の手型連鎖制約を見出すための手型変化パターン調査、(4)「手の構え」を構成する手型、掌の向き、中手骨の方向の３つの要素の組合せ可能性に関する調査、(5)日本における手型音素の抽出・確定および各手型音素の異音の調査を行った。

・成果

１）タイプ３音節における韻律外性（extrametricality）の検討

タイプ３音節を構成する位置音素は A-zone（手話話者の胴体およびニュートラルスペースを含むエリア：高さにより規定されている）内になければならないが、調査の結果、A-zone 内の位置音素と A-zone 外の位置音素の２つの位置音素をもつ音節が存在することが分かった。これらの音節では A-zone 外の位置音素は音節始めに現れており、音節形成において音節始めの位置は韻律外として扱われていることが明らかとなった。

２）適格音節 DB の精緻化・拡充化作業

2019年現在で、適格音節 DB に約3,000個、不適格音節 DB に約2,500個が登録されている。2020年度は、これらの DB に登録されている手型要素の一部見直し作業を行った。DB は音素表記を原則としているが、手型に関して、音声表記と音素表記が混在しているため、精緻化作業を行った。また、適格音節 DB に登録されている音節のうち、動き要素として手首関節の動き（orientation change movement: or と表記）や指関節の動き（handshape change movement: hs）をもつ音節の見直し作業を行った。その結果、動き要素として、or や hs だけをもつと思われていた音節の多くが、軌跡運動（path movement: p）、動きの繰り返し（repeat: r）、動きに付随する接触（contact）等を伴っていることが判明し、動き要素として hs だけを持つ適格音節は存在しない可能性が示された。

３）手型変化のパターンの調査

手型変化を含む音節には、変化前手型と変化後手型の２種類の手型を含む。アメリカ手話の研究では、手型変化に現れる２種類の手型には一定の関係があることが分かっている（手型連鎖制約）。2020年度の研究では、日本手話音節の手型変化に現れる２種類の手型にどのような関係があるかを調べた。その結果、音素レベルでは、理論的に可能な12種類のうち、以下のような５種類の手型変化パターンが存在することが分かった。①開→閉、②閉→開、③開→曲、④開→折、⑤折→開。音声レベルでは、①～⑤以外にいくつかの手型変化パターンが認められたが、それらすべては、同化等により説明可能であることが分かった。

４）「手の構え」（手型、掌の向きと中手骨の方向の組み合わせ）について調査

「手の構え」について、タイプ０、１、３を調べた。掌の向きと中手骨の方向の組み合わせは理論的には複数存在するが、適格音節 DB に登録された音節では、理論的に可能な組み合わせの一部しか存在が認められなかった。一般に、タイプ０は、「手の構え」の構成に関与する「手型」・「掌の向き」・「中手骨の方向」の組み合わせに関する制限は強くないと思われているが、実際には、タイプ０で許されるこれら３要素の組み合わせの可能性は、他のタイプと大きく変わらないことが明らかとなった。

５）日本における手型音素の抽出・確定を行うため、異音を音素にまとめる作業

日本手話における手型音素の抽出・確定作業を行った。日本手話には50余りの異なった手型が存在することが今までの研究で分かっているが、これらは音声的手型であり、手型音素の数は50個よりも少ないと想定され

る。日本手話の手型音素を確定するため、異音を音素にまとめる作業に着手した。たとえば、これまでO（オー）手型は音素手型として存在すると一般的に考えられてきた。しかし、O手型とS手型の分布を調べたところ、両手型はお互いに対立の関係にないケースが多く、両者は同一音素の異音である可能性が明らかとなった。

上記の研究成果（またはその一部）は、以下の研究費助成を受けている。

1．科学研究費（基盤研究（B））「音節構成要素の組み合わせに基づいた日本手話音節の適格性について」（研究代表者：原　大介）
2．科学研究費（基盤研究（S））「多用途型日本手話言語データベース構築に関する研究」（研究代表者：長嶋祐二教授（工学院大学））
3．科学研究費（挑戦的研究（萌芽））「手話言語版MLAT（現代言語適正テスト）の開発と活用」（研究代表者：中野聡子講師（大阪大学））
4．科学研究費（基盤研究（C））「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（研究代表者：相良啓子特任助教（国立民族学博物館））
5．科学研究費（基盤研究（B））「学術手話通訳者を対象とした日本手話習得再教育プログラムの開発」（研究代表者：中野聡子講師（大阪大学））

◎出版物による業績

［論文］

Hara, D. and M. Miwa

2020　The well-formedness and the ill-formedness of the JSL type-III syllable.　In Eren, ö. et al.（eds.）*Proceedings of the Fifty-fifth Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp.205–220. Chicago, IL: Chicago Linguistic Society.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年９月11日　（Hara, D., M. Miwa, and I. Yuhara）'Extrametricality of the Initial Location in the Type-III Syllable of Japanese Sign Language.' 28th Japanese/Korean Linguistics Virtual Conference（JK28), Online

2020年９月25日～10月２日　「日本手話の音素配列論――音節の適格性・不適格性」『手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020／SSLL2020』オンデマンド講演配信

2020年10月４日　「日本手話の音素配列論――音節の適格性・不適格性」『手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020／SSLL2020』オンライン質疑応答セッション

2021年３月１日　（西牧樹生・堀内靖雄・原　大介・黒岩眞吾と共同発表）「日本手話における手の位置の音素に関するモーションキャプチャによる分析」第91回言語・音声理解と対話処理研究会、オンライン開催

2021年３月30日　「日本手話における手型音素とその異音」電子情報通信学会リアルタイムコミュニケーション言語（LARC）第３種研究会第16回研究会、オンライン開催

■人類文明誌研究部

小長谷有紀［こながや　ゆき］―――― 教授

1957年生。**【学歴】**京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）**【職歴】**京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第１研究部助手（1987）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009–2011）、人間文化研究機構理事（2014）、国立民族学博物館客員教授（2019）**【学位】**文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学**【所属学会】**国際モンゴル学会、日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

［単著］

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ――変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書９）京都：臨川書店。

［編著］

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」――緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀――社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

【受賞歴】

2016 第３回ゆとろぎ賞

2015 モンゴル国科学アカデミー 名誉博士

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル、中央・北アジアの遊牧文化の人類学的研究

・研究の目的、内容

これまで「社会主義的近代化とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」以前の映像記録を用いて、グローバルな関係性の束を復元し、より多角的に地域像を描くことを目的とした。具体的には、19世紀から20世紀にかけて実施された、布教・軍事・商業・学術など多様なエクスペディションの記録写真を整理し、デジタル地図によるルートの統合を試みた。

・成果

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」により、ハンガリー、ポーランド、ロシア、モンゴル、スウェーデンなどで資料整備にあたっている研究者たちの協力を得た。また、鳥取大学乾燥地研究所の共同研究を申請し、古い写真から環境変化を読み解くという資料分析も行った。具体的な業績としては、論文２件、書籍２件。

◎出版物による業績

［単著］

Konagaya, Y.

2020 *Mongolian Propaganda Posters(1920s-1980s)*.（in Mongolian and English）Tokyo: Texnai.

［編著］

Konagaya, Y.(ed.)

2020 *Cultural Treasures related to the History of Mongolia in Japan*.（in Mongolian and English）Ulaanbaatar: International Association for Mongol Studies.

Юки Конагая, Наталия Симукова（eds.）

2021 *Исследователь Монголии А. Д. Симуков: письма, дневники, документы*（Senri Ethnological Reports 151）. Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

小長谷有紀

2021 「モンゴルにおける木材利用――19世紀末から20世紀初頭にかけての写真記録から」『日本とモンゴル』141：76-101。

2020 「モンゴルで撮影された写真の歴史（1880-1930）」『国立民族学博物館研究紀要』45(3)：517-567。

Konagaya, Y.

2020 （同上論文の英訳）Expedition Photographs of Mongolia（1880-1930）.

https://historicimages.mn/sites/default/files/2021-02/Y_Konagaya_Expedition%20Photographs%20of%20Mongolia%20%281880-1930%29_1.pdf

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年11月14日　「モンゴル写真コレクションの横断分析――犬と葬儀」草原考古学研究会

2020年12月５日　「古写真を用いた環境問題研究」鳥取大学乾燥地研究センター共同研究年次報告会

・みんぱくゼミナール

2020年９月19日　「梅棹忠夫に学んだ知的生産の技術」第502回みんぱくゼミナール

・展示

2020年９月３日～12月１日　梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」実行委員長、国立民族学博物館

2021年１月13日～３月14日　京都大学／特別展 梅棹忠夫生誕100年記念「知的生産のフロンティア」実行委員

◎調査活動

・国内調査

2020年11月17日～11月23日―徳島県徳島市（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館にて、鳥居龍蔵による内モンゴル調査に関する写真ならびに資料について、整理作業を行った）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「スウェーデンモンゴルミッションの研究」（研究代表者：都馬バイカル（桜美林大学））研究分担者、鳥取大学乾燥地研究センター共同研究「古写真を用いた環境問題研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

2021年１月25日～28日　東北大学環境科学研究科「環境文明論Ⅱ」集中講義

・他の機関から委嘱された委員など

NPO 法人モンゴルパートナーシップ研究所理事長

特別客員教員

■人類基礎理論研究部

辻　邦浩［つじ　くにひろ］―――― 教授

1965年生。**【学歴】**京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了（1994）**【職歴】**Kunihiro Tsuji Design 代表（1996－現在）、未来社会をデザインする会（2025年万国博を考える会）代表（2018-現在）、東京大学空間情報科学研究センター協力研究員（2018-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2018-現在）**【学位】**博士（理学）**【専攻・専門】**サービスデザイン、音響空間デザイン、環境デザイン、デザイン人類学**【所属学会】**ヒューマンインターフェイス学会

【主要業績】

2010　上海万博大阪館（Water Speaker 展示）

2008　スペイン・サラゴサ万博日本政府館（音響デザイン・Water Speaker 展示）

2007　ミラノサローネ　Water Speaker 個展

2006　ミラノサローネ　MODAL Speaker 個展

2002　フランス・ビエンナーレ「Biennale Internationale Design Saint-Etienne」（日本代表選出）

【受賞歴】

2016　ヒューマンインターフェイス学会研究会賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

次世代型展示案内システムの構築とサービス研究

・研究の目的、内容

応用可能なプラットフォームに関する研究をおこなう。

内容として

・運用開始初期の検証とシステム動作安定に向けての修正箇所の抽出を行い、システム動作のブラッシュアップを行う。

・システム動作の安定化を進めると共に、初期実装サービス各項目の体験プロセスにおける検証を行い、よりスムーズでストレスのない体験プロセスの修正を検討する。

・初期実装サービスに加えて、今後の新しい機能や使いやすさをユニバーサルデザインの観点から検討する。

・電子ガイド（館内）→ビデオテーク（館内）→家庭内学習（PC など）→電子ガイド（館内）の学習サイクルの教育工学とサービスに関する研究を行う。

・次世代型展示案内システムの館外エリア・施設連携に向けてのプラットフォーム化に関する研究を行う。

・成果

次世代型展示案内システムの初期実装サービスを検証する中で、実装されていなかった、視覚障害者や高齢者向けのインクルーシブなユニバーサルデザイン観点からのサービスを検討した。

　このことにより全ての利用者に、より使いやすい機能を実現するためにパナソニックと共同で研究を進め、ユニバーサルミュージアム実現のための次世代展示案内システムと連携する次世代小型モビリティでのスムーズな館内移動案内や、館外エリア連携サービスを実現するための共同研究を具体的な実証も含めての推進体制を構築した。

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

武居　渡［たけい　わたる］——教授

1971年生【学歴】筑波大学第二学群人間学類卒（1994）、筑波大学大学院心身障害学研究科中途退学（1999）【職歴】金沢大学教育学部講師（1999）、金沢大学教育学部助教授（2002）、金沢大学教育学部准教授（2007）、金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授（2008）、金沢大学人間社会研究域学校教育系（2014-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2017–現在）【学位】博士（心身障害学）（筑波大学2004年）【専攻・専門】発達心理学・聴覚障害心理学【所属学会】日本特殊教育学会、日本発達心理学会、日本手話学会、日本コミュニケーション障害学会、日本聴覚言語障害学会

【主要業績】

［論文］

武居　渡

2016 「聴覚障害児教育をめぐる環境の変化とろう学校の課題（特集 特別支援学校における現状と教育要求）」『障害者問題研究』44(1)：26–31。

2012 「言語を作り出す力――ホームサイン研究・手話研究を通じて見えてくるもの」『ENERGEIA』37：1–15。

2008 「手話研究の現状と展望――手話研究が言語獲得研究に貢献できること」『認知科学』15(2)：289–301。

【受賞歴】

2010　博報児童教育振興会第４回ことばと教育　研究助成事業　優秀賞

2002　日本発達心理学会第11回論文賞

2001　日本特殊教育学会研究奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

高等教育機関・学術機関における学術手話通訳者養成のしくみの研究

・研究の目的、内容

本研究は、学会や大学の講義など高度な専門的知識を日本語から手話、または手話から日本語へと通訳できる手話通訳者の養成プログラムを開発し、実施することを通してそのプログラムの妥当性を検証するものである。その中でも、通訳者の手話能力を客観的に測定するテストは現在我が国に存在していない。そこで、昨年度に引き続き今年度も、学術手話通訳者養成のスクリーニングや手話学習者の手話能力を客観的に測定できる方法を開発するための基礎資料を得ることを目的とし、手話語彙力を評価する日本手話版WFT課題（Word Fluency Test: 語彙流暢性課題）と日本手話文の模倣課題を実施し、その関連性について検討を行った。

・成果

昨年度実施した日本手話を日常的に使用している成人ろう者７名に加え、新たに手話学習者７名に対して、研究実施者が作成した日本手話版WFT課題を実施した。カテゴリー流暢性課題が５問と音韻流暢性課題５問を７名の被験者に実施し、各問１分間に表出できた手話語彙数をカウントし、その合計をその被験者の語彙力得点とした。またあわせて、様々な文法マーカーを含む10から16語からなる日本手話文を提示し、被験者に即時模倣をさせ、刺激文と模倣した文の比較を行った。また、WFT課題と日本手話文即時模倣課題の成績を比較し、手話力を測定する課題としての妥当性について検証を行った。その結果、WFT課題と日本手話即時模倣課題の成績間でやや相関があると判断された。ただし、被験者の年齢が40を超えると、記憶や処理速度が下がってくることが考えられ、これらの成績には手話力のみならず、認知能力の影響についても今後検証していくことが課題として挙げられた。

本研究で得られた研究成果について、2020年９月に行われた日本特殊教育学会第58回大会で発表を行った。また2020年７月にオーストラリア・ブリスベンで行われる予定であったInternational Congress on the Education of the Deafが１年延期となり、2021年７月にオンラインで開催されることとなり、そこで研究成果について発表を行う予定である。

なお、本研究は、科学研究費（基盤研究（C））「聴覚障害児の手話力を評価する総合的アセスメントパッケージの開発」（研究代表者：武居　渡）の助成を得て行われた。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年９月19～10月20日　「日本手話版語彙流暢性検査の開発（３）――欧米の手話語彙流暢性課題の結果との比較から」日本特殊教育学会第58回大会、オンライン開催

■人類基礎理論研究部

亀井哲也［かめい　てつや］――教授

1964年生。**【学歴】**金沢大学文学部卒業（1988）、埼玉大学大学院文化科学研究科修了（1992）**【職歴】**野外民族博物館リトルワールド学芸研究員（1993）、中京大学現代社会学部教授（2013）**【学位】**文化科学修士（埼玉大学大学院文化科学研究科　1992）**【専攻・専門】**文化人類学、**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、日本展示学会

【主要業績】

［論文］

亀井哲也

2020　「ンデベレの娘たち――南アフリカの成女儀礼と恋愛、そして……」和崎春日編『響き合うフィールド、躍動する世界』pp.552-569，東京：刀水書房。

2018　「ンデベレ壁絵文化の海外発信」『民族藝術』34：163-170。

2016　「アフリカの博物館――南アフリカの野外博物館を中心に」稲村哲也編『新訂 博物館展示論（放送大学教材）』pp.270-287，東京：放送大学教育振興会。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカにおける文化資源と民族意識に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、国民国家、民族、地域共同体などさまざまな集団の「われわれ」意識醸成のために、そのアイデンティティを育み、文化資源とされる諸文化事象を選択・表象している様相を、アフリカの事例を通じて文化人類学的に明らかにしようとするものである。具体的には、壁絵をはじめとする装飾文化を自らのシンボルとしている南アフリカ共和国のンデベレ社会を研究対象とする。ンデベレが政治経済的状況のもとアイデンティティを醸成する過程を文化運動として動態的にとらえ、ンデベレの物質文化のもつ力を、近年議論が活発な物質文化研究がもたらしたアプローチから検証し、新たな視座を見いだそうとする目的をもつ。

・成果

新型コロナウイルス感染症の影響で、計画していた南アフリカのンデベレでのフィールドワークは実施できなかった。そのため、これまで本務校の中京大学の学部教育カリキュラムの中で実施してきたンデベレ文化に関する学びと、そのアウトプットとしての大規模なンデベレ文化の常設展示を有する野外民族博物館リトルワールドに対する成果還元に関して、「大学教育と博物館展示の協働――ンデベレ文化を教材として」という論稿をまとめ、中京大学先端共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト（編）『中京大学文化科学研究叢書22　大学教育と博物館』として、2021年３月30日に出版した。また同書においては「大学博物館の役割――Beyond 'Town and Gown'」という論稿を執筆し、南アフリカのヨハネスブルグにあるウィットウォーターズランド大学付属美術博物館の事例を取り上げている。

外部資金に関しては、2020年10月に採択された国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人類学における芸術研究の刷新――イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化」の研究分担者となった。本科研ではンデベレの事例からイメージが生み出す社会関係の研究を進めるが、それは本研究の主眼とする文化資源と民族意識の研究に合致するものである。

◎出版物による業績

［論文］

亀井哲也

2021 「大学教育と博物館展示の協働――ンデベレ文化を教材として」中京大学先端共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト編『大学教育と博物館』pp.21-67，名古屋：ユニテ。

2021 「大学博物館の役割―― Beyond 'Town and Gown'」中京大学先端共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト編『大学教育と博物館』pp.131-162，名古屋：ユニテ。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2021年３月７日 「世界をつなぐオンラインチャレンジ 1920 アントワープオリンピック物語」長久手市国際交流協会

2021年３月21日 「公開座談会 "おそれ" をめぐる人類学 アフリカの "おそれ"」野外民族博物館リトルワールド

・展示

2020年９月29日～2021年１月19日　中京大学スポーツミュージアム特別企画展「多様性に向けたオリンピックの歩み」中京大学スポーツミュージアム

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人類学における芸術研究の刷新――イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、野外民族博物館リトルワールド学芸顧問、中京大学スポーツミュージアムアドバイザー

■学術資源研究開発センター

大坂　拓［おおさか　たく］―――― 准教授

1983年生。**【学歴】**明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業（2006）、明治大学大学院文学研究科博士前期課程修了（2008）、明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（2011）**【職歴】**宮城県教育庁文化財保護課（2011）、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究職員（2015）**【学位】**修士（考古学）（明治大学大学院 2008）**【専攻・専門】**考古学**【所属学会】**日本考古学協会、考古学研究会、北海道考古学会

【主要業績】

［論文］

大坂　拓

2020　渡島半島のアイヌ社会と民具資料収集者の視野――旧開拓使函館支庁管轄地域を中心として」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5：47–80。

2020　北海道アイヌの葬送用広紐に関する基礎的検討――製作技術の地域差と日高東部地域における東方系・西方系出自集団との関係」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5：23–46。

2018　「アイヌ民族の編袋――地域差と年代差、及び「土産物」・「伝統工芸品」としての継承』4：25–60。

【受賞歴】

2015　北海道考古学会奨励賞

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

近現代におけるアイヌの物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

日本国内各地の博物館等に所蔵されるアイヌ民具資料について、収集された品目の傾向を地域・年代毎に検討することにより、急速な和人の流入の中で生じた文化変容の進展過程に内在した地域的変異を明らかにできるとの見通しを持っている。

本年度は、伝統的に高い価値付けがなされ、富の象徴として蓄積されていた漆器に着目し、背景情報を伴う資料群の集成と分類を行い、各地域の資料群の組成から資料群の形成過程、流通ルートの変遷を明らかにすることを目指した。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、北海道全域を対象とする調査の実施が困難となったため、対象を北海道南部後志地域に限定し、品目を限定せずに民具資料を集成し、品目の通時的な傾向を明らかにすることとした。

・成果

後志地域については、前年度までに各地に収蔵されている民具資料の調査がほぼ終了していた。本年度は補足的な調査に加え、資料のバックデータを補うための文献調査を実施したほか、民具資料収集時のアイヌ民族の生業を復元するため、北海道立文書館が所蔵する開拓使札幌本庁及び札幌県、北海道庁の公文書を渉猟した。

その結果、第一に、収集された民具資料の大部分がkikeuspasuy（有翼酒箸）、inaw（木幣）、ciros（花矢）等の特定の品目に著しい偏りを示すことが確かめられた。この点は、後志地方のアイヌ民族が近世後半期以来の和人の流入により、和人社会から「同化」の進行度が比較的高いものと見なされていたため、1930年代に名取武光らにより全道的に網羅的な収集が試みられた品目を除けば、積極的な資料収集の対象とされていなかったことに起因するものと考えられる。第二に、生業関係資料は、弓矢猟を示す矢筒、海獣狩猟を示す銛先が含まれていたが、公文書の調査からは、この地域では明治期に毒矢猟が禁止され、大正期には狩猟具の中心は猟銃に移り変わっていたこと、生業の中心は一貫して鰊漁であったことが明らかになった。この齟齬については、和人の技術を大きく取り入れた銃猟や鰊漁は研究者の埒外にあったことに由来するものと判断された。

以上の成果は、研究論文「後志地方の近代アイヌ社会と民具資料収集の射程――旧開拓使札幌本庁管下後志国９郡を対象として」（『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第６号）としてまとめた。

関連資料の調査にあたっては、科学研究費（若手研究）（18K12558）「考古学的分析手法を導入した博物館収蔵アイヌ民具資料の基礎的研究」を使用した。

◎出版物による業績

［論文］

大坂　拓

2021 「後志地方の近代アイヌ社会と民具資料収集の射程――旧開拓使札幌本庁管下後志国９郡を対象として」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6：1-49。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年10月14日　「製作技術から探るアイヌの編物――刀帯と荷縄」釧路市立博物館企画展「織る×編む シタイキ・オシケ・テセ――釧路地方に伝わるアイヌ女性の手仕事」関連講演会

2020年10月17日　「岩宇地域のアイヌ文化誌」木田金次郎美術館企画展「アイヌ語地名と木田金次郎」関連行事

◎調査活動

・国内調査

2020年６月３日　北海道厚真町教育委員会所蔵アイヌ民具資料調査

2020年７月７～８日　北海道根室市歴史と自然の資料館所蔵アイヌ民具資料調査

2020年７月19日　北海道浦幌町立博物館所蔵アイヌ民具資料調査

2020年８月28日　小樽市総合博物館所蔵文書史料調査

外国人研究員

RAVINDRAN, Gopalan［ラヴィンドラン ゴーパーラン］―― 教授

任期：2020年１月31日～2020年４月15日

研究課題：民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

【学歴・学位】パッチャイヤッパ大学植物学部（1980）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部修士課程終了（1982）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部哲学修士課程終了（1984）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部博士課程終了（1991）**【職歴】**マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部講師（1984）、名古屋大学大学院国際開発研究科外国人客員研究員（1993）、マノンマニアム・スンダラナル大学コミュニケーション学部准教授（1995）、マレーシア大学コミュニケーション学部講師（2002）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部教授（2008）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部学部長（2008）**【学位】**博士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1991）、哲学修士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1984）、修士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1982）**【専攻・専門】**コミュニケーション学

【主要業績】

［論文］

RAVINDRAN, G.

2018 Human Rights and Contemporary Indian Journalism: Towards a “Journalism for People.” *Human Rights Education in Asia-Pacific* 8(1): 181-196.

2017 Philosophical and Anthropological Explorations of Digital/New Media Materialities, *Mizoram University Journal of Humanities and Social Sciences* 3(2): 1-7.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

・研究の目的、内容

ゴーパーラン・ラヴィンドラン教授は、「民衆のためのジャーナリズム」journalism for the peopleの取組みの一つとして、ダリット（不可触民）の伝統的な太鼓をもとに創られた新しい音楽ジャンル（タッパーッタム）の調査研究を進めるとともに、この演奏を学生パフォーマンスグループの活動に取り入れ、カーストによるイ

ンド社会の分断を乗り越えるための挑戦的な活動を継続している。民博での招聘期間中、比較研究を目的として、大阪の被差別部落で結成された和太鼓集団の活動の調査を行った。両者は、偏見や差別の対象となった楽器を戦略的に用いて創られた新しい表現形式である点や、解放に向けた政治運動と一定の距離を保ちながらも、音楽を媒介とした新しい社会運動の形を模索している点などで共通している。ラヴィンドラン教授は両者の類似点と差異を、コミュニケーション学の観点から検討し、その成果を延期となった特別研究の国際シンポジウムに反映させる計画である。なお、新型コロナ感染症の流行にともなうインドのロックダウンにより、当初の予定通りに帰国することがかなわず、2020年６月22日まで日本に滞在した。

・成果

同教授は、民博特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」の国際研究協力者として、2020年３月開催の国際シンポジウム Performing Arts and Conviviality で研究発表を行う予定であった。民博滞在中は、受入教員および特別研究代表者の寺田吉孝教授、特別研究の国際研究協力者であるサミュエル・アラウジョ教授とともに、特別研究プロジェクトのテーマや研究の進め方について議論を重ね、特に太鼓音楽と共生というテーマにかかわるセッションの組織に大きく貢献した。延期された国際シンポジウムが実現した際には、再度コーディネーターとして中心的な役割を果たすことが期待される。

阮　雲星［ゲン　ウンセイ］ ―― 教授

任期：2021年２月１日～2021年11月20日

研究課題：AI時代の文化遺産とコミュニティ――日本と中国における文化遺産の比較研究

【学歴】福建師範大学政治教育学部卒（1984）、北京大学哲学学部（西洋哲学史・助教研修班）准修士課程修了（1986）、京都大学大学院法学研究科修士課程修了（1995）、京都大学大学院法学研究科博士課程終了（2004）**【職歴】**福建師範大学政治教育学部助教（1984）、平安女学院大学国際コミュニケーション学科非常勤講師（2000）、天理大学国際文化学部非常勤講師（2002）、浙江大学公共管理学院政治学学部准教授（2004）、国立民族学博物館外国人研究員（2010）、浙江大学政治学学部／社会学学部教授（2010）**【学位】**法学博士（京都大学大学院法学研究科 2004）**【専攻・専門】**文化人類学（政治・文化遺産・サイボーグ人類学）

【主要業績】

［単著］

Ruan, Y.

2005 *Chinese Lineage and Political Culture: A Political-Anthropology Monograph of Contemporary Yixu Village in Eastern Fujian,1930-2000.*（in Japanese）Tokyo: Sobunsha.

［編著］

RUAN, Y. and M. Han（eds.）

2011 *Political anthropology: Fieldwork and writing culture in Asia.*（in Chinese）Hangzhou: Zhejiang University Press.

［論文］

RUAN, Y. and G. Yingce

2005 Cyborg Anthropology: The Metaphor of Cybernetic Organism and Intellectual Knowledge Production in the Information Age.（in Chinese）*Open Times* 289: 162-175.

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

AI時代の文化遺産とコミュニティ――日本と中国における文化遺産の比較研究

・研究の目的、内容

AIやゲノム編集などが象徴するデジタル技術は、人間の社会と文化を根底的に再構造化しつつある。本研究は、目下の民博特別研究の問題意識と共有し、人類学的文化遺産の担い手の価値観を重視する当代の文化遺産論を批判的に継承しながら、今日の科学技術社会化の新現象に潜むサイパネッチクス原理を洞察し、ポスト・ヒューマリティを視野にパラダイムシフトをも探究するサイボーク人類学的な研究の試みを目的とする。東アジアにおけるデジタル文化遺産について事例研究をおこない、文化遺産論のパラダイムシフト構想をも理論的

に検証する。

具体的に言えば、日中のデジタル博物館（「民博フォーラム型情報ミュージアム」と「杭州工芸美術博物館のデジタル博物館」）実践及びデジタルコミューニティの新現象（「阿寒アイヌコタン」と「浙江省景寧ショオ族村」）をフィールドワークして、その実態を明らかにしながら、それぞれの事例の論理をも比較検証する。さらに、サイポーク人類学的な理論構想及びその省察的な知的生産における「本質的緊張」の同定をも検討する。

SHI, Yingxi［シ エイシン］ 准教授

任期：2020年４月１日～2020年９月１日

研究課題：法会計制度移転における文化問題

【学歴】西安建築科技大学（中国）機械工学部（1990）、大阪府立大学社会福祉学部研究生（1997）、大阪大学国際公共政策研究科修士課程修了（1999）、大阪大学国際公共政策研究科博士課程修了（2002）**【職歴】**西安建築科技大学（中国）機械工学部助手（1990）、大連民族大学（中国）経済管理学部講師（2003）、大連民族大学経済管理学部（中国）副教授（2013）**【学位】**博士（公共政策 2002年）**【専攻・専門】**公共政策

【主要業績】

［分担執筆］

師　穎新・丁穎・韓　松花

2016 「中国の医療改革」本間正明監修『医療と経済』pp.407-422, 大阪：大阪大学出版会。

［論文］

Shi, Y. and M. Fukushige

2015 Long-Run Fiscal Multiplier for Autonomous Prefectures in China. *Pacific Economic Review* 20(5): 687-695.

師　穎新・窦悩

2014 「中国風力発電産業の規模と効率性について――内モンゴル自治区を例として」（中国語）『大連民族大学学報』16(2)：122-125。

【2020年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

法会計制度移転における文化問題

・研究の目的、内容

来日から新型コロナウイルスの影響で、研究の手法を完全にオンラインに依存しながら、政策や経営に係る民博共同研究の「会計学と人類学の融合」、「聖空間の経営人類学的研究」研究レビューとフォローアップを実施した。さらに、国際シンポジウム「東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化――普遍性と個別性」の企画通じ、中国台湾の研究者とウェブ会議アプリなどを駆使して準備を行った。

国際シンポジウムは、当初、リアルで実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響でオンラインに切り替えた。さらに、実施直前に、中国でのウェブ会議アプリ使用に制限がかかったことから、急遽、当初予定の半分のパネリストでの実施となったが、全体の企画を行いえた。

また、当初予定していた、中国展示チームの展示高度化については、新型コロナウイルスの影響で実施できなかった。

・成果

2020年８月28日に国際シンポジウムを行い、「Invoiceの文化性」と題する報告が行われました。報告では、中国の付加価値税のインボイスを主な調査対象とした。中国における請求書の歴史的進展の分析を通じて、請求書の背後にある法的、会計、文化的要因の包括的な研究が行われました。EUのVATと日本の消費税請求書管理とその最新の動向と比較して、請求書関連の犯罪と非営利組織に対する請求書管理システムの影響も分析します。最後に、eコマースやブロックチェーンなどの新技術の台頭がインボイス・システムに与える可能性ある影響を分析し、世界中のほとんどの国とは異なり、中国のインボイスは取引証明書であるだけでなく、国の税務管理の重要な責任も負っていることがわかった。そのうえでインボイス管理における管理手段の強化は、一方では税務管理を強化し、他方では「不正取引」の脅威に直面している。

このように各国に導入されている付加価値税・消費税などのツールに中国の管理国家としての文化性が表れていることを明らかにした。

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は「特別研究」「共同研究」「各個研究」という３種類の研究を柱としている。

「特別研究」は、2016年度から始まった第３期中期計画・中期目標期間の６年間を通じて、「現代文明と人類の未来――環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の１つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。

特別研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。

すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、採択される。共同研究会（一般）には、文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広いテーマを対象とし、挑戦的で、新領域開拓につながる研究である「新領域開拓型」と、本館の所蔵する資料（標本資料、文献資料、映像音響資料等）に関する研究である「学術資料共同利用型」の２つのカテゴリーがある。また、若手研究者の育成・支援を目的として、39歳以下の若手研究者を代表者とする共同研究（若手）も同様に公募している。

「各個研究」は、教員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

館の研究活動である「特別研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者には「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、特別研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、特別研究プロジェクト、26件の共同研究、約70件の各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。研究に客観性を担保していくためにも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による奨学寄附金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2020年度には『国立民族学博物館研究報告』45巻１号～４号が刊行されるとともに、SES（Senri Ethnological Studies）No. 103,104,105,106、SER（『国立民族学博物館調査報告』またはSenri Ethnological Reports）No.151,152、TRAJECTORIA Vol. 2、『民博通信 Online』No.2,3が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を開催している。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有しかつ後世に伝えるため、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。特に2014年度より、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の蓄積、発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度の2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する４件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する２件のプロジェクトが加わり、合わせて６件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。３年目となる2016年度から人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけられ、３件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト７件、合計11件のプロジェクトを実施した。2018年度は、４件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト

４件、強化型プロジェクト５件、合計９件のプロジェクトを実施した。2019年度は、３件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト６件、合計10件のプロジェクトを実施した。2020年度は、３件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト３件、強化型プロジェクト８件、合計11件のプロジェクトを実施した。各プロジェクトが本館の収蔵資料のソースコミュニティなどと協働してデジタル博物館の構築を促進する取り組みを実施したことにより、本事業によって構築されたデータベース・コンテンツの格納件数が、93,763件（1,912,693レコード）となった。研究成果の公開促進を目的として、2018年度より新設した国際発信プログラムにより、『国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集』を１冊刊行した。開発型プロジェクトでは、国際ワークショップ「Fishing and Material Culture in Maritime Asia」をオンラインで開催した。また、構築した４つのデータベースの公開を進め、プロジェクト全体の成果の国際発信と一般社会への発信に尽力した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく４分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は海外直接収集資料としてカナダのトーテムポール、国内購入資料として日本の伝統芸能衣装、アイヌの工芸品資料を収蔵した。また、日本の友禅振袖、モンゴルの生活関連資料、アイヌの木彫資料等を寄贈受入した。

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一時的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊分析・材質分析装置システムを所有している。このシステムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、共同利用科学分析室を運用している。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2020年度は、マイクロ資料2,687件（図書2,562件、新聞雑誌４タイトル125件）を登録した。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internetを介して広く公開・利用されており、2020年度は、図書館間相互利用での現物貸借受付が542件、文献複写受付は3,714件と、大学間の共同利用に貢献している。また、一般利用者への貸出冊数は1,076冊であった。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、民族学資料（標本資料、文献図書資料、オリジナル映像・音響資料、研究アーカイブズ資料）の利用に関する問合せを１つの窓口で対応することで、サービス向上を図っている。2020年度には156件の問合せに対応した。

また、蔵書点検３カ年計画の３年度目として、約22万冊の蔵書の点検を行った。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2020年度は引き続き資料の整理作業を行い「杉浦健一アーカイブ」、「菊沢季生アーカイブ」、「岩本公夫アーカイブ」の資料追加寄贈を受入れた。

また、アーカイブズ文書資料の特殊性に鑑み、複写にあたっては申請者の研究内容との関連性等を総合的に判断した上で許可することや、複写の申請は原則として来館時に限ること等を明記することとして、規程の改正を行った。さらに、近年国外からの来館者の利用申請が増加傾向にあることを踏まえ、利用申請書及び同意書の英語版を作成した。加えて、本館が大学共同利用機関として資料を適切に利用させるために、資料の利用方法について著作権者と確認する様式の検討を行った。

2-1　みんぱくの研究

特別研究

●特別研究の意義

特別研究は、2016年度から始まった第３期中期計画・中期目標期間の６年間を通じて、「現代文明と人類の未来――環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

近現代のヨーロッパに発する科学・技術、政治・経済制度、社会組織、思想などからなる西欧文明は、世界の多くの国と地域に影響を与え、科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきた。しかし、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言える。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題である。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直し、現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として特別研究を発足させた。この特別研究は、グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代的問題系として環境問題や人口をめぐる地球規模の変動をとらえ、それにアプローチすることで、旧来の

（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざすものである。

2020年度は、前年度に立ち上がった、「文化遺産とコミュニティ」に関する研究プロジェクトにおいて、国際シンポジウムを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大状況と、参加国・地域との時差等を考慮し、合計５回の連続ウェブ研究会「文化遺産実践における身体とモノ――集合的健忘に抗するための文化伝達」（2021年２月13日～３月13日）を実施した（参加者合計474名）。

2018年度に立ち上がった「マイノリティと多民族共存」に関する研究プロジェクトにおいては、2020年３月に開催予定であった「Performing Arts and Conviviality」と題する国際シンポジウムを2021年３月に実施予定であったが、参加予定者等との協議の結果、さらに次年度に延長することし、2020年度はその準備に向けた研究会 “Inaugural Zoom Meeting of the Special Research Project, Performing Arts and Conviviality” を2021年３月６日に開催した（参加者31名）。

また、2016年度に策定したロードマップに沿って、「文化衝突と多元的価値」をテーマとする研究プロジェクト「グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？」を新たに立ち上げ、本テーマに関する公開講演会「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」を開催した。

更に、2020年度は、館長リーダーシップ経費により、新たに緊急枠として「現代文明と感染症」を設置、プロジェクトリーダーを館内募集した結果、島村准教授をプロジェクトリーダーに選考し、研究プロジェクト「コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に」を立ち上げ、次年度の国際シンポジウム開催を企画した。

他、研究成果の国際発信に向けて、英文での成果刊行の準備を進めている。

2020年度特別研究一覧

リーダー	プロジェクト名	テーマ区分	研究年度
福岡正太	パフォーミング・アーツと積極的共生	マイノリティと多民族共存	2018-2022
飯田　卓	デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	文化遺産とコミュニティ	2019-2021
西尾哲夫	グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？	文化衝突と多元的価値	2020-2022
島村一平	コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に	現代文明と感染症	2020-2022

●特別研究のテーマ区分とプロジェクト

１．テーマ区分：⑤　マイノリティと多民族共存

プロジェクトリーダー：人類基礎理論研究部　福岡正太

研究課題：パフォーミング・アーツと積極的共生

研究目的

共生は、可視的な差別は概ね解消されているが、集団間の忌避感や偏見が残る「消極的な共生」と、お互いの文化的特性・差異を認め、尊敬の念を抱けるような「積極的な共生」に分けることができる。本プロジェクトは、音楽・芸能などに代表されるパフォーミング・アーツが「積極的な共生」を実現するために果たしうる役割と可能性を探ることを目的とする。ここで言うパフォーミング・アーツとは、音楽、舞踊、芸能、演劇はもとより博物館・美術館における体験型インスタレーションなど、身体を活動の基盤とする幅広い活動をさす。元来、パフォーミング・アーツは、身体を媒体とし視覚中心的な認識体系を超える（とは異なる）人間の知覚・思考形態に作用すると考えられ、人間の感情に大きな影響を与えることが報告されている。しかし、その一方で、パフォーミング・アーツのもつ感情に作用する力が、偏狭な国家主義、民族主義、性差別主義などの表現として利用されてきたことも事実である。そこで、本プロジェクトでは、パフォーミング・アーツが「積極的な共生」の達成に寄与する枠組みや条件を、具体的な事例の蓄積とそれらの比較検討から探りたい。

人間の集団は、その規模や地域に関わらず、民族、宗教、言語、政治的信条、経済階層、年齢、ジェンダー、セクシュアリティなど様々な指標（徴）により区別されており、そのように区別される集団間には、力の不均衡

が存在することが多い。この中で劣位におかれた集団（マイノリティ）の文化や歴史は、彼らが居住する国家や地域などの公的な文化表象や教育から排除される傾向がある。そのため、マイノリティが音楽や芸能に自己表現や主張の場を求める例がこれまでに数多く報告されてきたが、パフォーミング・アーツと共生の関係をテーマにした研究は数少なく、また地域的にも限定的であった。本プロジェクトでは、世界各地で関連するプロジェクトを展開する研究者や活動家の参加をつのり、パフォーミング・アーツを「積極的な共生」実現に向けた具体的な方策としてとらえる総合的な研究を目指す。

実施状況

2020年３月19日～22日に開催を予定していた国際シンポジウムが新型コロナウイルス感染症の広がりにより延期となったため、状況をみながら、国際シンポジウムの開催の可能性を探った。館内研究員である寺田吉孝名誉教授、国際共同研究員であるデボラ・ウォン教授（カリフォルニア大学リヴァーサイド校）、国際研究協力者サミュエル・アラウジョ教授（リオデジャネイロ連邦大学）と開催方法と内容について議論を深め、2021年３月にオンラインにて趣旨説明と基調講演を中心とした第１回研究会を開催した。その際、令和３（2021）年度には、３回（６月、９月、12月）のオンライン研究会をおこない、３月ごろに対面でのシンポジウムの開催を目指すことで意見がまとまった。

研究成果の概要

対面でのシンポジウムは、再度、延期せざるをえなかったため、期待された成果は次年度以降に持ち越すことになった。しかし、第１回オンライン研究を開催して趣旨説明と基調講演をおこない、全発表者と問題意識を共有し、今後のオンライン研究会およびシンポジウムで検討すべき問題点を整理することができた。

特別研究に関連した成果の公表実績

本研究プロジェクトを実施するきっかけとなったICTM（International Council for Traditional Music）のスタディ・グループ「音楽とマイノリティ」のシンポジウム（2014年、本館にて開催）の報告書 *Music and Marginalisation: Beyond the Minority-Majority Paradigm*（SES No. 105）を出版した。

２．テーマ区分：④文化遺産とコミュニティ
プロジェクトリーダー：人類文明誌研究部　飯田　卓
研究課題：デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ

研究目的

文化をめぐる第三の波が到来しつつある。第一の波は、ナショナリズムと結びついたかたちで文化遺産に関する枠組みができあがった19世紀末から20世紀初頭。第二の波は、産業資本主義への懐疑とともに文化の政治性が浮きぼりになった1970年代から1990年代。そして現在、ヒューマニティ（人間性）の概念をラディカルに問いなおすAIが登場し、ヒューマニティの最後の砦として文化が見直されはじめている。

これら３つの波は、一定時期を過ぎれば鳴りをひそめるといった類いのものではない。現にこんにち、第一の波によって問題化されたナショナリズムや、第二の波によって問題化されたアイデンティティ政治と文化との関係などが、なおも余韻を残しつつ第三の波と干渉し合っている。言いかえれば現代は、ナショナリティとローカル・アイデンティティ、ヒューマニティといった異なる価値に駆動されながら文化が躍動する時代だといってよい。

いっぽうで、文化が意味する範囲は相変わらず多様である。文化が時代を読み解く鍵になるとしても、その定義について合意がなされることは、当分のあいだないだろう。文学や美学が扱ってきた貴族趣味の芸術文化や、ロマン主義や文化人類学が扱ってきた生活様式としての文化、ならびにカルチュラルスタディーズが扱ってきた産業資本主義的なポピュラーカルチャー（文化）は、互いに響きあいながらそれぞれにリアリティを帯びている。ただし、第三の波を受けた現代においては、生活場面全般の行動様式という意味での文化は、相対的に存在感を弱めている。代わって存在感を強めているのが、さまざまな複製技術（VR技術など、デジタル技術に含まれないさまざまな技術も含む）によってパッケージ化され、アイコンとして流通しうる芸術文化やポピュラーカルチャーである。アイコン化になじみにくい行動様式としての文化は、現代では、無形文化遺産という名でパッケージ化されて流通する。このため文化人類学において議論されてきた生活文化は、文化遺産やそれを収める博物館といったテーマにおいてとりわけ先鋭的に問題化され、芸術文化やポピュラーカルチャーの問題に関わっている

のである。

本研究では、文化遺産の価値をめぐってくり広げられる社会関係からその特殊性や政治性を明らかにするとともに、それら文化遺産が現代的価値であるヒューマニティの代理／表象たりうるかどうか、言いかえれば、ローカルな文脈において生まれたはずの文化遺産が普遍性を持ちうるかどうかを議論する。ここでいう文化遺産は、ユネスコなどによって公的に認定されたものだけを指すのではなく、人間的な無形の営みを蓄積・反映した五感的表現は便宜的にすべて文化遺産とみなす。こうした文化遺産が、ナショナリティやローカル・アイデンティティのみならず、ヒューマニティをめぐる議論にも影響されながらいかなるふるまいを示すかを実証的に明らかにしていく。

実施状況

本年度は、前年度（2019年度）末の新型コロナウィルス感染症の副次的影響で普及したウェブ会議アプリを用い、４回の研究会を実施した。うち１回は前年度から延期されたものである。実施日と発表者、発表課題は以下のとおり。

５月30日　松田　陽（東京大学）　文化遺産の民主化と商品化と断片化
６月13日　關　雄二（民博）／ダニエル・サウセド・セガミ（立命館大学）　南米ペルー北高地の小村における文化遺産保護の試み
７月18日　田中英資（福岡女学院大学）　文化遺産と地域社会をつなぐ道
８月20日　中村真里絵（民博 外来研究員）　共有される地域の記憶と共有されない個人の記憶

いっぽうで本年度は、空前の感染症蔓延の影響により、対面的なシンポジウム開催とそのための打合せを中止せざるをえなかった。しかし、５回連続のウェブ研究会を開催することにより、結果的に、当初予定していたよりも多くの聴衆に研究発表を聴講してもらうことができた。研究会の統一テーマは「文化遺産実践における身体とモノ――集合的健忘に抗するための文化伝達」である。各回の実施日とテーマ、発表者と発表題目は以下のとおり。

第１回　記録メディアの継承　2021年２月13日
ニール・キャリア（ブリストル大学）　視覚遺産と都市
縄田浩志（秋田大学）　片倉もとこ中東コレクションの肖像権問題と写真アーカイブズ化
南 真木人（民博）　博物館とソースコミュニティの協同

第２回　モノの継承　2021年２月20日
アロミカ・バッタチャリャ（ペルーインド協会）　アフリカ系ペルー人による木製打楽器の音楽遺産化
吉田ゆか子（東京外国語大学）　バリの芸能の継承における仮面と衣装
佐藤若菜（新潟国際情報大学）　ミャオ女性における刺繍技術の伝承

第３回　デジタル技術をとおした継承　2021年２月27日
グラエム・ウェレ（ブリストル大学）　デジタル時代の文化継承
真鍋陸太郎（東京大学）　参加型コミュニティアーカイブのデザイン
飯田　卓（民博）　実社会における博物館資料の再生

第４回　学術活動をとおした継承　2021年３月７日
ジョン・ケイ（インディアナ大学）　次世代育成能力、遺産実践、高齢者福祉
松田　陽（東京大学）　日本の古墳の近現代史
ダニエル・サウセド・セガミ（立命館大学）／關　雄二（民博）　過去と現在の架け橋

第５回　実践と記憶の継承　2021年３月13日
カティ リンドストロム（KTH王立工科大学）　世界遺産登録は地域の再生産や継承実践を阻害するか？
田中英資（福岡女学院大学）　「われわれはリュキア出身のトルコ系牧畜民だ」
河合洋尚（民博）　遺産実践としての景観ポリティクス

研究成果の概要

年度前半の研究会は、2021年２月から３月にかけて開催した連続ウェブ研究会の準備として意義あるものとなった。また、連続ウェブ研究会は、本来ならば参加できない国内他地域や海外の聴衆の参加を可能としたという意味で、イベントとして大きな成功を収めた。また、内容的にも充実したものとなった。

今後の成果発信につながる論点としては、先行世代の記憶や経験を伝承していく営み（文化継承または文化遺産実践）において、さまざまな「メディア」が活用されていることである。ここでいうメディアとは情報の記録や通信の媒体にかぎらず、日常的に使われるモノ（物質文化）やその製作など、記憶や経験を継承するきっかけや機会などを含んでいる。ただし、どのような文化継承であろうと単一のメディアだけで実現することはなく、複数（場合によっては無数）の回路を用いなければ継承が容易に中断されることがある。

連続ウェブ研究会では、本研究の最終年度にあたる来年度（2021年度）に進めていくべき成果出版の準備を十全におこなうことができた。今後は、ウェブ研究会で共有したことがらを念頭に置きつつ、文化継承の現代的なありかたや現代的な諸問題について各登壇者が論文を執筆していく。

特別研究に関連した成果の公表実績

上記で述べた発表を除く成果公表実績は以下のとおり。

（出版物）

飯田　卓

2021「遺産化する地域料理」野林厚志（編集委員長）・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp. 636–641, 東京：丸善出版。

河合洋尚

2020『景観人類学入門』東京：風響社

2021「人類学如何着眼景観？――景観人類学之新課題」（辺　清音訳）『風景園林』28(3)：16–20。

末森　薫

2020「敦煌莫高窟初唐窟に描かれた千仏図の研究」『鹿島美術研究 年報別冊』37：427–437。

2020「敦煌莫高窟北周時代的石窟空空間构成――解析図案展示的方向性」『芸術学界』24：103–149。

2021「光学撮影が明らかにした地域文化」国立民族学博物館編『復興を支える地域文化――3.11から10年』pp. 77–81, 大阪：国立民族学博物館。

2021「新潟県十日町市で発見された越後縮『御召縮』関連資料の解読支援」日髙真吾・黄　貞燕編『地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割』pp. 143–158, 大阪：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日髙真吾研究室。

2021「民俗文化財の光学撮影調査」日髙真吾編『継承される地域文化――災害復興から社会創発へ』pp. 210–223, 京都：臨川書店。

松田　陽

2020「文化遺産研究から見た建築文化遺産」『建築雑誌』1743：7–9。

2020「ソンマ・ヴェスヴィアーナの古代ローマ遺跡の保全と活用」『地中海学研究』43：65–66。

2020「ICOM 博物館定義の再考」『別冊博物館研究――ICOM 京都大会2019特集』pp. 22–26, 東京：公益財団法人日本博物館協会。

Matsuda, A.

2020 Public Archaeology at the So-Called Villa of Augustus in Somma Vesuviana. *Amoenitas*（*Rivista internazionale di studi miscellanei sulla villa romana antica*）8: 105–112.

田中英資

2021「『リュキアの古道』トレッキング観光を通した遺産化――トルコ地中海地方デムレにおける『デムレーケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル』の事例から」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』31：1–30.

（口頭発表）

Iida, T.

2020年8月26日 'Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks.' *ACHS Fifth Biennial Conference 2020, Curated Session "Local Values of Heritage in Africa: Swinging between the Universal and the Local as well as the Tangible and Intangible"*, University College of London, London, United Kingdom, オンライン開催

河合洋尚

2021年3月28日 「ハワイの華人と客家」第584回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう、国立民族学博物館

田中英資

2020年５月31日　「文化遺産、観光、地域社会のインタラクションと道――トルコ地中海地方『リュキアの古道』トレッキング観光を事例として」日本文化人類学会第54回研究大会、早稲田大学、東京、オンライン開催

３．テーマ区分：③文化衝突と多元的価値

プロジェクトリーダー：グローバル現象研究部　西尾哲夫

研究課題：グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？

研究目的

和辻哲郎はインド洋から地中海に至る船旅での見聞をもとに風土的文化類型論を構築し、井筒俊彦はイスラーム神秘主義の中に普遍性を探り、東洋的哲学を構築した。また梅棹忠夫は「中洋」という文明圏の発見から地球的規模の文明論を構築し、中東・イスラーム世界を対象とする地域研究体制を創り、従来型の国益に沿う地域研究を、地球規模の人類的課題に係る問題群にアプローチする学問的営みへと発展させた。

西洋と東洋との第三項として「中東」を想定することで学問的発展を促した三者に対し、エドワード・サイードは、非西洋への西洋の植民地統治をも正当化させてきた西洋と「中東／オリエント」との認識論的・存在論的差異について明らかにし、近代西洋と非西洋との関係をめぐる内省的な再検討を促した。しかし日本と中東の文化的事物の往来が近代西洋を介して行われてきたことに目を向ければ、「遠い異郷」としての相互イメージに立脚する日本と中東の文化的仲介者／場としての西洋の役割について理解できるだろう。文化的に隔てられた地域を仲介した西洋への再検討は、グローバル文化的知識の環流が起こる現代的状況を解明することにもなりうる。

個人がアクセスできる知識と公共的コミュニケーション空間の関係の激変は、文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、そしてローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個人の社会的動員作用として働くメカニズムにも影響を及ぼしてきた。そこでグローバルな文化資源を個人がどのように実践して社会に関わるか、それが地域意識や世界観にどのように作用し、媒介項（変項）として環境要因や身体性の類型化可能な要因として作用するのかを確認することが重要となる。旧来の世界認識が、個人空間と制度的システムとの間で生起するナラティブ・ポリティックスに感応し、いかなるグローバルな地域性を獲得しようとしているのかをモデル化するために「東洋（日本）――西洋（ヨーロッパ）――中洋（中東）」における文化往還を検討しつつ、地球社会の認知地図を描こうとしてきた研究枠組みを批判的に再検討することで、現代における「文明」を再定義できるだろう。

地域研究が新たな価値を創出するためには、普遍的な価値を視野に入れた上で、グローバル化という視点から地域を再定位し、同時に地域的視点からグローバル化を再定位しつつ、人びとと世界とのつながり方の現代的動態をフィールド調査によって解明する「グローバル地域研究」が必要となる。自然・社会環境と言語メディア環境に係る地球規模の変動下において個人がいかに情報を入手し、それを知識としてストックし、さらにそれを資源として活用し、個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間をどのように接合しているかという観点から、個人の再社会化ならびにそれらの相互作用の中に多元的価値を包摂／排除する形で共創される社会空間の実相を捉え直す。

実施状況

⑴みんぱく公開講演会「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」（主催・国立民族学博物館／日本経済新聞社）を開催し、基調講演「アラジンはなぜ世界を魅了するのか？――ファンタジーの文明誌」と「妄想が世界を創る！　森見登美彦（作家）×西尾哲夫」という対談形式の報告をした。文学研究は地域研究と協業することで新領域を開拓する可能性があることを示した。他者をめぐる物語空間と小説の歴史類型論の構築を試みる一環として、グローバル化とデジタル化が進む地球社会において、ファンタジーの現代的役割に着目し、その創造の現場で考えることで、多元的価値共創空間としての世界文学の可能性について考察した。なおこの講演会を機に森見登美彦氏を国立民族学博物館の特別客員教授として迎え、学際的な共同研究を2021年度より始める。

⑵以下の研究発表による研究会をオンラインで開催した。

第１回　2020年５月４日　16：00～17：30

黒田賢治「近代日本と中東関係をめぐる試論――大正３年巡礼船事業をめぐる海洋覇権と植民地運営を中心に」

第２回　2020年６月５日　16：00～17：30

西尾哲夫「神と人の言葉をめぐる世界認識の類型化に向けて── Olivier Hanne, L'Alcoran: Comment l'Europe a découvert le Coran.（Paris: Belin, 2019. 696頁）の紹介と井筒俊彦のコーラン（クルアーン）研究の再評価」

第３回　2020年７月３日　17：00～19：00

Irfan Ahmad（Max Planck Institute for the Study of Religious & Ethnic Diversity）Are Anthropology and Ethnography Equivalent?

Hatsuki Aishima（National Museum of Ethnology）Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom

第４回　2020年７月31日　16：00～18：00

鈴木英明「19世紀後半から20世紀前半のペルシア湾における真珠採取業と拘束、奴隷制」

第５回　2020年11月20日　16：00～18：00

奈良雅史「国際貿易都市・浙江省義烏市におけるムスリムの共在のあり方」

第６回　2021年２月22日　16：00～18：00

竹村嘉晃「シンガポールにおける『ナショナルな』舞踊の生成──〈ピープルズ・バラエティー・ショー〉とインド人舞踊家の関わりを中心に」

※上記発表の英語タイトル（⇒HPに掲載）

第１回　2020年５月４日

Kenji Kuroda（National Museum of Ethnology）

Japanese Ships Never Came Again: A Study on Hajj Travel Business in Southeast Asia in 1914

第２回　2020年６月５日

Tetsuo Nishio（National Museum of Ethnology）

Toward a typology of world recognition from the viewpoint of the words of God and man: Critical Book review of Olivier Hanne, *L'Alcoran: Comment l'Europe a découvert le Coran*（Paris: Belin, 2019. 696p.）and re-evaluation of Toshihiko Izutsu's Quranic studies

第３回　2020年７月３日

Irfan Ahmad（Max Planck Institute for the Study of Religious & Ethnic Diversity）

Are Anthropology and Ethnography Equivalent?

17：20–18：00

Hatsuki Aishima（National Museum of Ethnology）

Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom

第４回　2020年７月31日

Hideaki Suzuki（National Museum of Ethnology）

Pearlfishery, Bondage and Slavery in the Persian Gulf, from the Late 19th Century to the Early 20th Century.

第５回　2020年11月20日

Masashi Nara（National Museum of Ethnology）

Co-presence of Muslims in Yiwu-shi, Zhejiang Province

第６回　2021年２月22日

Yoshiaki Takemura（National Museum of Ethnology）

The Making of “National” Dance in Singapore: ‘People's Variety Show’ with a Focus on Indian Dancers

研究成果の概要

分担者がターゲットとするグローバルに環流する現象（環流グローバル現象）について、それにかかる文化資源を個人がどう日常的に実践して社会空間に関わるか、それが地域意識や世界観などにどう相互作用して、その媒介項（変項）として環境要因やら身体性やらの類型化可能なファクターが働いているかをあぶりだしていく分析作業をおこなった。国内外の共同研究者とのあいだで問題意識の共有をはかり、研究テーマや研究手法について相互理解を深めるために「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム（研究テーマ公募型））」に応募した。

特別研究に関連した成果の公表実績

上記に記した講演会は、日本経済新聞社の協力で動画として視聴可能となっている。

危機の時代空想羽ばたく　民博教授×作家、対談：日本経済新聞（nikkei.com）

また研究会については、現代中東地域研究プロジェクトならびに南アジア地域研究プロジェクトと共催・協力した場合や、日本中東学会等の研究者コミュニティーを通じて公開した。

4．テーマ区分：現代文明と感染症

プロジェクトリーダー：超域フィールド科学研究部　島村一平

研究課題：コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に

研究目的

新型コロナウイルス感染症がほぼ同時に地球全体に広がるという事態に及んで、社会に潜在していた差別意識が浮かび上がるとともに、私たちが現在の生活を送るうえで当たり前と思って来た慣行やルール、すなわち人類が近代に入って作り上げてきたあらゆる制度や規範の意義と存在理由が改めて問われている。一方、宗教学者の島田裕巳は、新型コロナウイルスの流行は宗教に致命傷を与えた、と主張する。というのも宗教は、信者が集まることによって成り立つものであり、その活動に大幅な制限が加えられるからである。しかし人類学が関心を持ってきたミクロかつローカルな文化実践に関しては、必ずしも人が集まるわけでもない。むしろコロナ禍に対して「文化の免疫系」とも呼べる様々な対抗策がなされていると考えられる。そこで本プロジェクトでは、コロナ禍に対して日本に近い東アジア地域（日本・中国・韓国・台湾・モンゴル・シベリア・ロシア）において、どのような「文化の免疫系」が発動している / していないか、その態様を比較考察することを目的とする。研究会を組織し、最終的には国際シンポジウムを行い、英語による書籍をまとめるものとする。また研究会では、東アジア地域との比較の対象として、コロナ禍の被害が甚大なヨーロッパやアフリカの地域の研究者をゲストスピーカーに呼ぶ予定としている。

実施状況

3月18日に本プロジェクトのキックオフ・ミーティングを行った。参加者は、館内3名（島村一平・韓　敏・諸　昭喜）館外4名（遠藤誠一（阪大医学部教授）松崎政代（阪大医学部教授）中本剛二（阪大医学部研究員）浜田明範（関西大社会学部准教授））の7名である。このミーティングでのプログラムは以下の通りである。

① 島村一平「吉田館長の企画意図」「本特別研究の趣旨説明」 ② 浜田明範（関西大学）「人類学は感染症をいかに扱ってきたか」③自己紹介。

研究成果の概要

このミーティングを通じて濱田氏の指摘から、慢性病などと異なり感染症に対してはバイオメディシンが圧倒的に強いということが共有された一方で、同じバイオメディシンをいかに使うか、という点においてはローカルな差異（国、地域、あるいは病院単位などでの違い）があるのではないかという議論が交わされた。そうした上で、この研究会では「コロナ禍にいかに対処してきたか」という「対処法」を「文化の免疫系」と名付け、いろいろな国や地域、あるいは現場での「ローカルな対処」の事例を集めていくことを目標に定めた。また今後の研究会では、研究者だけでなく、現場の医療者やコロナの患者などもゲストスピーカーとして呼んでいくことが話し合われた。

特別研究に関連した成果の公表実績

なし。

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。

2020年度は、「開発型プロジェクト」3件、「強化型プロジェクト」8件を実施し、3つのデータベースを新たに館内公開、2つのデータベースを館外公開した。また、国際ワークショップ1件を実施した。

構築したデータベース間の検索機能を強化した統合検索システムの開発を継続実施するとともに、博物館学芸員の認定科目の教育に資するプログラムの試行を行った。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
飯田　卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	2017年4月～2022年3月***
寺村裕史	中央・北アジアの物質文化に関する研究 ――民博収蔵の標本資料を中心に	開発型	2018年4月～2022年3月
小野林太郎	海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化 ――東南アジア資料を中心に	開発型	2019年4月～2022年3月
日髙真吾	時代玩具コレクションの公開プロジェクト	強化型	2019年4月～2021年3月
林　勲男	ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築 ――20世紀前半収集資料を中心として	強化型	2019年4月～2021年3月
日髙真吾	津波の記憶を刻む文化遺産――寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良	強化型	2020年4月～2022年3月
三島禎子	セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化	強化型	2020年4月～2022年3月
池谷和信	データベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開	強化型	2020年4月～2022年3月
八木百合子	中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	強化型	2018年4月～2022年3月***
丹羽典生	民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築 ――オセアニア資料を中心に	強化型	2018年4月～2022年3月***
南 真木人	ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	強化型	2018年4月～2022年3月***

*2020年度実施分
**開発型は4年以内、強化型は2年以内
***新型コロナウイルス感染症の蔓延により、期間を延長

アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築

代表者：飯田　卓　2017年4月～2022年3月

実施状況

プロジェクトメンバーのあいだですでに活用されている暫定版データベース（日本語および英語、レコード数908,644）の精査をおこなった。また、この作業と並行するかたちでフランス語およびポルトガル語のデータを作成した。これらの作業は、2021年5月末までに完了する。完成すれば、レコード件数が倍加し、1,817,288レコードとなる見込みである。現在は関係者のあいだでの限定公開の状態だが、上記の期日以降にデータの登録と館内公開をとおしたチェックをおこない、9月末日には一般のインターネットユーザーがアクセスできるようになる。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が大きかったため、暫定版データベースを用いておこなう予定だった国際ワークショップなどをおこなうことができなかった。本プロジェクトは、本来は2021年3月で終了する予定だったが、特例措置により2021年度4月以降に経費を繰り越して使用することが認められたため、新型コロナウイルス感染症が終息すれば、4言語を搭載した完成形のデータベースを駆使してワークショップをおこなうことが可能となる。

完成形のデータベースには、標本資料に関するローカルな情報を効果的に蓄積するための「記憶ファイリング領域」をあらたに設け、民博と現地研究者、さらには民博とソースコミュニティが円滑なコミュニケーションを図れるようにした。

成果

データベースの精査が年度内に完了しなかったことは反省点である。すみやかに精査を完了し、フランス語およ

びポルトガル語のデータも完成させたうえで、2021年９月末までに完全なオープンアクセスの状態でデータベースを使用できるようにする。

国際ワークショップなども、新型コロナウイルス感染症の影響のために開催できなかった。しかし、前年度までに連絡をとり合ったカメルーンおよびケニアの研究者とは電子メールをつうじて連絡をとり合っており、感染症が終息すればただちに計画を再開する準備が整っている。2020年度内に執行できなかった経費を2021年度に繰り越して執行することが認められたため、感染症の心配がなければ完成形のデータベースを使って国際ワークショップを開催し、現地の研究者やソースコミュニティとの協働をおこなえる予定である。

成果の公表実績

＜単著＞

鈴木英明

2020 『解放しない人びと、解放されない人びと――奴隷廃止の世界史』東京：東京大学出版会。［査読有］

川瀬　慈

2020 『エチオピア高原の吟遊詩人――うたに生きるものたち』東京：音楽之友社。

＜口頭発表＞

2020年８月26日　‘Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks.’ “ACHS Fifth Biennial Conference 2020”, University College London, London, United Kingdom, オンライン開催

2020年８月26日　（Iida, T., A. A. Nelson, T. Laely, K. Umeya, J. Grigo, R. Nakamura, K. Hanabuchi, and K. Keida）‘Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks.’ “ACHS Fifth Biennial Conference 2020”, University College London, United Kingdom, オンライン開催

2020年10月30日　‘The Rise of Nosy Be: Conjunction between Indian Ocean Network and Imperial Expansion.’ “A Statistical Study of Indian Ocean Trade: Towards a Reappraisal of Regional Trade in Modern World History”, オンライン開催

2021年２月27日　‘Making Museum Objects Revive in Human Societies: An Experience of an Image-Sharing Project between Africa and East Asia.’ Serial Academic Webinars of Minpaku Special Research Project “Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices”, National Museum of Ethnology, オンライン開催

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：20,651件

レコード数：20,651点×44項目（写真を除く）＝908,644件

（ただし一般公開ではなく、研究者を中心とした関係者による限定公開）

中央・北アジアの物質文化に関する研究――民博収蔵の標本資料を中心に

代表者：寺村裕史　2018年４月～2022年３月

実施状況

本プロジェクトでは、広大な地域をロシア、モンゴル、中央アジアの３地域に分け、民博の中央・北アジア展示場で公開されている文化資源情報を核として、民博が収蔵している当該地域の標本資料に関する情報を高度化し、その成果をもとに中央・北アジア文化資源情報データベースを構築することを目的としている。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、海外での調査・研究は実施することができなかったが、日本国内で可能な事柄を中心に、主に下記の研究を実施した。

1）各メンバーが実際にフィールドワークを行ってきた地域や民族に重点を置き、その上で、自然環境への適応と生業形態、日常生活と信仰、社会主義の経験など、展示場でキーワードとなっているいくつかの共通項目を、通文化的に概観することを目指して、データベースの基本項目を定めた。

2）日本語・英語の中央・北アジア文化資源の基本データベースの作成と、現地語情報の追加。

3）プロジェクト内でのみ閲覧可能であるが、フォーラム型のDBテンプレートを活用し、試験版の「中央・北アジア物質文化資料データベース」を構築。

（中央アジア）標本資料件数：1,198件、レコード数：18×1,198＝21,564レコード

（北アジア）　標本資料件数：2,960件、レコード数：18×2,960＝53,280レコード】

4）中央・北アジア文化資源情報の高度化のための、マルチメディア型コンテンツの制作を実施。
＊「タシケントの民家（1/10模型）」に関わるインタビュー映像編集・番組制作
＊「タシケントの民家（1/10模型）」の設計図（青焼き図面）のデジタル画像化
＊サマルカンドのバザールのパノラマ映像編集およびデータベースとの連携
5）ウズベキスタン資料を中心に、現地（ウズベキスタン共和国）の連携機関や研究協力者とオンラインで打合せを実施し、英語・ロシア語翻訳チェック等を研究協力者の協力を得ながら進めた。

成果

今年度は研究計画にもとづき、国内外の研究機関や現地社会と協働して中央・北アジアの物質文化に関する現地調査や共同研究、ワークショップ等を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響のため、そうした海外での調査・研究の実施ができなかった。そこで、日本国内でも実施可能な、基本項目の確定や現地語情報の追加、試験版のデータベース構築などを前倒しで実施することとした。その成果については、先の「4. 今年度の研究実施状況」の(3)の項目で述べたとおりである。

また、現地（ウズベキスタン共和国）の連携機関や研究協力者とオンラインで打合せを実施する過程において、これまでの現地調査に関連する事柄も含めて、共著という形で論文を発表し、以下のジャーナルに掲載された。

Alisher BEGMATOV, Amriddin BERDIMURODOV, Gennadiy BOGOMOLOV, MURAKAMI Tomomi, TERAMURA Hirofumi, UNO Takao and USAMI Tomoyuki
2020 New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Cravings. *ACTA ASIATICA*（Bulletin of the Institute of Eastern Culture）(119): 1–20. 東京：一般財團法人　東方學會.

マルチメディア型コンテンツの制作においては、民博の展示場の標本資料と直結した「タシケントの民家（1/10模型）：H0105532」に関わる映像編集ならびに番組制作を実施し、約25分の『タシケントの民家再訪』という番組に仕上げた。最終的には、フォーラム型のデータベース上で閲覧可能（ID・PWによる制限の可能性あり）にするため、データベースへの組込み作業を次年度に実施する。

展示場にある民家模型が製作された、30年前の事情を知るインフォーマント（家主）から昨年度にインタビューし、30年後の現在の民家（と居住する人々）の姿を映像として記録したものを、今年度ひとつの番組として編集・制作できたことは、本プロジェクトにとっても現地社会との双方向の情報のやり取りを目的のひとつとするフォーラム型の実践例として大きな成果である。また、都市開発の波にさらされ、住人が立ち退きを要求され民家そのものも壊される可能性があることが、インタビューの結果判明し、30年前と現在の現地での暮らしの様子を伝える貴重な資料として、今回の映像および展示場の資料をフォーラム型で構築するデータベースで公開することで、資料情報の高度化にも資することができると考える。

さらに、サマルカンドのバザールのパノラマ映像編集およびデータベースとの連携については、パノラマ映像中から該当資料をクリックすることで、標本資料の情報を表示させるところまで完成しており、次年度に具体的にデータベース中に組込む作業を実施する予定である。

なお、モンゴル資料、中央アジア資料については、試験版ではあるがデータベース構築を進めることができた一方で、シベリア・極北の資料に関しては、データ整理途中であり、次年度にデータベースに組み込む作業が必要であるため、今後の検討課題である。

成果の公表実績

＜論文＞

ベグマトフ・アリシェル、寺村裕史、村上智見、宇野隆夫、宇佐美智之、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディ
2021 「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果――出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』（令和２年度考古学が語る古代オリエント）、東京：日本西アジア考古学会。

Begmatov, A., A. Berdimurodov, G. Bogomolov, T. Murakami, H. Teramura, T. Uno, and T. Usami
2020 New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Cravings. *ACTA ASIATICA*（Bulletin of the Institute of Eastern Culture）119: 1–20.

＜波及効果がみられるもの、大学共同利用・高等教育に資するもの＞

●総合研究大学院大学（博士課程）・文化資源研究特別演習・担当教員　寺村裕史、講義題目「文化資源のデジタル化とドキュメンテーション」

●岡山大学文学部　(2020年度　夏季集中)・担当教員　寺村裕史、講義題目「博物館情報・メディア論ａ」
●岡山大学文学部　(2020年度　夏季集中)・担当教員　寺村裕史、講義題目「博物館情報・メディア論ｂ」

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：4,158件
レコード数：74,844件

海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に

代表者：小野林太郎　2019年４月～2022年３月

実施状況

本プロジェクトの目的は、東南アジア島嶼部を中心とする海域アジアとその周辺海域を対象とし、本館が所有する人類の海洋適応に関わる物質文化のデータベース化、およびこのデータベースを用いた関係諸国の専門家との海洋文化研究の発展、ネットワーク連携の強化となる。この目的達成の下、今年度はまず(1)海域アジアとその周辺島嶼域の海洋文化（漁撈・航海・船舶技術・装飾・儀礼）に関する本館の資料を総チェックし、日本語と英語による資料台帳の作成を進めた。その結果、東南アジア島嶼部ではインドネシア、マレーシア、フィリピンを中心とした約800点、オセアニアにおいてはミクロネシアとメラネシアで収集された本館の関連所蔵標本約800点の資料を台帳化できた。このほかに東南アジア大陸部における類似性の高い資料についても台帳化のバージョンアップを進めた。

一方、データベースを基にした専門家との研究の発展についてはコロナの影響もあり、対面式での検討は行うことができなかった。しかしメール等を使って、国内における海洋文化の専門家との情報交換は進めることができ、国立科学博物館、沖縄県立博物館・美術館、沖縄海洋文化館、南山大学人類学博物館に所属する国内研究者ネットワークの強化を行った。海外における専門家との検討においては、2021年２月27日にオンラインでの国際ワークショップを開催し、インドネシアの国立科学研究所（LIPI)、海洋博物館、バハリ博物館、マレーシアの国立博物館、アダット博物館、マレーシアプトラ大学、フィリピンのフィリピン国立博物館、フィリピン国立大学に所属する各国を代表する海洋文化研究の専門家と協議したほか、各機関と連携強化を進めた。またこのワークショップでは日本国内の専門家も招聘し、今年度に作成・発展させたデータベースに対する直接的な意見や関連情報を頂いた。

成果

今年度における研究成果には、まず(1)国立民族学博物館が所有する、東南アジア島嶼部と新たにオセアニア（ミクロネシアとメラネシア）も加えた海洋文化関連の資料（漁具・船・儀礼・装飾関連）をほぼすべて英語化し、データベースのウェブ版デモのバージョンアップを行った点があげられる。さらに(2)このバージョンアップしたデータベースを軸にインドネシア、マレーシア、フィリピンの専門家を交え、資料の実見に基づく検討と海洋文化研究の推進も目的とした第２回目の国際ワークショップを2021年２月に開催し、データベースおよび研究の両方をさらに発展できた点があげられる。とくに(1)については予定通りに新たにオセアニアの関連資料（約800点）に関するデータベースを追加することができたほか、昨年度に台帳化した東南アジア関連の約800点についても新たな項目や情報追加を行うことができたため、今年度の研究目的は十分に達成できたと考えている。さらに(2)については、オンラインではあったが、２回目の国際ワークショップも継続して開催することができた。とくにこのワークショップでは、新たにロンドン大学の東洋アフリカ研究学院（SOAS）が展開中のフィリピン関連の博物館資料に関するデジタルアーカイブスプロジェクトに関する基調講演を、その担当者であるChristina Juan博士におこなって頂いた。またその後の議論を通して、こうした海外での共通性の高いプロジェクトとの今後の連携・協力を協議できたほか、計２回の国際ワークショップの成果公表について具体的な計画を進めることができたことは大きな成果であった。最終年度となる次年度は、このワークショップでの成果を踏まえた論文を国立民族学博物館研究報告の特集号として掲載する計画のほか、東南アジアやオセアニアの海洋文化に関する研究成果の論文・図書等による公表も視野に、より多角的な展開を計画している。また対象地域もオセアニア域のポリネシアも含めた全域に広げ、本館が所蔵する関連資料のデータベースの完成を含め、さらなる発展とプロジェクトの拡大を大いに期待できる。さらに捕捉として、本プロジェクトが終了する翌年度となる2022年度には、プロジェクトの成果を反映した企画展「海と人類（仮題)」開催の計画も進んでいることを追記しておきたい。

成果の公表実績

＜編著＞

Ono, R. and A. Pawlik（eds.）

2020 *Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation*. London: IntechOpen Publisher.［査読有］

＜分担執筆＞

小野林太郎

2020 「人類史１――発掘からよみとくオセアニア移住史と海洋適応」風間計博・梅崎昌裕編『オセアニアで学ぶ人類学』pp. 2–20, 京都：昭和堂。

2020 「『動く』戦略からみたオセアニアにおけるヒトの人類史」大塚柳太郎編『動く・集まる』（生態人類学は挑む）pp. 95–121, 京都：京都大学学術出版会。

＜論文＞

Fuentes, R., R. Ono, J. Carlos, C. Kerfante, Sriwigati, M. Tatiana, A. Nasrullah, H.O. Sofian, and A. Pawlik

2020 Stuck within Notches: Direct Evidence of Plant Processing during the Last Glacial Maximum in North Sulawesi. *Journal of Archaeological Science: Report*.（doi.org/10.1016/j.jasrep. 2020.102207）

Ono, R., H.O. Sofian, A.A. Oktaviana, Sriwigati, and N. Aziz,

2020 Island Migration, Resource Use, and Lithic Technology by Anatomically Modern Humans in Wallacea. In Ono, R. and A. Pawlik（eds.）*Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation*, pp. 85–111. London: IntechOpen Publisher.［査読有］

Nakanishi, Y., R. Ono, C. Katagiri, N. Sakagami, and T. Tetsu

2020 Pursuing Sustainable Preservation and Valorisation of Underwater Cultural Heritage: Okinawa's Pilot Project for an Underwater Site Museum. In J.A. Rodrigues and A. Traviglia（eds.）*IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November–2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle, Western Australia*, pp. 292–300. Oxford: Oxbow Books.［査読有］

Katagiri, C., R. Ono, Y. Nakanishi, and H. Miyagi

2020 Research on the Wreck Sites, Sea Routes and the Ships in the Ryukyu Archipelago. In J.A. Rodrigues and A. Traviglia（eds.）*IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November–2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle*, pp. 19–29. Oxford: Oxbow Books.［査読有］

Ono, R., R. Fuentes, A. Noel, O. Sofian, Sriwigati, N. Aziz, and A. Pawlik

2021 Development of Bone and Lithic Technologies by Anatomically Modern Humans during the Late Pleistocene to Holocene in Sulawesi and Wallacea. *Quaternary International*.［査読有］

Ono, R.

2021 Technological and Social Interactions between Hunter-gatherers and New Migrants in the Prehistoric（Neolithic）Islands of Southeast Asia and Oceania. In K. Ikeya and Y. Nishiaki（eds.）*Hunter-gatherers in Asia: From Prehistory to the Present*（Senri Ethnological Studies 106）: 127–148. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

＜監修＞

小野林太郎

2021 テルモ・ピエバニ、バレリー・ゼトゥン著、エラリー・ジャンクリストフ、篠原範子、竹花秀春訳『人類史マップ――サピエンス誕生・危機・拡散の全記録』東京：日経ナショナルジオグラフィック社。

＜口頭発表＞

2021年２月27日 'Report of Project Update and Plan 2020–2021.' International Online Meeting and Workshop "Fishing and Material Culture in Maritime Asia", National Museum of Ethnology, Osaka, オンライン開催

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：1,600件

レコード数：32,000件

時代玩具コレクションの公開プロジェクト

代表者：日髙真吾　2019年４月～2021年３月

実施状況

2020年のプロジェクトでは、初年度の成果を踏まえ、1. 形態では26種類（人形玩具、戦争玩具、乗物玩具、動力玩具、マスコミ玩具、紙製玩具、めんこ、カルタ、双六、着せ替え、ぬり絵、ビー玉・おはじき玩具、光学玩具、水遊び玩具、お面の玩具、ボード（盤上）玩具、ものづくり玩具、ごっこ玩具、スポーツ玩具、お土産玩具、教育玩具、駄菓子屋玩具、楽器玩具、玩具関連資料Ⅰ（子ども服・装身具）、玩具関連資料Ⅱ（文献・写真等）、その他）、2. 主な使用者３種類（男子、女子、男女共用）、3. 遊び方５種類（対戦、ごっこ遊び、鑑賞、一人遊び、ものづくり遊び）、4. 主に遊ばれる季節５種類（正月、ひな祭り、端午の節句、クリスマス通年）、5. 製造年代４種類（明治・大正・昭和・平成）、6. 主要素材９種類（植物由来、皮革由来、金属由来、土由来、貝由来、石由来、ガラス由来、人工素材由来、布由来）、7. サイズ、8. 備考という観点からの分類作業を進め、完了した。また、ここに記載される事項はすべて英訳作業を進め、データベースの構成素材を完成させた。その上ですでにフォーラム型情報ミュージアムで公開されている「日本の文化展示関連情報データベース」のプラットフォームを採用してデータベースを構築した。

成果

本データベースで最大の課題となっているのが著作権、版権を伴う玩具の写真の扱いである。これらの写真データは、現在、初年度の情報収集において、2020年10月24日に文化庁著作権課が示した「デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定に関する基本的な考え方」（著作権法第30条の４、第47条の４及び第47条の５関係）に着目し、なかでも、「その行為の目的上必要と認められる限度において、当該行為に付随して、著作物を軽微な範囲で提供する行為を行うことができる」に依拠した画像提供をおこなうことを考え、そして、「軽微な範囲」として示されている点については、国立民族学博物館で検討されている「インターネットによる学術情報公開のためのガイドライン」で示される「公開方法」のなかの、「人間文化研究機構資料特別利用規程に定める「特別利用」（熟覧、資料の複製等）に抵触しないようにするため、画像（静止画）データのサイズは長辺を1,500ピクセル（例えば1,500×1,200ピクセルの場合、180万画素となる）までに制限する。」に準じて掲載することとした。

写真の画像データを見本用画像であるサムネイル（180×180ピクセル）での掲載を考えている。ただし、この点については重要なことであるので、引き続き、情報課と連携しながら、サムネイル画像の取扱い基準を定めていきたい。また、本データベースでは、IDとパスワードでログインし、情報が追記できる仕組みと、新規情報が追記された際の履歴ごとのページを閲覧できるメモ機能の開発をおこなった。

成果の公表実績

＜論文＞

日髙真吾

2020 「フォーラム型ミュージアム「時代玩具コレクションデータベース」について」近畿民具学会編『近畿民具』42：33-43。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：13,828件

レコード数：46,804件

ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築――20世紀前半収集資料を中心として

代表者：林　勲男　2019年４月～2021年３月

実施状況

プロジェクト最終年度に当たる本年度は、以下の作業を実施した。

1）2020年２月に標本資料の熟覧調査をした国際研究協力者から送られてきた追加情報の精査をおこなった。

2）染木　煦著『ミクロネシアの風土と民具』の記述内容および挿絵と、染木収集による民博収蔵資料とを照合し、データの精査をおこなった。

3）東大情報カードと『内外土俗品圖集』の記載内容と民博収蔵資料とを照合し、データの精査をおこなった。

4）松岡静雄著『ミクロネシア民族誌』の記載内容と民博収蔵標本資料とを照合し、関連情報を整理した。
5）「杉浦健一アーカイブ」所収のスケッチと民博所蔵標本資料とを照合する作業をおこなった。
6）染木　煦ご遺族所有の絵はがきおよび写真を民博にて撮影し、染木によって付されたメモを整理した。
7）データベースに記載する情報の英訳をおこなった。
8）フォーラム型情報ミュージアムの開発型プロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に」（代表：小野林太郎）と、データベースでの相互参照等の協力・連携の可能性について検討した。

成果

今年度は、対象としているミクロネシア地域の標本資料に関連する文献・画像資料の調査を実施し、該当する記述および画像等と標本資料の紐づけ作業と、データの入力作業を実施した。

当初は、マーシャル諸島共和国とミクロネシア連邦での共同研究員による現地調査と、両国から資料熟覧のための民博への招へいを計画していたが、新型コロナ感染症拡大のため、実施がかなわなかった。また、インターネットを用いての現地との打ち合わせや、標本資料に関する情報収集についても検討したが、現地のネット環境や必要機材の不備のために諦めざるを得なかった。そのため民博が所蔵する文献やアーカイブス資料を中心に、関連情報の調査とそれに基づいたデータの摘出と整理を実施した。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：1,917件

レコード数：36,301件

現時点で収集・整理を完了したデータについては、システム開発班に引き渡し、データベースの検索機能について同班と協議中である。2021年７月中に館内公開、８月末までに一般公開の予定である。

津波の記憶を刻む文化遺産――寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良

代表者：日髙真吾　2020年４月～2022年３月

実施状況

研究の初年度となる2020年度は現在の入力データを精査し、記入ミス等の修正をおこなった。今年度は全件をおこなう予定であったが、想定以上に記入ミスや課題が散見したことで全体の３分２程度の精査にとどまった。また、国土地理院、東北大学災害科学国際研究所、国立研究開発法人海洋研究開発機構と研究会を開催し、本データベースの改良の方向性、災害の記憶に関するデータベースとの連携について協議する予定であったが、新型コロナウイルスの影響もあり、個別に意見交換をおこなうにととどめた。一方、本データベースの改修の基礎となる管理機能の利便性の向上については予定通り、改修を進めることができた。なお、次の展開として、申請者が主催する基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表彰システムの構築」、また分担者となっている特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」とは研究会等で意見交換がおこなえ、来年度は特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」の研究会で発表することとした。

成果

本年度のプロジェクトの最大の目標は、フォーラム型情報ミュージアムに適合したデータベースに改修することであった。このなかで、管理画面から寺社・石碑を登録する際に、住所の入力を支援する機能として、①市区町村をリストから選択することで都道府県から市区町村までの住所を登録出来るようにする、②登録した写真画像ファイルに含まれているGPS情報をもとに、国土地理院のジオコーディングサービスを利用して住所を取得・登録するシステムを整えることができた。

成果の公表実績

＜論文＞

寺村裕史

2021 「津波の記憶を刻む文化遺産――寺社・石碑データベース」日髙真吾編『特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」』pp. 94-101，大阪：国立民族学博物館。

＜波及効果がみられるもの、大学共同利用・高等教育に資するもの＞
特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」において、改良版をスタンドアローンで公開。

データベースの整備実績
資料（標本資料、映像・音響資料）件数：448件
レコード数：9,856件

セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化

代表者：三島禎子　2020年４月～2022年３月

実施状況
㋐2017年に撮影したセネガルにおける文化週間の映像記録（20ケ村、５日分）を精査し、演目、場所とシーン別におよそ240件の画像データに分割した。とくにビデオテークや映像民族誌に挿入することができなかった音声情報が豊富な歌や演説をピックアップすることに留意したほか、民族文化を紹介する演目ひとつひとつをカットしないで整え、さらに演目には直接関係がないものの民族文化を表象する踊りやパフォーマンスなどをもれなく拾い上げた。
㋑①の各データについて必要な基本情報を入れたデータベースをフランス語で作成した。
㋒②のデータベースのプラットフォームについて本館の担当者と、携帯端末などで閲覧が可能な適切なデータ量に加工すること、音声コメントのやりとりの可能性などについて話し合った。さらに240件のデータをプラットフォームに落とし込む作業を依頼し、現在進行中である。
㋓本計画の背景と構想について『民博通信 Online』に執筆した。
㋔本計画の構想について日本アフリカ学会と共同研究会において発表した。

成果
本プロジェクト全体の第一段階は、映像の内容を精査したうえで適切なかたちで分割することである。今年度はおよそ240件の映像データを作成した。また第二段階では分割した映像データそれぞれについて情報の項目を設定し、フランス語で基本情報を挿入する作業を終了した。本館の担当者にプラットフォームの相談をおこない、データ量を加工したうえでデータベースを落とし込む作業を依頼し、現在進行中である。第三段階はデータベースの日英版を整え、データベースの活用方法と情報追加について対象社会の人びととワークショップ等を行うことを来年度の目的としているが、そのための準備作業は順調に進んでいる。
また本プロジェクトの構想については論文や口頭発表などで公開した。

成果の公表実績
＜その他＞
三島禎子
2021 「ソニンケによる『文化週間』の映像データベースの構築」『民博通信 Online』3：8-9。
＜口頭発表＞
2020年５月23日～５月24日　「ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局――『文化週間』の映像取材から見えてきたもの」日本アフリカ学会第57回学術大会、オンライン開催

データベースの整備実績
資料（標本資料、映像・音響資料）件数：約240件
レコード数：240件×10項目→およそ2,400件

データベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開

代表者：池谷和信　2020年４月～2022年３月

実施状況
- **データベースの国際化**
今年度は、現在、民博で公開されているデータベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」（和文）の日本

語部分の英訳をして英語版を作成した。今後、個々の内容を精査して一般公開を進めていく予定である。

・学術研究の展開

以下、①研究報告、②論文刊行、③展示会の開催の３点から紹介する。

① カリフォルニア大学・バークレー校・東アジアセンター主催の国際シンポジウムにて熊本県五木村の焼畑の変遷に関する研究報告を行った。また、佐々木高明の中心的な調査地である五木村にて５回にわたる研究会（テーマ「焼畑と現代文明」、対象をモンスーンアジア地域に拡張）を開催して、各回において多様な分野の研究者による報告と同時に地域の人々との議論を進めてきた。

② 食と農をめぐる文明論について、池谷編集の本『食の文明論 ホモ・サピエンス史から探る』のなかで論議した。

③ 2020年10月から12月にかけて佐々木高明の調査をした五木村にて特別展示『佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ』を実施した。展示の開催中、展示場でのギャラリートークを行って、研究者や地域の人々とのあいだで意見交換を行った。

以上のように本研究プロジェクトでは、佐々木高明のみた焼畑の世界を日本列島のみならずモンスーンアジア地域に拡張して、焼畑の民族学・文化地理学を中心とした学術研究が展開された。

・プロジェクトの内容

これまで、日本列島における焼畑については、中世史や近世史、日本民俗学、人文地理学、民族学、農学などを中心にして戦前から数多くの研究がみられるが、その大部分は日本語の論文であり英語によって公開された論文がほとんどみられない。同時に、日本の焼畑の実態を時代や地域を明確にして分野を超えて展望するような研究が生まれていない。このため、現在でも焼畑が行われている湿潤熱帯を中心とした世界の焼畑研究に対して日本列島の事例からの貢献がほとんどないのが現状である。

しかしながら、世界的な視点からみると日本の焼畑は寒冷帯（「北の焼畑」）と熱帯・亜熱帯（「南の焼畑」）の焼畑で栽培されてきた多様な作物が含まれているなど、その多様性の起源や伝播普及の過程は十分に明らかになっていない。そして、現在の日本において「焼畑サミット」が開催されたり焼畑の再生がみられるなど、地球環境のなかでの持続可能な資源利用が求められるなかで、焼畑は自然にやさしい循環的な農耕であることが注目されている。

本プロジェクトでは、九州地方を中心として焼畑地の選択方法、焼畑の技術、土地利用、焼畑で作られる栽培植物の種類など、近現代における焼畑文化の変遷を総合的に把握することがねらいである。このためには、データベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」の写真類の利用を中心にして地元の人々への研究成果の還元を考慮しながら新たな焼畑像を構築することがねらいである。同時に、アジア（とくに東南アジアや南アジア）の焼畑を知ることから日本のそれの地域的特性を把握することも目的とする。

・期待される成果

以下の３点が挙げられる。これまで国内で国際発信の弱かった焼畑農耕の民族学的研究（例：現在まで刊行された約100冊のSenri Ethnological Studiesのなかで、焼畑論集が刊行されていない）を①英語圏中心にして世界に発信することができる。同時に、日本列島内の山の暮らしの詳細を知ることから、平地とは異なる②新たな日本文化論を展開することができる。さらに、近年、循環型農耕として自然にやさしい焼畑が、とくに国内において広く注目されている。これらの焼畑に関する知恵（在来知）は、③温帯山地や熱帯低地の森林地帯を中心にして全地球の持続的資源利用のあり方を考える際にヒントを与え、日本の人文学の社会的な価値を高めることになるであろう。

成果

以下の３点にまとめられる。

1）研究：国際シンポジウムのなかで焼畑の研究報告をしたことによって、世界的にみても焼畑が衰退・消滅している傾向にあることがわかった。同時に、日本の焼畑文化は、世界のなかでも栽培技術ほかかなりユニークなものである可能性が高いという印象を受けた。例えば、日本の焼畑の形成・展開・衰退についてのモデルを構築することが世界の研究に貢献することになるであろう。

2）展示とネットワーク構築：かつて焼畑が基本の生業であった村にて展示の開催中に国内ワークショップを開催したことで、新たなネットワークが形成された。研究者、行政、学校、地域住民である。例えば、学校教育におけ

る日本の歴史の時代区分が村の歴史にあわないという実態、焼畑で栽培された在来品種の小規模な商品化など焼畑を見直す動きがみられた。現に、2021年３月下旬に消滅していた村の焼畑が復活する動きとして結実している。

3）データベース：現在、公開されているデータベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」の写真キャプションほかに展示を観覧していた住民から間違いが指摘された。また、焼畑に関する物質文化の一部を地元の博物館が収集することをサポートした。それにともない、ものづくりの技術や知識を基礎資料として整備することができた。

成果の公表実績

＜編著＞

池谷和信編

2021 『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）東京：農山漁村文化協会。

＜分担執筆＞

池谷和信

2021 「地球・食・文明」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）pp. 9–31，東京：農山漁村文化協会。

＜論文＞

Yatsuka, H. and K. Ikeya

2020 Farming Practices among African Hunter-Gatherers: Diversifying without Loss of the Past. In G. Hyden, K. Sugimura and T. Tsuruta（eds.）*Rethinking African Agriculture: How Non-Agrarian Factors Shape Peasant Livelihoods,* pp. 49–63. London and New York: Routledge.

＜その他＞

池谷和信

2020 「食と農の未来――佐々木高明の見た最後の焼畑」特集「拡がる写真データベース」『月刊みんぱく』44（7）：6–7。

2021 「五木村での『佐々木高明の見た焼畑』展」『民博通信 Online』3：4–5。

Ikeya, K.

2021 Slash-and-Burn Cultivation Viewed by SASAKI Komei: From Itsuki Mura to the World. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 14.

＜口頭発表＞

池谷和信

2021年3月19日 'Slash-and-burn Agriculture and Millet Cultivation in Postwar Japan.' CJS-JSPS Symposium-Agroecology, Sustainable Food Production and Satoyama: Contributions of Japanese Case Studies to the Discussion of Traditional Ecological Knowledge and Environmental Conservation, Institute of East Asian Studies, University of California, オンライン開催

2020年度までに終了したプロジェクトによる成果の公表実績

＜編著＞

Nobayashi, A. and S. Simon（eds.）

2020 *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific*（Senri Ethnological Studies 103）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

Ito, A., C. Lomahaftewa, and C. Colwell（eds.）

2021 *Collections Review on 38 Silverworks Labeled "Hopi" in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5*（Info-Forum Museum Resources 5）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

＜論文＞

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, K. Yoshida, I. Hayashi, and T. Iida

2020 International Symposium "Future of the Museum: An Anthropological Perspective". *Bulletin of National Museum of Ethnology* 45(1): 115–176.［査読有］

丹羽典生

2021 「探検家朝枝利男の後半生――アメリカ日系人収容所での生活から博物館での活躍まで」『経済志林』88

(3)：21-42。

＜その他＞

伊藤敦規

第10回（2020年度）地域研究コンソーシアム賞（JCAS賞）授賞［研究企画賞］「ソースコミュニティと博物館資料との「再会」プロジェクト」〈http://www.jcas.jp/jcas2020.html〉

＜波及効果がみられるもの、大学共同利用・高等教育に資するもの＞

八木百合子

神戸市外国語大学・中南米文化史（集中講義）

「中南米の文化資料に関するデータベース」を活用した「中南米の人びとの暮らし――生活を形づくるモノと世界観（衣装／織物／現代の民衆芸術）」についての講義

横山廣子

非常勤講義（オンライン）での展示場とデータベース、ならびにデータベース作成プロセス等の紹介

講義

1）東京女子大学現代教養学部「周縁世界とグローバル化Ⅱ」
2020年度後期　大学３年、４年生対象講義

2）神奈川大学国際日本学部「文化人類学概論」
2020年度後期　大学１年生対象（新設学部ゆえ１年生のみ存在）講義

3）塚田誠之（横山プロジェクト）
東京女子大学現代教養学部 「民族と世界／エスニシティ論」
2020年度後期　大学３年、４年生対象講義

＜波及効果がみられるもの、社会貢献、ソースコミュニティに資するもの＞

台湾原住民電子台

『ivucung誰迷了路』（2019.12放映）第55屆電視金鐘獎（第55回テレビ番組大賞）人文紀實節目獎（人文ドキュメンタリー賞）

許春美

2020 『tjinnun nuwa paiwan（排灣族的織布）』屏東：許春美。

共同研究

2020年度の応募・採択状況

カテゴリー１：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広いテーマを対象とし、挑戦的で、新領域開拓につながる研究

カテゴリー２：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分			2020年度			
研究代表者		カテゴリー区分	申請	採択	継続	合計
一般	館内	1	6	4	4	9
		2	0	0	1	
	客員	1	0	0	0	0
		2	0	0	0	
	館外	1	6	3	10	14
		2	0	0	1	
若手		1	3	1	3	4
		2	0	0	0	
計			15	8	19	27

共同研究課題一覧

○印は館外研究者による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	区分	研究期間
博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から	園田直子	2	2017-2022
○人類学 / 民俗学の学知と国民国家の関係 ――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生勝美	1	2017-2022
○文化人類学を自然化する	中川　敏	1	2017-2021
○ネオリベラリズムのモラリティ	田沼幸子	1	2017-2022
○オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間計博	1	2018-2022
○伝統染織品の生産と消費 ――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	中谷文美	1	2018-2022
○心配と係り合いについての人類学的探求	西　真如	1	2018-2022
○統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する	佐川　徹	1	2018-2022
○グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス	山　泰幸	1	2018-2022
○カネとチカラの民族誌：公共性の生態学にむけて	内藤直樹	1	2018-2022
●拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田瑞穂	1	2018-2022
○沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西秀之	2	2019-2022
○グローバル化時代における「観光化／脱−観光化」のダイナミズムに関する研究	東　賢太朗	1	2019-2022
食生活から考える持続可能な社会――「主食」の形成と展開	野林厚志	1	2019-2022
社会・文化人類学における中国研究の理論的定位 ――12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合洋尚	1	2019-2022
人類史における移動概念の再構築――「自由」と「不自由」の相克に注目して	鈴木英明	1	2019-2022
島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	1	2019-2022
●感性と制度のつながり――芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	1	2019-2022
●モビリティと物質性の人類学	古川不可知	1	2019-2022
○海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み	片岡　樹	1	2020-2023
○「描かれた動物」の人類学――動物×ヒトの生成変化に着目して	山口未花子	1	2020-2023
○月経をめぐる国際開発の影響の比較研究――ジェンダーおよび医療化の視点から	新本万里子	1	2020-2023
環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究 ――人類史的視点から	岸上伸啓	1	2020-2023
不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う ――モノ、制度、身体のからみあい	森　明子	1	2020-2023
戦争・帝国主義と食の変容：食と国家の関係を再考する	宇田川妙子	1	2020-2023
日本列島の鵜飼文化に関するＴ字型学際共同アプローチ ――野生性と権力をめぐって	卯田宗平	1	2020-2023
●先住民と情報化する社会の関わり	近藤祉秋	1	2020-2023

「博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から」

本館における保存科学研究では、博物館機能をもつ研究所という特色を生かし、基礎的な研究と、それを発展させた実践的な研究に取り組んでいる。その内容は、モノ資料を主たる対象に、生物生息調査や温度・湿度モニタリングなどの保存環境データを効率的に分析するプログラムの開発、データの分析結果をもとにした展示・収蔵環境の整備とその検証、化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発および条件改良、収蔵スペースの狭隘化対策と収蔵改善を目的とした収蔵庫の再編成、被災文化財への応急措置を含めた保存修復法の開発など、多岐にわたる。

本研究では、これまでの研究をさらに深化させ、環境への配慮が一層求められる21世紀の社会状況に適合する持続可能な資料管理および保存環境の基盤整備を目的とする。ここでは、研究対象をモノ資料だけでなく、映像資料にひろげるとともに、大規模な博物館等の施設のみならず、設備、人手、経費が限られる小規模な博物館等の施設や個人所蔵者でも応用・実践が可能な保存の条件や指針を提示するという新たな軸を設定して研究を進める。その上で、保存科学の基礎的・実践的研究にくわえて、21世紀の社会状況のもとでの資料の保存と活用について、その

意義を整理し再考する。

研究代表者　園田直子
班員（館内）大森康宏、森田恒之、河村友佳子、末森　薫、橋本沙知、日髙真吾、平井京之介、吉田憲司
（館外）大関勝久、木川りか、佐藤嘉則、髙畑　誠、鳥越俊行、馬場幸栄、山口孝子、和田　浩、和髙智美

研究会
2020年 8 月 7 日（金） 13：30～17：00（ウェブ会議）
テーマ１：各館における新型コロナウィルス感染症対策
（文化財保存修復学会と共同開催。編集映像は学会 HP で2020年10月12日から12月12日まで公開した）
日髙真吾（国立民族学博物館）「国立民族学博物館の展示場における新型コロナウィルス感染症対策」
和田　浩（東京国立博物館）「新型コロナウィルス感染症対策――東京国立博物館の事例」
鳥越俊行（奈良国立博物館）「新型コロナウィルス感染症拡大予防対策に関する奈良国立博物館の取り組み」
木川りか・渡辺祐基（九州国立博物館）「九州国立博物館におけるコロナ感染症対策の概要」
山口孝子（東京都写真美術館）「新型コロナ感染拡大防止対策」
馬場幸栄（一橋大学）「一橋大学社会科学古典資料センターの新型コロナウィルス感染症拡大防止対策――貴重書閲覧室の場合」
テーマ２：共同研究の成果報告書について
2020年12月24日（木） 13：30～17：00（ウェブ会議）
テーマ：生物被害対策
河村友佳子（国立民族学博物館）、佐藤嘉則（東京文化財研究所）、小峰幸夫（東京文化財研究所）「太陽熱を用いた高温処理の条件確立に向けて――アフリカヒラタキクイムシを用いた高温繰り返し実験について」
森田恒之（国立民族学博物館）「戦後の日本の博物館における虫害対策」
2021年 3 月12日（金） 13：30～16：00（ウェブ会議）
テーマ１：小規模施設における資料管理
平井京之介（国立民族学博物館）「手作り資料館の持続不可能な資料管理――水俣の事例から」
馬場幸栄（一橋大学）「非博物館施設および個人宅における資料管理・環境整備の課題と対策――緯度観測所関連資料の事例から」
テーマ２：映像音響資料
園田直子（国立民族学博物館）
「A-D Strips を用いたフィルム調査――国立民族学博物館の事例からの考察」

成果
2020年度の研究会は、すべてウェブ開催とした。第１回研究会（8月7日）は「各館における新型コロナウィルス感染症対策」をテーマに、本館をはじめ、奈良国立博物館、九州国立博物館、東京国立博物館、東京都写真美術館、一橋大学社会科学古典資料センターの事例報告で構成した。この研究会は、本館と学術提携を結んでいる文化財保存修復学会との共同開催であり、編集映像は学会 HP で公開した（2020年10月12日～12月12日）。第２回研究会（12月24日）では、東京文化財研究所と本館が進めている高温殺虫処理実験の結果をもとに、実践で使用するための条件精査を行うことを確認した。また、戦後日本の博物館における虫害対策について議論を進めた。第３回研究会（３月12日）では、小規模な施設が抱える問題をふたつの事例をもとに共有した。また、映画フィルムのビネガーシンドロームを取り上げ、本館で15年あまり進めてきた調査結果について考察した。なお、今年度は九州国立博物館での館外研究会を計画していたが、コロナ禍で実施できなかったため、2021年度に繰り越すことが承認された。

「人類学 / 民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」
日本の人類学は、欧米の理論を導入して移植して学知として定着していった一方で、植民地経営への応用、ナショナリズムの勃興と民族意識の高揚、戦闘地域での情報活動など、人類学を取り巻く国内外の政治的状況で展開、発展してきたのは、欧米と同じである。そこで、単に学術活動や理論の受容を祖述するだけではなく、人類学 / 民俗学を取り巻く社会的状況を踏まえ、隣接諸領域を視野に含めた歴史の再構築をすることで、人類学の果たした社会的役割を明確にすることが、この研究の目的である。具体的にこの研究では、1920年代から40年代にかけての戦間期における欧米と日本の人類学 / 民俗学を比較対照することで、日本への影響のルーツを探り、学知として成立す

る人類学 / 民俗学を歴史のコンテキストで理解する基礎研究を目指したい。

研究代表者　中生勝美
班員（館内）飯田　卓、宇田川妙子
（館外）飯嶋秀治、池田光穂、臼杵　陽、江川純一、及川祥平、加賀谷真梨、栗本英世、佐藤若菜、角南聡一郎、泉水英計、田中雅一、Damien KUNIK

研究会
2020年12月19日（土）10：00〜17：00（ウェブ会議）
中生勝美（桜美林大学）「今後の研究成果出版計画」
出席者：研究状況報告

成果
今年度は、７月に東京の国立映画アーカイブに集合し、戦前に制作された鳥居龍蔵を題材にした映画を鑑賞した後、研究会を開こうとしたが、緊急事態宣言により開催を一旦秋に延ばしたが、やはり実施できず、やむなく中止した。最終的に12月にオンラインで研究の進捗状況を個別に報告する研究会しか実施できなかった。個別の研究成果としては、単著として池田光穂『暴力の政治民族誌──現代マヤ先住民の経験と記憶』が発表され、論文として中生勝美「戦後日本の人類学史（1）」、池田光穂「軍事的インテリジェンスの人類学の射程と倫理」佐藤若菜「1978年以降の日中民間交流に関する人類学的考察──ミャオ族の民族衣装に着目して」、角南聡一郎「黒潮文化圏と新『海上の道』」、「坪井正五郎と土俗学」など、関連したテーマでの論文、分担執筆などが出版された。

「文化人類学を自然化する」

文化人類学を自然科学の一部とすることを最終目標として、そのための方法を模索する。自然科学を人類学の研究対象にするのではない。人類学を他の自然科学（とりわけ心理学と生物学）と横にならぶ自然科学の一つの部門として成立させるのである。具体的には、人類学独自のことば遣いを自然科学のある部門の言葉へと翻訳する可能性を考えることから始める。すなわち還元がその方法論である。還元先の部門としては、とりあえず、心理学（認知心理学、社会心理学）そして生物学（進化生物学、疫学）を考えている。また積極的に自然化を推し進めている一部の哲学にも範を求めたい。消極的には「人類学の解消」に繋る動きととらえることもできようが、わたしは、より積極的に、文化人類学の自然化は自然科学というものを変化・発展させる契機になり得ると信じている。

研究代表者　中川　敏
班員（館内）飯田　卓、松尾瑞穂
（館外）唐沢かおり、高田　明、戸田山和久、中川　理、中空　萌、中村　潔、浜本　満、山田一憲

研究会
2020年８月１日（土）13：00〜17：00（ウェブ会議）
中空　萌（広島大学）「アクターネットワーク論と自然主義？（2）現代インドの自然物への法人格付与を事例に」
2021年度日本文化人類学会での分科会（成果発表）登録についての打合せ

成果
今年度はパンデミックのために研究会はオンラインで開催した。最初の一回のみは対面型同様になるべく多くの人が集まるよう日程調整し、長時間の研究会を開いた。その後はオンラインの特徴を活用して、短い時間の研究会を頻繁に開催することとした。（交通費を使用しないので、報告をしなかった。）全部で９回の１時間から２時間の研究会を開催した。2021年３月21日のオンライン・カンファレンスを計画し、それに向けて濃密な討議を重ねることができた。その討議の中で、研究会の目指す自然主義の人類学についてのイメージを固めることができた。一つは通時的な方向性で、理論的な性格を側面が強調される。もう一つは共時的な方向性で、民族誌を書くための方法が追求される。前者は閾問題（ヒトへの進化）の中に人類学的問題を探し、後者のテーマはアクターネットワークセオリーと自然主義の人類学の交差する地点を探ることである。

「ネオリベラリズムのモラリティ」

本研究の目的は、ネオリベラリズムの現れ方の多様性、特にモラリティの意味付けと実践を現地の文脈や当事者の視点から解き明かすことによって、今日の世界における生を民族誌的現実に即して知らしめ、具体的な課題を明らかにしつつ、ありうべき社会の可能性を探るための議論に貢献することにある。

ネオリベラリズムは、その言葉を知ろうと知るまいと、関心があろうとなかろうと、私たちの生活を覆いつくしつつある。しかしその現れ方は、場や受け取る側の歴史や政治経済的状況、及び文化によって様々である。本共同研究では、世界各地で長期フィールドワークを行ってきた30〜40代の研究者たちが、それぞれの地域と対象の人々の詳細な事例に関する情報と知見を交換し、ネオリベラリズムの世界におけるモラリティを具体的な事例を通じて理解することを試みる。

研究代表者　田沼幸子

班員（館内）相島葉月、八木百合子

（館外）伊東未来、猪瀬浩平、酒井朋子、佐川　徹、佐久間寛、佐々木 祐、中川　理、深澤晴奈、宮本万里

研究会

2020年 8 月 4 日（火）10：30〜15：30（ウェブ会議）

Discussion on Theme “Ethnographies of Neoliberalism: Hope or Pessimism?”

Sachiko Tanuma（Tokyo Metropolitan University), Haruna Fukasawa（Keio University),

Tomoko Sakai（Kobe University), Mari Miyamoto（Keio University),

Tasuku Sasaki（Kobe University）

2020年11月21日（土）14：00〜18：30（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）

田沼幸子（東京都立大学）「ネオリベラリズムを生きる人類学者として、何ができるのだろうか」

深澤晴奈（東京大学）「移民受け入れ社会におけるモラリティの変容――現代スペインのケース」

宮本万里（慶応義塾大学）「宗教領域の一元化と起業家的仏教僧の登場――ブータンの事例から」

酒井朋子（神戸大学）「EU 離脱をめぐる分断と家族の配慮――北アイルランドの事例から」

佐々木祐（神戸大学）「トランジットの毎日を生きること――メキシコにおける中米移民」

松田素二　コメント

2021年 2 月 9 日（火）10：00〜16：00（ウェブ会議）

Discussion on Theme “Ethnographies of Neoliberalism: Hope or Pessimism?”

Sachiko Tanuma（Tokyo Metropolitan University), Haruna Fukasawa（Keio University),

Tomoko Sakai（Kobe University), Mari Miyamoto（Keio University),

Tasuku Sasaki（Kobe University), Koharu Shiozawa（Tokyo Metropolitan University）

2021年 2 月22日（月）18：00〜22：00（ウェブ会議）

Discussion on Theme “Ethnographies of Neoliberalism: Hope or Pessimism?”

Presenters: Sachiko Tanuma（Tokyo Metropolitan University), Haruna Fukasawa（Keio University),

Tomoko Sakai（Kobe University), Mari Miyamoto（Keio University), Koharu Shiozawa（Tokyo Metropolitan University）

Discussants: Inge Daniels（Oxford University), Hazuki Aishima（Minpaku), Atsuko Tsubakihara（Ryukoku University）

成果

一部対面で行えたのは11月21日の研究会のみであったが、成果として以下の学会発表を行なった。準備のための集合を複数回行い、外部からのコメンテーターの意見をも受け、完成度の高い発表をすることができた。

⑴　2020年 5 月31日　分科会「ネオリベラリズムの民族誌――過去と今から」日本文化人類学会第54回研究大会、オンライン開催

⑵　2021年3月13日　Panel “Ethnographies of Neoliberalism: Hope or Pessimism?” IUAES 2020, Croatia（Online）［Convenor: Sachiko Tanuma, Co-convenor: Inge Daniels（Oxford University）］

⑴の発表には70人以上の参加者があり、対象となった人々の生き様や、微細な日常の複雑さを切り取った報告に考えさせられたという評価をいただいた。

⑵においては Inge Daniels 氏より、もはや人類学でも当たり前のものではなくなりつつあるが、やはり長期に

渡って関係を築くことによって行う調査の有効性を感じられるものだったと評価された。会長の小泉潤二氏からも、このテーマと meticulous な民族誌によって fresh に感じられたとコメントをいただいた。

2021年度の日本文化人類学会でも分科会発表を行う予定である。

「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」

本研究の目的は、虚実入り混じる電子情報が飛び交う現代世界において、他者接触に関する歴史経験の記憶がいかに「史実性」を獲得するのか、想起の場や感情と関連づけて追究することである。

近現代のオセアニアおよび東南アジア島嶼部では、欧米諸国や日本による植民地統治や第二次世界大戦を経て、多くの新興国が独立した。今日に至る歴史動態のなかで、当該地域の人々は、移動して多様な他者と遭遇し、軋轢や戦争に巻き込まれ、また他者との平和的協働を経験してきた。このような他者接触の歴史記憶を焦点化するにあたり、便宜上、1）国民やエスニック集団を統合する公的な集合的記憶、2）個々人の日常生活に根差したヴァナキュラーな記憶の二極を措定しておく。

そして、第一に、２つの歴史記憶の相互関係を見据えながら、人々が感情を伴っていかに集合的記憶および個別経験の記憶を生成、継承し、あるいは忘却していくのかを考察する。さらに、遺物や文書、語りを通して想起された歴史記憶は、静態的な情報に留まることなく、人々の感情を揺さぶり、ときに過激な行動を引き起こす潜在力を有する。そこで第二に、今を生きる人々の歴史記憶が立ち現れる場を射程に入れ、想起が内包する感情および身体的な特性の把握を目指したい。

研究代表者　風間計博

班員（館内）丹羽典生

（館外）金子正徳、河野正治、北村　毅、桑原牧子、小杉　世、長坂　格、西村一之、比嘉夏子、深川宏樹、深田淳太郎、藤井真一、森　亜紀子、山口裕子、吉田匡興

研究会

2020年６月６日（土）13：30～19：00（ウェブ会議）

北村　毅（大阪大学）「沖縄のガマにおける集団憑依現象へのアプローチ」

質疑応答

長坂　格（広島大学）「『薄いエージェンシー』としてのあいまいな未来――イタリアのフィリピン系若者移住者の未来イメージをめぐって」

質疑応答

全体討論

2020年７月４日（土）13：30～19：00（ウェブ会議）

金子正憲（摂南大学）「インドネシアにおける『日本』をめぐる記憶と変化」

質疑応答

西村一之（日本女子大学）「『社』から『神社』へ、そしてその後――台湾における日本認識の理解に向けて」

質疑応答

全体討論

2020年11月７日（土）13：30～19：00（ウェブ会議）

森　亜紀子（同志社大学）「南洋群島に生きた沖縄の人びとの植民地経験――境界から問う『長い20世紀』」

質疑応答

藤井真一（国立民族学博物館）「移動の来歴と史実性――ソロモン諸島ガダルカナル島における人的交流の歴史経験」

質疑応答

全体討論

2020年12月５日（土）13：30～19：00（ウェブ会議）

吉田匡興（桜美林大学）「パプアニューギニア、アンガティーヤ社会での過去語りの諸相――他者接触の歴史経験としての『公的自己認識』と炉辺で語られる『ストーリー』としての『他者接触』」

質疑応答

河野正治（東京都立大学）「『外来の人』を始祖とする人々――ミクロネシア・ポーンペイ島における他者接触の歴史と親族関係の想起」

質疑応答
全体討論

成果

今年度はオンライン研究会を4回開催し、共同研究員8名が発表を行った。全体を通してみると、東南アジア島嶼部とオセアニアにみられる共通性および個別事例の特異性が提示され、議論のなかで共同研究の全体像を明確化することができた。

植民地期や戦争時に起こった現地の人々と日本人との接触の記憶、歴史的遺物や物的痕跡の現在（台湾、インドネシア）、沖縄から南洋群島へ移住した移民の歴史経験等の具体的事例が検討された。諸事例において、日本と近隣諸国・地域に関わる現代史のなかで見落とされがちな歴史経験の記憶が、遺物や写真といった物を通して継承されていることが明示された。また、戦時中に多数の犠牲者が出た洞窟における幽霊の目撃譚や憑依（インドネシア、沖縄）の事例では、死に結び付いた特異な閉鎖空間が現在の人々の感情や身体に影響を及ぼすという、興味深い現象が検討された。

さらに、ヨーロッパ人との初期接触の記憶（ニューギニア、ポーンペイ）、現在と過去の移動経路（ガダルカナル）の事例を見ると、親族関係や通婚を媒介項として記憶が継承され、自己認識が新たに生成されるという、オセアニア諸社会に埋め込まれた記憶の諸相を見出すことができた。加えて、異郷のイタリアにおけるフィリピン人移民の生活を見ると、若者は現状に不満を抱きながらも未来への確固たる意志を示すことがないという、従来の移民像とは異なる微弱で曖昧な態度が考察された。

文字によらないヴァナキュラーな他者接触の経験と歴史記憶は、口碑伝承のみならず、物や親族関係の知識を通じて継承される。そして、直接経験していない世代を動かして新たな記憶が創出され、再活性化される多様な位相を見出すことができた。

「伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって」

本研究では、ローカルな生活世界において一定の社会的・文化的意味と機能を持ち、使用されてきた伝統染織品が商品化され、従来の生産と使用の文脈を離れた市場に流通するようになった過程を考察対象とする。とくに、ローカルな文脈に根付いた文化実践を国単位のものとしてグローバルな文脈に引き上げ、可視化する無形文化遺産の認定や、商品としての販路開発と結びつくと同時に外部者からの評価を強化する観光化が、アジア地域を中心とする各地の伝統染織品の生産と消費にどのような効果や影響をもたらすのかという点を議論の軸とする。具体的には、1）個別の伝統染織品に対してどのような価値づけが行われるようになったか、2）個別の伝統染織品が生産者および生産者を取り巻く社会において保持してきたローカルな意味がどのように変容してきたか、3）そこに生じる変容は、伝統染織生産に用いられる技法や素材の選択にも影響を及ぼしているかといった課題に取り組む。

研究代表者　中谷文美
班員（館内）上羽陽子
（館外）青木恵理子、五十嵐理奈、今堀恵美、落合雪野、金谷美和、窪田幸子、佐藤若菜、杉本星子、田村うらら、松井　健、宮脇千絵

研究会

2020年9月27日（日）10：00～18：00（国立民族学博物館　第6セミナー室　ウェブ会議併用）
金谷美和（国際ファッション専門職大学）「モノ語り　Part VI――インド、カッチ地方のアジュラック」
民博企画展「知的生産のフロンティア」観覧
三谷　武（MITTAN）・小林史恵（CALICO）「アジアの布から生み出すデザイン――MITTAN・CALICOの活動から」

総合討論・今後の打ち合わせ

2020年10月21日（水）18：00～19：30（ウェブ会議）
共同研究の中間総括と成果取りまとめについての打ち合わせ
2021年1月24日（日）10：30～18：00（ウェブ会議）
テーマ討議1「伝統染織とファッションショー」
宮脇千絵（南山大学）「エスニック・ファッションショーに関する試論」

中谷文美（岡山大学）「バリのテキスタイル in パリコレ── Appropriation or CSI?」
落合雪野（龍谷大学）「ラオスのハンディクラフト業界における＜文化的知的所有権＞をめぐる動向── #MaxOma からファッションショーまで」

ワークショップ「布と社会をとらえるテーマ群をめぐって」
2021年 3 月23日（火）13：00～17：30（国立民族学博物館　第 6 セミナー室　ウェブ会議併用）
杉本星子（京都文教大学）「モノ語り Part VII　マダガスカルの野蚕と家蚕──島固有種の多様性」
テーマ討議 2「伝統として残す素材・技術・道具」
落合雪野（龍谷大学）「繊維植物を利用し続けるために──農学と森林学からの検討」
金谷美和（国際ファッション専門職大学）「素材からみる藤織りの伝承」
上羽陽子（国立民族学博物館）「女神儀礼用染色をめぐる伝統イメージ」

成果
今年度は、ウェブ開催を含め計 4 回の研究会を開催した。第 1 回は「モノ語り Part VI」として、金谷がインド・グジャラート州カッチ地方の木版捺染について調査スライドや現物を用いて解説した。特別講師として招いた MITTAN と CALICO という 2 種類のブランドの代表者からは、大量生産・大量消費を前提とする社会のあり方に対する疑問から生まれた、オルタナティブなものづくりとマーケティングの姿勢を聞いた。
本共同研究が次年度は最終年度となることを踏まえ、第 2 回は成果取りまとめに向けての方針を成立する全体討論を行った。その際の議論に基づき、第 3 回は集中討議をするためのテーマの例として「伝統染織とファッションショー」を設定し、落合、中谷、宮脇が報告を行った。続いてワークショップ方式でテーマの洗い出しを行い、第 4 回はその中の一つ、「伝統として残す素材・技術・道具」のもとに上羽、落合、金谷が報告をした。「モノ語り Part VII」としては、杉本とともに、民博の収蔵庫内の資料熟覧を行った。

「心配と係り合いについての人類学的探求」

子育てや介助、癒やしや看護といった生活の様々な局面におけるケアの実践は、他者との一時的関係から生じる情動によって起動され、集合的な規範によって支持あるいは却下され、社会経済的制度によって保障あるいは排除される一連の係り合いの文脈において把握することができる。いかなる社会も、その成員が必要とする庇護や治癒を提供するための込み入った規範と制度とを備えている。しかし不確実な世界において私たちは、それら規範によって支持される見込みのない心配、制度的な保障を欠いた係り合いに常に巻き込まれている。本研究の目的は、情動と規範との間に生起する係り合いの束が、ある種の秩序／反秩序へと向かう政治的な過程を民族誌的記述として捕捉すること、またそのための方法論の確立である。その民族誌的方法は同時に、ケアに関する複合的な規範と制度、それらを結びつける諸エージェントの働きかけ、およびそこに動員される知識・技術・資源を、ある価値産出的な系として、すなわちケアの生態系として描き出すことを可能にする。

研究代表者　西　真如
班員（館内）森　明子
（館外）有井晴香、池見真由、大北全俊、加藤敦典、桑島　薫、佐藤奈穂、デ・アントーニ アンドレア、内藤直樹、中村沙絵、野村亜由美、馬場　淳、浜田明範、モハーチ　ゲルゲイ、森口　岳

研究会
2020年 7 月19日（日）10：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）
西　真如「ケアの生態学について」
加藤敦典（京都産業大学）、モハーチ ゲルゲイ（大阪大学）「Detachment を読む」
西　真如（京都大学）「Matters of Care を読む」
全体討論
2020年10月10日（土）10：00～17：00（国立民族学博物館　第 6 セミナー室　ウェブ会議併用）
成果公開に向けた討論（全員）
2021年 2 月 6 日（土）13：00～16：00（ウェブ会議）
デ・アントーニ アンドレア（立命館大学）「神様を形成する情動とケア──徳島県の現代にお祓いにおける生成とデタッチメント」

桑島　薫（名城大学）「他者の痛みへの接近――DV シェルターにおける支援から自他関係を考える」
総合討論

成果

2020年７月の研究会では、本共同研究の理論的枠組みについてメンバー間で理解を共有するための議論を行った。アフリカにおけるてんかん患者のケアやCOVID-19流行下の日本における自閉症者のケアといった事例を取り上げ、「ケアの生態学」の枠組みでどのように理解できるかを話し合った。また人間と非人間の双方に開かれたケアのあり方について、人類学やケア倫理学の最近の著書を取り上げながら討論を行った。10月の研究会では、メンバーがそれぞれ本共同研究の最終的な成果をにらんだ研究計画を発表し、全員で討論を行った。なお10月の研究会では認知症ケアの現場を訪問する予定もあったが、これはCOVID-19流行のため中止となった。

２月の研究会では、四国の神社でおこなわれている憑きもの祓いを、情動的技術による治癒の過程として分析した報告（デ・アントーニ）および、DV 被害者のシェルターにおいて支援活動に携わる者が、被害者の痛みにどのように接近するかを考察した報告（桑島）について討論を行った。

「統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する」

本研究では、統治のフロンティア空間、つまり国家の中心部から隔たれ、統治の遂行が希薄である空間の動態に着目する。P・クラストルやI・コピトフ、J・スコットは、国家と国家に捕捉されざる住民との関係を各地域レベルで論じた。彼らが対象としたのは、主として植民地化以前や第二次世界大戦以前の世界である。だが、フロンティア空間の国家への包摂は不可逆的なプロセスではない。国家による領域化が一度は完遂したと思われる地域も、国家の統治能力の減退により、再度フロンティア空間に回帰することがある。また国家統治から放置されていた地域が、新たな資源の商品化により、資本や国家からフロンティア空間として再度見出されることもある。フロンティア空間の「発見と消失」は循環的な現象である。実際、21世紀に入ってから、世界各地で新たなフロンティア空間が「発見」され、その開発と領域化が進行している。本研究の目的は、アフリカ・東南アジア・中南米地域の事例分析をとおして、国家による統治と資本主義への接合から完全には逃れられない現代世界で、フロンティア空間の住民がいかに生活の再編を試みているのかを示すことである。

研究代表者　佐川　徹
班員（館内）池谷和信、南 真木人
（館外）王　柳蘭、大澤隆将、岡野英之、桐越仁美、日下部尚徳、久保忠行、後藤健志、近藤　宏、鈴木佑記、武内進一、二文字屋脩

研究会

2020年９月11日（金）13：00～18：00（ウェブ会議）
佐川　徹（慶應義塾大学）趣旨説明
池谷和信（国立民族学博物館）「フロンティア空間の発見と消失――乾燥帯アフリカの事例」
桐越仁美（国士館大学）「砂漠と海を結ぶ人びと――西アフリカにおける長距離交易の変遷と商業民ハウサの外部社会との結節」
岡野英之（近畿大学）「ゴールデン・トライアングル――二つの国家のフロンティアが重なるハイブリッド・ガバナンスの領域」

2020年９月22日（火）13：00～18：00（ウェブ会議）
佐川　徹（慶應義塾大学）「領域性概念についての覚書」
王　柳蘭（同志社大学）「東南アジア大陸部イスラーム圏における商業・宗教的ネットワークの展開」
日下部尚徳（立教大学）「チッタゴン丘陵から見るロヒンギャ問題――バングラデシュの国家・資本・先住民族」
総合討論

2021年１月９日（土）10：00～18：00（ウェブ会議）
事務連絡
寺内大左（東洋大学）「土地開発フロンティアを生きる焼畑民――カリマンタンの消えゆく熱帯林から」
宮地隆廣（東京大学）「ラテンアメリカにおける国家研究の射程」
武内進一（東京外国語大学）「アフリカ農村部の土地をめぐる統治――ルワンダとコンゴ民主共和国」
総合討論

成果

今年度の研究会では、経済的利益の獲得を求めて外部からフロンティア空間に参入してくる商人（東南アジアとサハラ以南アフリカ）の観点から、またフロンティア空間への統治の貫徹を目指す国家（東南アジア、中南米、サハラ以南アフリカ）の観点から調査研究を進めているメンバーが発表をおこなった。その結果、国家、資本、地域住民の三者関係をめぐってより多面的な理解が可能になった。さらに、東南アジアにおける外的フロンティア地域の典型ともいえるカリマンタンの事例や、サハラ以南アフリカにおいて複数のフロンティア性が折り重なる南部アフリカの事例の発表をとおして、フロンティア概念の有効性をめぐる議論が活発になされた。そして、理論的にはフロンティア概念と密接なかかわりをもつ領域性（territoriality）概念をめぐる発表がなされた。最終年度となる次年度は、これまでの研究会での各発表の内容を総括して、成果のとりまとめに向けた議論を進める予定である。

「グローバル時代における『寛容性／非寛容性』をめぐるナラティヴ・ポリティクス」

急激にグローバル化が進展し、人間の移動が激しさを増すとともに、多文化的状況が今後さらに進展することが予想される。西欧の列強と呼ばれた国々では、かつての植民地から大量の移民が流れ込み、ある意味では予想外の、だが、ある意味では、必然の結果とも言うべき、皮肉な現象が起きている。こうした地球規模の社会環境の変容に加えて、従来の口承性や書承性を超越するメディア環境の変容の影響下で、文化的他者認識としての「異人」を迎える側の経験は、その質と量において、かつての「異人論」が想定していた状況とは比べものにならない規模となっている。さらに、この大量移動の時代は、程度の差こそあれ、誰もが自らも異人となる経験を持つことが当たりとなっている。問題は、こうした状況において、大小さまざまなコンフリクトが発生し、「不寛容」社会が出現しつつある点である。

本研究では、こうした状況を解明し、これに応答するために手がかりとするのが、「異人論」である。文化人類学及び民俗学の学問的伝統においては、外部から訪れる他者、すなわち「異人」に対する歓待や排除、蔑視あるいは畏怖や憧れなどの観念や行動をめぐって、「異人論」と称される研究の蓄積がある。本研究では、「異人論」という視点や方法を再考し、鍛えなおすことで、人文科学の立場から現代的問題の解決の糸口を探ることを目的とする。

研究代表者　山　泰幸

班員（館内）河合洋尚、韓　敏、西尾哲夫

（館外）岩本通弥、鵜野祐介、及川祥平、小川伸彦、カルディ ルチャーナ、川島秀一、川松あかり、君野隆久、國弘暁子、小長谷有紀、小松和彦、竹原　新、村井まや子、横道　誠

研究会

2020年10月31日（土） 13：00～17：00（ウェブ会議）

村井まや子（神奈川大学）「新しい皮――おとぎ話のなかの毛皮と現代アート」

カルディ ルチャーナ（大阪大学）「異人としての狐――20世紀～21世紀のアメリカ文学における日本の民話の受容」

2020年11月28日（土） 13：00～17：00（ウェブ会議）

河合洋尚（国立民族学博物館）「異人から客家へ――清末・民国期、広東の「客」をめぐるナラティブ・ポリティクス」

小川伸彦（奈良女子大学）「Corona-rative？――寛容性／非寛容性の実験場」

2021年１月23日（土） 13：00～17：00（ウェブ会議）

横道　誠（京都府立大学）「異人についてのエスノグラフィー　発達障害自助グループ・当事者研究会のナラティヴ・ポリティクス」

全　成坤（翰林大学）「災害をめぐる経験とナラティヴの間」

成果

2020年度は、コロナ禍のため、秋以降からウェブ会議のかたちで研究会を再開し、昨年度に引き続き持ち回りの発表を行い、異人をめぐる説話・民話などの物語、現代的な新しい形態のナラティヴと現代的問題との関係、いわば物語と現実社会との関係について、さらに集中的に検討を加えた。異人を排除する物語の論理を見極め、異人との間の相互的均衡的な関係性を打ち立てるような、ナラティヴがもつ潜在的な可能性について検討を試みた。対面的あるいは微視的なコミュニケーションの次元から、文学作品や映画など広く社会的に影響をもつ芸術作品における異人をめぐるナラティヴを共通の関心から検討を行った。

「カネとチカラの民族誌：公共性の生態学にむけて」

本共同研究の目的は、「利己性」と「経済」という視点から、公共性概念に関する人類学的な考察を深めることにある。そのために、近年の情報通信技術の発展のもとで営利を追求する諸主体（企業・NGO・個人・コミュニティ等）による実践に焦点をあてる。そして利己的な主体による、生存上の必要（食・住居・教育・医療・福祉等）の充足に関わるやりとりが、公的な領域やネットワークを創発する事例に関する民族誌を比較検討する。これらの検討を通じて、グローバルな政治経済的状況における公共性をめぐる諸問題に対する人類学的な応答の方途を構想する。それは、社会が成立する保証が無い状況から、社会がいかに立ち上がるか考察することでもある。そのために本共同研究では、市民社会やその規範的価値の存在を前提視しえない状況における、①それぞれの生存を追求しようとする多様な主体による利己的な行為に焦点をあて、②物質やエネルギーの移動をともなう相互行為としての経済に注目し、③それが特定の価値や倫理を帯びた場所やネットワークを産出する事態を社会的なものの創発として捉え、その機序を検討することを通じて「公共性の生態学」を構想する。

研究代表者　内藤直樹

班員（館内）森　明子

（館外）飯嶋秀治、岩佐光広、岡部真由美、北川由紀彦、木村周平、工藤由美、久保忠行、沢山美果子、髙橋絵里香、内藤直樹、中野智世、藤原辰史、丸山淳子、三上　修、モハーチ・ゲルゲイ、山北輝裕

研究会

2020年７月４日（土） 13：30～18：00（ウェブ会議）

木村周平（筑波大学）「Scallop at the end of Japan ――公共性の生態学への予備的考察」

大槻　久（総合研究大学院大学）「協力の起源と維持機構――その進化生物学的考察」

討論（全員）

2020年11月７日（土） 13：00～16：00（ウェブ会議）

内藤直樹（徳島大学）「『厄介者』と（して）生きることについて――寄生や依存から考える」

討論（全員）

2021年１月23日（土） 13：30～17：00（ウェブ会議）

岡部真由美（中京大学）「布施のエコノミーと宗教的なるもの――北部タイにおける仏法センターの事例」

（全員）成果公開にむけた討論

2021年３月18日（土） 13：30～17：00（ウェブ会議）

深田淳一郎（女子栄養大学）「介護の人類学試論――『贈与と福祉――全身性障害者の自立生活運動を事例に』

討論（全員）

成果

今年度は、安易な価値観の共有を許さない非人間を含む他者とともにあることのままならなさのなかで活動の場を創り、維持する機序について、さまざまな分野を専門とする共同研究員が理解するための基盤について検討した。そのために、数理生物学や福祉社会学の専門家を特別講師として招聘し、協力や共生についての生物学的な捉え方や福祉につきまとう贈与のパラドクス問題の解法についての討論をおこなった。そして、とりわけ近代以降にネガティヴなイメージがつきまとうようになった依存、寄生、厄介といった関係のあり方や腐敗、雑音、賭けといった活動や態度を通じて「共生」概念について再考する可能性を検討しようとしている。研究代表者の内藤は、こうした検討を通じて得た見方をもとに、２編の編著本を出版した。最終年度には＜エコロジー＞と＜エコロジカルに考えること＞の違いを整理した上で、否定的なものから公共性や公共空間について再考する方途について考察する。

「拡張された場における映像実験プロジェクト」

現場での観察や実測に基づくフィールドワークなど人類学的な手法が、美術、特に映像表現を含むものにおいて随分多く見られるようになり、また人文科学においても写真、映像、音楽など芸術の手法を活用した研究の必要性を論じるアートベースド・リサーチという考え方が広まりつつある。このように、従来の学問領域を超えたアプローチが日々更新されているという傾向を踏まえ、本研究では、映像人類学者、文化人類学者とキュレーター、アートコーディネーター、美術家といった芸術に関する専門職に携わる者からなるチームを結成し、多様な領域の理論と現実社会とを芸術を媒介に結びつけることを目指す。異なる領域での活動を行う者が互いにその活動にふれ、交流や協働作業を通してそれぞれの知と技術との交換を可能とする領域横断的な研究活動の基盤作りを推進するととも

に、従来の学問それぞれのアーキテクチャー（枠組み、構造）自体を拡張、発展へとつなげていくことを目的とする。

研究代表者　藤田瑞穂
班員（館内）下道基行、川瀬　慈
（館外）奥脇嵩大、岸本光大、佐藤知久、西尾咲子、西尾美也、福田浩久、村津　蘭、矢野原佑史

研究会
2020年７月１日（水）13：00～17：00（ウェブ会議）
村津　蘭（東京外国語大学）「憑依におけるメディアと情動」
ふくだぺろ（福田浩久・立命館大学）「ルワンダの元狩猟採集民トゥワのイメージコスモロジー」
全体討論
2020年11月18日（水）14：00～17：30（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）
柳沢英輔（同志社大学）「エオリアン・ハープを用いた環境の可聴化」
全体討論
2021年３月９日（火）13：00～17：00
各メンバーによる研究進捗報告、全体討論

成果
新型コロナウイルスの感染拡大の影響によって社会が変化していく中で、あらためて「映像」をどのように捉えるかということがたびたび議論の中心となった。フィールドワークの実施が難しく、研究計画の延期・変更を余儀なくされたメンバーも少なくないが、この状況にも柔軟に対応しようとする意欲的な萌芽的研究が多数報告され、また活発に意見交換も行われた。今年度最終の研究会では、成果発表のあり方についても協議した。研究期間を１年延長し、学際的な共同研究として、研究会のタイトルにもある「拡張」「実験」をキーワードに、この研究会によって新たに生まれた視点から各自の研究をつなぎ合わせて一つのストーリーを築き上げるための作業に時間をかけて取り組むことが確認された。加えて、動的イメージに関する論考をめぐっての将来的な展望をどのように示すかが継続的な課題となるだろう。

「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」
本研究では、国立民族学博物館所蔵の「泉靖一アーカイブ」を対象として、泉によって提示されたアイヌ社会像の再検討を試みる。具体的には、泉靖一が「イオル論」をはじめとするアイヌ社会モデルの構築に至った沙流川流域での調査資料を中心とする基礎データを、今日的な研究成果や社会意義などから改めて読み解くことにより、その新たな学術的・社会的活用の可能性を追究する。
このような目的の下、本研究では、まず①アイヌ研究に関連する文化／社会人類学・歴史学・考古学などの現在までの成果と、②アイヌ文化振興にかかわる諸政策・事業活動の成果を踏まえ、多角的に泉靖一の調査資料・データの再検討を行うことにより、単なる政治・政策的な批判や歴史的事実関係の正否の検証にとどまらない新たな評価や解釈の可能性を追究する。その上で、現在平取町を含む北海道各地で推進されている、「伝統的生活空間（イオル）」の再生事業をはじめとするアイヌ文化の継承や振興に対して、泉靖一の調査資料が果たしうる貢献や役割を検討する。

研究代表者　大西秀之
班員（館内）大塚和義、河合洋尚、齋藤玲子
（館外）石村　智、貝澤太一、萱野公裕、木村弘美、佐々木史郎、長野　環、森岡健治、吉原秀喜

研究会
2020年11月27日（金）13：00～17：30（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）
沙流川流域資料の活用の可能性
泉アーカイブの再検討１
泉アーカイブの再検討２
2020年11月28日（土）９：30～15：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）
森岡健治（平取町立二風谷アイヌ文化博物館）「平取町内の考古学的調査による建物跡と墓――擦文～アイヌ文化期」

石村　智（東京文化財研究所音声映像記録研究室）「泉靖一の見た済州島とその後」
総合討論と次回計画

2021年３月14日（日）13：00～17：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
大塚和義（国立民族学博物館）「アイヌ史から見る沙流川におけるアイヌ民族綜合調査の意義」
大西秀之（同志社女子大学）「イオル再生事業のための泉靖一による沙流川調査資料の活用」
総合討論と次回計画

成果

２年目となる2020年度は、新型コロナ感染症問題の影響を被り、本共同研究の計画の修正を迫られた。もっとも、研究報告に関しては、オンライン研究会を開催することにより、ほぼ計画通り実施し一定の成果を得ることができた。

具体的には、まず石村報告と大塚報告により、泉靖一が沙流川流域調査を行う前史として、済州島や大興安嶺での民族誌調査が果たした役割を明からにすることができた。また森岡報告では、沙流川流域の埋蔵文化財調査から得られた考古学的データとの比較検討を、大西報告では、現在推進されているアイヌ民族の伝統的生活空間の再生事業に対する泉調査の意義や活用法を、それぞれ議論することができた。

しかし、本共同研究の主目的は、あくまでも泉靖一アーカイブの資料を実見し検討することである。本年度は、社会的要請などにより対面での会合の機会を設けられなかったため、主目的と位置づけているアーカイブ資料の検討をほとんど推進することができなかった。複製などの館外検討ができない状況が続く場合、次年度も目的が達成できない状況が続くと危惧している。

「グローバル化時代における『観光化／脱−観光化』のダイナミズムに関する研究」

本研究は、多様化し拡大する観光現象を文化人類学的に捉え、新たな理論的転回を図ることを目的とする。

1980年代以降、文化人類学は観光という現象に着目するようになった。しかし、観光社会学ではJ.アーリやS.ラッシュらのグローバル論と関連付けながら新たな理論的展開を遂げたのに対し、人類学内部ではその現状をうまく捉えきれず、2000年代以降、観光研究は停滞しつつある。

そして現在、観光の形態はさらに多様化している。それは戦争など負の歴史を次世代へと伝え（ダークツーリズム）、移住を検討させ（移住観光）、自然と人間の共存を教育し（エコツーリズム）、アニメ作品などのファンと交流を図り（コンテンツツーリズム）、衰退した地域社会を再興させるものである（地域文化観光）。つまりこれまでまったく別々の文化現象だったものが、「観光」という文脈に包含されつつあるといえる。

他方、これまで観光の文脈で語られてきたものが、環境破壊や地域住民と観光客とのコンフリクトの増加などにより、制限され、文脈をずらされるという現象も起きている。本研究ではこれらの過程を「観光化」「脱−観光化」と概念化し、考察を深める。具体的には、①国内外の諸事例がいかにして「観光」の文脈に包含され／「観光」の文脈からずらされていったのか、その詳細を実証的に検討し、②グローバル化の議論を批判的に参照しつつ、人類学全体を見据えた新たな視座の構築を目指す。

研究代表者　東　賢太朗
班員（館内）奈良雅史
（館外）岡本　健、越智郁乃、紺屋あかり、鈴木佑記、中村香子、福井栄二郎、藤野陽平

研究会

2021年２月５日（金）14：30～18：00（ウェブ会議）
中村香子（東洋大学）「『マサイ』民族文化観光における『苦境』の観光資源化に関する一考察」
鈴木佑記（国士舘大学）「海民村落比較研究事始――タイ領アンダマン海域における『観光化／脱観光化』」
全員「観光化と脱観光化とは？――発表２事例をふまえて」

2021年３月５日（金）14：30～18：00（ウェブ会議）
紺屋あかり（明治学院大学）「ポストコロニアル・ノスタルジア――パラオ老人会と日本人観光客との交流の場を事例に」
岡本　健（近畿大学）「コンテンツツーリズムから考える現実・情報・虚構空間と身体的・精神的な移動――アニメ聖地における旅行者の『リアリティ』を考える」
全員「ポスト・コロナの観光化と脱観光化――発表２事例をふまえて」

成果

２年目の2020年度は、新型コロナウィルスの完成拡大により当初６月に予定していた第１回の研究会を延期したのち、数回の対面での研究会を計画したがかなわず、2021年２月５日と３月５日に２度のウェブ会議を開催した。本年度は共同研究会の全メンバーが現地調査を行うことができなかったため、４つの発表の内容も新たな現地調査資料を含むものではなく、これまでの調査資料を振り返り、新たな視点を見い出すための試み的な内容であった。しかし、そのような限定された状況下においてもメンバーの多数がウェブ会議に参加し、活発な議論を行い、それぞれ新たな知見を獲得することができた。とくに現状進行している新型コロナウィルスの感染に対する観光地の対応と、それにともなう脱観光化、さらには次第に再開する観光地の再観光化の状況について、それぞれの調査地の状況を共有できたことは予想外の成果であった。次年度以降については、今後の調査地の状況をメンバー各自が把握しながら、当面可能な研究を継続することを確認した。

「食生活から考える持続可能な社会――『主食』の形成と展開」

本研究の目的は、人類の食生活を生態、文化、社会、歴史の観点から検証し、持続可能な社会を実現するための食生活のありかたを探究することである。そのための作業概念として「主食」を採用する。「主食」に相当する語彙や概念は普遍的ではなく、時代や地域によって多様であるが、「人を肉体的・精神的に養ううえで、中心的役割を果たす食べもの」という一定の定義を与えることで、具体的な食生活中の「主食」の諸相から、対象とする社会や集団における食のあり方とその背景をより端的に浮かび上がらせることが可能となる。

食生活とは、食品の生産、加工、流通、消費、調理、廃棄の過程であり、自然環境、価値観、教条、法律や制度、経済条件、身体的な欲求や生理的条件、個人的な嗜好などが、人間の営みを通して密接に関連しあっている。それらの関連性を「主食」という作業概念にそって整理し、考察することにより、地球規模で人間が引き起こしている食の問題を明らかにする。そのうえで、人類学を中心に、歴史学、調理学、体育学などの食生活を理解するうえで核となる諸分野による学際的な議論を通して、人類の食生活のあるべき姿を検証したい。

研究代表者　野林厚志

班員（館内）池谷和信、宇田川妙子、菅瀬晶子

（館外）梅崎昌裕、木内敦詞、佐藤廉也、中澤弥子、那須浩郎、濱田信吾

研究会

2020年７月31日（金）15：00～17：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）

大石侑香（国立民族学博物館）「ハンティの主食の取り入れ方」

質疑応答と全体討論

2020年９月14日（月）15：00～17：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

野林厚志（国立民族学博物館）「エスニシティから見た主食――台湾原住民族の事例」

質疑応答と全体討論

2020年10月２日（金）10：00～12：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

菅瀬晶子（国立民族学博物館）「中東における主食概念とアブラハム一神教――東地中海地域の事例を中心に」

質疑応答と全体討論

2020年11月５日（木）15：00～17：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

宇田川妙子（国立民族学博物館）「イタリアのパンと小麦から考える『主食』」

質疑応答と全体討論

2021年３月22日（月）15：30～17：00（ウェブ会議）

1. これまでのふりかえり
2. 来年度の研究会計画

成果

本年度は当初研究計画にもとづき、主として民族誌の事例から主食がどのような位置付けにあるかについての発表と議論を行なった。主食とは何かという課題において浮かび上がった１つの考え方として、ある特定の食物が食生活のなかで主食として位置づけられていく過程として、「１つの選択肢――主要な食べ物（主要食）主食」という３つの「食物地位」の段階をあげることができた。さらに、１つの選択肢には、自然資源から生態資源への導入が、主要な食べ物には、集団レベルでの生態学的な適応と文化的な組み込み、主食は、様々なレベルでの制度的な裏づ

けが、それぞれの背景に存在する可能性が想起されることになった。

本研究課題の主要な関心の１つである主食の形成には、この「食物地位」モデルが適用可能であり、もう１つの関心である主食の展開には、地位の拡大と縮小の両方が予想され、今後の研究会でも議論の課題にしたいと考えている。

「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価」

中国社会を対象とする人類学的研究は20世紀前半より本格的にはじまり、日本、欧米、中国国内の研究者によりさまざまな研究が展開されてきた。早期には「未開」社会とは異なる複合社会の研究を推進する舞台として期待され、1960年代になるとアフリカ研究との比較の対象として民族誌が著された。ところが、その後の中国研究は「独自」の路線で議論を進めるようになったため、同じ東アジア研究ですら対話が難しくなり、人類学において半ば「孤立」した立ち位置に置かれるようになっている。だが、中国をめぐる人類学的研究を振り返ると、国家 - 社会関係論、ポリティカル・エコノミー論、個 - 全体論、存在論など、現代人類学の先駆けともいえる議論が早期から展開されてきたことに気づかされる。本研究は、中国研究で多くの蓄積がなされてきた12のテーマ（親族、ジェンダー、コミュニティ、エスニシティ、宗教、風水、生態、食、芸術、観光、メディア、都市）をとりあげ、その理論史を整理することで、人類学一般の理論と対話をなすことを目的とする。

研究代表者　河合洋尚

班員（館内）韓　敏、奈良雅史

（館外）阿部朋恒、磯部美里、稲澤　努、川口幸大、川瀬由高、小林宏至、櫻田涼子、清水拓野、周　星、田中孝枝、中生勝美、丹羽朋子、伏木香織、藤野陽平、堀江未央、横田浩一

研究会

2020年10月31日（土） 14：00～18：30（国立民族学博物館　第４セミナー室　ウェブ会議併用）

趣旨説明＆新規自己紹介

稲澤　努（尚絅学院大学）「中国の『民族』とエスニックグループをめぐる研究動向」

コメンテーター：大石侑香（神戸大学）

川口幸大（東北大学）「親族」

コメンテーター：松尾瑞穂（国立民族学博物館）

2020年11月１日（日） 10：00～16：00（国立民族学博物館　第４セミナー室　ウェブ会議併用）

奈良雅史（国立民族学博物館）「中国における宗教の人類学――成立宗教を中心とした研究動向」

コメンテーター：片岡　樹（京都大学）

横田浩一（国立民族学博物館）「中国民俗宗教研究の動向」

コメンテーター：片岡　樹（京都大学）

2020年12月12日（土） 14：00～18：15（ウェブ会議）

周　星（神奈川大学）「中国の文化遺産に関する人類学的研究」

コメンテーター：黄　潔（愛知大学）

伏木香織（大正大学）「音楽人類学と民族音楽学」

2020年12月13日（日） 10：00～15：30（ウェブ会議）

田中孝枝（多摩大学）「中国における観光の人類学の研究動向」

コメンテーター：山下晋司（東京大学名誉教授）

小林宏至（山口大学）「文化人類学と風水研究」

コメンテーター：中野麻衣子（東洋英和女学院大学）

総合討論

成果

2020年度は、中国を対象とする人類学的研究（以降、中国民族誌と表記）のうち、宗教、風水、観光、文化遺産、音楽という５つのトピックをとりあげ、その研究動向を示すとともに、それらの理論的意義について議論を展開した。５つのトピックのうち、宗教、風水、観光をめぐるレビューは、これまでも日本語、中国語または英語でなされている。ただし、発表担当者は、人類学理論一般との対話に焦点を当てることで、従来とは異なる角度からこれらの研究動向を再検討した。それに対して、文化遺産と音楽については、これまで断片的な紹介にとどまっており、

全体像が描かれることが少なかった。したがって、この２トピックの研究動向の整理は、それ自体が新しさをもつものであった。これらのトピックの紹介と再検討を通して、中国民族誌学は早くから歴史や政治経済を視野に入れた研究を展開していたことを、改めて確認することができた。また、国・地域によって研究姿勢に若干の違いがみられ、一部は応用人類学的な思考を強くもっていることも、再確認した。さらには、風水研究の一部に存在論人類学の先駆けと思われる議論があるなど、中国民族誌学の理論的意義を新たに見出すことができた。

「人類史における移動概念の再構築――『自由』と『不自由』の相克に注目して」

本研究は、人類史における移動概念を、特に「自由」と「不自由」の相克に注目して再検討し、移動研究の新たな地平を築こうとするものである。人が移動する要因には、迫害や紛争、あるいは天災など生存に関わる現象からの「避難」、特定の集団や個人に対する「強制」、自由意志が先立つ「移住」などさまざまな位相がある。このなかで「強制」については、とりわけ移動者の不自由性や被害的側面、悲劇性ばかりが強調され、移動者は主体性のない存在として理解されてきた。これに対して、本研究では、「強制」に含まれる移動現象（たとえば、奴隷貿易、強制移住、契約労働、政治難民）を軸に、時間軸と空間軸との結節点が異なる事例を研究対象として取り上げ、それぞれの事例において、不自由と自由がどのように相克しているのかを検討し、事例間の比較を試みながら、人類史における移動概念について再検討する。具体的には、移動を生じさせた政治的、宗教的、経済的、あるいは文化的、自然環境的な要因を踏まえながら、他方で、移動する人や集団の立場から移動現象を捉えなおす。このようにマクロな視点とミクロな視点とを交錯させ、「自由」と「不自由」の相克に着目しながら、コンテクストの異なる多様な移動を比較・連関させることで、人類史における移動研究の新たな展開に資する概念の再構築を目指す。

研究代表者　鈴木英明
班員（館内）池谷和信、新免光比呂、寺村裕史、三島禎子
（館外）小林和夫、左地亮子、薩摩真介、杉本　敦、園田節子、田中鉄也、馬場多聞、向　正樹

研究会

2020年11月28日（土）12：30～18：30（国立民族学博物館　第４セミナー室　ウェブ会議併用）
鈴木英明（国立民族学博物館）「アデン湾両岸地域の可能性」
馬場多聞（立命館大学）「14世紀のイエメンの東アフリカ出身者」
石川博樹（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「エチオピアのオロモの移動――その歴史的意義と研究の困難さ」
池谷和信（国立民族学博物館）「ソマリランドにおける人の移動、ものの移動」
「先住民の宝」展見学
栗本英世（大阪大学）、三島禎子（国立民族学博物館）によるコメントと総合討論

2021年２月18日（木）９：30～13：00（ウェブ会議）
今後の進め方について
小林和夫（早稲田大学）「19世紀ガンビア川流域の落花生栽培と移民労働者」
三島禎子（国立民族学博物館）「移動する人の諸相――時間軸と空間軸の接点からみるソニンケ商人」
田中鉄也（人間文化研究機構）コメント
総合討論

2021年３月26日（金）９：30～13：30（ウェブ会議）
イントロダクション
左地亮子（東洋大学）「ヨーロッパにおけるジプシー／ロマの移動――フランスのマヌーシュとルーマニア・ロマ移民を事例に」
杉本　敦（国立民族学博物館）「トランシルヴァニアの小農経済――『豊か』になるための移動？」
新免光比呂（国立民族学博物館）コメント
総合討論

成果

本年度前半はコロナの状況を伺い、研究会の開催を延期したために開催実績はなかった。11月から３月までに３度の研究会を開催した。それぞれ、第１回研究会はアデン湾両岸地域、第２回はアフリカ大陸西部、第３回は東欧にそれぞれ焦点を当てた。このように地域別に研究会を組んだのは、本研究会が多様な専門分野の専門家から構成

されており、まず、それぞれの慣れ親しんだ空間枠組みでそれぞれの考えていることを出し合い、そこから新たな展開を構想したかったためである。したがって、次年度前半もこのような地域別の構成で研究会を組んでいく。

「島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」

アフリカ大陸で誕生した私たち現生人類＝ホモ・サピエンスは、約５万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼域への移住を開始した。一方、人類による葬送行為も私たちホモ・サピエンス以降に活発化し、発展してきたと考えられている。その萌芽的な痕跡はアフリカ大陸や西アジアで確認されているが、アジア・オセアニアへの島世界へと移住した人類集団も、その初期から墓葬や埋葬行為を行っていた痕跡が、各地で発見されつつある。本研究の目的の一つは、人類史的には大陸部で誕生したと考えらえる葬送行為や墓葬文化が、島世界という独特な環境への移住後、どのように変容し現在に至るのかという時間軸による検討を行うことにある。ついで二つ目の目的は、アジア～オセアニアの島嶼域を大きく東南アジア・台湾・日本の南西諸島・オセアニアという４つの地域に分けたうえで、その地域性を人類の島嶼適応や移住といったテーマを軸とする人類史的な視点から検討することにある。また時間軸による検討では、アジア・オセアニアにおける現生人類の歴史と重なる５万年程度の幅の長期的な考古学的時間軸と同時代を含む約100年程度の幅の民族誌的時間軸を比較の準拠枠とする。本研究では、考古学と文化人類学を軸に分野横断的な比較検討を行うことで、島世界の葬送や墓葬にみられる普遍性、歴史性、地域性を明らかにしたい。

研究代表者　小野林太郎

班員（館内）印東道子、池谷和信、丹羽典生、野林厚志

（館外）秋道智彌、片岡　修、片桐千亜紀、後藤　明、新里貴之、鈴木朋美、角南聡一郎、竹中正巳、田中和彦、前田一舟

研究会

2020年８月１日（土）13：20～18：00（第３セミナー室　ウェブ会議併用）

小野林太郎（国立民族学博物館）「第三回研究会の趣旨説明と目的の紹介」

竹中正巳（鹿児島女子短期大学）「古人骨からみた南九州・奄美群島地域の地域の再葬」

新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）「琉球列島先史時代の葬墓制」

小野林太郎・片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）「ウォーレシアにおける初期金属器時代の再葬――比較の視点から」

総合討論

2020年11月28日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第７セミナー室　ウェブ会議併用）

小野林太郎（国立民族学博物館）「第４回研究会の趣旨説明と目的の紹介」

印東道子（国立民族学博物館）「ミクロネシア・ファイス島の埋葬遺跡と葬法の特徴」

丹羽典生（国立民族学博物館）「民族誌的資料からみるフィジーの葬儀の変化」

後藤　明（南山大学）「東南アジア・オセアニアの埋葬法と他界観――民族誌テキスト分析の新手法に触れて」

秋道智彌（総合地球環境学研究所）「海民の葬制――民族誌ノート」（コメンテーター）

総合討論

2021年３月６日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第７セミナー室　ウェブ会議併用）

前田一舟（うるま市立海の文化資料館）「琉球における横穴の墓について」

竹中正巳（鹿児島女子短期大学）「南九州における横穴の墓について」

片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）「崖葬墓文化に関する考察」

小野林太郎（国立民族学博物館）「東インドネシアの複葬――民族考古学的視点から」

池谷和信（国立民族学博物館）「狩猟採集民による葬送とは――人類史的アプローチ」

討論――葬送の多様性・地域性と島世界との関係性

成果

今年度はコロナの影響を受け、完全に対面式での共同研究を開催できなかったが、オンライン上のウェブ会議を含めたハイブリッド形式にて計４回の共同研究を開催することができた。15名のメンバーのうち、実に10名が最低１回は発表を行うことができ、地域的にも琉球・南西列島、東南アジア島嶼部、オセアニアの全地域に関する事例報告がなされ、活発な議論を展開できた。時間軸においても、考古学データに基づく先史時代の事例から、民族誌

データに基づく近現代の事例まで広く検討を行った。これらの結果、島世界における葬送の一つの特徴として、二次葬や三次葬といった複葬がかなり広範囲に行われる傾向があることが明らかとなってきた。琉球列島で現代においても知られる風葬や、先史時代から近世期まで行われてきた崖葬墓などはまさにその一例と認識できる。同じく風葬や崖葬墓は、インドネシア東部やフィリピン諸島でも先史時代から近世期にかけて散見され、とくに離島域では主流となる傾向が確認された。一方、オセアニアでは水葬などやや異なる葬送も一般的だった可能性があり、こうした地域差の追究は次年度の共同研究でさらに検討を計画している。

「感性と制度のつながり――芸術をめぐる『喚起』と『評価』のプロセスから考える」

本共同研究は、制作や展示といった芸術実践において、モノゴトや制度などの非人間を含めた諸存在の働きにおける「喚起」と「評価」のあり方に注目し、感性と制度の不可分なありさまを検討していく。

芸術の人類学では1980年代後半から、美や芸術の普遍性を前提とすることが孕む権力性に基づき、地域の実践とグローバルな制度の関係が問題にされてきた。他方で、1990年代末以降は物質文化研究やエージェンシー論が隆盛し、人やモノゴトの働きの連鎖や相互生成のありさまが提示されてきている。しかし、後者で注目を浴びた「喚起」や「魅惑」と、前者で問題になっていた制度や審美的判断がどのように結びついているのかは、十分に検討されてこなかった。

そこで本共同研究は、世界各地の絵画や生活造形、音楽、古今東西の景観、パフォーマンスなどを含む芸術実践における「喚起」と「評価」の多様なあり方を明らかにしながら、感性と制度的領域が不可分に結びつくさまを検討していく。

研究代表者　緒方しらべ
班員（館内）寺村裕史
（館外）兼松芽永、竹久　侑、田中理恵子、登　久希子、橋本　梓、長谷川　新、光本　順、渡辺　文

研究会

2020年８月２日（日）13：30～16：00（ウェブ会議）
緒方しらべ（日本学術振興会）「アートを評価する――ナイジェリアの地方都市におけるアートの感覚的なものと制度的なもののつながり」
光本　順（岡山大学）「物質のネットワークと古墳づくり」
寺村裕史（国立民族学博物館）「考古学のデータ処理におけるアナログとデジタル――実測図から読み解く制度・身体・感性」

2020年10月11日（日）13：30～16：00（ウェブ会議）
竹久　侑（水戸芸術館）「制度を見直し、感性の発露をみる――『アートセンターをひらく』における『変身ワークショップ』を通して」
長谷川　新（インディペンデントキュレーター）「石器時代最後の夜――香川県鷲ノ山の石工と芸術家の邂逅を例に」
中間全体総合討論

2020年10月18日（日）13：30～15：30（ウェブ会議）
兼松芽永（女子美術大学）「中山間地における郷土美術教育と芸術祭」
中間全体総合討論

2021年１月24日（日）13：30～18：00（ウェブ会議）
橋本　梓（国立国際美術館）「形なき作品の収蔵は美術館をどう変えるか」
登　久希子（国立民族学博物館）「アートにかかわる『経験』の語りについての一考察」
全体討論：今年度の全体のまとめと総論、来年度の研究計画

2021年３月21日（日）13：30～18：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）
緒方しらべ（関西外国語大学）・兼松芽永（女子美術大学）「今年度の論点の整理と方向性」
登　久希子（国立民族学博物館）「The Institution of Institutionalism の概要と本研究の参照点」
長谷川　新（インディペンデントキュレーター）「『感情史とは何か』の概要と本研究の参照点」
全体討論と来年度の研究計画

成果

今年度の５回の研究会の成果として、以下２点が挙げられる。1)「制度」を批判の対象としてだけでも、利用の対象としてだけでもなく、創造的な「別物」として捉える可能性が見えてきたこと。また、これによって、従来の制度論と生成論の二項対立を乗り越える道が見えてきたということ。2)「制度」が創出されるプロセスに、「感性」が介入／発露していることが明らかになり、「感性」が「制度」の変容可能性の一つの鍵を握っていることがわかってきた。作家、キュレーター、鑑賞者、参加者、市民・地域住民、考古学者、過去を生きた人たちの感性（感覚、身体、感受、感情など）が既存の「制度」と接触したり、利用したり、それに反発したり、それと交わらなかったり、調和したりと、「制度」との何らかの絡みのなかでうごめく「感性」があり、それによって創出されうる／変容する（あるいはしない）「制度」がある、という状況が浮かび上がってきた。

「モビリティと物質性の人類学」

グローバル化の進展にともなって、人々の移動はますますその規模と多様性を増している。本研究の目的は、生業活動から観光まで、現代世界の人々が地球上を移動してゆく様々なあり方について知見を集積するとともに、人間の移動には不可避的に伴う物質的な側面を特に焦点化しながら比較分析することである。本研究ではまず、人々の移動を共通項として研究を続けているメンバーの事例をもとに、a. 身体、b. インフラストラクチャー、c. マテリアリティを鍵概念としてそれぞれの移動に固有の物質的側面を検討する。そのうえで事例間の共通性と差異を、①地域（アジア、ヨーロッパ等）、②移動背景（難民、観光等）、および③移動手段（徒歩、自動車等）の三つを軸に比較分析する。本研究では人々の移動を、人とモノと環境がその都度の状況に応じて個別的な関係を取り結ぶ実践として捉え、上記の作業を通じてそこに内在する様々な物質性（matelialities）の諸相を明らかにしてゆく。

研究代表者　古川不可知

班員（館内）八木百合子

（館外）左地亮子、高木　仁、土井清美、中野歩美、那木加甫、難波美芸、西尾善太、橋爪太作、片　雪蘭、村橋　勲

研究会

2020年７月18日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）

片雪　蘭（関西学院大学）「北インド・ダラムサラにおけるチベット難民の移動／滞留と物質性」

中野真備（京都大学）「インドネシア・バンガイ諸島におけるサマ／バジャウの海と道」

「全体討論と今後の進め方について」

2020年10月31日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

左地亮子（東洋大学）「『ジプシー巡礼祭』における身体・モビリティ・マテリアリティー――ストーリーを横切る『空間の偶然性』に着目して」

萩原卓也（京都大学）「走るたびに感じる身体の居場所――ケニアにおける自転車競技選手の浮遊と沈殿」

「全体討論と今後の進め方について」

2021年１月23日（土）13：30～16：00（ウェブ会議）

中野歩美（関西学院大学）「地続きの移動／定住――北西インドの移動民における野営の技術と物質性」

「全体討論と今後の進め方について」

成果

本年度は３回の研究会を開催し、５名のメンバーが発表をおこなった。上記の研究実施状況に示した事例を基に議論を重ね、世界各地の多様な移動実践について知見を深めた。さらに複数の事例を比較検討することを通して、いわゆるグローバル化に伴った移動様式の類似する変化や、移動を媒介するモノに応じた環境認識の差異、移動と住まうことの連続性といった、研究会全体に通底する複数のトピックも見出すことができた。さらに移動と滞留という区分自体がそもそも分析的な仮定に過ぎないのではといった、研究会の立脚点を再考し、深化させるような問いも提示された。また2021年３月にクロアチア（オンライン）で開催されたIUAES 2020ではMobilities and Materialitiesというパネルを組織し、関心を共有する海外の研究者と意見交換をおこなった。新型コロナウイルスの影響により、当初目標としていた発表回数は達成できず、外部講師の招聘も実現されない結果とはなったが、最終年度につながる成果は得られたものと考えている。

「海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み」

本共同研究の目的は、国外フィールドでの民族誌的経験を通して、文化人類学による日本社会／文化理解の新たな視角を提案することである。我が国における文化人類学は、戦後しばらくまでの時期を除けば、主に国外フィールドにもとづく異文化理解の学として発展してきた。異文化理解とは異文化を自文化と参照する営為であるため、それは必然的に一種の自文化論となる。ただしこの自文化論はほとんどの場合、研究者自身にとってもじゅうぶんに意識化されることはなく、あくまで民族誌の行間に埋め込まれている。しかし実際には、梅棹忠夫や佐々木高明、中根千枝の例が示すように、日本の人類学には、海外ですぐれた民族誌的研究を行ってきた人類学者が日本文化に関するユニークな仮説を提案するという良質な知的伝統が存在する。本共同研究では、そうした伝統を新たに継承すべく、国外での民族誌的研究の経験を重ねてきた研究者たちが、暗黙裡の参照項として措定してきた日本文化を対象化することで、国外フィールド発の日本研究の新たな可能性を提示したい。

研究代表者　片岡　樹
班員（館内）飯田　卓、平井　京之介
（館外）市野澤潤平、川瀬由高、川田牧人、桑山敬己、黄　潔、島村恭則、清水　展、中谷文美、中村昇平、平野美佐、松村圭一郎

研究会
2021年２月23日（火・祝）13：00～18：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
片岡　樹（京都大学）「全体趣旨」
清水　展（関西大学）「横須賀ネイティブの自文化＝自分化（？）グラフィーという企て」
片岡　樹（京都大学）「逆さ読みの日本論へ」
全体討論

成果
本年度は初年度ということもあり、２月23日に第一回のキックオフミーティングをハイブリッド形式で行った。同研究集会を通じ、メンバー間の問題意識の共有を行うことができたのは、次年度につながる成果ということができる。また当日の討論からは、海外フィールドを経由させた「自文化語り」や「民族誌の逆さ読み」が、海外フィールド経験者の視点からの日本論への切り口として一定の有効性があることが確認された。これらはいずれも、異文化のフィールドで日本との意外な共通点を発見することで、自文化に再び同一化を図るというベクトルによるアプローチである。それとは反対の極として、日本を異文化として発見し、異文化研究で培ったツールを適用するというアプローチもあり得るだろう。次年度以降は、この二つの極を念頭に、さらに討論を深めていく予定である。

「『描かれた動物』の人類学――動物×ヒトの生成変化に着目して」

人はなぜ「動物」に惹かれるのか？レヴィ＝ストロース（2001）が指摘するように、動物との直接的な関わりが希薄になった現代においても私たちはなぜ子供が生まれるとすぐ動物の絵本や玩具を与えるのか？これらの問いに生成変化としての「描かれた動物」が人と動物との「あいだ」の回路を開くとともにこれまでに知覚できなかったものを知覚させるものであるという可能性を検討することで迫るのが本研究の目的である。このためまず①動物をどのように知覚し、②何によって描写するのか、③なぜ描写するのか、④描写、あるいは描写された動物はどのような場で生成し、誰に必要とされるのかという４つの問いを具体的な事例を検討することによって、重なりや空白も含めた動的なものとして捉えなおす。さらにより深くこの問題に取り組むため、他者とともに「生成変化」する人類学の手法（インゴルド）によってドゥルーズ＆ガタリの提示した「動物との間に生じる生成変化によって新しい次元を開くもの」としての「動物描写」を検討する。具体的には描き手である人と、描かれる動物との間の動的な生成過程を再現し、「動物を／で／と／描く」という行為のなかで何が立ち現れるのかを身体経験や認知科学の知見を援用しながら明らかにすることでこれらの問いについて考察し新たな動物理解の地平を開拓することを目指す。

研究代表者　山口未花子
班員（館内）山中由里子
（館外）石倉敏明、大石侑香、小田　隆、COKER Caitlin、齋藤亜矢、管　啓次郎、菅原和孝、竹川大介、西澤真樹子、丹羽朋子、盛口　満、吉田ゆか子

研究会

2020年11月８日（日）10：00～18：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）

特別展「先住民の宝」の見学（全員）

山口未花子（北海道大学）「趣旨説明――『描かれた動物』共同研究の目指すもの」

民博展示における「描かれた動物」の調査（全員）

各共同研究者のテーマ発表と研究会の展望についての全体討論（全員）

2021年３月９日（火）13：00～17：30（ウェブ会議）

山口未花子（北海道大学）「ドゥルーズ＆ガタリ著『千のプラトー』第十章における芸術・あいだ・動物と人類学」

番匠美玖（北海道大学）インガ・ボレイコ（北海道大学）、前田雄亮（北海道大学）、加賀田直子（北海道大学）、田中佑実（北海道大学）、ケイトリン・コーカー（北海道大学）「『千のプラトー』キーワード解説」

菅原和孝（京都大学名誉教授）「〈動物になること〉の触発――Ｄ坂の怪事件」

管 啓二郎（明治大学）「ドゥルーズ『と』ガタリの『と』とともに」

全体討論

次年度の計画についての打ち合わせ

成果

初年度である今年は、２回の共同研究会を実施した。第１回研究会では、趣旨説明とメンバーによる研究紹介を行い、今後の研究計画についての方針を定めた。

第２回研究会では、理論的支柱の一つとしてドゥルーズ＆ガタリの『千のプラトー』を読み、３つの点、1）今日の哲学や人類学における世界の見方の基盤となる“様々な存在とともに世界を作り続ける人間”という視点につながる脱領土化とリゾーム的なつながりの重要性、2）人間と人間以外の存在をつなぐ中間に動物がいるということ、3）動物との間の生成変化として芸術を取り上げることで具体的なイメージを共有することが可能になること、を確認した。また菅原は「人」や「動物」といったカテゴリの同一性を検討する必要を認めた上で、コミュニケーションの基盤を手放す危険な行為になりかねない点に留意する必要とともに、生成変化の生じる此性では未来における原因ではなく準＝原因となりうることを指摘した。これに続く討論ではテキストとの間を反復しながら研究会の議論を深めるという方向性が示された。

「月経をめぐる国際開発の影響の比較研究――ジェンダーおよび医療化の視点から」

月経への対処は、近年、国際開発の分野において女子の就学率の向上、ジェンダー平等、水・衛生環境の向上などの観点から重視されている。月経衛生対処（menstrual hygiene management）に関する政策が、各国で策定、実施されはじめている。また、紙使い捨てナプキンをはじめとした生理用品がグローバルな市場を通じて流通し、月経への対処に影響を及ぼしている。このように月経は、女性の身体に普遍的な現象として政治・経済の回路を通じて対処される。一方で、その捉えられ方や対処のされ方にはローカルな慣習がある。月経という生理現象を忌避する社会は世界各地に広くみられ、文化人類学においては、出産や死の不浄などとともにケガレとして理論化されてきた。

本研究は、開発介入が世界各地の月経への対処や月経にまつわる文化に与える影響を、ジェンダーと月経の医療化という２つの視点から通文化比較を行うものである。月経への対処が国際開発の対象となったという同時代性から、月経をめぐる状況の通文化性と地域性を抽出することを目的とする。

研究代表者　新本万里子

班員（館内）丹羽典生、松尾瑞穂

（館外）秋保さやか、岡田千あき、小國和子、Karusigarira Ian、菅野美佐子、佐藤　峰、椎野若菜、杉田映理、波平恵美子、林　耕次、村上　薫

研究会

2020年11月21日（土）10：00～12：00（ウェブ会議）

新本万里子（広島大学）共同研究会の趣旨説明

出席者全員　自己紹介・共同研究に関する各自の関心の共有

2021年２月23日（火）10：00～12：30（ウェブ会議）

杉田映理（大阪大学）「生理ブーム？――月経をめぐる世界各地の新たな動きと開発支援」

波平恵美子（お茶の水女子大学）「月経におけるケガレ観（不浄性についての観念）と女性の生殖機能についての観念」

成果

初年度の2020年10月から2021年３月にかけて、２回の研究会を開催した。第１回は、代表者から研究会の趣旨を説明したほか、メンバー全員がこの研究会への関心を述べて、各自取り組む予定の課題を確認した。

第２回の研究会では、杉田が、月経衛生対処が開発アジェンダとなった経緯と月経をめぐる近年の産業界の動向を報告した。また波平が、月経のケガレに関わる文化人類学的研究の理論的展開を報告した。これら報告と全体討論を通じて、二つの報告を月経の可視化／不可視化という言葉でつなぐことができることを確認し、今後の議論のベースを作ることが出来た。

「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究――人類史的視点から」

環北太平洋沿岸地域（新旧両大陸の北太平洋沿岸地域）において先住民文化・社会の間に類似性や共通性が見られることは、100年以上前から知られていた。この類似性や共通性を解明するために、フランツ・ボアズ（Franz Boas）によるジェサップ北太平洋調査プロジェクト（1897年～1902年）など大小さまざまな調査・研究が試みられてきた。本研究の目的は、環北太平洋地域の先住民の諸言語・諸社会・諸文化の変化と現状、未来について、(1) 自律期、(2) 接触期、(3) 植民地期、(4) 国家による同化期、(5) 政治的自律化期、(6) 未来の６つの時期に分けて、(1) 歴史・考古学、(2) 言語学、(3) 文化人類学の視点から学際的に比較検証し、その異同の諸側面を総合的に解明するとともに、同地域の先住民社会の未来を構想することである。北太平洋の東西沿岸に分布する先住民社会の間にみられる文化的類似性と共通性をどのように考えるべきか、彼らの言語・社会・文化がどのように変化してきたか、現状はどのようであるか、そしてそれらは今後どのように変化していくか、を解明する。

研究代表者　岸上伸啓

班員（館内）　齋藤玲子、島村一平

（館外）　生田博子、大石侑香、大坂　拓、加藤博文、呉人　恵、近藤祉秋、関口由彦、高倉浩樹、高瀬克範、立川陽仁、野口泰弥、平澤　悠、堀　博文

研究会

2020年10月24日（土） 13：30～17：15（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

岸上伸啓（人間文化研究機構・国立民族学博物館）「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究――共同研究計画の提案を中心に」

全員「各自の研究紹介と研究計画の中での役割の検討」

2020年10月25日（日） 10：00～15：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

齋藤玲子（国立民族学博物館）、岸上伸啓（人間文化研究機構・国立民族学博物館）「特別展「先住民の宝」におけるアイヌ展示と北西海岸先住民（カナダ）展示について」

齋藤玲子（国立民族学博物館）、岸上伸啓（人間文化研究機構・国立民族学博物館）「環北太平洋先住民関連フォーラム型情報ミュージアム（Data Base）の高度化について」

2020年12月５日（土） 13：00～17：00（北海道大学アイヌ・先住民研究センター／岸上伸啓（人間文化研究機構・国立民族学博物館）「趣旨説明」

高瀬克範（北海道大学）「千島アイヌの形成史に関する学説整理と研究動向」

平澤　悠（東亜大学）「北米移住仮説研究の動向とアラスカの位置付け」

全員　全体討論「環北太平洋の考古学の現状と課題」

2020年12月６日（日） 10：00～18：00（北海道大学アイヌ・先住民研究センター／国立アイヌ民族博物館　［ウェブ会議併用］）

高倉浩樹（東北大学）「環北太平洋民族誌にみられる狩猟採集社会の不平等化」

全員　全体討論

加藤博文（北海道大学）「国立アイヌ民族博物館における展示と研究」

2021年３月14日（日） 13：00～17：00（ウェブ会議）

趣旨および打ち合わせ

呉人　恵（富山大学）「北東アジア諸言語の系統と類型――北米との関係性を視野に」

堀　博文（静岡大学）「北米先住民諸言語の系統分類と歴史」
全体討論

成果

初年度は共同研究会を３回開催した。第１回共同研究会では、環北太平洋地域の先住民社会に関する文化人類学研究の研究史と成果を整理した。第２回共同研究会では、千島アイヌの形成史に関する学説整理と研究動向、旧大陸から北米への人類の移住に関する研究動向とアラスカの位置付け、環北太平洋地域の狩猟採集民社会における不平等の出現過程について検討を加えた。第３回共同研究会では、北米先住民諸言語および北東アジア先住民諸言語の系統分類の諸説と問題点、新旧大陸の言語間の関係などについて検討を加えた。これらの議論の結果、新旧両大陸の先住民諸文化の間にはサケや海獣に基づく生業活動、定住度の高さ、精神世界におけるワタリガラスの重要性などといった共通性や類似性が見られる一方、先住民諸言語の系統関係は、両大陸間のみならず、それぞれの地域内においても解明できていないことが判明した。先住民諸文化・諸言語間の類似性と差異の生成は、先住諸民族による類似した自然環境への適応過程、移動経路、交流や交易、戦争などの歴史的相互作用と複雑に絡み合っているため、それらを解明するためには考古学者や歴史学者、言語学者、文化人類学者、生物人類学者らが協働して学際的比較研究を行う必要があるという認識を共有するに至った。

「不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う――モノ、制度、身体のからみあい」

グローバル化がすすむ世界において、他者とのあいだはどのように媒介されるのか。本研究は、施設や建築物などのモノや制度と人間の身体がどのようにからみあい、そこでどのような調整がおこなわれているのかを、民族誌研究のアプローチから描き出す。たとえば移民や難民、老者や病者の身体を受け入れ／収容する制度や施設が創出されると、つくられた制度や施設は、人間の身体を介した相互行為に変更を迫り、周辺にいる人々や、そこにある別の制度や施設にも影響を与える。制度からはみ出そうとする身体があれば、さらなる制度の組み換えや新たな創出もおこる。こうして、目の前の他者との生身の身体を介したやりとりから、モノと制度と身体がおりなすセッティングの調整と再編がくりかえされることになる。ここでは身体性をともなう関係性を場所という視点からとらえていく。状況に応じて調整される場所のセッティングの先に、21世紀にあらわれつつある社会のあり方を見通そうとする。

研究代表者　森　明子
班員（館内）奈良雅史、松尾瑞穂、三尾　稔
（館外）猪瀬浩平、長坂　格、中村沙絵、難波美芸、浜田明範、古川不可知、松嶋　健

研究会

2020年11月14日（土）13：30～17：00（国立民族学博物館　第１演習室　ウェブ会議併用）
森　明子（国立民族学博物館）「共同研究の趣旨について」
全員「共同研究のテーマをめぐって」
2020年12月６日（日）13：30～17：00（ウェブ会議）
中村沙絵（京都大学）「コプルストン・ハウスから始まる物語――スリランカの老人施設にみる〈場所〉と異質なものたちがつくる世界」
全員　質疑応答
2021年１月30日（土）13：30～17：00（ウェブ会議）
猪瀬浩平（明治学院大学）「緊急事態宣言下でもやって来る人達――日本のグループ農園におけるモノ、制度、身体のからみあい」
全員　質疑応答
2021年２月20日（土）13：30～17：00（ウェブ会議）
松島　健（広島大学）「ケアの場所、場所のケア――イタリアにおける精神医療と精神保健」
全員　質疑応答

成果

初年度は、４回の研究会を開催した（初回はウェブ会議併用、それ以後はウェブ会議開催）。
第１回研究会では、本共同研究の目的および射程について、代表者（森　明子）が基調報告を行い、場所という

視座を共有して議論をスタートすることを提案した。次いで、共同研究会メンバー各々が、問題関心や研究主題について簡潔な報告を行い、相互批評のうえで総合討論を行った。第２回研究会では中村沙絵が、スリランカの老人施設について、場所、空間性、建築環境という視座から報告した。第３回研究会では、猪瀬浩平が、新型コロナウィルスがもたらすパンデミックの状況下の生のからまりについて、グループ農園という場所からとらえる報告を行った。第４回研究会では、松嶋健がイタリアの精神医療の脱施設化を、場所の履歴という視点から報告した。毎回の報告ののちに、生の諸側面のからまりやあらわれをどうとらえて記述するかについて、参加者全員が討論を行った。新型コロナウィルス対応のため、ほぼ毎月１回、１報告について全員で議論することを定型化して、初年度の研究会を運営した。

「戦争・帝国主義と食の変容：食と国家の関係を再考する」

現在の食の状況はきわめて複雑で激しい変化にさらされているが、そうした現状につながる重要な歴史的モメントの一つとして、戦争・帝国主義をあげることができる。

そもそも食は国力の基盤である。よって戦争・帝国主義は、国内の食に対してだけでなく、国や地域を越えて食を移動させ変容させる重要なモメントになりうる。本共同研究では、主として、帝国主義的な国家の拡大路線が強まった19世紀末から20世紀半ばの食の変化に着目し、戦争や帝国主義がそれぞれの国・地域の食にどんな変容をもたらし、現在の食のあり方にどう影響を与えているのかを、ヨーロッパとアジアの事例を中心に明らかにする。その変化には、国家だけでなく市民（階層・ジェンダー差等も考慮）、兵士、専門家、市場（闇も含む）、メディアなどの多様なレベルや立場・主体が関与している。ゆえに個々の事例をそれらに留意しながら比較検討することによって、より一般的な意味でも、食の変容メカニズムにかんする試論や論点を提示し、現代社会の食のあり方を再考する一助にしたい。

研究代表者　宇田川妙子

班員（館内）諸　昭喜、野林厚志

（館外）井坂理穂、石田　憲、小田なら、秦泉寺友紀、新田万里江、林　史樹、林淑美（太田美沙代）、藤原辰史、牧　みぎわ、劉　征宇

研究会

2020年11月14日（土）13：30〜17：00（ウェブ会議）

宇田川妙子（国立民族学博物館）「『戦争と食』研究の趣旨説明」

全員・各自の研究構想

2020年11月28日（土）10：00〜12：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

藤原辰史（京都大学）「第一次世界大戦期の飢餓体験とナチス／ドイツおよび帝国日本」

全体討議

2021年３月６日（土）10：00〜12：00（国立民族学博物館　第２演習室　ウェブ会議併用）

劉　征宇（国立民族学博物館）「毛沢東時代の中国における戦争、統制経済と食生活――朝鮮戦争以降の天津都市部を事例に」

成果

１回目の研究会で、代表者による趣旨説明を行うとともに各メンバーが研究テーマ・対象を提示することによって、共同研究全体の問題意識の共有と戦争と食というテーマにかんして想定される論点について議論をおこなった。以降はメンバーの研究発表を２回開催し、ドイツと中国の事例にかんする議論を行った。前者は、世界大戦という規模も史的インパクトも大きな戦争について、しかも帝国ナチス・ドイツの側による食の統制や殖民等にかんする総括的な発表であり、食と戦争を一般的に考える上でのモデルの一つを提供するものとなった。後者は、打って変わって世界大戦後の冷戦期の中国に着目し、さらには都市部の生活をミクロな視点から叙述・分析した発表であり、戦争・帝国主義と食にかんする多様な事例の比較検討の必要性が浮き彫りになった。その一方で、食の生産や流通にかかわる具体的で詳細な視点の必要性（たとえば戦時における肥料などの輸出入など）、食の調理・消費にかかわる女性やジェンダーという視点の必要性、農学などの専門家や思想の影響、子どもの食への着目、戦争の記憶の影響など、共通して論じることのできる論点も具体的に出てきている。

「日本列島の鵜飼文化に関するＴ字型学際共同アプローチ――野生性と権力をめぐって」

本研究の目的は、日本列島の鵜飼文化に関わる新たな事例をＴ字型学際共同アプローチの方法論（後述）によって比較検討し、それらの事例を整理することで鵜飼文化の全体像を明らかにすることである。

ここでいうＴ字型学際共同アプローチとは、(1) 鵜飼に関わる埴輪造形や文献史料、絵画、俳句や短歌、美術、装束などの通時的な視点、(2) 各地の鵜飼に関わる民俗技術や知識、社会組織、物質文化などの共時的な視点、(3) ウ類（ウミウやカワウ）の生態、捕食される魚類の生態、鮎鮭の食品栄養に関わる自然科学的な視点から得られた成果を統合して分析する方法論である。これらの事例は代表者が鵜飼研究を続けるなかで確認したものであり、これまで統合的に議論されてこなかった。本研究ではこれら３つのアプローチをまとめて「Ｔ字型学際共同」とよぶ。

そのうえで、本研究では個別事例の比較検討および中国の鵜飼との対比を通して、日本列島の鵜飼文化の全体像と地域固有性を明らかにする。その際、本研究では野生性と権力を分析の切り口とする。それは、1300年以上の歴史をもつ日本の鵜飼においてこれまで野生のウ類がおもに利用されており、かつ鵜飼はときの権力者の庇護のもとで続けられてきた。こうした現象は中国の鵜飼においてみられない特徴だからである。

研究代表者　卯田宗平

班員（館外）井口恵一朗、石野律子、今石みぎわ、大塚清史、小川宏和、賀来孝代、筧　真理子、亀田佳代子、河合昌美、篠原　徹、瀬戸敦子、宅野幸徳、葉杖哲也、夫馬佳代子、堀　光代、松田敏幸、水野裕史、三戸信恵

研究会

2020年11月28日（土） 13：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）

卯田宗平（国立民族学博物館）「共同研究会『日本列島の鵜飼文化』で目指すもの」

共同研究メンバー全員による研究紹介と今後の予定

卯田宗平（国立民族学博物館）「比較対象としての中国の鵜飼の紹介およびディスカッション」

2021年２月27日（土） 13：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）

卯田宗平（国立民族学博物館）「前回の研究会を踏まえて①」

特集：宇治川の鵜飼におけるウミウ産卵を問いなおす

沢木万理子（鵜匠、宇治市観光協会）「宇治川の鵜飼における鵜の人工ふ化について」

卯田宗平（国立民族学博物館）「ウミウの繁殖生態と鵜匠たちによる繁殖技術の収斂化――計５回の繁殖記録から考える」

亀田佳代子（滋賀県立琵琶湖博物館）「飼育環境下でのウミウ産卵に関する鳥類学からのコメント」

成果

2020年度は計２回の研究会を開催した。第１回目の研究会では代表者である卯田（民博）が日本列島の鵜飼文化に関わる問題意識と今後の研究方針を示した。具体的には、鵜飼に関わる造形や文献史料、絵画などを通時的な視点で捉えるアプローチ、各地の鵜飼に関わる民俗技術や知識、物質文化、観光化などを共時的な視点で捉えるアプローチ、ウ類の生態や捕食される魚類の行動特性などに関わる自然科学的なアプローチという三つのアプローチによって、日本の鵜飼文化を包括的に捉えていくことをメンバーのなかで共有した。第２回目の研究会では、「宇治川の鵜飼におけるウミウ産卵を問いなおす」と特集テーマとして、2014年５月にウミウが産卵した事例に関わる発表をおこなった。具体的には、ウミウの人工繁殖に当事者として関わった沢木万理子氏（鵜匠、宇治市観光協会）が当時の対応や繁殖技術を構築していく上での問題点、働きかけ、放ち鵜飼に向けた取り組みに関わる報告をした。それを踏まえて、卯田は過去５年間の繁殖作業の記録を手がかりに、飼育環境下におけるウミウの繁殖生態の変化を自然下のウミウとの対比から報告した。最後に、鳥類生態学が専門の亀田佳代子氏（滋賀県立琵琶湖博物館）が鳥類学の立場からのウミウ繁殖の要因に関わるコメントをした。この研究会を通して、日本の鵜飼史のなかで記録上初めてとなるウミウの人工繁殖と今後の課題をメンバー間で共有した。

「先住民と情報化する社会の関わり」

本研究の目的は、都市化・情報化が進行する現代社会の中で先住民の人々がどのように生活世界を構築しているかを比較研究の手法に基づいて明らかにすることである。世界各地の先住民社会で都市部への移住、もしくは伝統的生活圏の都市化が進行していることはよく知られている（青柳・松山『先住民と都市』青木書店、1999年）。しかし、近年、情報化社会の到来にともない、これまで論じられてきた「都市と先住民」の主題に加えて、「情報技術と

先住民」の関わりを考える必要が生じてきている。スマートフォン、SNSなどの通信技術が登場することで先住民の人々の生活はいかに変化したか。とりわけ伝統的生活圏と都市部の間で情報のやり取りが容易になったことは、どのような影響をもたらしているか。デジタル空間上で先住民自身による情報発信がなされるようになった一方で、先住民を含むマイノリティに対するヘイトスピーチが横行しているが、先住民の「デジタル主権」をどのように考えることが可能か。本研究はこれらの問いに貢献することを目指す。

研究代表者　近藤祉秋
班員（館内）伊藤敦規
（館外）北原次郎太、栗田梨津子、土井冬樹、平野智佳子、額田有美、山越英嗣、渡辺浩平

研究会
2020年11月1日（日）13：00〜17：00（国立民族学博物館　第6セミナー室　ウェブ会議併用）
顔合わせ
近藤祉秋（神戸大学）「趣旨説明」
近藤祉秋（神戸大学）「デジタル民族誌の実践――社会的距離化時代の民族誌調査に向けて」
平野智佳子（神戸大学）「オーストラリア中央砂漠の村――都市間を移動するアボリジニの携帯電話の使用方法」
今後の研究活動に関する打ち合わせ
2021年1月23日（土）10：00〜12：00（ウェブ会議）
土井冬樹（神戸大学大学院）「デジタル化する集会――日本に移住したマオリによる文化・言語の学習機会」
栗田梨津子（神奈川大学）「オーストラリア都市先住民の社会運動におけるSNSの活用――今後の研究に向けて」
2021年3月16日（火）10：00〜12：00（ウェブ会議）
額田有美（国立民族学博物館）「コロナ時代のコスタリカの先住民土地回復運動――リモートエスノグラフィーの実践に向けて」
来年度の活動に向けての打ち合わせ

成果
第1回目の研究会ではスマホやSNSの利用に関して、アボリジニとアラスカ先住民の事例報告がなされた。第2回の研究会では、マオリとアボリジニによるSNS利用に焦点が当てられ、先住民言語の再活性化や社会運動のための利用がなされていることが論じられた。第3回の研究会でも、コスタリカ先住民の事例からSNS利用が論じられ、SNSが土地回復運動で重要な役割を果たしていることが明らかになった。初年度の成果としては、先住民社会においてSNSが多岐にわたる目的で利用されているが、その中でも社会運動や抵抗運動との親和性が高いことが確認された。デジタル人類学の先行研究ではオンライン上での参与観察が盛んに論じられてきた（Horst & Miller 2012など）が、ネット接続が不安定な場合も少なくない先住民社会の研究においては文字情報による非同期型の調査方法を見直す必要性があることが示唆された。来年度はコロナ禍におけるデジタル人類学の方法論についてもより詳細に検討していく。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム
国際シンポジウム「東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化――普遍性と個別性」
2020年8月2日　オンライン開催
代表者：出口正之

実施状況
新型コロナウイルスの影響で直前まで実施が危ぶまれたが、オンラインによる開催に切り替えた。ところが直前になって、米国と中国との間でオンラインアプリに関する使用を巡って争点となり、直前に大幅にプログラムを見直し、二日間のプログラムを一日で実施せざるを得なくなった。当日は41名の参加があり、引き続きオンライン上での懇親会を実施した。内容面では、メルボルン大学の小川晃弘教授が「『政策の人類学』を展望する市民社会を分析レンズとして」と題する基調報告を行い、「政策の人類学」を、クリス・ショアとスーザン・ライトの二人が編集した*Anthropology of Policy: Critical Perspectives on Governance and Power*（Routledge 1997）にその起源をた

どりながら、数量分析の対抗軸として発展してきたナラティブ分析による質的な政策研究として、同教授が過去20年間にわたり進めてきた、市民社会研究から事例をひき、政策分析における民族誌的調査の重要性を主張した。また、本流の会計学者の尾上選哉・日本大学教授が、「企業会計の『特殊性』と『普遍性』」と題して、組織としては決して普遍性を有したものではない、特殊形態として企業から誕生した「会計学」が、果たして他の組織に対しても、「一般性」を持ちうるのか、という学問上きわめて重要な指摘を行った。さらに、外国人研究員の師穎新氏が、中国で導入されている付加価値税を、各仕入れ・販売ベースで証明している「インボイス」（証憑）に着目し、「インボイス」の操作による「虚偽取引」と、領収書での詐欺行為、さらにそれに伴う税収への影響の発表を行った。租税政策上、こうした文化的な作為は着目されてこなかったことであり、極めて新規性の強い発表があった。また、法学者の久保秀雄は、「コントロールと逸脱のダイナミクス」と題して、会計上の虚偽取引などの逸脱行為をどのようにコントロールするのかという点を、システム論を使って解明し、各パネリストと視聴者による斬新な議論が展開できた。なお、実施額はオンラインであり、謝金も予定していなかったことから、ゼロである。

成果

共同研究の成果発表シンポジウムであり、当該の共同研究については2021年１月に清水弘文堂から出口正之・藤井秀樹編『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』を出版予定。シンポジウムでの新規の内容については現在未定。本件については、*MINPAKU Anthropology Newsletter* で概略を紹介した上、本研究チームの WEB（https://i4cphil.com 現在作成中）に掲載予定。なお、録画があり、この取り扱いについては現在検討中である。

国際ワークショップ「グアテマラのマヤ民族衣装の現在」

開催中止

代表者：鈴木　紀

実施状況

2020年５月22日～５月25日の日程で本館にて開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行のため、グアテマラからシンポジウム参加者を招聘することが困難となったため、本プログラムの実施を中止した。

●国際研究集会への派遣

国際学会「International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC, 国際文化財保存学会）2020年大会」における研究発表

2020年11月２日～11月６日　オンライン開催

代表者：末森　薫

実施状況

国際文化財保存学会（IIC）は文化財の保存に関する権威のある国際学会であり、２年ごとに大会を開催している。2020年大会は、11月２～６日の日程で「歴史的建造物の保存における実践と挑戦（Practices and Challenges in Built Heritage Conservation）」をテーマとしエディンバラ（スコットランド）にて開催される予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、オンライン開催となった。オンライン開催となったため、エディンバラへ渡航はしていない。

申請者は、オンライン大会のセッション３において“Deterioration Caused by A New Support Layer Bonded with Epoxy Adhesive to the Mural Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, Chin Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, China”と題する研究発表を録画にておこなった。本発表は申請者が中国の共同研究者とともに、中国遼寧省義県にある奉国寺に描かれた壁画を対象として進めてきた研究の成果である。奉国寺は11世紀に築造された大型の木造建造物であり、内壁には大画面の壁画が残されている。1980年代におこなわれた部分解体を伴う修理事業によって、壁画の支持体にエポキシ樹脂およびグラスファイバーを用いた新たな層が設置されたが、それが原因となり新たな劣化現象が生じており、その調査・分析を進めてきた。本発表では、壁画の修復に使用された材料、建物・壁画の構造、そして環境に焦点を当て、これらの関係性より劣化要因を分析した結果を報告した。セッションの最後にはウェブ会議アプリを用いたライブ配信により、発表者およびモデレーターが参加するＱ＆Ａがおこなわれた。チャットに寄せられた質問に応えるとともに、モデレーターより提示された修復材料・技法に関するディスカッションに参加した。

成果

大会の発表をまとめたPreprintsの学会誌が発刊され、下記査読付論文として掲載された。“Deterioration Caused by a New Support Layer Bonded with Epoxy Adhesive to the Mural Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, China”, Lui C., K. Suemori, Q. Li, Y. He, F. Wang, H. Kang, *Current Practices and Challenges in Built Heritage Conservation, The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC）2020 Edinburgh Congress Preprints*（Studies in Conservation, Vol. 65, Supplement 1, 2020), pp.S187–S191.

館長リーダーシップ経費による事業・調査

みんぱく映画会の実施（特別展「先住民の宝」関連イベント）

実 施 日：2020年10月10日

代 表 者：園田直子

特別展「先住民の宝」の関連イベントとして、『斧は忘れても、木は覚えている』の映画会を開催した。

特別展では、マレーシアのオラン・アスリに関する展示コーナーがあり、ドキュメンタリー作品の上映を通じて、開発や森林伐採、土地権など、オラン・アスリが抱えている諸問題に関する理解を深めることにある。作品に描かれているオラン・アスリの惨状は、オラン・アスリ研究ばかりでなく、東南アジアに関する地域研究や先住民に関する人類学研究に対しても、研究上の貴重な資料を提供しており、作品の分析を通じて、さらなる研究の展開が期待できる。本作品の上映は、一般の方々にマレーシアやオラン・アスリのことを知っていただく機会を提供するだけでなく、マレーシアでは表面化されていない現象についても、映画というメディアを通じて、よりわかりやすい形で提供することができた。

なお、当日の参加者数は125名であった。

DIY型画像データベースプラットフォームにおける情報登録支援システムの開発

実施期間：2020年10月１日～2021年３月31日

代 表 者：丸川雄三

「DIY型画像データベースプラットフォーム」の実現に向けたシステム開発を実施し、利用者が手許のエクセルデータと画像ファイルを基に、人手を介さず独自に画像データベースを構築可能な「画像情報登録支援システム」を構築した。

システムの主な機能は次の３点である。すなわち、1）画像ファイルの読み込みと変換、2）登録用エクセルファイルの読み込み、3）データベース登録用セットの出力、である。これらの機能をウェブインタフェースを介して利用者が操作することにより、指定したネットワークドライブに配置した画像ファイルから、DiPLAS型の画像データベースへ登録可能なデータセットを作成することが可能となった。またこれらの機能のほかに、画像ファイルから登録用エクセルファイルの雛形を出力する機能、画像ファイルのメタデータおよび登録情報から索引等を自動生成する機能、コンタクトシートpdfを自動生成する機能をあわせて備えている。DiPLASの知見も活かし、データベースの利用を開始する時点で、登録した画像にある程度の整理がついている状態となるよう配慮した。その他、情報公開ポリシーにも対応可能な安全な運用を実施するための機能として、システムを操作するユーザを制限するための認証機能を実装した。2021年度は情報基盤事業として、引き続き本システムの実運用に向けた環境整備を実施する予定である。

創設50年史編纂事業

実施期間：2020年９月１日～2021年３月31日

代 表 者：新免光比呂

当該年度においては、2024年の「創設50周年史」刊行に向けての準備として、「創設10周年史」、「創設30周年史」、「年報」、「民博通信」、「中期計画報告書」、一般の社史などを熟覧すると同時に民博HP上のデータを精査した。その成果として、「創設50周年史」編集に備えて執筆対象となる事項をエクセルでリスト化し、今後の「創設50周年史」編集部会による編集作業の基礎とすることができた。

研究公演「阪神虎舞みんぱく公演」

実 施 日：2021年３月６日
代 表 者：日髙真吾

2018年11月に神戸で発足した阪神虎舞は、東日本大震災被災地の芸能を他の地域に広め、災害の記憶の風化を食い止めることを一つの目的として結成された。指導に当たったのは、特別展「復興を支える地域の文化――東日本大震災から10年」に展示協力をおこなっている岩手県大槌町の城山虎舞である。また、城山虎舞の神戸への移植を考え、プロデュースしたのは、東日本大震災後に民博内に設置された大規模災害復興支援委員会の協力者である橋本裕之氏（元追手門学院大学教授）である。

本公演では、阪神虎舞を実演するとともに、東日本大震災から10年の経過のなかで、東北と関西を結びつけた阪神虎舞結成の物語を紹介し、災害の記憶への向き合い方について参加者とともに考える場を設けた。ここでは、阪神虎舞のプロデューサーの橋本裕之氏と中川真氏（大阪市立大学）のほか、虎舞の指導をおこなった城山虎舞の菊池忠彦氏、金崎亘氏と釜石市地域で郷土芸能の復興支援を主体的におこなっている笹山政幸氏を招へいし、議論を行い、有意義なディスカッションを展開することができた。本来は、前庭で一般公開の予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大によって緊急事態宣言が出され、やむを得ず、オンライン公開となった。ただし、すでに再生回数は1000回を超えており、社会への情報発信としては一定の効果を上げたと考えている。

創設50周年に関わる時代的証言のインタビュー映像記録

実施期間：2020年９月24日～2021年３月31日
代 表 者：飯田　卓

2021年１月22日に吉田憲司館長が聞き手となり、松原正毅名誉教授のインタビュー映像を収録し、２月22日には、野林厚志教授が聞き手となり、石毛直道名誉教授のインタビュー映像を収録した。

いずれのインタビュー映像も、民博館内のセミナー室などでおこなった。映像収録中は、感染症に配慮し、部屋への立ち入りを制限するとともに、話者のあいだにはアクリル板の仕切りを立てるなどの措置を講じた。記録映像の利用許諾は、民博がビデオテーク用映像の利用許諾を取るための書式を用いて、収録直後に取りつけた。収録された映像素材は専門業者によって編集された。

民博研究懇談会

第301回　2020年10月28日
諸　昭喜（チェソヒ）「産後の民俗病に関する人類学的研究――韓国のサヌプンを中心に」

第302回　2020年12月９日
岡田恵美「共に歌う山の民ナガ――インド北東部ナガランド州の音楽文化にみる特殊性」

第303回　2021年１月14日
金　悠進「異国趣味を超えて――“インドネシア（らしい）音楽”とは何か」

第304回　2021年２月４日
上畑　史「ポピュラー音楽と民族的アイデンティティ――セルビアのターボフォークを例に」

2-2　外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2020年度科学研究費補助金　採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
新規	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化B）	人類学における芸術研究の刷新：イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化	吉田憲司	2020-2024
	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化B）	チベットの宗教基層におけるモノと聖性の動態に関する国際共同調査研究	長野泰彦	2020-2023
	基盤研究（A）一般	社会的記憶の観点からみたアンデス文明史の再構築	關　雄二	2020-2023
	基盤研究（B）一般	動物保護時代における文化システムとしての鵜飼の全面解明と「最適継承ルート」の共創	卯田宗平	2020-2024
	基盤研究（B）一般	装飾文化からみたアフリカ史の再構築に関する研究	池谷和信	2020-2022
	基盤研究（C）一般	20世紀前半ペルシア湾奴隷制に関する歴史民族誌的研究	鈴木英明	2020-2024
	基盤研究（C）一般	民族誌と統計解析の手法による博物館職員の働きがいと職業意欲の解明	太田心平	2020-2023
	基盤研究（C）一般	EU農政下における家族制農業生産についての民族誌的研究	杉本　敦	2020-2022
	基盤研究（C）一般	ケアから見たベルリンのネイバーフッドに関する民族誌的研究	森　明子	2020-2023
	基盤研究（C）一般	「民族芸術」の生成過程――中国雲南省麗江におけるトンパ教文化の資源化と観光	高　茜	2020-2022
	基盤研究（C）一般	南アジアのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究：インド・マニプル州ナガを中心に	岡田恵美	2020-2023
	若手研究	近世近代移行期における教団未満の宗教者と新宗教をめぐる史的研究	石原　和	2020-2023
	若手研究	現代アンデスにおける寄進と宗教性に関する研究――奉納品と教会記録の分析を中心に	八木百合子	2020-2023
	若手研究	ヒマラヤ山間部における車道建設の人類学的研究	古川不可知	2020-2023
	若手研究	チリのマプーチェ先住民組織における民族医療に関する文化人類学的研究	工藤由美	2020-2023
	若手研究	日常を美学化する詩的オラリティの人類学――タイ文化圏の声と文字の文化の比較研究	伊藤　悟	2020-2023
	若手研究	医療と制度：南インド社会にとっての公的伝統医療と伝統的治療師の関係性	松岡佐知	2020-2022
	若手研究	中等教育脱落者の少年少女と社会参加――インド・スラムにおける仲介者の働きに着目して	茶谷智之	2020-2023
	挑戦的研究（開拓）	東南アジアへ拡散したオーストロネシア語族の土器・埋葬文化に関する学際的研究	小野林太郎	2020-2022
	研究活動スタート支援	インフラの時間性に関する人類学的研究：ラオスの流れ橋の事例から	難波美芸	2020-2021
	研究成果公開促進費学術図書	仏教モダニズムの遺産：アナガーリカ・ダルマパーラとナショナリズム	杉本良男	2020
	研究成果公開促進費データベース	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2020
	特別研究員奨励費	ミクロネシア――南琉球の比較分析による初期人類の島嶼適応戦略の解明	山極海嗣	2020-2022

新規	特別研究員奨励費	ネパールにおける近代医療の市場化 ――医療アクセス・薬剤・身体経験	中村友香	2020-2022
	特別研究員奨励費	災害遺構を巡る住民の語りをもとにした集合的記憶形成過程の分析	坂口奈央	2020-2022
	特別研究員奨励費	第二次世界大戦後のケニアにおける越境性動物疾病対策と国家統治の変容	楠　和樹	2020-2022
	特別研究員奨励費	ネワール低カースト女性の儀礼実践とその変容に関する宗教人類学的研究	工藤さくら	2020-2022
継続	新学術領域研究 （研究領域提案型）	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016-2020
	新学術領域研究 （研究領域提案型）	日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて	林　由華	2019-2020
	新学術領域研究 『学術研究支援基盤形成』	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	吉田憲司	2016-2021
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化）	移民の身体ポリティクス： インド舞踊のグローバル化とエージェンシー	竹村嘉晃	2017-2020
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化B）	時空間を融合する： GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ	菊澤律子	2018-2023
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化B）	オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究	小野林太郎	2018-2021
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化A）	遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化 ――インドにおける血と遺伝子を中心に	松尾瑞穂	2018-2021
	基盤研究（A）一般	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	小長谷有紀	2017-2021
	基盤研究（A）一般	超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築	山中由里子	2018-2022
	基盤研究（A）一般	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	林　勲男	2018-2021
	基盤研究（A）一般	北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究	岸上伸啓	2019-2023
	基盤研究（A）海外	モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究	島村一平	2016-2020
	基盤研究（B）特設	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	西尾哲夫	2016-2020
	基盤研究（B）一般	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	西尾哲夫	2017-2021
	基盤研究（B）海外	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	マシウス ピーター	2017-2020
	基盤研究（B）一般	教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存	日髙真吾	2018-2020
	基盤研究（B）一般	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	園田直子	2018-2020
	基盤研究（B）一般	文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究：東部アフリカを事例に	飯田　卓	2019-2021
	基盤研究（B）一般	バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究	上羽陽子	2019-2023
	基盤研究（B）一般	再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価	末森　薫	2019-2021
	基盤研究（B）一般	シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究	寺村裕史	2019-2022
	基盤研究（B）一般	紛争後社会のレジリエンス：オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析	丹羽典生	2019-2022
	基盤研究（C）一般	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	藤本透子	2016-2020

継続	基盤研究（C）一般	触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究	廣瀬浩二郎	2018-2020
	基盤研究（C）一般	『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相	中道静香	2018-2022
	基盤研究（C）一般	アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究	川瀬　慈	2018-2021
	基盤研究（C）一般	島嶼社会における芸能伝承の課題 ――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ	福岡正太	2018-2020
	基盤研究（C）一般	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究	平井京之介	2018-2021
	基盤研究（C）一般	米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開	鈴木七美	2018-2021
	基盤研究（C）一般	未発表原稿分析による J.-C. マルドリュスの執筆過程の解明	岡本尚子	2019-2023
	基盤研究（C）一般	中国――南太平洋島嶼国関係の変化と「オセアニアン・チャイニーズ」像の表出	河合洋尚	2019-2022
	基盤研究（C）一般	日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明	相良啓子	2019-2022
	基盤研究（C）一般	インド・オディシャーにおける親密圏の変容： 恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験	常田夕美子	2019-2021
	基盤研究（C）一般	世界遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究	中村真里絵	2019-2022
	基盤研究（C）一般	インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究	三尾　稔	2019-2022
	基盤研究（C）一般	無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握：バヌアツ北部事例研究	野嶋洋子	2018-2020
	若手研究（A）	チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究	鈴木博之	2017-2020
	若手研究（B）	社会をつくる芸術： 「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	登　久希子	2016-2020
	若手研究（B）	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017-2020
	若手研究	現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究	黒田賢治	2018-2020
	若手研究	アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究	彭　宇潔	2018-2020
	若手研究	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷 ――伊勢大神楽と韓国農楽を中心に	神野知恵	2018-2021
	若手研究	肉食性動物のドメスティケーション： 毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化	大石侑香	2019-2022
	若手研究	レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究	早川真悠	2019-2021
	若手研究	宗教と移動をめぐる人類学的研究： 現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク	奈良雅史	2019-2022
	挑戦的研究（開拓）	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	出口正之	2017-2021
	挑戦的研究（萌芽）	新手話学の構成素の実証的検証研究	神田和幸	2018-2020
	挑戦的研究（萌芽）	日本手話言語の変質に関する研究	川口　聖	2018-2020
	研究活動スタート支援	アオウミガメを例にした稀少動物に対する人為空間の構造的理解に向けての比較研究	高木　仁	2019-2020
	研究活動スタート支援	社会変化と民俗特有の病いの変容： 韓国と台湾の産後の病いに対する比較研究	諸　昭喜	2019-2020

継続	研究成果公開促進費 データベース	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2018-2022
	特別研究員奨励費	琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明	林　由華	2017-2020
	特別研究員奨励費	高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割： 南インドの事例から	松岡佐知	2018-2020
	特別研究員奨励費	ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究：コスタリカを中心に	額田有美	2019-2021
	特別研究員奨励費	アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究	稲井啓之	2019-2021
	特別研究員奨励費	東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明	崎田誠志郎	2019-2021
延長	基盤研究（C）	生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究	新本万里子	2017-2020
	基盤研究（C）	農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究	杉本　敦	2017-2020
	若手研究（B）	三線が引き出す社会関係、価値、感情 ――大衆楽器が人びとに与える効果の研究	栗山新也	2017-2020
	若手研究（B）	宮古語諸方言の言語記録のための基礎的研究とデータ収集	林　由華	2016-2020
	若手研究（B）	アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究 ――聖像の所有と継承に注目して	八木百合子	2017-2020
	挑戦的研究（萌芽）	被災後社会の総体的研究：被災後をより良く生きるための行動指針の開発	竹沢尚一郎	2018-2020
延長	研究活動スタート支援	食の認識体系とその変容――タイにおけるMSG（グルタミン酸ナトリウム）の消費と拒絶	大澤由実	2019-2020
繰越	基盤研究（A）	アンデスにおける植民地的近代 ――副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤　晃	2015-2020
	基盤研究（A）	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015-2020
	基盤研究（A）	モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究	島村一平	2016-2020
	基盤研究（A）	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	小長谷有紀	2017-2021
	基盤研究（B）	バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究	上羽陽子	2019-2023
	基盤研究（B）	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	マシウス ピーター	2017-2020
	基盤研究（B）	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	園田直子	2018-2020
	挑戦的研究（開拓）	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	出口正之	2017-2021
	特別研究員奨励費	ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究：コスタリカを中心に	額田有美	2019-2021
	特別研究員奨励費	東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明	崎田誠志郎	2019-2021

受託事業

日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト

委 託 者：公益財団法人　日本財団
担当教員：菊澤律子
実施期間：2020年４月１日～2021年３月31日

目的と概要

みんぱくの大学共同研究機関という性質をいかし、手話言語学研究の推進とアウトリーチ、学術手話通訳者の育成を二本の柱として、館内外の専門家と協力しながら研究事業を進める。国際研究集会の開催等を通じて、手話言語と音声言語を通モード的にとらえる視点からの研究を推進する基盤を提供すると同時に、言語学の基礎概念や海外の研究動向に触れる機会を国内の研究者や手話通訳者、一般社会に提供する。さらに、そのような場での参加者間のコミュニケーションがより効果的に進められるよう、学術手話通訳者の育成に取り組むと同時に、将来、学術界における通訳ニーズへの対応に結びつけるための基盤づくりに取り組む。

手話言語学部門の活動

国際シンポジウム「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020／SSLL2020年」（2020年９月25日～10月４日）を開催し、手話言語学の最新動向に関する講演をおこない、議論の場を提供した。合わせて、国内向けに「手話言語学基礎講座」をおこなった。いずれも開催前一週間のオンデマンド配信およびオンタイムでのリモート開催の併用とした。

また、将来の学術界における通訳ニーズに対応するための基盤づくりとして、大阪大学全学教育「手話の世界と世界の手話言語☆入門」2020年度（後期開講）への講師派遣を行い、手話言語学の授業及び講演を実施した。講義の形態は、講師により、オンデマンドもしくはオンタイムのリモートとした。

学術手話通訳研修事業においては、学術手話通訳の習得・レベルアップを目的とする「国立民族学博物館学術手話通訳研修事業」（2020年４月～2021年３月）を実施した。

また、昨年度国立民族学博物館と大阪府が締結した協定に基づき、以下の５講座を実施した。

研修名	開催日数	場所
大阪府登録手話通訳者現任研修	12	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
大阪府手話通訳者養成講座現任研修（ワークショップ）	4	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
Late signer 講座	3	アットビジネスセンター大阪梅田
若手手話通訳者ブラッシュアップ講座	8	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
若手手話通訳者養成トライアル講座	8	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター

大阪府手話言語条例に基づく手話通訳者養成関連事業

委 託 者：大阪府
担当教員：飯泉菜穂子
実施期間：2020年８月６日～2021年３月31日

目的と概要

大阪府手話言語条例の趣旨に基づき国立民族学博物館と大阪府が協業体制をとり、以下の２点を含めた事業を実施することによって大阪府における質の高い手話通訳者養成を実現する。(1) 国立民族学博物館手話言語学研究部門（みんぱく手話部門）学術手話通訳研修事業が日本財団の助成を得て展開している諸講座を大阪府登録手話通訳者およびその指導者（養成講座講師）の現任研修講座として活用する。あるいは、大阪府登録手話通訳者およびそ

の指導者（養成講座講師）の現任研修講座をみんぱく手話部門学術手話通訳研修事業の一環として実施する。(2)若手手話通訳者の養成を目指した講座を実施する。

実施状況

新型コロナウィルス感染症拡大防止のためみんぱく手話部門が展開している諸講座を全て中止としたため、上記(1)相当事業として以下の３講座を少人数グループ・対面で実施した。

① 大阪府登録手話通訳者現任研修（６グループ×３講座：全18講座）
② 大阪府手話通訳者養成講習会講師現任研修（通訳実技指導基礎ワークショップ２グループ×２講座：全４講座）
③ NPO法人「こめっこ」スタッフ研修会（夏期集中講座として３講座）

また、上記(2)該当講座として、以下の２講座を少人数グループ・対面で実施した。

④ 若手手話通訳者ブラッシュアップ講座（大阪府登録手話通訳者のうちで手話通訳士資格を有する若手対象、８講座）
⑤ 若手手話通訳者養成トライアル講座（NPO法人「こめっこ」聴者スタッフで現に手話通訳を行っているあるいは手話通訳を目指す若手対象：８講座）

各実施事業（講座）の詳細（期日、回数、場所、内容、受講者数）は以下の通りである。

① 大阪府登録手話通訳者現任研修

日時：2020年９月１日、９月４日、９月８日、９月11日、９月15日、９月18日、９月23日、９月25日、９月30日、10月２日、10月14日、10月16日
回数・受講者数：各グループ３回ずつ、５名×６グループ計30名
場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター、アットビジネスセンター大阪梅田
内容：聞き取り通訳、読み取り通訳技術検証（ワークショップと個別検証）

② 大阪府手話通訳者養成講習会講師現任研修

期日：2020年12月18日、12月21日、2021年１月８日、１月18日
回数・受講者数：各グループ２回ずつ、７名×２グループ計14名
場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
内容：聞き取り通訳技術指導（検証方法）についてのワークショップと講義

③ Late signer 講座

期日：2020年８月27日～29日
回数：３講座（１日１講座）
受講者数：８名（NPO法人「こめっこ」スタッフ）
場所：アットビジネスセンター大阪梅田
内容：手話言語学（講義）、身体表現論（ワークショップ）、学習者の手話習得（講義）

④ 若手手話通訳者ブラッシュアップ講座

期日：2020年10月２日、10月14日、10月16日、10月28日、10月30日、11月11日、11月13日、11月25日
回数：８回
受講者数：５名
場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
内容：聞き取り通訳技術検証、読み取り通訳技術検証、通訳事前準備ワークショップ、模擬講演会読み取り通訳技術検証、手話言語学（講義）、手話通訳論（講義）

⑤ 若手手話通訳者養成トライアル講座

期日：2020年８月７日、８月12日、８月19日、８月21日、９月２日、９月４日、９月16日、９月18日
回数：８回
受講者数：６名

場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
内容：聞き取り通訳技術検証、読み取り通訳技術検証、通訳事前準備ワークショップ、模擬講演会読み取り通訳技術検証、手話言語学（講義）、手話通訳論（講義）

講師
- 庄崎隆志氏（office 風の器主宰）：
  講座③：「身体表現論」
- 前川和美氏（関西学院大学手話言語研究センター）：
  講座④⑤：聞き取り通訳技術検証
  講座③④⑤：手話言語学（講義）
- 飯泉菜穂子（国立民族学博物館日本財団助成手話言語学研究部門）：
  全事業コーディネート
  講座①②：全講座
  講座③：学習者の手話習得（講義）
  講座④⑤：手話通訳論（講義）、聞き取りおよび読み取り通訳技術検証

その他（資料作成・配付）
　前ページの実施状況(1)のうち大阪府手話通訳者養成講習会講師現任研修の「講義」に該当する内容として『みんぱくで手話言語学を学ぼう！2019』で実施した11講座の配布資料に解説文（ノート）を付与したものを受講者数分プリントして提供した。

民間などの研究助成金などによる研究活動

- 寄附金
  關雄二教授研究助成金（公益財団法人平和中島財団　2020（令和2）年度国際学術共同研究助成）
  ―――――――――――― 關雄二
  岡田恵美准教授研究助成金（公益財団法人平和中島財団　2020（令和2）年度国際学術共同研究助成）
  ―――――――――――― 岡田恵美
  順益台湾原住民博物館研究賛助金
  ―――――――――――― 順益台湾原住民博物館

2-3　文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源関連事業

　文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設の基盤業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。
　また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、情報管理施設の支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。
　2020年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1．運営体制

文化資源関連事業

　文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」、「文化資源計画事業」、「情報管理施設の基盤業務」の３種類のカテゴリーによって実施した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2．文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクト（以下「プロジェクト」）は、本館あるいは大学等関連機関が所有する学術資源の体系化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、期間として実施する研究プロジェクトである。

プロジェクトは、４つの分野（調査・収集、資料管理、展示、博物館社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記４分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1）調査・収集分野

該当するプロジェクトなし。

2）資料管理分野

該当するプロジェクトなし。

3）展示分野

特別展「先住民の宝」

提案者：信田敏宏

世界各地の先住民が大切にしている「宝」をキーワードに、写真や動画、絵画や漫画などのメディアも活用しながら、それぞれの地域の先住民の暮らしや現状を紹介した。「宝」には、狩猟具、装身具、儀礼具、その他の生活用具などの具体物だけではなく、伝統的な生活、森や海などの自然環境、言語、信仰、芸能なども含まれる。先住民運動や文化復興運動などが隆盛し、民族アイデンティティが活性化している状況にも配慮しながら、展示全体のストーリーを構成した。

特別展「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会」

提案者：廣瀬浩二郎

2021年秋の特別展実施に向けて準備を進めた。具体的には以下の３点について取り組んだ。

① 協力アーティストを確定し、各自の出展作品の数、内容に関して打ち合わせを行なった。

② 図録の目次案を固め、執筆予定者に原稿依頼状を送付した。

③ 展示場全体のレイアウトについて展示デザイナーと議論を重ね、設計図面を完成させた。

特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」

提案者：日髙真吾

未曽有の被害をもたらした東日本大震災。2021年はこの震災から10年目を迎える。東日本大震災では、復興過程において、被災地の地域文化の果たす役割が大きな注目を集めた。本展示では、東日本大震災からの10年の復興過程のなかでの地域文化の動向を紹介し、ミュージアムの視点から地域文化の防災・減災を考えるものであり、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」として、３月４日に開幕した。

特別展「*Homō loquēns*『しゃべるヒト』――ことばの不思議を科学する」の準備

提案者：菊澤律子

言語に関する展示会を、言語学の諸分野および言語に関連する他の分野の共同の研究成果公開の場として、2022年秋に民博の特別展示場において開催するための準備を進めた。展示の実施に向けて、会期変更に伴うスケジュールおよび予算の見直し、コンテンツの内容提供の依頼、具体的なコンテンツの大枠の決定および平面図概要の確定、展示関連出版物の内容の見直しなどを行った。

特別展「邂逅する写真たち――モンゴルの100年前と今」

提案者：島村一平

およそ100年前、多くの探検家たちが中央アジアを目指し、モンゴルに到達した。探検家たちは多くの写真を残し現在に伝えている。一方、研究者はもちろん現代のモンゴルの写真家たちも自らの社会を見つめ、写真で表現するようになった。100年前の欧米の探検家たちが残した「辺境」としてのモンゴルに対するまなざしと現代の研究者のまなざし。そして現代モンゴル人の自らの社会に対するまなざし。本展示は、こうした写真をめぐ

る100年の時空を越えた邂逅をテーマに展示するものである。以上のような内容の展示を企画するための準備を行った。

梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」

提案者：飯田　卓

2019年４月に採択された文化資源プロジェクト「企画展「梅棹忠夫生誕100年」（仮称）準備」を受けて、標記プロジェクト名に示した展示名で企画展を開催した。当初、会期は2020年４月23日から６月23日までの予定だったが、新型コロナウィルス感染症の流行第２波のために延期され、同年９月３日から10月20日に変更された。また、開幕後、この企画展をもとにした内容の展示を京都大学総合博物館に巡回させることを予定していたところ、先方の会期が延期されたため、民博では最終的に12月１日まで会期を延長して開催した。

2021年度企画展「躍動するインド世界の布」

提案者：上羽陽子

南アジア社会における布（着衣や儀礼用布など）の使途の多様性や、布が人や神に作用する機能などに注目した企画展を2021年11月４日～2022年２月15日（予定）に国立民族学博物館本館・企画展示場にて実施するための準備をおこなった。

巡回展「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」

提案者：山中由里子

ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるが実在するかもしれない「驚異」は、神の偉大な力を示すものととらえられ、自然に関する知識の一部として伝えられた。また、東アジアにおいては、流星や異形の生き物の誕生など、通常とは異なる現象は、天や神仏からの警告である「怪異」としてとらえられ、歴史書のなかに記録された。本展では、国立民族学博物館所蔵の民族資料を中心に、人魚、竜、怪鳥、一角獣など、さまざまな世界の想像上の生き物について紹介するとともに、警告・凶兆（モンストルム）を語源とする怪物（モンスター）の文化史的な意味について考えた。

巡回展「子ども／おもちゃの博覧会」

提案者：笹原亮二

2019年３～５月に本館で開催した特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を、島根県立古代出雲歴史博物館（島根県出雲市）において、巡回展として開催するための準備を行った。展示は、大人とは異なる存在としての近代日本における「子ども」の誕生を、子どもに関する玩具を始めとした様々な生活用品などのモノの展示を通して明らかにすることを目的とする。近代以降に商品化された子どもの生活に関する多種多様なモノは、現在、民博所蔵のビッグバン旧蔵資料を始め、各地の博物館・資料館や旧家に大規模コレクションとして残されている。展示では、これらの資料をとおして、近代以降、質量ともに充実する子どもに関するモノと、子どもの社会やそれを取り巻く社会全体との関係を検証し、モノに映しだされたその時代の生活意識や社会意識を読み解くことで、近代日本の子ども観の形成過程を実証的に提示する。本展はこれまでの文献や絵画資料などを中心とした子ども像の探求とは異なる視点から、近代日本の子ども観の形成過程を広く一般に展示公開するものである。

巡回展「ビーズ アイヌモシㇼから世界へ」

提案者：池谷和信

本計画では、民博所蔵の標本資料を中心に活用して、世界における多様な素材で作られたビーズや社会的役割を持つビーズを北海道の国立アイヌ民族博物館にて展示する。そして、これらをとおして、私たち人類ホモ・サピエンスの文化の特質を理解する機会にする。つまり今回の展示は、特定の地域の文化に焦点を当てたものではなく、地球上に普遍的にみられるビーズというものをとおして、「人類とは何か」という人類学の基本課題を正面から追求するものである。

共催展「佐々木高明のみた焼き畑――五木村から世界へ」

提案者：池谷和信

本館の元館長・佐々木高明は、焼畑研究の第一人者として知られている。これまで本館では、佐々木の撮影し

た写真を整理してデータベースとして公開してきた。同時に、佐々木の研究の出発点となった熊本県五木村にて氏の撮影した写真を紹介することから、現地の方々との研究交流会を進めてきた。そこで、本展示では、国立民族学博物館・五木村ヒストリアテラス五木谷との共同開催において（2020年10月３日～12月13日）、氏の撮影した五木村での焼畑の写真や道具を中心にして国内外での焼畑文化を紹介することが目的であった。同時に本展示は、五木村の事例から日本や世界の食と農の未来のあり方を考える試みでもあった。

共催展「梅棹忠夫生誕100年記念　知的生産のフロンティア」

提案者：飯田　卓

国立民族学博物館で2020年秋に実施した企画展をもとにした展示を京都大学において開催する。提案時には展示名や実施形態に不明な点があったが、最終的には京都大学総合博物館において2021年１月13日から３月14日まで、特別展「梅棹忠夫生誕100年記念――知的生産のフロンティア」という展示名のもとに開催された。新型コロナウィルス感染症の対策のため、会期の変更や入場制限などがおこなわれたものの、約1,300名の入場者を得て閉幕した。

4）博物館社会連携分野

知的障害者の博物館活用に関する実践的研究

提案者：信田敏宏

知的障害者を対象とした試行的ワークショップ「みんぱくSama-Sama塾」を開催した。知的障害者にとっても分かりやすく、楽しめる博物館の活用モデルを目指し、知的障害者が博物館を活用する際に必要とされる支援や改善点などを検討しながら実施した。

博物館社会連携事業強化プロジェクト

提案者：吉岡　乾

本館の博物館社会連携事業を、既存プログラムの改良と新プログラムの研究開発により強化することを目的に、下記６つの事業の実用化と運用、および新たな事業の研究開発を行った。

1. 2019年度に企画・実施したアウトリーチプログラムの検証と実用化
2. ワークシートの改良と種類の増加
3. 近隣公共施設との連携事業の実施と実用化
4. 2019年度に作成した子どもパンフレットの試行と校正
5. 高校、大学生に対する教育プログラムの企画立案、実施
6. 館内ワークショップの企画立案、実施

3．文化資源計画事業

文化資源計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、継続性の高い事業、または計画的に実施する事業で、３つの分野（資料関連、展示、博物館社会連携）に分けられる。

1）資料関連分野

標本資料の撮影等業務

本事業は、標本資料を研究、展示、情報提供等に有効利用するために、標本資料の撮影、計測、及びそれらに付随する業務をおこなうものである。標本資料の正確かつ詳細な画像情報を記録し、標本資料を有効に活用するための基礎的データの蓄積を目的としており、大学共同利用機関として資料に付随する情報の公開等に供するデータを作成する基盤的な事業である。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関する情報サービス、展示準備・展示運営のための資料管理及び情報の作成・管理等を行うものである。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関するデータベース掲載情報の作成、更新作業及び「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」に係るデータ整理業務を行うものである。

標本資料の整理・利用 データベース整理ワーキングに係るDBシステム要件の精査

現在、公開している標本資料関連データベース「標本資料詳細情報DB」「標本資料目録情報DB」「標本資料記事索引DB」の運用について、2019年に「データベース整理ワーキング」を立ち上げ、今後の戦略の検討を始めた。本事業は、タスクフォースの設置とデータベースの整理及び統合に向けた検討作業を円滑に進めるため、専従で従事するプロジェクト研究員1名を雇用し、データベースの現状確認と基礎情報整理を実施する事業である。

有形文化資源の保存・管理システム構築

本事業は、本館所蔵資料の保存と活用の両立を目的に、その保存・管理システムを緊急度に応じて構築することを目的にしている。2020年度は、①有形文化資源の保存対策立案としては、総合的有害生物管理（IPM）の考えのもと、生物被害の防除・殺虫対策に関わる資料管理活動を企画、統括した。②資料管理のための方法論策定では、博物館環境および博物館資料の調査、解析、総括をおこなうとともに、収蔵庫再編成に関わる活動を立案し、助言した。③資料の科学的調査法の推進では、本館の資料調査および他機関との共同利用を念頭に、物理的・化学的・光学的の各種調査の実施と拡充をはかった。

トーテムポールの新規製作

開館時に収集され本館前庭に屋外展示しているトーテムポールが、経年により劣化が進み、2017・2018年度の台風により両翼が破損したことから、新たなトーテムポールを制作することとした。制作をカナダ先住民族クワクワカワクゥのアーティストに依頼し、2020年4月に本館に搬入された。その後、6月にトーテムポール設置工事を行い、その様子をYouTubeでライブ配信した。さらに、11月にはトーテムポール新規制作のクラウドファンディングで寄附いただいた方を招いてトーテムポールの解説等の案内ツアーを実施した。

標本資料「ロシアの椀、匙、イースターエッグ」の寄贈受入

本館の中央・北アジア展示を充実させるため、旧ソ連の特別商店ベリョースカ（Beryozka）で1973年に購入されたホフロマ塗りの椀と匙、イースターエッグ型の民芸品の寄贈を受け入れた。ベリョースカはソ連邦対外経済関係省の管轄下にあった全ソ貿易公団が経営するチェーン店で、外国人向けに国産の民芸品、書籍、酒、食料品、衣料、電化製品など多様な商品が販売され、外貨をもつ一部の旧ソ連市民も利用した。寄贈資料は、こうしたソ連時代の制度及び生活の一端を示すものである。

標本資料「ネパール高地の酒器およびマニ車」寄贈受入

本事業は、1959年から70年代にかけてネパール高地で収集された轆轤引きの木製酒器6点とマニ車、油容器、盃、水煙草（4パーツ）の計10点を民博に寄贈受け入れし、南アジア資料の充実を図る目的で実施された。酒器はランタン谷、ダウラギリ山系ミャグディ・コーラ流域などヒマラヤ山麓の村で使われていたもので、保存状態が極めてよく酒器の表面装飾のヴァリエーションも確認できるなど、貴重な資料を所蔵することができた。

標本資料「新作タマサイ（アイヌの首飾り）」の寄贈受入

神戸市在住のガラス（とんぼ玉）作家が古式に模して製作したタマサイ（アイヌの女性が宝物としてきたガラス玉を中心とした首飾り）の寄贈を受け入れた。製作には技術と時間を要する貴重なもので、本館には同様の収蔵品はなく、今後の博物館活動に利用できる資料であるため、受け入れることとした。

標本資料「中国関連のバッジ、キーホルダー、護符等資料」の寄贈受入

中国に関連する標本資料、13件を受け入れた。中国社会の特色ある風習、観光土産、お守り、毛沢東や孫文など近代社会の指導者に関する資料等を受け入れることにより、中国地域の標本資料の充実を図るものである。

標本資料「ベトナムのバッジ（胡志明）」の寄贈受入

ベトナムに関する標本資料の寄贈を受け入れた。今回、寄贈された資料は、ベトナム革命を指導した建国の父である胡志明（ホー・チ・ミン）のバッジである。2004年8月～9月にベトナムのハノイで調査した時に購入したものである。バッジの表には、ベトナム、胡志明の肖像、彼の名前、生まれた年と、死亡した年（1890–1969）などが刻まれている。ベトナム地域の標本資料充実を図るものである。

標本資料「中国雲南省ナシ族女性の前掛け」の寄贈受入

中国雲南省西北部の少数民族であるナシ族の女性が着用するプリーツのついた前掛けを本館で収蔵した。研究ならびに展示、教育普及活動に活用する。この前掛けはナシ族の中で主流派といえる麗江地区のナシ族女性の民族衣装の中でも重要な位置を占めるもので、現地で他のナシ族女性のために前掛けを製作し、その技術に定評を得ている麗江地区のナシ族女性が、昔ながらの製法で2018年に製作したものである。資料的価値が極めて高い。

標本資料「パプアニューギニアの竹笛」の寄贈受入

京都市立芸術大学教授・山田陽一氏が、パプアニューギニアにおいて儀礼における音楽的表現の調査中に収

集した竹笛等の寄贈を受け入れた。

標本資料「パプアニューギニアの斧及びカレンダー資料」の寄贈受入

多賀俊介氏が1978年11月28日から12月５日にかけて、現地を旅行で訪れた際に購入した斧及びカレンダーの寄贈を受け入れた。別途寄贈された音響映像資料とともに独立期のパプアニューギニアに関する資料を充実させた。

標本資料「フィリピン、チボリの民族衣装資料」の寄贈受入

本事業は、東南アジア関連資料、とりわけ民族衣装資料をさらに充実させるため、フィリピンの山岳少数民族チボリの民族衣装を受け入れ、東南アジアの民族衣装に関する研究活動や博物館活動等において活用するものである。

標本資料「民俗芸能衣装資料」の勘定科目替え

本事業は、申請者である日髙真吾が、2021年３月に開催される特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」の準備の一環および研究資料として購入した物品（南部藩壽松院年行司支配太神楽衣装一式（岩手県）、城山虎舞衣装一式（岩手県）、友禅振袖（新潟県））を、標本資料へ勘定科目替えすることを目的とするものである。

2）展示分野

該当するプロジェクトなし。

3）博物館社会連携分野

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるみんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）の活動支援をおこなった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

特別展関連ワークショップを４回実施した。講師による講義、展示観覧および講師による展示解説、制作等の体験をとおして、参加者が特別展のテーマに関する理解を深める内容とした。ワークシートについては、ホームページに掲載し使用希望者が自由にダウンロードしていただけるように運用し、また展示場の状況にあわせて適宜内容を変更した。社会連携事業検討ワーキングにおいて作成した新規ワークシートは、学校団体にむけて試行調査を行い、改良案を検討した。

音楽の祭日2020 in みんぱく

社会連携活動の一環として、出演者が講堂およびエントランスホールにて演奏する音楽イベントを開催する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、今年度の実施は中止した。

カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

当館が所蔵するアイヌの標本資料に対して、安全な保管と後世への確実な伝承を目的に、祈りの儀式（カムイノミ）をおこなう予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、今年度の実施は中止した。

みんぱっくの改訂版制作（モンゴル――草原のかおりをたのしむ）

学校機関や各種社会教育施設を対象に貸出を行う学習キット「みんぱっく」は、パック制作後10年を耐用年数とし、また、時代に即した内容にするためにも改訂を行う必要がある。2020年度は「モンゴル――草原のかおりをたのしむ（2011年度製作）」の内容物確認と改訂後の内容物の検討を行った。

情報関連事業

情報関連事業は、2016年度まで文化資源関連事業として実施してきた事業のうち、映像音響資料・研究アーカイブズ資料および情報化にかかわるものを再編し、2017年度から実施している事業である。映像音響資料・研究アーカイブズ資料の蓄積や公開、学術資源の情報化等を通して、文化人類学・民族学及び関連諸分野における共同利用の基盤を整備し、利用を促進することを目的としている。2020年度の情報関連事業の概要は以下のとおりである。

1．情報プロジェクト

情報プロジェクトは、映像音響資料の収集・制作・公開、学術情報のデータベース化等を進める研究プロジェクトである。本館専任教員の提案に基づき、館外の有識者の意見を聴取した上で、情報運営会議の審査により採択し、

提案者の責任において実施する。その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元を前提としている。

1）取材・収集分野

●映像民族誌「コロナ状況下の伊勢大神楽――山本源太夫社中の活動記録（仮題）」

提案者：山中由里子

伊勢大神楽は西日本各地で厄払いの獅子舞を演じる職能芸能者のことを指す。本プロジェクトでは、コロナ禍においても巡行を続ける山本源太夫社中を取材した。

●マルチメディア番組「東南アジアの人形芝居（仮）」の制作

提案者：福岡正太

これまで民博が取材および制作した映像素材を基に、東南アジアの人形芝居を概観するマルチメディア番組「東南アジアの人形芝居」を制作した。

●マルチメディア番組「徳之島の歌と踊りと祭り」の制作

提案者：笹原亮二

人間文化研究機構連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」等で作成したマルチメディアコンテンツを基に、ビデオテークにて公開することを目的としてマルチメディア番組「徳之島の歌と踊りと祭り」を制作した。

2．情報計画事業

情報計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、計画的に実施する事業である。所掌事務又は本館専任教員からの提案を基に、情報運営会議で実施の可否を審議する。ビデオテークやみんぱく電子ガイドで提供する映像の制作、展示等の記録映像の制作、映像音響資料・研究アーカイブズ資料等の寄贈受入などが含まれる。

1）特別展・企画展・コレクション展示パノラマ映像制作

●特別展「先住民の宝」

●梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」

2）ビデオテーク番組制作

●「ウズベキスタンの美味しい羊料理――プロフ・ショルバ」

制作監修：寺村裕史

●「タンディルでパンを焼く」

制作監修：寺村裕史

●「ウズベキスタンの結婚式」

制作監修：寺村裕史

●「みんぱく村に神楽がやって来る！――伊勢大神楽ワークショップの記録」

制作監修：山中由里子

2-4　人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターは、2016年度より6ヵ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。基幹研究プロジェクトは、(Ⅰ)機関拠点型、(Ⅱ)広領域連携型、(Ⅲ)ネットワーク型（地域研究および、日本関連在外資料調査研究・活用）の、3類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画である。

本館が担当しているプロジェクトは以下のとおりである。

●広領域連携型
日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築
みんぱくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」
代表者：日髙真吾

1．プロジェクト概要

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできた。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせている。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状がある。

そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにする。また、これらの動向に人間文化研究がいかに貢献しうるのかを考察し、現在（いま）への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指す。

具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開する。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって地域文化を有意義な形で表象するためのシステムを構築する。

2．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

国立民族学博物館ユニットでは、本研究課題の成果公開の取りまとめとして、特別展を開催するとともに、2018年度に京都造形芸術大学と連携して実施したリレー講義「民俗文化財の保存・活用入門」を軸とした出版物を刊行する。また、2019年度の国際フォーラムの成果報告としてブックレットを刊行する。

3．年次計画の進捗状況

国立民族学博物館ユニットでは、本研究課題の成果公開の取りまとめとして、2021年３月４日より、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」を開催した。本特別展では、2011年の東日本大震災で、復興の原動力として大きな注目がよせられた「地域文化」に注目し、災害からの復興を支える地域文化をめぐる活動を紹介した。また、豊かな社会の礎となる地域文化の大切さとその継承について考える場を提供した。臨川書店より刊行した日髙真吾編『継承される地域の文化――災害復興から社会創発へ』では、地域文化の保存と活用を両立させることを目指した実践研究の成果を取りまとめた。また、ブックレット『地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割』では、台湾と日本における地域文化の活用事例を比較検証し、市民参加型の博物館活動の在り方について考察を進めた。

●広領域連携型
アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開
みんぱくユニット「文明社会における食の布置」
代表者：野林厚志

1．プロジェクト概要

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することである。

食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきた。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っている。

こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いである。

なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける『エコヘルス』の新展開」の一つのユニット研究として実施する。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究し

ようとする新たな研究の視座である。

2．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

本年度は、当初の基本計画にしたがい（1）定例研究会（若手研究者支援セミナーを含める）、（2）アジア諸地域における基盤調査、（3）アジア地域外での比較調査（4）一般公開講演会、（5）成果刊行論集の編集計画の立案、を中心に進めるとともに、研究成果の公開を国内外で積極的に進める。

3．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

2回の全体研究会合を行い、プロジェクトで実施した調査の報告、公開した成果の内容を報告し参加者間での議論、意見交換を行った。若手研究者を中心とした食事調査文献資料の渉猟プロジェクトを新規にたちあげ実施した。これは、東アジア・東南アジアにおける食生活の調査記録を集成し、複数の地域間での比較研究を可能とするデータベースの構築を主目的とするものである。同時に、COVID-19による新型肺炎の国内外での流行のために、国内外の調査を実施することができなくなった大学院生、ポスドク研究員の研究活動の活性化も目的とした。計5回の研究会を実施し、基礎データを集成するとともに若手研究者の育成につとめた。

COVID-19による新型肺炎の国内外での感染状況に鑑み、基本的には海外調査は中止もしくは延期をした。これに対応するために予定していた海外旅費を調査地の衛星写真購入費にきりかえ、リモートセンシングによる調査を実施した。また、移動可能な国内調査地における継続調査、予備調査を実施した。

研究成果の公開については、査読付き論文を8本（国際誌5本、国内誌3本）を公刊し、プロジェクト参加者を中心に編集を行った『世界の食文化百科事典』（丸善出版社2021）を刊行するとともに、一般公開講演会は延期とし、次年度開催の準備を行った。具体的にはSDGsと食との関係についての連続講演会を産学連携で実施する計画を立案した。

今後のプロジェクト推進方策

2019年にひきつづき、COVID-19による新型肺炎の感染拡大状況に鑑み、海外調査を含めた野外調査を見直すとともに、昨年度に代替措置としてとったリモートセンシング調査を適宜導入しながら対応していく予定である。また、持ち越しとなった刊行物の出版にむけた編集作業を進める。全体の成果のとりまとめについては、代表ユニットである地球研ユニットのリーダーシップのもとで進めていく。

●ネットワーク型：北東アジア地域研究

北東アジアにおける地域構造の変容――越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」

代表者：池谷和信

1．プロジェクト概要

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、民博内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成される。また、北東アジアを研究対象にして、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指している。

ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としている。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みである。

なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進している。

2．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

国立民族学博物館・北東アジア地域研究拠点では、初年度より行っている館内研究会を継続して開催し、連携拠点である国立歴史民俗博物館との研究交流や館外の研究者との交流を行う。また、国際公開セミナーを開催し、研究情報の収集に努めるとともに、海外の研究者との連携を図る。こうした研究活動を通して構成員各自のテーマか

ら全体のテーマへの議論を深め、最終年度における成果出版を見据えつつ北東アジア地域像の解明に努める。

3．年次計画の進捗状況

本年度は、新型ウイルスの感染症拡大に伴う影響により、当初の計画通りに遂行することは困難となったが、オンラインによるリモートを併用しながら館内研究会（計2回）、国際ワークショップ “Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches” を開催した。また、熊本県五木村での企画展「佐々木高明の見た焼畑−五木村から世界へ」、およびそれに伴う研究講演会「なぜ、いま、焼畑なのか『佐々木高明の見た焼畑−五木村から世界へ』展から考える」（計4回）、「焼畑からみた地球の未来」を開催した。このほかにも、第38回大会比較文明学会シンポジウムにおけるパネル「生き物をめぐって現代文明を考える」の組織および季刊民族学における特集の刊行（2021年1月）、国立民族学博物館特別展示「先住民の宝」（2020年10月1日〜12月15日）におけるアイヌに関するコーナーへの協力を行った。

●ネットワーク型：南アジア地域研究

グローバル化する南アジアの構造変動──持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究
副中心拠点「南アジアの文化と社会」

代表者：三尾　稔

1．プロジェクト概要

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変りつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではない。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進している。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学（中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の6拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っている。

民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献する。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、アジアにおける南アジア研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っている。

2．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

本拠点の重点テーマは「南アジアの文化と社会」である。調査研究活動は、「南アジアにおける社会的レジリエンス」を扱う研究ユニット1（「移動・移民」研究班と「社会変動と親密圏」研究班）、「環流する南アジア」を扱う研究ユニット2（「音楽・芸能」研究班と「布」研究班）、そして両ユニットを橋渡しする「宗教」研究班という研究体制を軸に、南アジアの文化と社会の動態の長期的・総合的観点からの解明に取り組んでいる。また副中心拠点として、国際シンポジウム主催や開催支援、事業の研究成果の英文叢書等刊行支援、国際学術交流協定関係の拡大、国際南アジア研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業の国際化の推進を行っている。

【調査研究活動】

南アジアをはじめ海外の各地に拠点メンバーを派遣し、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会のレジリエンスの実態を調査する。調査成果は、拠点独自で編集する成果論文集の刊行を念頭に、昨年度同様、「移民・移動」、「音楽・芸能」、「社会変動と親密圏」、「宗教」、「布」の5つのテーマ別研究会を年に数回開催するほか、拠点全体でユニット2のテーマ「環流する南アジア」に関する合同研究会を1回開催して議論を深め、メンバー間で知見の共有を図る。また、外国人研究者を招聘したMINDAS-South Asia国際セミナーを複数回開催する。さらに、研究交流協定を結んでいるエジンバラ大学との研究協同を推進するため、拠点メンバーを派遣して研究発表の機会を提供し、今後の共同的研究の発展に関して意見交換を行う。

国際的な南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して2016年度に発足させた「アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム」（以下、ACSAS）の第4回国際シンポジウムをベトナムの研究機関と共催（11月）し、日本から研究者を派遣して研究発表の機会を提供するとともに、シンポジウム後に行う運営会議で今後の共同的研究ネットワークの発展に関して意見交換を行う。また12月には、東京大学、広島大学および京都大学の各拠点との共催による第12回INDAS全体国際シンポジウムの開催準備を支援する。

【研究成果の公開・可視化】

⑴　報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

①　第1回ACSAS国際シンポジウム（2017年度）、第2回会議（2018年度）、第3回会議（2019年度）に関する成果論文集のとりまとめと編集作業を引き続き支援する（韓国外国語大学南アジア研究センター発行の学術雑誌Journal of South Asian Studiesの特集号として刊行予定）。

②　2018年1月にネパール・カトマンズで開催したINDAS-South Asia/Martin Chautari共催の国際シンポジウム（第9回INDAS全体国際シンポジウム）に関する成果論集の取りまとめ・編集作業を引き続き支援し、年度内にRoutledge社からの刊行を目指す。また2018年12月に東京外国語大学で開催した国際シンポジウム（第10回INDAS全体国際シンポジウム）、2019年12月に龍谷大学で開催した国際シンポジウム（第11回INDAS全体国際シンポジウム）に関する成果論集の取りまとめ・編集作業を引き続き支援する。

③　INDAS-South Asia全体および各拠点が中心となった英文の研究成果に対して校閲の補助を行う。

⑵　教育プログラム等

①　国立民族学博物館と大学の連携に向け、主に関西圏の大学で拠点メンバーがそれぞれ担当する授業等において、同館の活用方法および南アジア展示に関する解説を行い、南アジア地域の理解を促していく。

②　社会人向けセミナー等への出講を積極的に行い、南アジア地域に関する研究成果の普及に努めていく。

⑶　展示等

①　国立民族学博物館の南アジア展示コーナーに関して、「躍動する南アジア」の現在を念頭に置きつつ、随時展示替えや一部改修を行う。

②　本拠点「布」班を中心として企画を進めている、2021年度開催予定の企画展開催の準備を支援していく。

③　同館に寄贈されたネパールのガンダルバ映像音響資料のデータベース化を支援し、南アジアの文化と社会に関する映像音響資料の更なる充実を図る。

【研究プロセスの国内外に向けた情報発信】

拠点が運営するホームページからの情報発信を積極的に進めるとともに、本プロジェクトの国際化をさらに推進すべく、英文情報ページの充実を図る。

【若手研究者の人材育成の取組み】

拠点が主催する個別・合同研究会等で博士後期課程・PDレベルの若手研究者に研究発表の機会を積極的に与え、研究ネットワークの拡充を図る。また若手研究者のフィールドや国際学会への派遣に努め、調査・研究活動を支援する。これらを通じて若手研究者の研究能力の育成に取り組んでいく。

3．年次計画の進捗状況

【調査研究活動】

新型コロナウィルス感染症の流行による海外渡航制限の発令をうけ、今年度計画していた本拠点メンバーの海外派遣が困難となり、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会の実態について、個別の事例を比較検討するための現地調査を行うことはできなかった。しかしながらコロナ禍においても、オンラインによる研究会や国際セミナーを実施することで海外との研究交流を可能とし、最終年度の成果発信に向けて、各々の研究の進展に貢献した。また国際ネットワークの維持構築にも貢献した。

昨年度に引き続き、研究ユニット1「南アジア社会におけるレジリエンス」を「社会変動と親密圏」「宗教」「布」、研究ユニット2「環流する南アジア」を「音楽・芸能」「移民・移動」という各班にわけ、具体的なテーマに絞った個別の研究会を計6回（計88名が参加）、国際セミナーを1回（オンライン開催、計34名が参加）、現代中東地域研究国立民族学博物館拠点との連携研究会を1回（オンライン開催、計23名が参加）開催し、本拠点独自の成果論文集の出版（2021年度刊行予定）に向けた問題意識の共有と議論をさらに深めた。拠点全体としての研究活動の一体性が増す効果が得られた。

本プロジェクトの国際化を担う当拠点の活動として、国際的な（特にアジア圏）南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して、2016年度に発足させたACSASの第4回国際シンポジウムをベトナムのインド・南西アジア研究所と共催で開催する予定であったが（ベトナム・ハノイ、11月11～12日）、新型コロナウィルス感染症の流行をうけて開催を1年延期した（ベトナム・ハノイ、2021年11月18～19日予定）。当シンポジウム延期に伴う代替措置として、第1回Asian Consortium for South Asian Studies（ACSAS）ウェビナーをACSASと共催で開催し（オンライン開催、12月5日、計56名が参加）、プロジェクト内から1名が研究発表、1名がコメントを行った。

また、ウェビナー後に開いたコンソーシアム運営会議において、ウェビナーの講評を行うとともに、研究成果の刊行や共同的研究ネットワークのさらなる発展に関して意見交換を行った。

南アジアのグローバルな重要性が高まるなかで、アジア諸国には南アジア（またはインド）研究センターが次々に設立されつつあるが、各研究センター間を横断した連携は皆無に等しかった。本コンソーシアムは南アジア研究の厚い蓄積を有する日本を基軸として、アジアにおける南アジア研究の連携を図り、欧米によるコロニアル / ポストコロニアルな枠組みとは異なる関係を育んできたアジア諸国の歴史的経験に立脚した南アジアへの視点を新たに確立することで、南アジア研究の国際的な活性化を狙う特色がある。運営面では、第１期事業以来ネットワーク型地域研究の経験を積み重ねてきた本研究プロジェクトが主導し、とくに本プロジェクトの国際化を担う国立民族学博物館拠点がハブとしての役割を果たし、参加各国持ち回りでのシンポジウムの開催やその成果論文集の編集、さらにはメーリングリストを通じた情報共有などを行って、アジア圏を中心に本プロジェクトの存在を広く海外に発信することに貢献している。

英国・エジンバラ大学南アジア研究センターとは第１期事業以来研究交流協定を結び、研究者を相互に派遣して国際セミナー等を開催してきたが、2020年５月に協定の期限を迎えた。そこで先方の代表と交渉して協定をさらに３年間継続することで合意した。また、コロナ禍における来年度本拠点の構成員の派遣に伴う共同的研究の実施についても意見交換を行った。

くわえて、東京大学拠点、広島大学拠点および京都大学拠点主催の第12回 INDAS 全体国際シンポジウム（オンライン開催、12月19～20日、計82名が参加）の開催準備を支援し、拠点メンバーが企画・運営にあたるとともに、メンバーの中から１名が発表を行った。全体集会の企画・運営・成果において、拠点も一定の貢献を果たすことができた。

【研究成果の公開・可視化】

⑴ 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

「報告書・成果論集」

2018年１月にネパール・カトマンズで開催した第９回 INDAS 全体国際シンポジウムに関する成果論集を Routledge 社から刊行した。また、2018年12月に東京外国語大学で開催した第10回、2019年12月に龍谷大学で開催した第11回の INDAS 全体国際シンポジウムの英文での成果論集を Routledge 社から刊行する予定であり、編集作業を進めた。同出版社は海外の大学・研究機関でも高く評価されており、研究成果の国際的な発信に大いに貢献できるものである。

2017年11月にタイ・バンコクで開催した ACSAS 第１回、2018年11月に韓国・ソウルで開催した第２回、および2019年11月にシンガポールで開催した第３回国際シンポジウムの成果論集について、Journal of Indian and Asian Studies からの刊行を目指して編集作業を進めた。同雑誌は韓国外国語大学インド研究所と World Scientific 社（シンガポール）が共同発行する査読誌で、研究成果のグローバルな発信が期待される。

⑵ 教育プログラム等

① 国立民族学博物館と大学間の連携促進にむけ、本拠点メンバーが関西圏の大学で担当する南アジア関連の授業において、同館が収蔵する文献・映像資料の活用方法や南アジア展示に関する解説を行い、学生にとって馴染みのない南アジア地域に対する理解を促した。また、同館にて受講学生（日本人および外国人留学生）を対象とした博物館実習を予定していたが、新型コロナウィルスの感染拡大に伴う博物館の休館措置をうけて実施が困難になったことから、関連授業において同館が収蔵する様々なモノを紹介し、南アジア社会の暮らしをモノから理解する機会を提供することで、南アジア地域をより身近に感じさせることに貢献した。

② 同館が定期的に開催するウィークエンドサロンおよび公開講演会にて本拠点のメンバーが講義を行い、南アジア地域の文化について参加者の理解を図った。

⑶ 展示等

① 国立民族学博物館の南アジア展示コーナーに関して、「躍動する南アジア」の現在を念頭に置きつつ、展示品の収集作業を支援し、展示コーナーの改修に貢献した。

② 本拠点「布」班の研究成果の一端を国立民族学博物館の企画展として2021年度に開催する計画を立て、本拠点「布」班を中心に企画を進めた。最終年度の企画展にむけて、準備は順調に進んだ。

③ 同館に寄贈されたネパールのガンダルバ映像音響資料のデータベース化に向けて、同資料の研究を支援し、将来的な社会的発信に貢献した。

【研究プロセスの国内外に向けた情報発信】

本拠点が運営するホームページをリニューアルし、より分かりやすく、魅力的な掲載方法を検討するなどして、研究情報の国内外への発信をより一層強化した。

【若手研究者の人材育成の取組み】

本拠点メンバーや他大学のPD、助教、講師、准教授レベルの若手研究者に対して、本拠点が主催する班別および連携研究会での発表機会（のべ3名）を提供し、学際的な視点をふまえた研究能力の育成に務め、ワーキングペーパーや論文などの研究成果に結びつくよう働きかけた。また、これまでの人材育成の取り組みが実を結び始め、メンバーの1人がインドのシヴ・ナダー大学とオーストラリアのモナッシュ大学が共同開催した国際シンポジウム（オンライン開催、2021年3月11～2日）に招聘され、研究発表を行った。ACSAS第4回国際シンポジウム（ベトナム・11月11～12日）では発表者の研究発表に伴う旅費の支援を行う予定だったが、新型コロナウィルス感染症の流行をうけて開催が1年延期された（ベトナム・2021年11月18～19日予定）。国際的な学術交流の機会を提供することに取り組んできた。

●ネットワーク型：現代中東地域研究

地球規模の変動下における中東の人間と文化――多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」

代表者：西尾哲夫

1．プロジェクト概要

現代中東地域研究では、国立民族学博物館拠点を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めている。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究である。

本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究している。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っている。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となる。そこで(1)「個」から世界への視点による他者観と、(2)社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施している。

2．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

中東地域の現代的動態について、資源をめぐる問題系として①文化資源（文化遺産、個人と世界観、宗教とマテリアリティなどの問題群）、②自然資源（生態系と生活空間、環境問題と人間、資源と環境ガバナンスなどの問題群）③知的資源（情報環境、コミュニケーションと社会空間、伝統知と教養などの問題群）④人的資源（高齢化、障害者、女性・子ども・若者、経済的弱者やマイノリティ、難民などの問題群）として整理し、それぞれの問題群の検討を通じて、人間文化や人類の普遍性への地平を拓く新たな価値創出を目指す。

国立民族学博物館現代中東地域研究拠点（担当分野：文化資源）では、「個人空間の再世界化」をテーマとし、文化知識の資源化に焦点をあててきた。

プロジェクト5年目の本年度においては、基本計画に則り最終的な研究到達目標の達成と成果公開準備に向け四つの事業計画を中心に研究活動を推進していくことを計画した。(1)前年度までに再帰的に実施してきた調査研究の補足調査実施、(2)各拠点での研究成果の公刊を随時進めるとともに、プロジェクト全体での研究成果公刊にむけた編集作業の加速、(3)漸次実施してきた若手研究者の育成のための公募型共同研究の推進、(4)各拠点の分担課題到達にむけた深度の高いテーマ設定による国際的な研究集会の開催である。しかしながら(1)および(2)に関しては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって変更を余儀なくされた。

3．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

国際的な人的移動の制限や施設利用制限などにより研究活動にも制約があったなかで、遠隔での研究環境の整備などを行いつつ、これまでの研究活動によって培ってきた人的ネットワークを活用した研究活動を推進しながら、

前年度までの成果を統合した成果発信を行った。

初年度から実施してきた日本語・英語でのレクチャーシリーズを５月上旬からオンラインならびにハイブリッド形式で継続的に実施することで、国内外からより多くの研究者の参加を促した。また昨年度４月に民博拠点・AA研拠点で開催したマギル大学のサルヴァトーレ・アルマンド氏の主編著 *Wiley Blackwell History of Islam* の合評会の成果が、歴史学分野におけるトップジャーナルである *American Historical Review* の126巻１号（2021年３月刊行）に AHR Review Roundtable として掲載された。またプロジェクト初年度にパリで開催した中東における個と世界をめぐる国際シンポジウムの成果を Dominique Casajus, Tetsuo Nishio, François Pouillon, et Tsuyoshi Saito eds. 2021. *Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées*（Senri Ethnological Reports 152）. Suita: National Museum of Ethnology. として刊行した。加えて現代中東地域研究拠点から刊行している Resources for Modern Middle East Studies Series に、プロジェクト二年目に開催したアラブ詩の国際シンポジウムの成果として Akiko Sumi and Tetsuo Nishio eds. 2021. *The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions.* およびマグリブの博物館資料として Takumi Yamaguchi ed. *Research Source Guide for Museums in the Middle East II: Maghreb.* を刊行した。

さらに秋田大学拠点と協力しながら一昨年度に開催した企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――『みられる私』より『みる私』」を総括しながら過去の研究者による調査データの継承する方法的課題について、第36回日本中東学会年次大会（2020年８月29日）および英国王立人類学協会主催の国際研究集会（2020年９月18日）でパネル報告を行うとともに、次年度における成果刊行に向けた準備を進めた。

今後のプロジェクト推進方策

各拠点で深めてきたそれぞれの各分担テーマを統合し、現代中東地域研究全体での研究成果の発信を進めていきながら、プロジェクトで当初から設定してきた人類や人間文化という普遍的な価値を提供することが可能であるようなグローバル化時代の中東地域研究へと議論を高次に発展させていく。

国立民族学博物館拠点においては、年度前半においては統合的な研究成果の発信に向けた準備を重ねつつ、京都大学拠点と協力しながら編集作業をすすめてきた日本語での現代中東地域研究全体での研究叢書を刊行する。また年度後半には、本研究プロジェクトの総括となる内容の研究成果の発信を行う。

なお新型コロナウイルス感染症の世界的な流行が長期化し、感染状況について予断を許さない状況が続いていることから、新たな生活行動様式を取り入れながら研究活動の推進ならびに成果発信に務める。

2–5　研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

45巻１号（2020年８月31日発行）

- 論文

  旧ユーゴスラヴィア時代における鵜飼い漁の技術とその存立条件――北マケドニア共和国ドイラン湖におけるマンドゥラ（Mandra）漁の事例から ―― 卯田宗平
- 研究ノート

  フードスケープ――「食の景観」をめぐる動向研究 ―― 河合洋尚
- 資料

  International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”

  ―― James Clifford, Atsunori Ito, Reiko Saito, Kenji Yoshida, Isao Hayashi, Taku Iida

45巻２号（2020年10月30日発行）

- 論文

  ベトナムにおける黒タイ文字の創成について ―― 樫永真佐夫
- 特集「協働／プロセスの人類学――同時代のアートをめぐる省察から」

  序 ―― 登　久希子・兼松芽永

  アート作品の譲渡不可能性――参加型アートとその制作プロセス ―― 登　久希子

  芸術家と非芸術家の関係から生じる「アート」――《Self Select: Nairobian in Tokyo》の実践から ―― 西尾美也

窓花を〈うつす〉窓花展――人類学的表現実践としての映像と展示制作 ―― 丹羽朋子
アートによる「生活空間の脱植民地化」をめざして――オアハカの民衆聖像崇拝とアクチュアリティの共鳴 ―― 山越英嗣
アートプロジェクトの図地転換――田んぼの「棚田化／アート化」から考える ―― 兼松芽永

45巻 3 号（2021年 1 月28日発行）

• 論文

Nominal Echo Formations in Kati: In the Context of Languages of Northern Pakistan ― Noboru Yoshioka
個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態――カメルーン東南部のバカを事例に ―― 彭　宇潔
過程の中の竹製パンパイプと間に合わせのレコーディング・スタジオ――ソロモン諸島アレアレの在来楽器をめぐる音楽的媒介 ―― 佐本英規

• 研究ノート

モンゴルで撮影された写真の歴史（1880–1930）――学術調査隊による写真コレクションを中心に ―― 小長谷有紀

45巻 4 号（2021年 3 月12日発行）

• 論文

考証館運動の生成――水俣病運動界の変容と相思社 ―― 平井京之介

• 資料

国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて ―― 岸上伸啓

●Senri Ethnological Studies

No. 103（2020年11月24日発行）

Atsushi Nobayashi and Scott Simon（eds.）*Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific*

No. 104（2021年 3 月 1 日発行）

Nobuhiro Kishigami（ed.）*World Whaling: Historical and Contemporary Studies*

No. 105（2021年 3 月12日発行）

Ursula Hemetek, Inna Naroditskaya, and Terada Yoshitaka（eds.）*Music and Marginalisation: Beyond the Minority-Majority Paradigm*

No. 106（2021年 3 月22日発行）

Kazunobu Ikeya and Yoshihiro Nishiaki（eds.）*Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present*

●Senri Ethnological Reports（国立民族学博物館調査報告）

No.151（2021年 3 月12日発行）

Составители Юки Конагая, Наталия Симукова (eds.) Исследователь Монголии А. Д. Симуков: Письма, Дневники, документы

No.152（2021年 3 月12日発行）

Sous la direction de Dominique Casajus, Tetsuo Nishio, François Pouillon, et Tsuyoshi Saito（dir.）*Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées*

●民博通信 Online

No.2（2020年 9 月30日発行、旧『民博通信』通巻166号）

1980年代のサーランギ音楽の共有化 ―― 南 真木人
「死」と「死にゆくこと」の人類学――「看取り文化」の新たな地平に向けて ―― 浮ヶ谷幸代
沙漠社会に見る適応と移動――アラビア半島の衣装と住居から考える ―― 縄田浩志

など

No.3（2021年３月31日発行、旧『民博通信』通巻167号）

戦争と食の多様な関係 ――― 宇田川妙子
北太平洋先住民社会に関する比較研究構想 ――― 岸上伸啓
月経衛生対処という開発介入とローカルな月経観、女性の身体 ――― 新本万里子
など

●TRAJECTORIA

No.2（2021年３月31日発行）

・Special Theme

Confronting Museums: Collaboration, Reception, and Experiment in “Tabuluja（Wake Up!）” and “New York, just another city”
Introduction ――― Mihai Andrei Leaha
Tabuluja（Wake Up!） ――― Rose Satiko Gitirana Hikiji, Jasper Chalcraft, and Shambuyi Wetu
New York, just another city ――― André Lopes and Joana Brandão
Discussion: Dialogues over Time
――― Mihai Andrei Leaha, Rose Satiko Gitirana Hikiji, Jasper Chalcraft, André Lopes, and Joana Brandão

・Film

Muakai’s Wedding ――― Su Hung-En
Lives and Deaths between Ebbs and Flows ――― Futuru C. L. Tsai

・Article

The Taiwan International Ethnographic Film Festival and the Rise of Indigenous People Documentaries in Taiwan ――― Hu Tai-Li

・Carte Blanche

The Museum of Mental Furniture
――― An van. Dienderen, Rosine Mbakam and Thomas Bellinck with a first guest contribution by Hugo DeBlock

●研究年報2018（2020年10月19日発行）
研究年報2019（2021年３月16日発行）

●外部出版

川田牧人・白川千尋・飯田　卓編『現代世界の呪術――文化人類学的探究』春風社（2020年５月30日刊行）
岸上伸啓編『捕鯨と反捕鯨のあいだに――世界の現場と政治・倫理的問題』臨川書店（2020年11月30日刊行）
丹羽典生著『応援の人類学』青弓社（2020年12月23日刊行）
松川恭子・寺田吉孝編『世界を環流する〈インド〉――グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』青弓社（2021年１月22日刊行）
出口正之・藤井秀樹編『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』清水弘文堂書房（2021年２月26日刊行）
長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性の人類学――近代の果てに、人は何を願うのか』法藏館（2021年３月30日刊行）

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんぱくリポジトリ」は、2010年１月12日に一般公開され、11年が経過した。2020年度は、館内出版物『国立民族学博物館研究報告』、『国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）』『民博通信』電子ジャーナル「TRAJECTORIA」の登録を行った。

2020年度新たに登録したコンテンツは116件で、2020年度末のコンテンツ登録数は5,757件となった。コンテンツのダウンロード数は、年間508,012件に達している。

学術講演会

「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」

実 施 日　2020年11月６日（金）
場　　所　日本経済新聞社大阪本社 カンファレンスルーム（大阪）
共　　催　日本経済新聞社
後　　援　岩波書店
参 加 者　619名（会場参加者114名、ウェブ中継視聴者504名）
講演会趣旨　世の中が乱れると、ファンタジーブームが起きると言われている。フランス革命勃発後、人びとはファンタジーに夢中になったし、関東大震災のあともファンタジーが読まれた。ボッカチオの『デカメロン』はペスト禍のときに書かれたし、『千一夜』最古の写本が成立したとされる14世紀前後は、中東地域でペストが猛威をふるった時期だった。

「みんな今を生きているって、想像しよう」とジョン・レノンは言った。いま一人ひとりが、これからどう生きよう、世の中はどうなるのだろうと不安にかられているかもしれない。ファンタジーは、その問いかけに即答するようなものではない。その役割とは、もうひとつの世界を想像してみること、その可能性の中で日々を生きていくかけがえのなさを見つめることなのである。ファンタジーに思いを寄せることは、広い意味での想像力、創造力という人間に備わった能力の一部である。

人間は、10万年ほど前に言葉を獲得したとされている。おそらくは時を同じくして、さまざまな生存戦略の一部として「虚構の世界を創る」能力も獲得したのである。この能力は他者をあざむくためだけでなく、他者とつながるためでもあっただろう。自分ではどうにもならない事象を前にしてそれを理解し超えていく、たとえ超えられなくても見知らぬものをそばに置き直して楽しむために想像の世界を広げていったのではないだろうか。

ファンタジーという文学ジャンルが広く認められるようになったのは、比較的新しい時代のことである。しかしファンタジーそのものは、人類が言葉を獲得してからずっと人間の営みの一部だった。言葉で世界を発見していく文学行為としてのファンタジーについて、その創造の現場で考えてみた。

プログラム
基調講演　「アラジンはなぜ世界を魅了するのか？――ファンタジーの文明誌」
講　　師　西尾哲夫（国立民族学博物館・教授）
対　　談　「妄想が世界を創る！」
　　森見登美彦（作家）×西尾哲夫（聞き手）

「グローバル化する武道と中東」

実 施 日　2021年３月19日（金）
場　　所　オーバルホール（大阪）
共　　催　毎日新聞社
参 加 者　301名（会場参加者140名、Web ライブ中継視聴者161名）
講演会趣旨　2021年夏に開催予定の東京オリンピックでは、二つの武道が公式種目となった。柔道と空手道である。本講演会は空手を中心とした武道の中東地域への広がりから、スポーツ文化のグローバル化について探求した。

武道は、もはや日本だけにとどまることなく、そのあり方を変えながら、世界中で親しまれている。一方で、武道が中東地域で人気を集めていることは、日本では意外と知られていない。特に空手は、イスラエル、トルコ、イランなどで広く普及しており、エジプトでは国民的なスポーツになって久しい。一般的に空手は、日本の伝統文化として世界的に知られている。しかし多くのエジプト人空手家は、空手が日本発祥の格闘技であることを深く意識せず、グローバルな世界とつながる手段として稽

古に取り組んでいる。
　では、誰が、どのような経緯で、中東に武道を広めていったのだろうか。中東にはどのような社会的、文化的価値があり、武道が受け入れられていくことになったのだろうか。また、武道の何が中東の人々のハートをつかんだのだろうか。武道のグローバルスポーツとしての展開について、中東の事例から考えた。

プログラム
講 演 1　「カラテから考えるエジプトのスポーツと社会」
講　　師　相島葉月（国立民族学博物館・准教授）
講 演 2　「岡本秀樹による中東での空手の普及――日本人の視点より」
講　　師　小倉孝保（毎日新聞社・論説委員）
パネルディスカッション
司 会 進 行：河合洋尚（国立民族学博物館・准教授）
コ メ ン ト：アレキサンダー・ベネット（関西大学・教授）
パネリスト：相島葉月×小倉孝保×アレキサンダー・ベネット

2–6　学会開催

学会開催

2020年11月21日～23日　比較文明学会 第38回大会
開催場所：国立民族学博物館。

2–7　若手研究者奨励セミナー開催

若手研究者奨励セミナー開催

国内の大学院博士課程在籍者及びPD（ポストドクター）などの若手研究者を対象として、2009年度から「みんぱく若手研究者奨励セミナー」の名称のもと、本館教員の講演の後、参加者が特定のテーマで研究発表を行うセミナーを行っている。2017年度からは、研究部改組に伴い、新しく再編された各研究部のミッションに沿った形で当該研究部が年度毎に本プログラムを担当する体制を整えた。2020年度は人類文明誌研究部が担当し、「危機対応をめぐる文化のデザイン――人類の知と技を問いなおす」というテーマが設定され、国立大学の大学院生を含む若手研究者８名が参加した。教員による講演に続き、参加者による研究発表と各コメンテーターを中心に質疑応答が行われ、優秀発表者に「みんぱく若手研究者奨励セミナー賞」が授与された。同時に、図書室、収蔵庫、展示場などの施設見学を実施した。

2–8　研究員制度

外来研究員

BAIFUYING　白　福英（ハク　フクエイ）中国
　研究課題：中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究――オラド後旗の事例から

BIAN Qingyin　辺　清音（ヘン　セイオン）中国　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
　研究課題：新華僑と神戸南京町の相互作用に関する人類学的研究

CHIU Chunni　邱　君妮（チョウ　チュンニ）台湾　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
　研究課題：台湾における地域文化遺産の保存・活用に関する博物館学的研究

De Antoni Andrea（デ・アントーニ　アンドレア）イタリア　立命館大学国際関係研究科 准教授

研究課題：現代日本とイタリアにおける憑依と除霊の体験――宗教・生物医療を感じる身体とジェンダー

GAO Qian　高　茜（カオ　チエン）中国　神戸市外国語大学　非常勤講師／雲南芸術学院デザイン学部 教授
研究課題：中国南西部の少数民族地域における芸術・文化の変容に関する研究

HOFER Theresia（ホーファー　テレジア）オーストリア　Department of Anthropology and Archaeology, University of Bristol Senior Lecturer
研究課題：人類学におけるユニバーサル・ミュージアム・デザイン

HUANG Jie　黄　潔（コウ　ケツ）中国　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員
研究課題：現代タイの都市部における「クニの柱」信仰の集合現象の解明

JIA Yulong　賈　玉龍（ジャ　ユーロン）中国　大阪大学人間科学研究科　博士後期課程修了
研究課題：中国漢族の「親族関係」をめぐる人類学的研究――「つながり」概念を手掛かりに

LIU Zhengyu　劉　征宇（リュウ　セイウ）中国　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
研究課題：社会主義制度下の食文化と日常生活に関する研究――中国北部の都市を事例として――

LU YIPING　呂　怡屏（ロ　イーピン）台湾　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学
研究課題：文化復興による民族アイデンティティ形成に関する人類學的研究――台湾のシラヤ族の事例

PYEON Seollan　片　雪蘭（ピョン　ソラン）韓国　関西学院大学先端社会研究所 専任研究員
研究課題：チベット難民の越境と第３国への再移住に関する人類学的研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante（サウセド　セガミ　ダニエル　ダンテ）ペルー　立命館大学政策科学部 准教授
研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する研究

XIE Li　謝　黎（シャ　レイ）中国　東北芸術工科大学芸術学部 准教授
研究課題：現代中国における「民族服」をめぐる交渉・競争・闘い――「民族服」事象に関する理論的構築に向けて

Yimin　伊敏（イミン）中国
研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化
――内モンゴル地域におけるモンゴル語と満洲語の地名を中心に

ZHAO Furong　趙　芙蓉（チョウ　フヨウ）中国
研究課題：チベット仏教とモンゴル・シャマニズムの関係性に関する研究――モンゴル地域の土地神信仰をめぐって

ZONG Xiaolian　宗　暁蓮（ソウ　ギョウレン）中国　西南大学国際文化学部 非常勤講師
研究課題：日中相互間における社会イメージの形成および社会記憶の構造に関する研究
――訪日旅行者のインタラクティブな文化交流と相互理解への影響を事例として

秋保　さやか（アキホ　サヤカ）日本
研究課題：内戦後のカンボジア農村開発に関する民族誌的研究

荒田　恵（アラタ　メグミ）日本　天理大学附属天理参考館 学芸員
研究課題：器の中のアンデス世界を体験するメディア展示

伊藤　悟（イトウ　サトル）日本
研究課題：中国西南・東南アジアのタイ系民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究

伊藤　渚（イトウ　ナギサ）日本
　研究課題：布と人の関わりを通じた身体観の変遷に関する人類学的研究
　　――ラオス北部タイ系民族の女性の織る布と紋様に注目して

稲井　啓之（イナイ　ヒロユキ）日本　日本学術振興会 特別研究員／京都大学アジアアフリカ地域研究資料センター 特任研究員
　研究課題：アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究

井家　晴子（イノイエ　ハルコ）日本
　研究課題：妊娠・出産の異常とその対処法に関する文化間比較研究

井上　航（イノウエ　コウ）日本
　研究課題：音・声・言葉をつなぐ身体――ブラウクルン語の表出性からの接近

今井　彬暁（イマイ　アキトシ）日本
　研究課題：ベトナムのモン社会における死者のエージェンシーの研究

内田　修一（ウチダ　シュウイチ）日本
　研究課題：都市環境におけるソンガイの精霊憑依の実践の研究

緒方　しらべ（オガタ　シラベ）日本　大阪大学 非常勤講師
　研究課題：感性と制度のつながり――芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える

岡本　尚子（オカモト　ナオコ）日本　洗足学園音楽大学音楽学部 非常勤講師／実践女子大学 非常勤講師
　研究課題：「J.-C. マルドリュス遺贈コレクション」中の『詞華集』研究

風間　計博（カザマ　カズヒロ）日本　京都大学大学院人間・環境学研究科 教授
　研究課題：オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究

川口　聖（カワグチ　キヨシ）日本
　研究課題：日本における手話の言語変化に関する研究

神田　和幸（カンダ　カズユキ）日本　中京大学名誉教授／NPO 手話技能検定協会理事長
　研究課題：新手話学の構成素の実証的検証研究

楠　和樹（クスノキ　カズキ）日本　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任助教
　研究課題：第二次世界大戦後のケニアにおける越境性動物疾病対策と国家統治の変容

工藤　さくら（クドウ　サクラ）日本　東北大学 学術研究員
　研究課題：ネワール低カースト女性の儀礼実践とその変容に関する宗教人類学的研究

工藤　由美（クドウ　ユミ）日本　東邦大学看護学部 非常勤講師／慶應義塾大学法学部 非常勤講師／江戸川大学社会学部 非常勤講師／明海大学外国語学部 非常勤講師
　研究課題：チリ先住民マプーチェの民族医療の都市的展開に関する人類学的研究

栗山　新也（クリヤマ　シンヤ）日本　沖縄県立芸術大学付属研究所共同研究員
　研究課題：三線が引き出す社会関係、価値、感情――大衆楽器が人びとに与える効果の研究

児玉　徹（コダマ　トオル）日本　筑波大学准教授（筑波会議・TGSW 推進ユニット ユニット長兼務）／一般財団法人国際貿易投資研究所 客員研究員

研究課題：産官学民連携のもとで文化ツーリズム推進策の人類学的な分析
——ワインツーリズム推進政策の国際比較を中心に

近藤　祉秋（コンドウ　シアキ）日本　神戸大学大学院国際文化研究科 講師
研究課題：先住民と情報化する社会の関わり

坂口　奈央（サカグチ　ナオ）日本　東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了
研究課題：災害遺構を巡る住民の語りをもとにした集合的記憶形成過程の研究

佐川　徹（サガワ　トオル）日本　慶応義塾大学文学部 准教授
研究課題：統治のフロンティア空間をめぐる人類学——国家・資本・住民の関係を考察する

崎田　誠志郎（サキタ　セイシロウ）日本　日本学術振興会 特別研究員
研究課題：東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明

櫻井　想（サクライ　ソウ）日本　龍谷大学大学院国際文化研究科 研究生／龍谷大学グローバルアフェアーズ研究センター リサーチアシスタント
研究課題：中国都市部における古物の攤販市場をめぐる＜空間＞と＜場所＞の民族誌
——天津の「鬼市」を事例として

佐藤　浩司（サトウ　コウジ）日本
研究課題：オーストロネシア語族の建築に関する比較研究

佐藤　吉文（サトウ　ヨシフミ）日本　神戸市外国語大学 非常勤講師
研究課題：先スペイン期のアンデスにおいて禿頭とは何か——「第三のジェンダー」に関する考古学的研究に向けて

荘司　一歩（ショウジ　カズホ）日本　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学
研究課題：先史アンデスにおける公共建造物の出現と生態資源利用

新本　万里子（シンモト　マリコ）日本　広島大学アクセシビリティセンター 教育研究推進員
研究課題：出産をめぐる保険・医療事業の影響に関する文化人類学的研究

杉本　敦（スギモト　アツシ）日本　東北学院大学文学部・法学部 非常勤講師／東北大学文学部 非常勤講師
研究課題：小規模農家支援をめぐる貧困概念の文化人類学的研究—— EU 農政下のルーマニアを例に

次下　利春人（ズグスタ　リチャード）日本
研究課題：西部ボルネオ島のダヤク系民族に関する歴史人類学研究

鈴木　博之（スズキ　ヒロユキ）日本
研究課題：チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究

高木　仁（タカギ　ヒトシ）日本
研究課題：人とウミガメの民族誌(2)

髙野　哲司（タカノ　サトシ）日本　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学
研究課題：近現代の日本の都市における庶民の庭の植物利用

高橋　晴子（タカハシ　ハルコ）日本
研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブの国際化および標準化の検討と実践

高屋　雅彦（タカヤ　マサヒコ）日本　近畿大学医学部精神神経科学教室 講師／滋賀刑務所 医務課長
　研究課題：精神科医療の比較制度分析――人類学的アプローチの可能性について

竹村　嘉晃（タケムラ　ヨシアキ）日本
　研究課題：移民の身体ポリティクス――インド舞踊のグローバル化とエージェンシー

田沼　幸子（タヌマ　サチコ）日本　東京都立大学大学院人文科学研究科 准教授
　研究課題：ネオリベラリズムの中のモラリティ

田村　卓也（タムラ　タクヤ）日本
　研究課題：東アフリカ沿岸部の小規模漁業者による水域環境の利用に関する研究

辻本　香子（ツジモト　キョウコ）日本　大阪芸術大学 非常勤講師／京都精華大学 非常勤講師／近畿大学 非常勤講師／大阪府立大学 非常勤講師
　研究課題：都市における芸能を主としたイベントの構築にみる音環境の研究

常田　夕美子（トキタ　ユミコ）日本　大阪大学人間科学部　非常勤講師／京都女子大学大学院現代社会研究科 非常勤講師
　研究課題：インド・オディシャーにおける親密圏の変容――恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験

内藤　直樹（ナイトウ　ナオキ）日本　徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学学域 准教授
　研究課題：カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて

仲尾　友貴恵（ナカオ　ユキエ）日本　京都大学大学院文学研究科 非常勤講師
　研究課題：タンザニア・ダルエスサラームにおける身体障害者の生活基盤

中川　敏（ナカガワ　サトシ）日本　大阪大学大学院人間科学研究科 教授
　研究課題：文化人類学を自然化する

中川　渚（ナカガワ　ナギサ）日本
　研究課題：先史アンデス形成期における社会動態

永田　貴聖（ナガタ　アツマサ）日本　宮城学院女子大学 准教授
　研究課題：複数エスニシティ・ナショナリティ関係の文化人類学研究

中田　梓音（ナカタ　シオン）日本
　研究課題：対人関係の構築過程における言語コミュニケーション研究

中谷　文美（ナカタニ　アヤミ）日本　岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授
　研究課題：伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって

中野　歩美（ナカノ　アユミ）日本　関西学院大学先端社会研究 専任研究員
　研究課題：インド北西部に暮らす移動民の住まい方に関する研究

中道　静香（ナカミチ　シズカ）日本　大阪大学 非常勤講師／天理大学 非常勤講師
　研究課題：『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相

中村　真里絵（ナカムラ　マリエ）日本　園田学園女子大学シニア専修コース 非常勤講師／大谷大学文学部 非常勤講師 / 大阪国際大学国際教養学部 非常勤講師／神戸女子大学 非常勤講師／桃山学院大学 非常勤講師／龍谷大学 非常勤講師

研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究

中村　友香（ナカムラ　ユカ）日本　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科博士後期課程修了
研究課題：ネパールにおける近代医療の市場化――医療アクセス・薬剤・身体経験

難波　美芸（ナンバ　ミキ）日本　一橋大学社会学研究科博士後期課程単位取得退学
研究課題：インフラストラクチャーが作る多時間性――ラオス北部ルアンナムター県の事例

二階堂　祐子（ニカイドウ　ユウコ）日本　奈良先端科学技術大学院大学 特命准教授
研究課題：出生前検査の「対象となる妊婦」に関する人類学的研究――サブスタンスの地域性と動態

西　真如（ニシ　マコト）日本　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特定准教授
研究課題：心配と係り合いについての人類学的探求

額田　有美（ヌカダ　ユミ）日本　日本学術振興会 特別研究員／同志社大学グローバル地域文化学部 非常勤講師／大阪大学人間科学部 非常勤講師
研究課題：ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究――コスタリカを中心に

野嶋　洋子（ノジマ　ヨウコ）日本
研究課題：無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握――バヌアツ北部事例研究

登　久希子（ノボリ　クキコ）日本
研究課題：社会をつくる芸術――「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究

早川　真悠（ハヤカワ　マユ）日本　摂南大学外国語学部 非常勤講師／神戸女学院大学文学部 非常勤講師／関西大学社会学部 非常勤講師／久米田看護専門学校 非常勤講師
研究課題：レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究

林　由華（ハヤシ　ユカ）日本　甲南大学 非常勤講師／大阪大学 非常勤講師
研究課題：日琉諸語における情報構造標示システムの変遷について

深海　菊絵（フカミ　キクエ）日本
研究課題：家族と倫理――米国ポリファミリーを事例として

福間　真央（フクマ　マオ）日本　北部国境大学院大学 ポスドク研究員
研究課題：境界域の先住民――モビリティ、記憶、境界

藤井　真一（フジイ　シンイチ）日本　天理大学国際学部 非常勤講師
研究課題：贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究――ソロモン諸島の事例から

藤田　瑞穂（フジタ　ミズホ）日本　京都市立芸術大学 学芸員
研究課題：拡張された場における映像実験プロジェクト

古川　不可知（フルカワ　フカチ）日本　九州大学大学院比較社会文化研究院 講師
研究課題：モビリティと物質性の人類学

松岡　佐知（マツオカ　サチ）日本　日本学術振興会 特別研究員／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員
研究課題：高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割――南インドの事例から

松岡　とも子（マツオカ　トモコ）日本　総合研究大学院大学人文科学研究科博士後期課程単位取得退学
　研究課題：韓国近現代画家金煥基が描いた朝鮮文化を象徴するモチーフ――1950年代の作品から

松田　有紀子（マツダ　ユキコ）日本
　研究課題：花街の担い手コミュニティによる「伝統」継承をめぐる歴史人類学的研究

盛　恵子（モリ　ケイコ）日本　京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員
　研究課題：セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張

山　泰幸（ヤマ　ヨシユキ）日本　関西学院大学人間福祉学部 教授
　研究課題：グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス

山極　海嗣（ヤマギワ　カイシ）日本　日本学術振興会 特別研究員
　研究課題：ミクロネシア――南琉球の比較分析による初期人類の島嶼適応戦略の解明

山本　文子（ヤマモト　アヤコ）日本　和歌山県立医科大学保健看護学部 非常勤講師
　研究課題：ミャンマー都市部における民間信仰の文化人類学的研究

山本　泰則（ヤマモト　ヤスノリ）日本
　研究課題：文化資源情報の構造的記述と活用に関する研究

横田　浩一（ヨコタ　コウイチ）日本　亜細亜大学国際関係学部 非常勤講師／聖心女子大学文学部 非常勤講師／川村学園女子大学 非常勤講師／東洋大学生命科学部 非常勤講師
　研究課題：潮州系華人の宗教領域における統治と放縦に関する研究

吉直　佳奈子（ヨシナオ　カナコ）日本　高崎経済大学 非常勤講師
　研究課題：生殖の知識・認識・経験――日本における生殖補助医療の受容／拒否についての人類学的考察

渡辺　浩平（ワタナベ　コウヘイ）日本　立教大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学
　研究課題：アメリカ先住民ナヴァホ指定居留地における共歓の人類学的研究

渡辺　裕木（ワタナベ　ユキ）日本　フェリス女学院大学 非常勤講師（スペイン語）
　研究課題：メキシコ先スペイン期の遺跡に与えられた自国のアイデンティティー形成に果たす役割

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけではなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2020年度は、国立大学１人、私立大学１人、計２人の大学院生を受け入れた。

2-9　データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

●標本資料および映像取材地域

●標本資料の収集・利用状況

・2021年３月31日現在の収蔵資料数（未登録資料含む）

海外資料／179,264点（未登録資料含む）　国内資料／165,879点（未登録資料含む）　総点数／345,143点（未登録資料含む）

・大学・博物館等への貸し出し

総点数／157点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

山中由里子　日本、伊勢大神楽の映像音響資料収集

2020年９月、10月、11月、12月、2021年１月

・2021年３月現在の収蔵資料数

映像資料／8,277点　音響資料／64,421点　総点数／72,698点

・資料の利用

利用総件数／72件（内、大学20件）　資料利用総点数　404点（内、大学112点）

館内利用など

利用件数／30件　資料利用点数／204点

特別利用（館外での上映・試聴など）

利用件数／41件　資料利用点数／203点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2020年度図書室の活動

１．利用者サービス

利用者支援の一環として、若手研究者奨励セミナーの際に、図書室案内を行った。

２．資料整備関連

1）遡及入力事業として、国立情報学研究所NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2020年度はマイクロ資料について図書2,562件、新聞雑誌４タイトル（125件）の遡及入力を行った。

2）資料整備関連事業として、書庫・探究ひろばの約22万冊の蔵書点検を行った。

●2020年度新規受入数

日本語図書	1,852点	外国語図書	1,566点		
AV資料他	92点	製本雑誌	704点	合計	4,214点

●2021年３月末現在の収蔵図書数

日本語図書	270,428点	外国語図書	415,855点	合計	686,283点
日本語雑誌	10,162種	外国語雑誌	7,070種	合計	17,232種

●利用状況（2020年度）

入室者	全体	6,051人
	館外者	803人
時間外入室者		125人
うち日曜、祝日		27人
貸出	図書	9,373冊
	雑誌	207冊
うち館外貸出図書		1,220冊
HRAF　利用受付		6件 （カウンター受付件数）

文献複写	受付	国内（うち謝絶）	1,559(118) 件
		国外（うち謝絶）	9 (9) 件
		来室	2,146 件
	依頼	国内	174 (13) 件
		国外	0 (0) 件
現物貸借	受付	国内	542 (32) 件
	依頼	国内	249 (21) 件
		国外	0 (0) 件
事項調査		受付	7 件

民族学資料共同利用窓口

2006年度に、本館が所蔵する民族学資料の利用に関する問合せ窓口として「民族学資料共同利用窓口」を設置した。本館の民族学資料が、館内外における各分野の研究・教育において有効利用され、社会に還元されることを目的に、問合せ窓口を一本化したものである。

2020年度の問合せ件数は、156件であった。

問い合わせ者別　（件）

教員（大学）	21
大学院生	8
大学生	4
教員（小・中・高）	1
学生（小・中・高）	1
博物館・美術館関係	15
図書館	4
教育・研究機関	3
マスコミ関係	0
会社・団体	29
一般	29
民博教職員	41
計	156

問い合わせ者の所属機関別　（件）

公的機関	大学・大学図書館	32
	博物館・美術館	31
	小・中・高	3
	その他教育機関	0
	研究機関	2
	公共図書館	3
	地方公共団体	2
	各種団体	0
民間	研究機関	0
	会社	22
	団体	6
個人	館外	29
	館内	26
	不明	0
計		156

資料の利用目的　（件）

調査・研究	研究*1	43
	論文作成	8
	学習*2	1
	図書館から	3
	授業で利用	19
	その他	8
	小計	82
館内利用	刊行物作成	3
	館の事業	15
	参考資料	1
	資料の複製	0
	小計	19

業務用	展示用	16
	番組制作	1
	出版物作製	24
	参考資料	4
	入手方法	2
	その他	4
	小計	51
その他	寄贈申出	3
	その他	1
	小計	4
合計		156

注）*1 大学生以上の調査を「研究」とする
*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、石毛直道、泉靖一、岩本公夫、内田勣、梅棹忠夫、江口一久、大内青琥、沖守弘、桂米之助、鹿野忠雄、木内信敬、菊沢季生、栗田靖之・別府春海、小林保祥、篠田統、杉浦健一、西北ネパール学術探検隊1958年データカード、土方久功、馬渕東一、丸谷彰、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブの資料目録の作成等を行い、その成果を順次公開している。

2020年度は、昨年度に引き続き資料の整理作業を行い「杉浦健一アーカイブ」、「菊沢季生アーカイブ」、「岩本公夫アーカイブ」の資料追加寄贈を受入れた。また、アーカイブズ文書資料の特殊性に鑑み、複写にあたっては申請者の研究内容との関連性等を総合的に判断した上で許可することや、複写の申請は原則として来館時に限ること等を明記することとして、規程の改正を行った。さらに、近年国外からの来館者の利用申請が増加傾向にあることを踏まえ、利用申請書及び同意書の英語版を作成した。加えて、本館が大学共同利用機関として資料を適切に利用させるために、資料の利用方法について著作権者と確認する様式の検討を行った。

目録を公開し、利用に供しているアーカイブは22件である。2020年度の利用状況は閲覧・視聴が21件、特別利用が13件、事業利用が１件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2019年度までの作成件数	286,431
2020年度の作成件数	76
2020年度のアクセス件数	140,933

・標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2019年度までの作成件数	77,259
2020年度の作成件数	3,419
2020年度のアクセス件数	10,088

・標本資料記事索引

本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデータベース。

2019年度までの作成件数	69,264
2020年度の作成件数	6,775
2020年度のアクセス件数	5,441

・韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2019年度までの作成件数	7,827
2020年度の作成件数	0

2020年度のアクセス件数　3,490

• ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　2,992
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　2,417

• チベット宗教図像（白描画）

本館が所蔵する「チベット仏画コレクション」に含まれる木版の白描宗教図像およびチベット仏教古派とポン教の魔除け・厄除けの護符に関する基本情報を収録（画像あり）。

2019年度までの作成件数　——
2020年度の作成件数　1,439
2020年度のアクセス件数　——

• 映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2019年度までの作成件数　8,223
2020年度の作成件数　54
2020年度のアクセス件数　2,894

• ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2019年度までの作成件数　775
2020年度の作成件数　49
2020年度のアクセス件数　15,007

• 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2019年度までの作成件数　849
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　445

• 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　170
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　1,220

• 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　22,361
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　1,749

• 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	7,889
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	753

• アフリカ　カメルーン民族誌写真集――端信行コレクション

端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査のなかで撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	6,530
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	2,107

• 沖守弘インド写真（日本語版、英語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）

2019年度までの作成件数	21,971
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	6,595

• ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	3,879
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	2,423

• 焼畑の世界――佐々木高明のまなざし

佐々木高明（本館元館長）が、調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録（画像あり）。

2019年度までの作成件数	454
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	3,493

• 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、ＣＤ、テープなど音響資料の情報。

2019年度までの作成件数	62,651
2020年度の作成件数	1,770
2020年度のアクセス件数	5,227

• 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。

2019年度までの作成件数	351,802
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	13,089

• 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2019年度までの作成件数	650,610
2020年度の作成件数	3,411

2020年度のアクセス件数　1,740,150

• 梅棹忠夫著作目録（1934〜）

著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。

2019年度までの作成件数　6,911
2020年度の作成件数　63
2020年度のアクセス件数　3,192

• 中西コレクション――世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2019年度までの作成件数　2,729
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　67,813

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2019年度までの作成件数　33,450語（40,596頁）
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　548

• Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）

Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2019年度までの作成件数　7,717
2020年度の作成件数　3,503
2020年度のアクセス件数　1,744

• 日本昔話資料（稲田浩二コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。音声は館内限定公開。

2019年度までの作成件数　3,696
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　2,110

• rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）［英語、中国語］

長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。83の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。

2019年度までの作成件数　41,078語（文例：15,706件）
2020年度の作成件数　0語（文例：0件）
2020年度のアクセス件数　12,871

• 衣服・アクセサリー

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　31,696
2020年度の作成件数　589

2020年度のアクセス件数　　20,914

• 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2019年度までの作成件数　　181,770
2020年度の作成件数　　1,846
2020年度のアクセス件数　　7,817

• 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日常に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2019年度までの作成件数　　11,905
2020年度の作成件数　　2,609
2020年度のアクセス件数　　1,694

• 身装画像――近代日本の身装文化

和装と洋装が拮抗していた1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。

2019年度までの作成件数　　6,741
2020年度の作成件数　　23
2020年度のアクセス件数　　22,991

• 3 次元 CG で見せる建築――東南アジア島嶼部の木造民家

佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の 3 次元 CG から作成した gif アニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。

2019年度までの作成件数　　36 地点　57棟
2020年度の作成件数　　2 地点　4棟
2020年度のアクセス件数　　346

• 津波の記憶を刻む文化遺産――寺社・石碑データベース

日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　　440
2020年度の作成件数　　30
2020年度のアクセス件数　　50,553

• 平成の百工比照コレクション

金沢市と金沢美術工芸大学が、全国各地の工芸品について、工程・技法がわかる見本や製品見本、製作道具、材料を収集整理して作成した標本集「平成の百工比照」に関する情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　　553
2020年度の作成件数　　0
2020年度のアクセス件数　　528

●館内で利用できるデータベース

• 標本資料詳細情報（館内専用）

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2019年度までの作成件数　　278,397

2020年度の作成件数　8,155
2020年度のアクセス件数　32,494

• カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち――カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2019年度までの作成件数　158
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　27

• 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2019年度までの作成件数　849
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　119

• 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　42,195
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　376

• 梅棹忠夫写真コレクション

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　35,481
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　6,742

• オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真

小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　7,999
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　100

• 朝枝利男コレクション

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　3,966
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　53

• 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　8,842
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　14

• 沖守弘インド写真（日本語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	22,120
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	19

• 西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年〜1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2019年度までの作成件数	620
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	21

• タイ民族誌映像――精霊ダンス

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2019年度までの作成件数	写真：10,082　調査報告：41
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	10

• 東南アジア稲作民族文化綜合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	4,393
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	551

• 日本昔話資料（稲田コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2019年度までの作成件数	3,696
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	208

• 国内資料調査報告集

日本国内における、1）民具などの標本資料類の所在、2）伝統技術伝承者の所在、3）民族・民俗映像記録の所在、4）民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年〜2003年）をデータベース化。

2019年度までの作成件数	21,373
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	78

●2020年度に館外公開されたデータベース

• チベット宗教図像（白描画）（2021年３月29日公開）

2-10　みんぱく施設の利用

博物館施設の利用状況

●本館展示場を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

大阪大学(37)、大阪学院大学(8)、大阪芸術大学(16)、大阪工業大学(10)、大阪商業大学(13)、大阪成蹊大学(32)、大阪人間科学大学(14)、華頂短期大学(20)、関西大学(40)、岐阜大学(8)、京都女子大学(8)、京都橘大学(23)、近畿大学(43)、神戸大学(16)、神戸女子大学(36)、国際ファッション専門職大学(46)、滋賀大学(5)、成安造形大学(21)、摂南大学(25)、千里金蘭大学(4)、中央大学(18)、同志社大学(15)、同志社女子大学(5)、富山大学(6)、阪南大学(14)、桃山学院大学(5)、立命館大学(3)、龍谷大学(9)

＊注　利用申請手続をおこなった大学・研究機関等

□来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- 学生に様々な民族や文化に触れて欲しいため
- 学生が食生活や衣食住に関する実物資料を観察し、食生活や染織文化に関する理解を深めるため
- 新型コロナウイルス感染症対策が実施されており、安心して演習できると判断したため
- 学生が卒論研究などで博物館での展示やイベントを利用するための予備知識を獲得するため
- 異文化に触れることは、ファッション業界で生きていくために、これからますます必要になるのではないかと考えたため
- 国立博物館として有数の規模を誇り、充実した展示がおこなわれているため
- 東洋史・西洋史を専攻する史学科の学生の参加が多く、関心に沿うと思われたため
- 展示や第一線で活躍している研究者の話を聞くことで国際協力及び日本語教育を軸に世界の言語・文化に係る諸問題を扱っているゼミでの学びを深めるため
- 展示が質量ともに豊富であり、授業の目的である社会科教育との関連性が高く、博物館への関心を高めることができる施設であるため
- 日本の博物館の中でも最大級の規模を持ち、設立の理念と経緯、研究・教育・展示の各方面における現在に至るまでの様々な取組など、国内の博物館のありようを学習するうえで必ず見学しておくべきと考えたため
- ゼミの導入教育で「世界の民族文化を知る」ため
- 博物館を見学調査する学びのため
- 学生に民博の存在と展示物の圧倒的な種類と数を知らせるため
- 博物館実習の一環として展示と研究の関係を学習するため
- みんぱくの研究者の講演を聴くため
- 太陽の塔内部見学と組み合わせて見ることができるため

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、同志社大学［文化情報学部・文化情報学研究科］、千里金蘭大学、学校法人立命館［立命館大学］、学校法人塚本学院［大阪芸術大学・大阪芸術短期大学・大阪芸術大学付属大阪美術専門学校※通信課程含む］、京都大学、同志社大学［グローバル地域文化学部］(1,644)

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1）既存施設・設備の有効活用への取組状況

- 施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2020年度は9回開催した。

2）施設の維持管理の取組状況

- 講堂の舞台を延長し客席と一体的な空間を創出することを目的とした講堂舞台改修工事を行った。
- 感染症対策として適正な換気量を確保するため事務室等の換気設備改修工事、演習室、食堂等の網戸設置工事

を行った。
- 自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- 安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。

※館内害虫駆除については、調達係へご確認ください。

3）省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況
- 昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。

2–11　受賞・特許

受賞

●2020年度の職員受賞者

鈴木英明	2020年７月22日	第35回大同生命地域研究奨励賞
伊藤敦規	2020年11月21日	地域研究コンソーシアム研究企画賞
關　雄二	2020年12月17日	2020年度文化庁長官表彰

●2020年度の当館受賞

国立民族学博物館 九州大学 山口大学	2020年10月１日	2020年度グッドデザイン賞（受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］）
国立民族学博物館 九州大学 山口大学	2020年12月18日	IAUD国際デザイン賞2020銀賞（公共空間デザイン部門）（受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］）
国立民族学博物館 九州大学 山口大学	2021年３月15日	UNIVERSAL DESIGN expert 2021（専門家賞）（受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］）
国立民族学博物館 九州大学 山口大学	2021年３月15日	UNIVERSAL DESIGN consumer 2021（消費者賞）（受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］）

知的財産形成・特許出願など

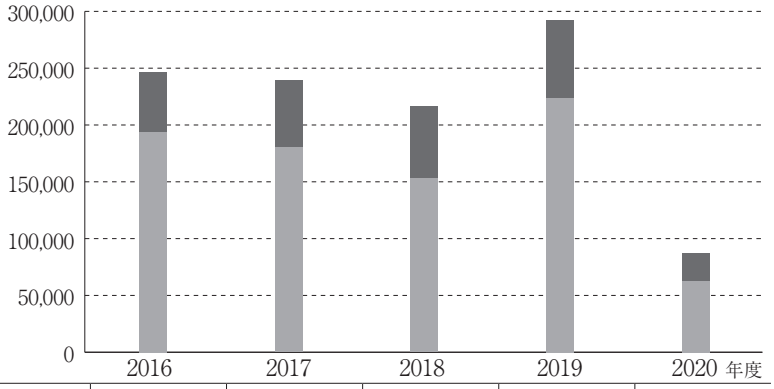
2020年度　出願、特許査定なし

3 展 示

入館者数

●2020年度総観覧者数（共催展、巡回展含む）　103,333人

●入館者数（5年間。共催展、巡回展除く）



	2016	2017	2018	2019	2020
合計（人）	246,505	239,476	216,158	292,315	87,076
団体	52,744	59,512	63,130	68,616	25,194
個人	193,761	179,964	153,028	223,699	61,882

本館展示

●展示専門部会

本館展示新構築にかかわる支援・連絡調整と本館展示の運営にかかわる連絡調整、ならびに特別展・企画展の企画内容の点検支援・連絡調整を行う組織として、文化資源運営会議のもとに展示専門部会を置く。同部会は本館展示新構築総括チームと特別展・企画展ワーキング・グループより構成する。なお、本館展示の運営・新構築にかかわる案件の全体での検討の場として、随時、本館展示プロジェクトリーダーからなる拡大展示専門部会を開催する。

●本館展示プロジェクトチーム

	代表者	構成メンバー　（五十音順）
オセアニア展示	ピーター・マシウス	小野林太郎、菊澤律子、丹羽典生、林　勲男
アメリカ展示	伊藤敦規	岸上伸啓*、齋藤　晃、齋藤玲子、鈴木七美、鈴木　紀、關　雄二、八木百合子
ヨーロッパ展示	新免光比呂	宇田川妙子、森　明子
アフリカ展示	三島禎子	飯田　卓、池谷和信、川瀬　慈、鈴木英明、吉田憲司
西アジア展示	菅瀬晶子	相島葉月、上羽陽子、西尾哲夫、山中由里子
音楽展示	福岡正太	岡田恵美、川瀬　慈、笹原亮二
言語展示	吉岡　乾	西尾哲夫、菊澤律子、相良啓子
南アジア展示	上羽陽子	岡田恵美、松尾瑞穂、三尾　稔、南 真木人、吉岡　乾
東南アジア展示	信田敏宏	小野林太郎、樫永真佐夫、平井京之介、福岡正太
中央・北アジア展示	藤本透子	池谷和信、島村一平、寺村裕史
東アジア展示（朝鮮半島の文化）	太田心平	諸　昭喜、三島禎子
東アジア展示（中国地域の文化）	河合洋尚	卯田宗平、韓　　敏、末森　薫、奈良雅史、野林厚志
東アジア展示（アイヌの文化）	齋藤玲子	岸上伸啓*、吉田憲司
東アジア展示（日本の文化）	日髙真吾	池谷和信、卯田宗平、笹原亮二、菅瀬晶子、出口正之、寺村裕史、野林厚志、廣瀬浩二郎、南 真木人
情報・インフォメーション	野林厚志	寺村裕史、廣瀬浩二郎、福岡正太、丸川雄三
イントロダクション展示		※2020年度は、展示情報高度化事業実施部会が担当する。

*は、併任教授を示す

●特別展・企画展ワーキング

開催を予定する各特別展・企画展の実行委員会、本館展示プロジェクトリーダー（１～２名）

●本館展示の新構築（展示チームは一般公開日現在）

・アフリカ展示

一般公開　2009年３月26日～

アフリカ展示チームリーダー　飯田　卓

アフリカ展示チームメンバー　（館内）池谷和信　川瀬　慈　竹沢尚一郎　三島禎子　吉田憲司

内容

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきた。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかならない。新たに構築したアフリカ展示では、人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを４つの「動詞」（憩う・働く・装う・祈る）のコーナーに分けて紹介する。

・西アジア展示

一般公開　2009年３月26日～

西アジア展示チームリーダー　山中由里子

西アジア展示チームメンバー　（館内）上羽陽子　菅瀬晶子　西尾哲夫

内容

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）と呼ばれる北アフリカと深い関係を保ってきた。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきた。多くの住民はムスリムだが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもある。新たに構築した西アジア展示では、地域規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介する。

・音楽展示

一般公開　2010年３月25日～

音楽展示チームリーダー　福岡正太

音楽展示チームメンバー　（館内）川瀬　慈　笹原亮二　寺田吉孝

内容

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきた。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきた。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の「太鼓」、「ゴング」、「チャルメラ」、「ギター」等の例を通して考える。

・言語展示

一般公開　2010年３月25日～

言語展示チームリーダー　庄司博史

言語展示チームメンバー　（館内）菊澤律子　西尾哲夫　八杉佳穂

内容

音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができる。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを生みだすことばは、人類のもつかけがえのない資産である。言語展示では、「言葉を構成する要素」、「言語の多様性」、「世界の文字」というテーマを中心に構成する。

・オセアニア展示

一般公開　2011年３月17日～

オセアニア展示チームリーダー　ピーター・マシウス

オセアニア展示チームメンバー　（館内）印東道子　菊澤律子　久保正敏　小林繁樹　須藤健一　丹羽典生　林　勲男

内容

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在している。そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人々が暮らしてきた。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示している。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介する。

• アメリカ展示

一般公開　2011年３月17日～
アメリカ展示チームリーダー　鈴木　紀
アメリカ展示チームメンバー　（館内）伊藤敦規　岸上伸啓　齋藤玲子　鈴木七美　齋藤　晃　關　雄二　八杉佳穂

内容

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られる。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできた。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していった。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介する。

• ヨーロッパ展示

一般公開　2012年３月15日～
ヨーロッパ展示チームリーダー　宇田川妙子
ヨーロッパ展示チームメンバー　（館内）庄司博史　新免光比呂　森　明子

内容

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植した。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつある。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示している。

• 情報・インフォメーション

一般公開　2012年３月15日～
情報・インフォメーションチームリーダー　野林厚志
情報・インフォメーションチームメンバー　（館内）飯田　卓　伊藤敦規　田村克己　廣瀬浩二郎　福岡正太

内容

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の３つのコーナーを通して、みんぱくの研究や展示をより詳しく知ることができる。展示場で見た資料についてもっと知りたい、みんぱくの研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたいという探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用いただきたい。

• 東アジア展示（日本の文化）

一般公開　「祭りと芸能」「日々のくらし」 2013年３月22日～
「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」 2014年３月20日～
東アジア展示（日本の文化）チームリーダー　日高真吾
東アジア展示（日本の文化）チームメンバー　（館内）池谷和信　近藤雅樹　笹原亮二　庄司博史　菅瀬晶子　野林厚志　出口正之

内容

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれている。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきた。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしている。ここでは、「祭りと芸能」、「日々のくらし」、「沖縄のくらし」、「多みんぞくニ

ホン」という４つの角度から、日本文化の様相を展示している。

• 東アジア展示（朝鮮半島の文化）

一般公開　2014年３月20日～
東アジア展示(朝鮮半島の文化)チームリーダー　朝倉敏夫
東アジア展示(朝鮮半島の文化)チームメンバー　（館内）太田心平

内容

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつも、独自の文化を育んできた。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきた。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めた。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られる。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介する。

• 東アジア展示（中国地域の文化）

一般公開　2014年３月20日～
東アジア展示(中国地域の文化)チームリーダー　塚田誠之
東アジア展示(中国地域の文化)チームメンバー　（館内）韓　敏　小長谷有紀*　田村克己　野林厚志　横山廣子

内容

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきた。漢族が人口の90％以上を占め、平野部を中心に全国に居住している。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住している。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしている。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介する。

• 南アジア展示

一般公開　2015年３月19日～
南アジア展示チームリーダー　三尾　稔
南アジア展示チームメンバー　（館内）上羽陽子、杉本良男、寺田吉孝、松尾瑞穂、南 真木人、吉岡　乾、竹村嘉晃*、豊山亜希*

内容

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできた。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれている。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介する。

• 東南アジア展示

一般公開　2015年３月19日～
東南アジア展示チームリーダー　信田敏宏
東南アジア展示チームメンバー　（館内）樫永真佐夫、佐藤浩司、平井京之介、福岡正太、吉田ゆか子*

内容

森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候にくらす人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近くに達する日中は屋内で昼寝などをして暑さをしのぐ。夕方、スコールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かける。日が落ちて涼しくなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しむ。本展示場では、「東南アジアの１日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介する。

• 中央・北アジア展示

一般公開　2016年６月16日～
中央・北アジア展示チームリーダー　藤本透子

中央・北アジア展示チームメンバー　（館内）池谷和信、佐々木史郎、寺村裕史、小長谷有紀*

内容

中央・北アジアは、ユーラシア大陸の北東部を占める広大な地域である。古くから東西南北をむすぶ交渉路としての役割を担い、多様な民族が行き交っていた。20世紀に社会主義を経験した後、市場経済に移行し、グローバル化の波にさらされながら伝統を再評価する動きがみられる。「自然との共生」「社会主義の時代」というふたつの共通テーマをふまえて、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の３つの地域に生きる人びとの今を紹介する。

・アイヌの文化展示

一般公開　2016年６月16日～

アイヌの文化展示チームリーダー　齋藤玲子

アイヌの文化展示チームメンバー　（館内）伊藤敦規、岸上伸啓、佐々木史郎、吉田憲司、北原次郎太*

内容

アイヌは、北海道を中心に日本列島北部とその周辺にくらし、寒冷な自然環境のもとで独自の文化をはぐくんできた先住民族である。江戸時代に幕府による支配が始まり、明治時代に同化がすすめられると、アイヌは差別を受け生活に困るようになった。しかし近年、日本政府はその歴史的事実を認め、アイヌ民族を尊重した政策に取り組みはじめた。ここでは、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する人びとの姿を紹介する。

*併任教授、客員教員、特別客員教員、機関研究員等を示す

特別展示・企画展示など

●特別展示

「先住民の宝」

会　期　2020年10月１日（木）～12月15日（火）

会　場　特別展示館

主　催　国立民族学博物館

実行委員長　信田敏宏

実行委員　（館内）池谷和信、岸上伸啓、齋藤玲子、鈴木　紀、野林厚志、南 真木人、川瀬　慈

（館外）阿部健一（総合地球環境学研究所）、北原次郎太 モコットゥナシ（北海道大学）、久保正敏（国立民族学博物館 名誉教授）、庄司博史（国立民族学博物館 名誉教授）、立川陽仁（三重大学）、田村将人（国立アイヌ民族博物館設立準備室）、本谷裕子（慶應義塾大学）

協　力　UMAK ノルウェー・アークティック大学博物館・芸術学院、公益財団法人アイヌ民族文化財団、国立アイヌ民族博物館、株式会社札幌丸井三越、集英社「週刊ヤングジャンプ」、一般財団法人千里文化財団、総合地球環境学研究所、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット（UBRJ）

内容

世界には、現在、約３億7,000万人の先住民が暮らしており、その民族の数は少なくとも5,000と言われている。本特別展でいう宝とは、圧政や差別に苦しみながらも、日々を力強く、そして希望を失わず生きてきた彼らにとっての心の拠り所であり、民族としての誇りでもある。先住民の思いをのせた約740点におよぶ展示品とともに、先住民の世界を紹介する展示となった。

●企画展示

梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」

会　期　2020年９月３日（木）～12月１日（火）

会　場　本館企画展示場

主　催　国立民族学博物館

協　力　一般財団法人千里文化財団

学術協力　国立情報学研究所 高野研究室

実行委員長　飯田　卓

実行委員　（館内）丸川　雄三
（館外）小長谷有紀（日本学術振興会）、久保正敏（国立民族学博物館 名誉教授）、
高野明彦（国立情報学研究所）

内容

みんぱく初代館長を務めた梅棹忠夫（1920-2010）は、多数の学術調査に参加した知の先覚者である。彼は、調査成果を論文などにまとめる方法を『知的生産の技術』（1969年）で述べたが、具体的に資料を加工する過程は示さなかった。この企画展では、梅棹のアーカイブズ資料とデジタル・データベースで彼の方法の舞台裏を紹介した。

●共催展示

「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」

会　期　2020年10月３日（土）～12月13日（日）
会　場　五木村歴史文化交流館（ヒストリアテラス五木谷）
担当者　池谷和信

内容

熊本県五木村の郷土博物館において、本館との共催によって佐々木高明氏の撮影した五木村での焼き畑の写真を中心にして当時の村の暮らしを紹介した。同時に、五木村の事例から日本（九州）やアジア（台湾・東南アジアなど）の食と農の未来のあり方を考えた。

「梅棹忠夫生誕100年記念　知的生産のフロンティア」

会　期　2021年１月13日（水）～３月14日（日）
会　場　京都大学総合博物館
担当者　飯田　卓

内容

本館で2020年秋に開催した梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」との連動企画である。

梅棹の学生時代の受講ノート、スケッチ、フィールドノートや、学術調査の際に収集した資料、また、京都大学と関係する資料を新たに加えた展示を開催した。

●巡回展示

「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」

会　期　2020年６月23日（火）～８月16日（日）
会　場　兵庫県立歴史博物館
担当者　山中由里子

内容

本展では、国立民族学博物館所蔵の民族資料を中心に、人形、竜、怪鳥、一角獣など、さまざまな世界の想像上の生き物について紹介するとともに、警告・凶兆（モンストルム）を語源とする怪物（モンスター）の文化史的な意味について考えた。

展示関連出版物およびプログラム

●特別展示

「先住民の宝」

発行日　2020年３月19日
編　者　信田敏宏
発　行　国立民族学博物館

「復興を支える地域の文化――3.11から10年」

発行日　2021年３月２日
編　者　日髙真吾
発　行　国立民族学博物館

●ビデオテーク

「ウズベキスタンの美味しい羊料理――プロフ・ショルバ」（番組番号1759）

制作監修：寺村裕史

家畜市で羊を買い、ウズベキスタンの代表的な料理である羊肉を使ったプロフやショルバを調理する様子を紹介する。

「タンディルでパンを焼く」（番組番号1760）

制作監修：寺村裕史

ウズベキスタン・サマルカンド市郊外の村において、タンディルという伝統的な窯でパンを焼く様子を紹介する。

「ウズベキスタンの結婚式」（番組番号1761）

制作監修：寺村裕史

ウズベキスタン・サマルカンド市郊外の村で行われた結婚式における儀礼や披露宴の様子を紹介する。

「みんぱく村に神楽がやって来る！――伊勢大神楽ワークショップの記録」（番組番号1762）

制作監修：山中由里子、神野知恵

伊勢大神楽は旅する芸能者の人々です。この映像では、彼らがみんぱくで行った厄払いの獅子舞の様子を紹介する。

●研究用映像資料

該当なし

●マルチメディア番組

「徳之島の歌と踊りと祭り」（番組番号6059）

制作監修：笹原亮二、福岡正太

徳之島の各集落に伝わる歌と踊りと祭りの様相やほかの奄美の島々との異同などを、ビデオや解説や歌詞などによって紹介する。

「東南アジアの人形芝居」（番組番号6060）

制作監修：福岡正太

影絵、木偶人形、糸あやつり、水の上を動く人形など、東南アジアでは、さまざまな人形芝居が多くの人に楽しまれている。

●「みんぱく電子ガイド」プログラム数（2021年３月31日現在）

展示プロジェクト地域	プログラム数			
	日本語版	中国語版	英語版	韓国語版
オセアニア	23	23	23	23
アメリカ	27	27	27	27
ヨーロッパ	12	12	12	12
アフリカ	17	17	17	17
西アジア	16	16	16	16
南アジア	40	40	40	40
東南アジア	32	32	32	32
中央・北アジア	30	30	30	30
東アジア				
朝鮮半島の文化	47	47	47	47
中国地域の文化	39	39	39	39
アイヌの文化	10	10	10	10
日本の文化	35	35	35	35
音楽	0	0	0	0
言語	0	0	0	0
総　　計	各 328			

4 国際連携と研究協力

海外研究機関との研究協力協定

国(地域)名　ペルー
相手機関名　国立サン・マルコス大学
協定書等名　国立民族学博物館とペルー・国立サン・マルコス大学との間における考古学調査と学術交流に関する協定
締結日　2005年６月14日
協定終了予定日　2025年５月17日
目的　考古学分野における共同調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流の促進
協定内容　パコパンパ考古学プログラム

国(地域)名　台湾
相手機関名　順益台湾原住民博物館
協定書等名　国立民族学博物館と順益台湾原住民博物館との学術協力協定書
締結日　2006年７月１日
協定終了予定日　2021年３月31日
目的　台湾原住民に関する学術調査、研究を推進する。
協定内容
- 台湾原住民族の現代的動態に関わる人類学的、言語学的、歴史学的調査
- 国立民族学博物館ならびに他の博物館に収蔵されている台湾原住民族関連の資料に係る調査
- 上記に係る報告書ならびに研究誌の発行

国(地域)名　韓国
相手機関名　国立民俗博物館
協定書等名　国立民族学博物館と大韓民国国立民俗博物館との文化交流協定
締結日　2007年７月11日
協定終了予定日　2022年６月14日
目的　学術、文化交流を通して友好関係を強化し、この関係を発展させる。
協定内容
- 国際共同展示に係る協定
- 教職員及び研究者の交流
- 共同研究及び研究集会の実施
- 博物館の展示及び教育活動に関する協力
- 学術的情報及び出版物の交換
- 両機関で合意されたその他の事業

国(地域)名　中国
相手機関名　内蒙古大学
協定書等名　国立民族学博物館と中華人民共和国内蒙古大学との学術協力の協定
締結日　2008年９月22日
協定終了予定日　2023年５月22日
目的　相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する
協定内容
- 双方の教職員・研究者の交流
- 研究プロジェクトの展開
- 博物館展示品の展覧及び教育分野における協力活動
- 学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開
- その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名　台湾
相手機関名　国立台北芸術大学
協定書等名　国立民族学博物館と台湾国立台北芸術大学との学術協力の協定
締結日　2009年５月15日

協定終了予定日　2024年５月14日
目的　相互の学術交流と両者の発展を目的とした学術協力関係を築く。
協定内容
- 双方の教職員・研究者の交流
- 研究プロジェクトの展開
- 博物館展示品及び教育分野における協力活動
- 学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の促進
- その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名　英国
相手機関名　エジンバラ大学
協定書等名　国立民族学博物館と英国・エジンバラ大学との研究交流協定
締結日　2010年５月17日
協定終了予定日　2023年５月16日
目的　相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容　学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力

国(地域)名　ロシア
相手機関名　ロシア民族学博物館
協定書等名　国立民族学博物館とロシア民族学博物館との間の博物館学及び文化研究の分野における学術協力に関する協定
締結日　2010年12月３日
協定終了日　2020年12月２日
目的　博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力・相互支援関係を樹立する。
協定内容
- 両博物館が保有する歴史的、文化的財産の保存状態改善を目的としたプロジェクトの支援
- 両博物館の研究者交流
- ロシア民族学博物館が実施するシベリア、中央アジア、極東、北コーカサスでの民族学的フィールドワークへの民博の研究者の参加
- 両博物館が指名する経理、データベース構築、収集品の考証、資料の分類、保存科学などの諸分野の専門家の交流

国(地域)名　ロシア
相手機関名　ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）
協定書等名　国立民族学博物館とロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）との間の協力および文化交流に関する協定
締結日　2011年10月21日
協定終了予定日　2021年10月20日
目的　学術、文化の両分野において相互交流および協力関係を発展させる。
協定内容　野外調査および学術・理論的研究、博物館関連活動の分野における交流を以下の項目について実施する
- 教職員の交流
- 野外調査、学術・理論的研究、学術集会の共同実施
- 展示および教育プロジェクトの共同実施
- 学術情報および刊行物の交換
- 両博物館の合意による、その他のあらゆる学術分野の活動

国(地域)名　ベトナム
相手機関名　生態学生物資源研究所
協定書等名　国立民族学博物館とベトナム生態学生物資源研究所の学術協力に関する協定
締結日　2012年３月22日
協定終了予定日　2021年６月６日

目的　相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術研究および交流の強化、発展のために本契約を締結する。
協定内容　共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進

国(地域)名　米国
相手機関名　アシウィ・アワン博物館・遺産センター
協定書等名　国立民族学博物館とアシウィ・アワン博物館・遺産センターの学術協力に関する協定
締結日　2012年6月3日
協定終了予定日　2022年6月2日
目的　相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容
- 双方の教職員・研究者の交流
- 共同研究プロジェクトの展開
- 博物館資料の展覧および教育分野における協力活動
- 学術研究資料、学術情報および公開出版物についての交換と相互利用の展開
- その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名　フィリピン
相手機関名　フィリピン国立博物館
協定書等名　国立民族学博物館とフィリピン国立博物館の学術協力に関する協定
締結日　2012年7月18日
協定終了予定日　2023年1月16日
目的　相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術研究および交流の強化、発展のために本契約を締結する。
協定内容　共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進

国(地域)名　中国
相手機関名　中国社会科学院民族学・人類学研究所
協定書等名　国立民族学博物館と中国社会科学院民族学・人類学研究所との学術交流協定
締結日　2012年8月28日
協定終了予定日　2021年8月27日
目的　両機関の学術交流を通して国際的な連携を進めるため、平等互恵と相互尊重の理念のもとに、この協定を締結する。
協定内容
- 研究プロジェクトの展開
- 双方の教員・研究者交流
- 研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開
- その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名　米国
相手機関名　北アリゾナ博物館
協定書等名　国立民族学博物館（日本国 大阪）および北アリゾナ博物館（米国 アリゾナ州 フラッグスタッフ）との学術協力・協働協定書
締結日　2014年7月4日
協定終了予定日　2024年7月3日
目的　学術交流・研究を強化・発展させる。
協定内容　より一層の交流、情報共有、協力関係、良質な民族誌的記録向上を目的として、博物館やソースコミュニティと共に諸活動を研究・促進するプロジェクトの発展のために協働する

国(地域)名　台湾
相手機関名　国立台湾歴史博物館
協定書等名　国立民族学博物館と国立台湾歴史博物館との間の学術研究交流に関する協定書

締結日　2015年10月16日
協定終了予定日　2021年10月15日
目的　相互に理解と友好を深め、両機関における学術研究交流を促進する。
協定内容
- 研究者の交流
- 共同研究及び研究集会の実施
- 博物館の展示や教育活動に関する協力
- 学術情報及び出版物の交換
- その他両機関が合意した事項

国(地域)名　米国
相手機関名　ヴァンダービルト大学
協定書等名　国立民族学博物館（日本国）とヴァンダービルト大学（アメリカ合衆国）との協定合意書
締結日　2016年１月15日
協定終了予定日　2026年１月14日
目的　両機関が友好と相互平等と利益互恵の原則に基づいて学術的に協力・協同する。
協定内容
- 講演会やシンポジウム、研究会における協力
- 共同研究
- 文化交流

国(地域)名　中国
相手機関名　浙江大学人類学研究所・図書館
協定書等名　日本国国立民族学博物館と中華人民共和国浙江大学人類学研究所・図書館との学術交流に関する協定書
締結日　2016年４月19日
協定終了予定日　2022年４月18日
目的　両機関の刊行物をお互いに寄贈することにより、民博側は浙江大学に創設された「民博文庫」の充実に努め、浙江大学側は民博図書館における中国（語）関係資料の充実に努める。
協定内容
- 研究者などの人材交流
- 人類学及び人類学資料事業に関する研究
- 学術出版物の寄贈
- その他協定の目的のために両機関が必要と認める活動に関すること

国(地域)名　カナダ
相手機関名　ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館（UBC）
協定書等名　日本・国立民族学博物館とブリティッシュコロンビア大学人類学博物館の学術協力に関する協定書
締結日　2017年３月９日
協定終了予定日　2022年３月８日
目的　研究交流や人材交流を行い、両博物館における研究活動や博物館活動を促進・活性化させる。
協定内容
- 研究者などの人材交流
- 人類学及び人類学資料事業に関する研究
- 学術出版物の寄贈

国(地域)名　イラン
相手機関名　イラン国立博物館
協定書等名　イラン・イスラム共和国・イラン国立博物館および日本・国立民族学博物館の博物館協力に関する覚書
締結日　2017年11月８日
協定終了予定日　2022年11月７日
目的　両博物館の文化・研究分野の協力強化
協定内容
- 共同研究プロジェクトに関すること

- 刊行物の交換に関すること
- 共同で行う展示に関すること
- 学術調査、博物館学（技術者研修）、標本資料の保存・修復分野における専門研究者の交流に関すること
- 博物館学、保存、修復分野に関する共同ワークショップ、会議、セミナー、シンポジウム開催に関すること
- 実験研究分野での連携協力に関すること
- インターネット、デジタル資源の共同作業と共有に関すること

国（地域）名　台湾
相手機関名　客家文化発展センターおよび交通大学客家文化学院
協定書等名　国立民族学博物館と客家委員会客家文化発展センター、交通大学客家文化学院との間の三者学術研究交流に関する協定
締結日　2017年12月16日
協定終了日　2021年３月31日
目的　三者間の学術研究交流の推進
協定内容
- 研究者、教職員、職員の交流
- 共同研究及び研究集会の実施
- 博物館展示や教育活動に関する交流と協力
- 学術情報及び出版物の交換と使用
- その他三機関が合意した事項

国（地域）名　ザンビア
相手機関名　国立博物館機構
協定書等名　国立民族学博物館と国立博物館機構との間の学術協力に関する協定
締結日　2018年８月12日
協定終了予定日　2023年８月11日
目的　相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容
- 研究者・学芸員、その他の研究職員の交流
- 共同研究及び研究集会の実施
- 博物館の展示や教育活動、研修事業に関する協力
- 関連分野に関する学術情報及び出版物の交換
- 学術専門集会、フォーラムおよび協議会への相互の招待

国（地域）名　インドネシア
相手機関名　国立考古学研究センター
協定書等名　インドネシア・国立考古学研究センターおよび日本・国立民族学博物館との共同調査研究に関する覚書
締結日　2019年６月10日
協定終了予定日　2022年６月９日
目的　インドネシア国内での国際共同調査の実施、および研究成果の共有
協定内容
- インドネシア国内における共同研究の推進
- 学術情報及び出版物の交換と使用
- 博物館展示に関する交流と協力
- その他、両機関が必要と認める研究活動の実施

国（地域）名　ウズベキスタン
相手機関名　ウズベキスタン共和国科学アカデミー　ヤフヨ・グロモフ考古学研究所
協定書等名　ウズベキスタン・ウズベキスタン共和国科学アカデミー　ヤフヨ・グロモフ考古学研究所および日本・国立民族学博物館との学術協力に関する協定書

締結日　2019年９月19日
協定終了予定日　2024年９月18日
目的　国際共同発掘調査・研究、研究者交流、考古学に関する資料や情報の交換等・研究者・学芸員などの人材交流。
協定内容
- 考古学、人類学、地理学、保存科学、その他関連分野に関する共同研究の推進
- カフィル・カラ遺跡とその周辺遺跡の発掘調査、ならびにザラフシャン川中流域の遺跡踏査および測量調査
- 博物館展示や教育活動、研修事業に関する交流と協力
- その他、両機関が必要と認める研究活動の実施

国(地域)名　バングラデシュ
相手機関名　バングラデシュ農業大学
協定書等名　バングラデシュ農業大学および日本・国立民族学博物館との学術研究交流に関する協定書
締結日　2019年11月３日
協定終了予定日　2023年11月２日
目的　相互理解、相互利益及び協力関係の原則に基づいた学術研究及び学術交流の強化・促進。
協定内容　学術研究と共同研究、研修、出版、展示プロジェクトにおける学術研究及び研究交流の推進

国(地域)名　ケニア
相手機関名　ケニア国立博物館群
協定書等名　ケニア国立博物館群および日本国立民族学博物館による学術・文化・教育面での交流促進に関する覚書
締結日　2019年11月７日
協定終了予定日　2022年11月６日
目的　平等で互酬的な関係のもとに、文化と博物館に関する研究と教育の分野での協働にむけて合同して活動する。
協定内容
- 共同調査プロジェクトの実施
- 講演会、シンポジウム、共同展示の実施
- 調査に関わる情報と資料の交換
- 文化ならびに博物館学に関する交流プログラムの振興
- 研究スタッフの交流に関する協力

国(地域)名　タイ
相手機関名　カセサート大学林学部
協定書等名　タイ・カセサート大学林学部および日本・国立民族学博物館との学術研究交流に関する協定書
締結日　2019年11月22日
協定終了予定日　2023年11月21日
目的　相互理解、相互利益及び協力関係の原則に基づいた学術研究及び学術交流の強化・促進。
協定内容　共同研究、研修、出版、展示に関わるプロジェクトにおいて、学術研究および交流を推進する

MINPAKU Anthropology Newsletter

Newsletter 50（Summer 2020）

Special Theme: Globalization and Migration

Introduction ——— Kenji Yoshida
About “the transnational family” and its sense of place ——— Akiko Mori
Living “two cultures”? Turkish immigrants in a German city ——— Shinsaku Ishikawa
Japan today and the German experience ——— Sachi Takaya
Hakka migration and the virtual world ——— Hironao Kawai

Newsletter 51（Winter 2021）

Special Theme: Totem Poles

A totem pole of Northwest Coast People in Canada ——— KISHIGAMI Nobuhiro

Potlatch and totem pole under colonial control in Canada ——— TACHIKAWA Akihito

Motifs of totem poles ——— SAITO Reiko

みんぱくフェローズ

客員研究員等で国立民族学博物館に在籍した研究者で、帰国後も継続的な関係を維持するために*MINPAKU Anthropology Newsletter*を送付している研究者、および国立民族学博物館と関連の深い国内外の研究機関で、*MINPAKU Anthropology Newsletter*を送付している機関。

アジア・中東・オセアニア		ヨーロッパ		北米・中南米		アフリカ	
アラブ首長国連邦	2	アイスランド	2	アルゼンチン	1	エジプト	15
イスラエル	11	アルメニア	7	米国	148	エスティワニ	2
イラン	1	イタリア	2	エクアドル	3	エチオピア	6
インド	11	英国	44	カナダ	15	ガーナ	3
インドネシア	16	オーストリア	3	ガイアナ	1	カメルーン	1
オーストラリア	22	オランダ	7	コロンビア	2	ケニア	3
韓国	29	キプロス	1	ジャマイカ	4	コートジボワール	1
サウジアラビア	3	ギリシャ	1	チリ	1	ザンビア	13
サモア	4	スイス	4	パラグアイ	1	スーダン	2
シンガポール	4	スウェーデン	9	ブラジル	5	セーシェル	2
スリランカ	3	スペイン	2	ペルー	13	タンザニア	2
ソロモン諸島	3	スロベニア	1	ボリビア	3	ナイジェリア	2
タイ	26	セルビア	1	ホンジュラス	1	ナミビア	1
台湾	30	チェコ	3	メキシコ	4	ボツワナ	2
中国	188	デンマーク	2			マダガスカル	2
トルコ	4	ドイツ	24			マリ	1
ニュージーランド	3	ノルウェー	2			南アフリカ	5
日本	186	フィンランド	1			モーリタニア	1
ネパール	6	フランス	17				
パキスタン	1	ブルガリア	3				
バヌアツ	1	ベルギー	3				
パプアニューギニア	3	ポーランド	5				
パレスチナ	7	ポルトガル	2				
フィジー	9	マケドニア	1				
フィリピン	5	ルーマニア	2				
ブータン	3	ロシア	14				
ブルネイ	1						
ベトナム	7						
香港	3						
マレーシア	10						
ミャンマー	11						
モンゴル	7						
ヨルダン	8						
ラオス	4						
小　計	632	小　計	163	小　計	202	小　計	64
総　計							1,061

「博物館とコミュニティ開発」コース

国際協力事業団（JICA）が主宰し、本館が中心となって1994年から10年間実施してきた「博物館技術（収集、保存、展示）コース」は、開発途上国における諸博物館の技術向上と、博物館間の国際的ネットワーク構築に大いに貢献してきた。また、その過程を通じて、本館はじめわが国の博物館関係者も、研修参加者から多くのことを学ぶことができた。

研修コースの設置から10年の節目を迎えた2003年、国際協力事業団は独立行政法人国際協力機構に衣替えし、本館もまた、2004年４月より法人化し、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の１機関となった。この機に当たり、改めて過去10年の成果を点検し、いくつかの点でコースの改変を行い、2004年度からは「博物館学集中コース」として再出発した。

この新たな「博物館学集中コース」は、本館がJICAから全面的な事業委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と協同で運営することとなった。もとより、研修の実施に際しては、国内の多くの博物館・美術館とその関係者から協力をあおぐことはいうまでもない。本館のもつ国際的ネットワークは、対象国の博物館事情を踏まえた研修実施に不可欠な要因であり、またその先進的な情報・資料管理や博物館運営は、研修に大きな効果をあげている。その一方で、研修員の多くにとって切実な問題である、自らの属するコミュニティの資料を収集・整理し、展示するという課題については、主として海外資料の収集・展示に関わる人文社会系の博物館である本館での研修に限界があることも事実である。そこで、2004年度からの新しいコースでは、自然科学系の博物館としてこの分野の活動で先進的な業績をあげている、琵琶湖博物館と密接に連携することで、より充実した研修を進めている。また、研修プログラムの設定にあたっては、各講義を講師による一方向の教育ではなく、講師と研修員とが自らの経験や知識を共有する議論の場として位置付け、相互に学び合うコースとなるように留意している。

その後、2009年度からは、JICA集団研修全体の枠組みが大きく変更され、３年間を一区切りとして、その間は研修員受入れ割り当て国を変更しない、という基本原則が定められた。日本の国際協力事業全体を見直す動きの中で、同一国に継続的な協力を行ってその結果が現地に確実に還元される仕組みを作り、それを３年ごとに確認して当該コースを継続すべきかを外部評価の判断にゆだねる、というJICAの方針から、このような枠組みの変更が行われたものである。しかし、本館としては、この枠組みの変更に際し、博物館関係者を３年間にわたり継続して派遣することが困難な国も多いことを勘案して、「大きな需要を持ちながらも博物館人材の少ない国を切り捨てる結果に陥らないこと」を要望してきた。その結果、2012年度以降は、JICAが各国に向けて要望調査を行う際の、割り当て国の固定をやめ、全世界に要望調査を行うことになった。2015年度においては、「博物館学集中コース」を博物館が地域社会に果たす役割により重点を置いたコースへと改組し、合わせて「博物館とコミュニティ開発」コースへと名称変更を行った。さらに、2018年度より琵琶湖博物館が展示刷新のため本コースの運営を辞退し、本館単独での運営となった。

2020年度は、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大状況を鑑み、実施委託元であるJICAとの協議の結果、2020年度実施予定分を繰り延べし、2021年度に遠隔での実施に向けて計画することとなった。

国内研究機関等との研究連携、協力の推進

相手機関名　日本文化人類学会
協定名　人間文化研究機構国立民族学博物館と日本文化人類学会との連携に関する協定
締結日　2008年２月27日
概　要　研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用を促進し、もって人類社会における学術の発展と普及に寄与する。
終了予定日　なし

相手機関名　金沢大学
協定名　大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人金沢大学との連携・協力に関する協定
締結日　2014年３月23日
概　要　金沢大学と民族学博物館とのこれまで長年にわたり培ってきた信頼関係と連携・協力の実績を基盤に、より緊密かつ組織的に行う体制強化を図る。
終了予定日　2021年３月31日

相手機関名　立命館大学
協定名　国立民族学博物館と立命館大学との学術交流に関する協定書
締結日　2014年４月10日
概　要　食に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日　2024年４月９日

相手機関名　大阪工業大学
協定名　国立民族学博物館と大阪工業大学との学術交流に関する協定書
締結日　2015年３月23日
概　要　情報メディア・ディジタルコンテンツに関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日　2025年３月22日

相手機関名　株式会社 海遊館
協定名　大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と株式会社海遊館との連携・協力に関する協定
締結日　2015年11月19日
概　要　産学連携の推進、学術研究の振興、研究成果による社会貢献、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日　2021年３月31日

相手機関名　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
協定名　大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との連携・協力に関する協定
締結日　2015年11月25日
概　要　世界諸地域の言語と文化に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日　2022年３月31日

相手機関名　神戸大学大学院人文学研究科
協定名　大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定
締結日　2016年７月15日
概　要　研究教育のための学術交流を推進する。
終了予定日　2022年３月31日

相手機関名　山形大学
協定名　大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人山形大学との学術交流・協力に関する基本協定書
締結日　2018年２月16日
概　要　研究・教育活動全般における学術交流・協力を推進し、相互の研究・教育の一層の進展と地域社会及び国内外の発展に資する。
終了予定日　2024年２月15日

相手機関名　大阪大学
協定名　国立民族学博物館と大阪大学との学術交流に関する協定書
締結日　2018年３月17日
概　要　学術研究、教育、社会貢献及びその他諸活動の発展に資する。
終了予定日　2022年３月16日

相手機関名　京都芸術大学

協定名　人間文化研究機構国立民族学博物館と京都造形芸術大学との学術交流・協力に関する基本協定書
締結日　2018年３月19日
概　要　研究・教育活動全般における学術交流・協力を推進し、相互の研究・教育の一層の進展と地域社会及び国内外の発展に資する。
終了予定日　2024年３月18日

相手機関名　一般社団法人文化財保存修復学会
協定名　人間文化研究機構国立民族学博物館と一般社団法人文化財保存修復学会との学術交流・協力に関する基本協定
締結日　2018年11月19日
概　要　文化財保存のための基礎研究を行う研究者、実際に文化財の修復を行う修復家、美術館・博物館の学芸員、将来の専門家を育成する教育機関の関係者、専門家を志す学生などさまざまな立場の会員が集まり、文化財の保存に関わる科学・技術の発展と普及を図る。
終了予定日　2021年11月18日

相手機関名　日本展示学会
協定名　人間文化研究機構国立民族学博物館と日本展示学会との学術交流・協力に関する基本協定
締結日　2018年11月26日
概　要　両機関が行う研究・教育活動全般における学術交流・協力を推進し、相互の研究・教育の一層の進展と地域社会及び国内外の発展に資する。
終了予定日　2021年11月25日

相手機関名　大阪府
協定名　大阪府と国立民族学博物館との手話言語に係る連携協力に関する協定書
締結日　2019年８月28日
概　要　手話言語学の分野において、相互に連携の強化を図り、双方の発展と充実に寄与する。
解約日　2021年３月31日

相手機関名　一般社団法人東洋音楽学会
協定名　一般社団法人東洋音楽学会と人間文化研究機構国立民族学博物館との連携に関する協定
締結日　2019年11月３日
概　要　研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用を促進し、もって音楽文化の持続可能な発展と、音楽文化研究の深化に寄与する。
終了予定日　2022年11月２日

相手機関名　神奈川大学日本常民文化研究所
協定名　神奈川大学日本常民文化研究所と国立民族学博物館との学術交流に関する協定
締結日　2020年３月26日
概　要　両機関が行う研究活動全般における学術交流・協力を推進し、相互の研究の一層の進展と日本の文化人類学・民俗学等の発展に資する。
終了予定日　2025年３月25日

相手機関名　公立大学法人金沢美術工芸大学
協定名　大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と公立大学法人金沢美術工芸大学との連携協力に関する協定
締結日　2021年３月22日
概　要　相互に連携を図り、平成の百工比照コレクションデータベース（以下「データベース」という。）を基に、高等教育におけるデータベースの在り方及び活用手法について検証するとともに、社会連携事業と連動させることにより、高等教育教材の実用化を目的とする。
終了予定日　2024年３月31日

5 広報・社会連携

概観

地域に根ざした広報活動

大型複合施設エキスポシティ内にある吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」で1カ月間（2020年9月2日～9月30日）、「みんぱくフェア」を開催した。トーテムポールにまつわる大型解説パネルを作成し設置するなど、地域住民を中心に研究・展示活動を発信し、本館の認知度向上と集客を図った（入場者数 11,210名）。

北大阪8市3町の美術館・博物館計57館が参加する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」によるシンポジウム、「大阪でEXPOを考えるⅢ――大阪万博50年」に協力し、会場を提供した。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2020に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の中心的役割を担い、広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

本館研究者の研究成果を幅広い層に社会還元するとともに、広報、普及するため、本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズ作品の上映会を大阪市内にあるミニシアター「淀川文化創造館シアターセブン」において、無観客でオンライン開催するとともに、監修者による解説を行った。4回の実施で延べ365名のオンライン参加があり、本館の活動を広報することができた。

千里文化財団の協力のもと、大学等教育機関との連携を図り、文化人類学・民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続実施し、高等教育への本館の活用を促した。本年度は、継続加入6校（大阪大学、同志社大学（文化情報学部・文化情報学研究科、グローバル地域文化学部）、千里金蘭大学、立命館大学、学校法人塚本学院（大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校）、京都大学）の申込があり、計1,644名の学生、教職員が来館した。また、本館の展示や館蔵資料を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんぱく活用」を本館ウェブサイトに継続して掲載するとともに、活用方法を紹介したリーフレットを本年度も作成し、全国の大学に配布した。また、本館を使用した大学教員による講義・講習も33件実施され、468名の学生等に展示場が利用された。

学校教員向けに、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツール、貸出用学習キットなどについて紹介する動画を製作し、2020年3月に本館公式YouTubeチャンネルで公開した。併せて、主に関西圏の小、中、高等学校及び教育委員会、支援学校に紹介動画を本館公式YouTubeチャンネルで公開したことを案内した。

その他、若い世代に対する特別展と本館展示の相互観覧による理解度の向上を目的に学校団体（大学）に対する特別展観覧料の優待措置を継続した。

なお、例年、初等中等教育に貢献するため実施している職場体験及び小学校団体の博物館見学を有意義で楽しいものにし、体験を通じて多文化共生を学ぶきっかけをつくることを目的とした、展示場における体験プログラム「わくわく体験 in みんぱく」は、コロナ禍の影響により、実施することができなかった。一方、コロナ禍による家庭学習の機会の需要増及び学校休業対策として、本館が制作した子ども向けのコンテンツをまとめた「おうちでみんぱく」を本館ホームページで公開し、39,231件のアクセスがあった。

インターネットによる広報活動

ウェブサイト上のニュースや、催し物のコンテンツで最新の情報を発信したほか、特別展や企画展は個別サイトを作成し関連イベントを中心とした情報発信を行った。また、2021年2月にウェブサイトを「使いやすく、見やすく、わかりやすいホームページ」をコンセプトに、ビジュアルを中心に、長すぎず、簡潔なページへとリニューアルを行った。ホームページの利用者数は、訪問者数1,041,104、ページビュー数2,718,942であった。

メールマガジン（みんぱくe-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信した（配信数は53,855件）。

ソーシャルメディアに関しては、利用者も順調に増加し、自前の広報メディアとして、着実に地歩を固めている。（Facebook いいね！数16,086（年度）、Twitterフォロワー数4,551（年度）、YouTube総再生回数35,084（年度）、Instagram いいね！数6,521（累計））。また、YouTubeのライブ配信機能を用い、ゼミナールや研究公演、公開講演会などの中継を行った。

マスメディアによる広報活動

新聞に関しては、毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」の連載を継続し、本館の研究者がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。また、週刊新潮でコラムニストがみんぱくの収蔵品を紹介する、「ディープ『みんぱく』探検隊」が継続して連載されている（2019年12月～）。千里ニュータウンFM放送番

組「ごきげん千里837（やぁ、みんな）」の「みんなのみんぱく」も継続している。

プレスリリースも随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間24本）。報道関係者との懇談会・内覧会等は、年10回（参加者数 156名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。

また、報道関係者との懇談会については、オンラインを併用しながら開催したことにより、今まで参加することができなかった在京メディアの参加もあった。

2020年度は、テレビ59件、ラジオ25件、新聞480件、雑誌110件、ミニコミ誌38件、その他63件の各媒体総数777件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して文化人類学・民族学の最新の研究成果を発信する「みんぱくゼミナール」を５回（参加者数 572名）開催したほか、オンライン（無観客）でも１回開催した。また、研究部のスタッフと来館者が展示場内でより身近に語り合う「みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう」を16回実施した（参加者数 552名）。みんぱくゼミナールにおいては生涯学習の促進のために10回参加毎に表彰を行っており、今年度は25名を表彰した。

さらに、映画の上映に研究者の解説を加えた「みんぱく映画会」を３回（参加者数 397名）開催したほか、オンライン（無観客）でも４回開催した。この他、特別展「復興を支える地域の文化」関連として、2021年３月６日に研究公演「阪神虎舞みんぱく公演」をオンライン開催し、延べ1,943回再生された。

以上、コロナ禍のため、対面での開催が制限された一方、新しい試みとして、活動の一部をオンラインで開催した。

また、特別展「先住民の宝」関連として、カナダ先住民の文化への親しみ、理解を深めることを目的としたワークショップ「ペーパークラフトでトーテムポールをつくろう」（10月31日～11月１日、延べ参加者数29名）、アイヌの自然に対する考え方や伝統の継承について理解を深めることを目的としたワークショップ「アイヌの矢作りと模擬狩猟体験」（11月７日～８日、延べ参加者数43名）を開催した。

このように、特別展・企画展・展示イベントに関連するワークショップ、ゼミナール、ウィークエンド・サロンなどのイベントを開催し、展示の理解を深めることに寄与した。

これらの活動は、みんぱくカレンダーやチラシを制作し、関係諸施設を通じて配布したほか、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付するとともに、全国の研究機関、大学等に寄贈することによって、広く情報発信を行った。視覚障害者向けの同誌音訳版も並行して製作・配付した。

なお、例年実施している「音楽の祭日 in みんぱく」、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的として行う祈りの儀式「カムイノミ儀礼」については、コロナ禍のため実施することができなかった。

その他の活動

学校を卒業した知的障害者に対し、博物館を開かれた学びの場として提供するため「みんぱく Sama-Sama 塾」の試行を2018年度、2019年度に引き続き行った。本年度はワークショップを３回実施し、延べ41名の参加があった。ワークショップ当日の様子を基に知的障害者が博物館を活用する際に必要とされることや改善点などを探った。

また、高齢者や身体が不自由な方など幅広い層が快適に来館できるよう、特別展会期中の土、日、祝日に大阪モノレール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。

さらに、2019度に制作した本館紹介ビデオをホームページで公開するとともに、大阪モノレールの車内広告において、本館展示及び特別展示の広報を行った。

国立民族学博物館要覧2020

- 和文要覧　　2020年８月発行
- 英文要覧　　2021年２月発行

ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　（2021年 3 月31日現在）

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

2020年度は、「使いやすく、見やすく、わかりやすいホームページ」をコンセプトにビジュアルを中心に、文章量を抑え、アクセスしやすい構成へと全面的な改修を行った。また、改修にともない、レスポンシブWEBデザインを導入し、近年アクセスが増加しているスマートフォンやタブレット端末からの閲覧に対応したサイトを構築することにより、使いやすさが向上した。なお、作成においては最新のソフトを導入し、ホームページ全体のセキュリティも向上した。

提供している主な情報は以下の通り。2020年度の訪問件数は1,041,104件。

・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

・博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月 1 回電子メールで配信している。2020年度の配信数は53,855件。

報道

●報道関係者との懇談会

2020年 6 月18日	24名（19社）	国立民族学博物館の再開にあたって、トーテムポールの立ち上げについて、新任紹介
6 月24日	13名（11社）	トーテムポール立ち上げ
7 月16日	16名（12社）	国立民族学博物館の再開後の動きについて、最新の研究紹介（刊行物紹介）、リニューアルしたみんぱく電子ガイド、ビデオテークについて
9 月30日	14名（12社）	特別展「先住民の宝」報道・出版関係者向け内覧会のご案内
10月15日	11名（ 7 社）	「第35回大同生命地域研究奨励賞」受賞について、最新の研究紹介（刊行物紹介）、共催展「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」
11月19日	12名（ 9 社）	最新の研究紹介（刊行物紹介）、『ガラン版千一夜物語』最終刊発行及びみんぱく公開講演会「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」の報告、特別展「先住民の宝」アイヌについて
12月17日	12名（10社）	みんぱく映画会／みんぱく映像民族誌シアターについて、最新の研究紹介（刊行物紹介）、研究の窓（第10回地域研究コンソーシアム賞の受賞と研究報告）、共催展「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」の報告

2021年１月21日　21名（17社）　公開講演会「グローバル化する武道と中東」、最新の研究紹介（刊行物紹介）、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」
２月18日　13名（10社）　特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」関連イベント、連続ウェブ研究会「文化遺産実践における身体とモノ集合的健忘に抗するための文化伝達」、最新の研究紹介（刊行物紹介）
３月３日　20名（15社）　特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」報道・出版関係者向け内覧会

●新聞等報道件数

2020年度は、テレビ59件、ラジオ25件、新聞480件、雑誌110件、ミニコミ38件、他63件、計777件の報道があった。

月刊みんぱく

４月号（第511号）	2020年４月１日発行	特集「知的生産のフロンティア」
５月号（第512号）	2020年５月１日発行	特集「釣り」
６月号（第513号）	2020年６月１日発行	特集「食と博物館展示」
７月号（第514号）	2020年７月１日発行	特集「拡がる写真データベース」
８月号（第515号）	2020年８月１日発行	特集「ヒトと感染症」
９月号（第516号）	2020年９月１日発行	特集「ウポポイでアイヌ文化を魅せる」
10月号（第517号）	2020年10月１日発行	特集「世界の地相術」
11月号（第518号）	2020年11月１日発行	特集「世界温泉めぐり」
12月号（第519号	2020年12月１日発行	特集「激変する世界と観光の現在」
１月号（第520号）	2021年１月１日発行	特集「めでたい場の食」
２月号（第521号）	2021年２月１日発行	特集「逆転の雪」
３月号（第522号）	2021年３月１日発行	特集「地域の記憶と向き合う」

みんぱくゼミナール

第501回　出稼ぎ先は「小さな国連」――国際貿易都市・浙江省義烏市に暮らすムスリムたち

2020年８月15日

講　師　奈良雅史

受講者　62名

内　容　中国内外から多くのムスリムが集まる「世界最大の卸売市場」といわれる浙江省義烏市。そこに暮らすさまざまな出自を持つムスリムたちがどのようなコミュニティを築いてきたのかを考えた。

第502回　梅棹忠夫に学んだ知的生産の技術

【梅棹忠夫生誕100年記念企画展関連】

2020年９月19日

講　師　小長谷有紀（国立民族学博物館 客員教授）
高野明彦（国立情報学研究所 教授）
飯田　卓

受講者　158名

内　容　梅棹忠雄は、調査で得た資料を整理して論文にするだけでなく、関連資料をアーカイブスとしてのこしている。資料の収集から公開までの研究サイクルを、新技術も用いて実現するようすを話した。

第503回　アイヌ文学の世界――韓・日との比較

【特別展「先住民の宝」関連】

2020年10月17日

講　師　北原モコットゥナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授）
　　齋藤玲子
受講者　146名
内　容　アイヌ民族が伝承してきた物語は、登場するキャラクターや語り方などによっていくつかのジャンルに分けられてきた。朝鮮半島や日本の物語と比較し、共通点や違いについて考えた。

第504回　ミュージアムが社会を変える――水俣の遺産
2020年11月21日
講　師　平井京之介
受講者　82名
内　容　博物館や資料館はただモノを保管するだけではない。現在、その社会を変える力が注目されている。熊本県水俣市の資料館を事例に、負の遺産がどのように利用されているかを話した。

第505回　民博研究の政策としての応用――トランスフォーマティブ研究事始め
2020年12月19日
講　師　出口正之
受講者　55名
内　容　みんぱくの展示品を見て皆さんは何を感じるか？ もし、従来の「常識」が覆されたなら、それがすべての「研究」の始まりだ。民博の研究が税制、NPO 政策、大阪の活性化政策などに活かされている。「常識の残像」から脱するために民博がいかに役立っているかを話した。

第506回　南半球の華僑華人――客家を中心として
2021年 2 月20日（オンライン（ライブ配信）のみで実施）
講　師　河合洋尚
受講者　67名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）
内　容　21世紀に突入後、南半球では華僑華人の移住が急増している。そのうち客家が多いタヒチ、ニューカレドニア、ペルーをとりあげ、中国系新移民の流入による社会・文化構造の変化を解説した。

第507回　牡鹿半島の民俗誌――復興キュレーション
【特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」関連】
2021年 3 月20日（会場・オンライン（ライブ配信）併用開催）
講　師　加藤幸治（武蔵野美術大学 教授）
　　日髙真吾
受講者　69名（来館による参加者数）
　　55名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）
内　容　震災から10年間の民俗調査と博物館活動。自然の営み・復興の繰り返しの歴史・家族や隣人の思い出、三つの時間から描き出す牡鹿半島の民俗誌。「津波」「クジラ」そして「ペンギン」をキーワードに話した。

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

延期　2020年 4 月 5 日　サーミの工芸品
　　（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　庄司博史

延期　2020年 4 月12日　ネパールの先住民運動
　　（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　南 真木人

延期　2020年４月19日　台湾原住民運動40年――「高山青」から移行期正義まで
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　野林厚志

延期　2020年４月26日　アフリカの先住民について
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　池谷和信

延期　2020年５月３日　カナダ北西海岸先住民文化の歴史と現状
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　岸上伸啓

延期　2020年５月10日　100年前のアイヌのくらしと現代の文化
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　齋藤玲子

延期　2020年５月24日　オラン・アスリと精霊
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　信田敏宏

延期　2020年５月31日　デジタル技術でみる「梅棹忠夫アーカイブズ」
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　丸川雄三

延期　2020年６月14日　現代に活かす「知的生産の技術」
（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い延期。）
講　師　飯田　卓

中止　2020年６月28日　1990年代黒タイの村落生活――みんぱくのデータベース「ベトナムの衣文化」の写真から
（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止。）
講　師　樫永真佐夫

第567回　2020年７月12日　アマゾンのゴムブーム
講　師　齋藤　晃
受講者　18名
内　容　アマゾンでは、ヨーロッパとの接触以前から、天然ゴムを素材とする品がつくられてきた。しかし、19世紀に加工技術が向上し、利用範囲が広がると、ゴム採取は巨大産業に変貌し、アマゾンを大きく変えた。ゴムの利用法を説明するとともに、その歴史を振り返った。

中止　2020年７月26日　カフィル・カラ遺跡（ウズベキスタン）の発掘調査
（本館への爆破予告による臨時休館のため中止。）
講　師　寺村裕史

第568回　2020年８月９日　中国におけるハラールフード
講　師　奈良雅史
受講者　21名
内　容　中国には2000万人ほどのムスリム（イスラーム教徒）が暮らしているとされる。かれらは漢族をはじめとする非ムスリムとの関係のなかでどのような食文化を紡いできたのだろうか。かれらを取り巻く現代的状況を踏まえ、中国に暮らすムスリムの食のあり方を考えた。

第569回　2020年８月23日　オンライン展示の条件――民族誌資料、著作権、公開適正化
講　師　伊藤敦規
受講者　12名
内　容　新型コロナの影響で世界中の多くの博物館が展示場を閉鎖した。そこで注目されたのがインターネットを利用したバーチャルな展示場訪問と資料紹介である。収蔵資料のオンライン公開に際して、資料の所有者である博物館がクリアしなければならない著作権上の課題を解説した。

第570回　2020年８月30日　コーヒーと西アジア、そして日本
講　師　菅瀬晶子
受講者　40名
内　容　今年２月、西アジア展示内に新セクション「グローバル文化としてのコーヒー」が誕生した。この新セクションの展示内容をもとに、西アジアにおけるコーヒー文化、そして日本におけるコーヒー文化について話した。

第571回　2020年９月13日　デジタル技術でみる「梅棹忠夫アーカイブズ」
講　師　丸川雄三
受講者　43名
内　容　フィールドノートやスケッチ、写真など、みんぱくでは梅棹忠夫が残した膨大な資料を整理しデジタル化を進めている。コンピュータで検索、閲覧が可能となったアーカイブズ資料は何を語り、そこから何がみえてくるのだろうか。その一端を探った。

第572回　2020年９月27日　現代に活かす「知的生産の技術」
講　師　飯田　卓
受講者　41名
内　容　梅棹忠夫の『知的生産の技術』が刊行されて今年で51年。その間、事務機器の発達とパソコンの普及、デジタル化の進展とインターネットの導入など数々の変化があった。なぜ、梅棹の本はいまだに読みつがれているのだろうか。知的生産の過去と現在を紹介し、未来を見とおした。

第573回　2020年10月４日　カナダ北西海岸先住民文化の歴史と現状
講　師　岸上伸啓
受講者　38名
内　容　ヨーロッパ人が到来する以前からカナダの太平洋沿岸地域に住んでいる人びとは、北西海岸先住民と呼ばれている。昔からポトラッチ儀礼や、木製のトーテムポールや仮面などを作ることで有名である。彼らの文化の歴史と現状をスライド画像を用いて紹介した。

第574回　2020年10月11日　ネパールの先住民運動
講　師　南 真木人
受講者　28名
内　容　ネパールの先住民（アーディバーシー）とは誰のことで、何を求めてどのような運動をしているのだろうか。1990年代に始まった運動の経緯と過程をふまえつつ、2008年の王制廃止後、連邦民主共和国となってからの先住民の動向を考えた。

第575回　2020年10月18日　オラン・アスリと精霊
講　師　信田敏宏
受講者　44名
内　容　特別展「先住民の宝」では、マレーシアの先住民オラン・アスリの彫像や仮面が展示されている。これらの彫像や仮面には、それぞれ精霊の名前がついている。オラン・アスリと精霊について詳しく解説した。

第576回　2020年10月25日　旅と映画とマヤ民族

講　師　鈴木　紀

受講者　42名

内　容　特別展「先住民の宝」では、グアテマラのマヤ民族を取り上げている。マヤ民族とはどのような人々なのか、「旅」と「映画」を手掛かりに考えた。話者が1983年と2019年に行ったグアテマラへの旅を比較し、その間に何が生じたのかを「映画」から読み取った。

第577回　2020年11月１日　100年前のアイヌのくらしと現代の文化

講　師　齋藤玲子

受講者　42名

内　容　特別展で原画を展示する漫画『ゴールデンカムイ』は、北海道と樺太（サハリン）を舞台にした冒険活劇で、そこに描かれるアイヌのくらしはおよそ100年前のものである。明治から現代に至るまでの歴史と、生活が変化するなかでも受け継がれてきた文化について紹介した。

第578回　2020年11月８日　サーミの工芸品

講　師　庄司博史

受講者　42名

内　容　サーミ人にとって、サーミ工芸は今日も生活をささえる、伝統文化をいかした重要な生業である。生活の近代化によりかつての工芸品の多くは便利は製品におきかわり、サーミの工芸品をまねた安価な製品も出回るなかで、彼らの工芸品をまもる努力を紹介した。

第579回　2020年11月29日　アフリカの先住民について

講　師　池谷和信

受講者　42名

内　容　アフリカ大陸には、多様な民族集団が暮らしている。その領域は、国境と一致することはあまりない。はたして先住民は、アフリカに存在するのだろうか。ここでは、アフリカの先史時代から現在までの民族の歴史をふまえて、誰がアフリカの先住民であるのかという問いを設定して考えた。具体的には、カラハリ砂漠のサン人やソマリランドのソマリ人の事例を紹介した。

第580回　2020年12月６日　台湾原住民運動40年――「高山青」から移行期正義まで

講　師　野林厚志

受講者　42名

内　容　台湾には原住民族とよばれるオーストロネシア系先住民がくらしてきた。原住民族は1980年代から先住民族としての権利と尊厳を主張し、現在では台湾の憲法において先住民族としての存在が認められている。その40年にわたる誇りをかけた営みを話した。

中止　2021年１月24日　北マケドニア共和国という国

（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い中止。）

講　師　卯田宗平

中止　2021年１月30日　新みんぱく映像民族誌紹介「セネガルを越える人と地域ラジオ」

（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い中止。）

講　師　三島禎子

中止　2021年２月14日　海を越えたサピエンスとオセアニアへの移住――発掘の最前線

（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い中止。）

講　師　小野林太郎

中止　2021年２月28日　ろう者と聴者の協働する「ろう通訳」

（緊急事態宣言の発出を受け臨時休館したことに伴い中止。）

講　師　飯泉菜穂子

第581回　2021年３月14日　今日からは話せない！ ブルシャスキー語門前講座
講　師　吉岡　乾
受講者　33名
内　容　語学教材や講座は、「今日から話せる」などと銘打ちがちだが、たった１時間程度の勉強で話せるとは、普通に考えれば言えたものではない。今回は、魔法みたいに話せるようにはならない、ブルシャスキー語講座の初回であった。

第582回　2021年３月28日　ハワイの華人と客家
講　師　河合洋尚
受講者　24名
内　容　ハワイには日系人だけなく、中国系の華人が多く住んでいる。彼らのなかには、現地で生まれ、中国系の言語を話せない人が少なくない。では、彼らはどのようにして中国人アイデンティティを保ち、中国由来の文化を継承しているのだろうか。華人の一派である客家を中心に考えた。

研究公演

特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」関連
「阪神虎舞みんぱく公演」（オンライン（ライブ配信）のみで実施）
2021年３月６日
司　会　寺村裕史
解　説　橋本裕之（大阪市立大学都市研究プラザ 特別研究員・坐摩神社権禰宜）
中川　眞（大阪市立大学都市研究プラザ 特任教授）
山本和馬（阪神虎舞）
金崎　亘（大槌城山虎舞）
笹山政幸（被災文化遺産所在調査専門調査委員）
コーディネーター　日髙真吾
出　演　阪神虎舞
参加者　131名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）
内　容　特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」の関連企画として、東日本大震災の被災地の芸能を他の地域に広め、災害の風化を食い止めることを１つの目的として神戸で結成された「阪神虎舞」を招き、災害の記憶への向き合い方について参加者とともに考えた。

みんぱく映画会

【みんぱく映画会】
2020年10月10日
「斧は忘れても、木は覚えている」
司　会　信田敏宏
登壇者　盛田　茂（東洋大学アジア文化研究所 客員研究員）
参加者　125名
内　容　特別展「先住民の宝」の関連イベントとして企画した。本作は、マレーシアの先住民オラン・アスリの現状や、マレーシアがブミプトラ政策を採用する大きな要因となった「人種暴動」（1969年）に関するドキュメンタリー映画で、森林破壊に直面するオラン・アスリの悲惨な状況や、マイノリティであるオラン・アスリや華人を取り巻くマレーシアの歴史を、関係者のインタビューなどを交えながら紹介した。

【みんぱくワールドシネマ　映像から考える＜人類の未来＞】
＜人類の未来＞をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施した。
（全３回のうち１回は、新型コロナウイルスによる感染症拡大防止のため中止。）

2020年 9 月12日
「判決、ふたつの希望」
司会・解説　菅瀬晶子
参加者　129名
内　容　ベイルートを舞台にしたレバノン・フランス合作映画「判決、ふたつの希望」を上映し、異なる価値観をもつ人びとがどのように共存していくことができるかについて考えた。

2020年11月 7 日
「僕の帰る場所 Passage of Life」
司　会　菅瀬晶子
解　説　田村克己
参加者　143名
内　容　ある在日ミャンマー人一家を描いた日本・ミャンマー合作映画「僕の帰る場所」を上映し、異なる土地で暮らす移民、難民について考えた。

【みんぱく映像民族誌シアター】
本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者による解説をおこなった。新型コロナウイルスによる感染症拡大防止のため、 4 回全ての会場参加を中止し、オンライン（ライブ配信）のみで開催。
2021年 1 月23日
セネガルを超える人と地域ラジオ
司　会　福岡正太
解　説　三島禎子
参加者　59名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）

2021年 1 月30日
ネパールのサーランギ音楽
司　会　福岡正太
解　説　南 真木人
参加者　81名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）

2021年 2 月13日
常ならざる音――耳を通して異界とつながる
司　会　福岡正太
解　説　山中由里子
参加者　133名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）

2021年 2 月27日
カンボジア クメール人の伝統芸能
司　会　福岡正太
解　説　福富友子（東京外国語大学 非常勤講師）
　　寺田吉孝（国立民族学博物館名誉教授）
参加者　92名（オンライン（ライブ配信）における最大同時接続視聴数）

博物館社会連携

●学習キット「みんぱっく」
学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸し出しを実施している。みんぱっくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2021年 3 月現在で16種類28パックを用意している。

名称	個数	2020年度貸出件数	2020年度利用者数
極北を生きる	2	7	1,482
アンデスの玉手箱	2	12	2,006
ジャワ島の装い	1	6	533
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	4	429
ソウルスタイル	2	9	1,322
ソウルのこども時間	2	13	2,302
インドのサリーとクルター	2	8	470
ブリコラージュ	3	0	0
アラビアンナイトの世界	2	6	1,034
アイヌ文化にであう	2	13	1,869
モンゴル	2	19	2,043
あるく、ウメサオタダオ展	1	3	1,258
世界のムスリムのくらし1	2	8	733
世界のムスリムのくらし2	2	10	1,120
エチオピアのコーヒーセレモニー	1	3	130
エチオピアをまとう	1	6	543
		合計　127	17,274

●ワークショップ

特別展「先住民の宝」関連ワークショップ「ペーパークラフトでトーテムポールをつくろう」

開催日：2020年10月31日（土）
　　11月１日（日）
講　師：田主　誠（版画・造形作家）
　　岸上伸啓
参加人数：10月31日　18名
　　11月１日　20名

特別展「先住民の宝」に関連したワークショップ。本館前に設置された２本のトーテムポールの観察および講師による講義により、トーテムポールに彫られる動物の特徴を学んだうえで、参加者がオリジナルのトーテムポールを制作した。

特別展「先住民の宝」関連ワークショップ「アイヌの矢作りと模擬狩猟体験」

開催日：2020年11月７日（土）
　　11月８日（日）
講　師：岡田恵介（公益財団法人アイヌ民族文化財団職員）
　　山道陽輪（公益財団法人アイヌ民族文化財団職員）
　　齋藤玲子
参加者：11月７日　21名
　　11月８日　22名

特別展「先住民の宝」関連ワークショップに関連したワークショップ。特別展観覧、およびアイヌの狩猟文化に関する講義の後、公益財団法人アイヌ民族文化財団の職員の指導のもと、参加者が矢を製作し、実際に弓矢をつかう体験をした。

●ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるガイドマップ「みんぱく見どころアラカルト」など、テーマに沿って本館展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどを作成している。これらは当館のホームページ上に掲載しており、ダウンロードして利用できる。

2020年度は、「社会連携事業検討ワーキング」において開発中のアクティビティ型のワークシートの学校団体向けの試行を行い、結果を基に引き続き開発を継続した。来年度も引き続き開発改良と試行を行い、完成させる。

●社会連携事業検討ワーキング

本館の博物館社会連携活動を強化するため、博物館活動に関する専門的知識を有する特任専門職員を配置し、2018年度新たに配置された人文知コミュニケーター及び社会連携担当の機関研究員をメンバーに加えた「社会連携事業検討ワーキング」を立ち上げ、活動を強化するための体制を整備している。今年度はアクティビティ型ワークシートの充実に向けた調査・開発を行ったほか、近隣公共施設との連携事業として吹田市立山田駅前図書館と展示やワークショップを共同企画した。また、大阪大学との連携協定に基づき、日本と世界の民族文化の多様性と共通性を学び、文化の展示と表象をめぐる諸問題について考える機会を提供することを目的として、大阪大学の全学生を対象に昨年度おこなったスタディ・ツアーのプログラム内容を検証・改善した。

●みんぱく春と秋の遠足・校外学習　事前見学＆ガイダンス

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを、毎年春と秋に実施している。2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点より、教員が来館するガイダンスの実施が困難であることから、対面実施を見送り、その代替として学校・教育関係者向けの広報用動画を制作した。動画は、本館のホームページで公開している。

●職場体験

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供している。2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止にともなう臨時休校措置により、中学校におけるカリキュラムの見直しが予想されたため、受け入れを予定していた吹田市・豊中市・箕面市・茨木市・摂津市の教育委員会及び各市内の中学校を対象に、職場体験活動の実施の有無について事前調査を行った。その結果、全校で実施の予定はないとの回答であったため、中止とすることとした。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとパス・関西2020」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年９月に発足した団体であり、本館は、市民活動の場として、MMPの活動を支援している。

2020年度は、新型コロナウイルスの感染防止対策を講じた上で、総勢170名を超えるMMPメンバーの自己研鑽のための支援として、特別展及び企画展の概要説明会（３回）、本館の教員による継続研修「来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座」（１回）を行った。さらに、新規メンバーに対しては、活動にあたり必要な知識を得るための研修（全５回）を実施し、そのうち１回は外部講師を招いている。以上の支援により、MMPは本年度、展示場内における視覚障害者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者案内」を１回（案内数17名）、その他一般来館者を対象とした各種ワークショップ（「点字体験ワークショップ」２回、「陽気な墓」で想い出を残そうワークショップ１回）を実施した。また、梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」のデータベースコーナーにおいては、650名を超える観覧者のサポートをした。

6 学術資源研究開発センター

センターの設置目的

学術資源研究開発センターは、本館が所蔵する学術資源の学際的かつ国際的共同利用性を高度化することを目的として、2017年４月１日に設置された。

国立民族学博物館には、約34万点の標本資料や約７万点の映像・音響資料、約67万冊の書籍、本館の所蔵資料をはじめ、多様な研究資料や写真資料、研究成果に関連するデータベース、文化人類学者・民族学者が残したフィールドノートや調査資料からなる民族学研究アーカイブズ等がある。これらは人類の文化や活動に関わる文化資源であり、人類の過去、現在、そして未来を考えるための貴重な学術資源でもある。本館では、これらの学術資源に関する研究成果や情報を「フォーラム型情報ミュージアム」とよばれるデータベースや、特別展・企画展・巡回展など多様な媒体を利用して公開するなど、学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるプロジェクトを実施している。本センターでは、これらの研究プロジェクトを支援するとともに、新たに立案し、推進する。

センターの研究事業

2020年度には、おもに３つの事業を展開した。

●フォーラム型情報ミュージアム構築プロジェクトの研究推進と支援

本館では、2016年度より人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクト「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を実施している。2020年度には、「アフリカ関連資料」や「中央・北アジア資料」など３件の開発型プロジェクトと「日本の時代玩具資料」や「ミクロネシア資料」など８件の強化型プロジェクトを実施した。

構築したデータベース間の検索機能を強化した統合検索システムの開発を継続実施するとともに、博物館学芸員の認定科目の教育に資するプログラムの試行を行った。

本センターでは、標本資料名の統一化・多言語化などについて研究をおこなった。またデータベースの構築や編集、発信などに関して各プロジェクトの推進を支援した。

●特別展・企画展・巡回展プロジェクトの研究推進と支援

本館では、学術資源やそれらに関連する研究成果を公開するために、特別展や企画展、巡回展を実施している。2020年度には、特別展「先住民の宝」、「復興を支える地域の文化――3.11から10年」や梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」、巡回展「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」、共催展「佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ」、「梅棹忠夫生誕100年記念　知的生産のフロンティア」、次年度に向けたワークショップなどの準備と開催を支援した。本センターでは、これらの展示をおこなうための研究を進めるとともに、実施するための支援をおこなった。

●学術資源の共同利用性の高度化に関する研究

2020年度には、いかにすれば本館の学術資源の学際的・国際的な共同利用化が進展し、大学教育や学術研究、知識の一般社会への普及、文化の担い手による文化の創成等に効果的に貢献できるかについて研究した。

「大学博物館等協議会」に参加し、情報共有、意見交換を行った。

7 国際研究統括室

設置目的

国際研究統括室は、新領域開拓のための本館の共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内研究戦略を立案し統括することを目的として、2017年４月に設置された。

具体的には、研究活動の戦略策定、共同研究・共同利用体制の整備、学術交流協定（国内外）締結方針の策定と締結、研究動向調査、外部資金に関する情報収集と情報提供など、本館がより戦略的かつ組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進していくために必要な活動を行っている。

2020年度活動報告

(1) 国内の研究機関との協定について、2021年３月に金沢美術工芸大学との間で協定を締結した。

(2) 海外の研究機関との協定について、2020年12月にロシア民族学博物館との協定、2021年３月に客家委員会客家文化発展センター及び交通大学客家文化学院との三者間協定を終了した。また、台湾・順益台湾原住民博物館、ペルー・国立サン・マルコス大学、英国・エジンバラ大学との協定について、これまでの交流状況及び今後の交流計画について審議を行い、その更新を行った。

(3) 外国人研究員（客員）について、本館の特別研究プロジェクトに関連する研究を行い、その推進に貢献していただく研究者１名を国内外に広く公募し、採用した。

(4) 国際学術交流の面では、本館と関わりのある海外の研究者及び本館と関連の深い国内外の研究機関を「民博フェローズ」として位置づけ、研究者ネットワークを構築しており、2020年度末の民博フェローズは92ヵ国・地域、約1,100件が登録されている。

(5) 『研究年報』の制作スケジュールについて、今後の在り方について検討を行った。

8 総合研究大学院大学

国立民族学博物館（民博）には、総合研究大学院大学（総研大）の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）が設置されている。総研大は、学部を持たない大学院博士課程だけの国立大学法人で、大学共同利用機関の人材と研究環境を基礎とし、各機関の行っている高度な研究活動に密着した教育・研究を行っている。民博に基盤をおく２専攻は、長期のフィールドワークで得られた資料に基づき博士論文を作成することを目的とし、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールを通して、広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしている。

本年度の地域文化学専攻長は樫永真佐夫、比較文化学専攻長は鈴木　紀が務めた。

●葉山キャンパス・文化科学研究科の動き

2020年度、総研大は設立32周年を迎え、国立大学法人化17年目を迎えた。

文化科学研究科においては、かねてより連携強化が図られ、2005年度から文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業として専攻を横断して「総合日本文化研究実践教育プログラム」が２ヵ年実施された後、2007年度より「文化科学研究科連携事業」が始まり、民博に基盤を置く２専攻もこれに参加してきた。2020年度は、査読付き学術雑誌『総研大文化科学研究』第17号が刊行され、地域文化学専攻在籍生の論文１本、研究ノート１本、資料紹介１本が掲載された。また、「総研大文化フォーラム2020　文化のレジリエンスとは？――〈異〉をつなぎ、未来へ」を2020年12月５日、12月６日に国際日本文化研究センター（京都市）およびWebにて開催し、地域文化学専攻の１年次生２名、比較文化学専攻の１年次生１名が学生企画委員として、その企画立案から準備・運営全般に携わった。さらに「学術資料マネジメント教育プログラム」として、文化科学研究科の各基盤機関が所蔵する学術資料を活用し、高度な知識と技術の習得ができる授業が開講されており、本年度は地域文化学専攻の川瀬　慈准教授による「映像話法の理論と実践」、園田直子教授による「資料保存学」が開講された。

第70回教授会（2020年９月18日）において地域文化学専攻から１名の課程博士が承認された。第71回教授会（2021年２月26日）において比較文化学専攻から２名の課程博士、地域文化学専攻から１名の論文博士が承認された。

●教員の異動

島村一平准教授が、2020年４月１日付で地域文化学専攻担当になった。同じく４月１日付で、福岡正太が教授に昇任した。

鈴木英明准教授が、2020年10月１日付で地域文化学専攻担当、岡田恵美准教授が、2020年10月１日付で比較文化学専攻担当になった。

出口正之教授は民博定年退職に伴い、2021年３月31日付で総研大教員の併任解除となった。

●学位の授与

【課程博士】

今井彬暁（地域）『ベトナムのモンの二元論における諸存在の制作と構成――「常世」と「現世」の関係に着目して』［文学］

〔審査委員〕樫永真佐夫、韓　敏、信田敏宏、
中田友子（神戸市外国語大学国際関係学科 教授）、
横山廣子（総合研究大学院大学・国立民族学博物館 名誉教授）

八木風輝（比較）“*Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia: A Case Study of the Musical Practices of Professional Performers*”［文学］

〔審査委員〕島村一平、岡田恵美、福岡正太、
坂井弘紀（和光大学表現学部総合文化学科 教授）、
寺田吉孝（総合研究大学院大学・国立民族学博物館 名誉教授）

田村卓也（比較）『ケニア沿岸部の零細漁業者による水産資源の利用に関する生態人類学的研究――かご漁を事例として』［文学］

〔審査委員〕小野林太郎、鈴木英明、飯田　卓、
秋道智彌（山梨県立富士山世界遺産センター 所長）、
中村　亮（福岡大学経済学部 准教授）

【論文博士】

内田修一（地域）『都市環境における関係性を巡る実践としての精霊憑依――マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究』［学術］

〔審査委員〕三尾　稔、川瀬　慈、島村一平、
竹沢尚一郎（総合研究大学院大学・国立民族学博物館 名誉教授）、
田中正隆（大谷大学文学部社会学科 准教授）、
岸上伸啓（人間文化研究機構 理事・国立民族学博物館 客員教授）

●学生の就職状況

学生の受入を開始した1989年以来、2021年３月末日までに地域文化学専攻・比較文化学専攻を巣立った144名の修了生および退学生のうち、合計74名が常勤の教育研究職に就いた。内訳は、国立大学17名、公立大学７名、私立大学38名、海外等その他の機関６名、歴博１名、民博４名、地球研１名である。

●入学者選抜試験

2021年度入学者の選抜試験には、地域文化学専攻２名、比較文化学専攻２名、計４名の志願者があり、地域文化学専攻２名、比較文化学専攻２名、計４名の合格者を第71回教授会において決定し、４名が入学手続きをとった。入学定員（各専攻３名）に対する出願者の倍率は0．６倍（合格者に対する倍率は1．０倍）であった。合格者、「志望研究題目」、（主任指導教員、副指導教員）は以下の通りである。

【地域文化学専攻】

築山欣央
「人の移動と地域コミュニティとの関係についての一考察――日系ブラジル人の意識と行動に焦点をあてて」
（平井京之介、南　真木人）

BATOCHIR BALJINNYAM（バトオチル　バルジンニャム）
「家畜の『交換』に関する文化人類学的研究」
（島村一平、樫永真佐夫）

【比較文化学専攻】

川又幸恵
「ベネズエラ都市部におけるリプロダクションと産前・産後ケアから見る出産文化の特性」
（松尾瑞穂、鈴木　紀）

志川真子
「民俗芸能の復活」
（福岡正太、笹原亮二）

2021年度入学者も、ここ数年と同様、研究対象である現地での経験を持つ者が多い。出身大学の内訳は、公立２名、私立１名、海外１名で出身大学院の地方別では、関東、近畿、海外となっている。

2021年３月現在、地域文化学専攻14名、比較文化学専攻13名、あわせて27名が在籍しているが、このうち３年次以上には両専攻あわせて17名がいる。これは、教育研究の柱としている長期フィールドワークにそれぞれ出かけているためである。

2020年度は、館内でオープンキャンパス（入試相談会／2000年度から開催）を９月25日に開催した。総研大および民博の概要説明、施設見学、教員との個別面談等が行われた。参加者は17名で関東、中部、近畿、海外からと多岐にわたった。

●日本学術振興会特別研究員（DC2）への採用

2020年度は地域文化学専攻　澁谷美和、比較文化学専攻　孫文、古澤瑞希が日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用された。

●地域文化学専攻・比較文化学専攻教員数（2021年３月現在）

専　攻	専攻長	担当教員数
地域文化学専攻	1	25
比較文化学専攻	1	24（基盤機関の長である民博館長を含む）

●地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生（2021年３月現在）

専　攻	入学定員	現　員			
		１年次	２年次	３年次	計
地域文化学専攻	3	3	2	9	14
比較文化学専攻	3	2	3	8	13

●年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	計
1991（平成３年）年度			1		1
1992（平成４年）年度					0
1993（平成５年）年度			1	1	2
1994（平成６年）年度	2		1		3
1995（平成７年）年度	2		1		3
1996（平成８年）年度		3			3
1997（平成９年）年度	3		4		7
1998（平成10年）年度	4	2			6
1999（平成11年）年度					0
2000（平成12年）年度	2		2	1	5
2001（平成13年）年度	1	1	2	1	5
2002（平成14年）年度	1	1		2	4
2003（平成15年）年度					0
2004（平成16年）年度	2	3			5
2005（平成17年）年度	4	2		2	8
2006（平成18年）年度	2		3		5
2007（平成19年）年度	2	1	3		6
2008（平成20年）年度	1		1		2
2009（平成21年）年度		1	1	1	3
2010（平成22年）年度	2		2	3	7
2011（平成23年）年度	3		1	1	5
2012（平成24年）年度	1	1	1	1	4
2013（平成25年）年度			1	1	2
2014（平成26年）年度	2	1	2		5
2015（平成27年）年度	3	1			4
2016（平成28年）年度	1	1	1		3
2017（平成29年）年度	1		1		2
2018（平成30年）年度	1				1
2019（平成31・令和元年）年度	1		2		3
2020（令和２年）年度	1	1	2		4
計	42	19	33	14	108

索引

あ

相島葉月 …… **91**
東 賢太朗 …… 212
飯泉菜穂子 …… **36**
飯田　卓 …… **57**、184、190
池谷和信 …… **60**、197
石原　和 …… **154**
石山　俊 …… **156**
伊藤敦規 …… **113**
上畑　史 …… **152**
上羽陽子 …… **68**
宇田川妙子 …… **40**、223
卯田宗平 …… **70**、224
大石侑香 …… **165**
大坂　拓 …… **176**
大澤由実 …… **153**
太田心平 …… **46**
大西秀之 …… 211
岡田恵美 …… **23**
緒方しらべ …… 217
小野林太郎 …… **72**、193、216

か

風間計博 …… 205
樫永真佐夫 …… **42**
片岡　樹 …… 219
神野知恵 …… **166**
亀井哲也 …… **174**
河合洋尚 …… **94**、214
河村友佳子 …… **157**
辛嶋博善 …… **160**
川瀬　慈 …… **25**
菊澤律子 …… **28**
岸上伸啓 …… **105**、221
金　悠進（キム　ユジン） …… **153**
黒田賢治 …… **161**
阮　雲星（ゲン　ウンセイ） …… **178**
小長谷有紀 …… **170**
小林直明 …… **158**
近藤祉秋 …… 225

さ

齋藤　晃 …… **65**
齋藤玲子 …… **141**
相良啓子 …… **37**
佐川　徹 …… 208
笹原亮二 …… **109**
シ エイシン …… **179**
島村一平 …… **48**、189
新免光比呂 …… **50**
新本万里子 …… 220
末森　薫 …… **33**
菅瀬晶子 …… **51**
鈴木七美 …… **82**
鈴木英明 …… **96**、215
鈴木　紀 …… **66**
關　雄二 …… **10**
園田直子 …… **14**、202

た

武居　渡 …… **173**
田中鉄也 …… **163**
田沼幸子 …… 204
諸　昭喜（チェ　ソヒ） …… **148**
茶谷智之 …… **164**
辻　邦浩 …… **172**
出口正之 …… **16**
寺村裕史 …… **76**、191

な

内藤直樹 …… 210
中生勝美 …… 203
中川　敏 …… 203
中谷文美 …… 206
奈良雅史 …… **53**
西　真如 …… 207
西尾哲夫 …… **84**、187
丹羽典生 …… **144**
野林厚志 …… **102**、213
信田敏宏 …… **87**

は

橋本沙知 …… **158**
林　勲男 …… **38**、195
原　大介 …… **168**
韓　敏（ハン　ミン） …… **43**
日高真吾 …… **19**、195、196
平井京之介 …… **13**
廣瀬浩二郎 …… **98**
福岡正太 …… **21**、183
藤本透子 …… **78**
古川不可知 …… 218
彭　宇潔（ホウ　ウケツ） …… **159**
藤田瑞穂 …… 211

ま

マシウス ピーター ジョセフ ……**45**
松尾瑞穂 ……**55**
丸川雄三 ……**30**
三尾　稔 ……**81**
三島禎子 ……**100**、197
南 真木人 ……**146**
森　明子 ……**89**、222

や

八木百合子 ……**150**
山口未花子 ……219
山中由里子 ……**111**
山　泰幸 ……209
吉岡　乾 ……**32**
吉田憲司 ……**8**

ら

ラヴィンドラン ゴーパーラン　……**177**

［研究年報 2020］

編集・発行――大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国立民族学博物館

印刷――――株式会社 遊文舎

発行日――――2021年 8 月30日
〈非売品〉